岐阜県文化財保護センター
調査報告書　第139集

六里遺跡・稲荷遺跡
（第２分冊）

２０１７
岐阜県文化財保護センター

六里（ろくり）遺跡・稲荷（いなり）遺跡
（第２分冊）

２０１７
岐阜県文化財保護センター

目　次（第２分冊）

第４章　稲荷遺跡の調査成果 …… 1
　第１節　基本層序 …… 1
　第２節　遺構・遺物の概要 …… 4
　第３節　古墳時代及び古代の遺構・遺物 …… 7
　第４節　その他の時代の遺構・遺物 …… 102
　第５節　遺物包含層出土遺物 …… 108
第５章　自然科学分析 …… 116
　第１節　分析の概要と成果 …… 116
　第２節　花粉分析及びプラント・オパール分析 …… 118
　第３節　炭化材樹種同定及び放射性炭素年代測定 …… 133
　第４節　鉄滓の成分分析 …… 139
第６章　総括 …… 145
　第１節　六里遺跡・稲荷遺跡の竪穴建物について …… 145
　第２節　六里遺跡の土器埋設遺構について …… 151
　第３節　六里遺跡・稲荷遺跡の出土土器について …… 156
　第４節　土地利用の変遷について …… 162
引用・参考文献
写真図版

目次（第１分冊）

巻頭図版
序
例言
目次
第１章　調査の経過
　第１節　調査に至る経緯
　第２節　調査の方法と経過
第２章　遺跡の環境
　第１節　地理的環境
　第２節　歴史的環境
第３章　六里遺跡の調査成果
　第１節　基本層序
　第２節　遺構・遺物の概要
　第３節　第１調査面の遺構・遺物
　第４節　第２調査面の遺構・遺物
　第５節　第３調査面の遺構・遺物
報告書抄録

挿図目次

第 160 図　稲荷遺跡土層柱状図 …… 2
第 161 図　発掘区壁面土層図 …… 3
第 162 図　SI１埋土炭化物検出範囲 …… 8
第 163 図　SI１遺構図① …… 9
第 164 図　SI１遺構図② …… 10
第 165 図　SI１出土遺物 …… 11
第 166 図　SI２遺構図 …… 12
第 167 図　SI２出土遺物 …… 13
第 168 図　SI３遺構図① …… 15
第 169 図　SI３遺構図② …… 16
第 170 図　SI３出土遺物 …… 17
第 171 図　SI４遺構図① …… 18
第 172 図　SI４遺構図② …… 20
第 173 図　SI４遺構図③ …… 21
第 174 図　SI４出土遺物 …… 21
第 175 図　SI５遺構図① …… 22
第 176 図　SI５遺構図② …… 23
第 177 図　SI５遺構図③ …… 24
第 178 図　SI５出土遺物 …… 25
第 179 図　SI６遺構図① …… 26
第 180 図　SI６遺構図② …… 27
第 181 図　SI６出土遺物 …… 27
第 182 図　SI７遺構図 …… 29
第 183 図　SI７出土遺物 …… 30
第 184 図　SI８遺構図① …… 31
第 185 図　SI８遺構図② …… 32
第 186 図　SI８出土遺物 …… 32
第 187 図　SI９遺構図 …… 34
第 188 図　SI９出土遺物 …… 35
第 189 図　SI10 遺構図① …… 36
第 190 図　SI10 遺構図② …… 37
第 191 図　SI10 出土遺物 …… 38
第 192 図　SI11 遺構図 …… 40
第 193 図　SI11 出土遺物 …… 41
第 194 図　SI12 遺構図① …… 42
第 195 図　SI12 遺構図② …… 43
第 196 図　SI12 出土遺物 …… 43
第 197 図　SI13 遺構図 …… 44
第 198 図　SI13 出土遺物 …… 44
第 199 図　SI14 遺構図 …… 45
第 200 図　SI14 出土遺物 …… 45
第 201 図　SI15 遺構図① …… 46
第 202 図　SI15 遺構図② …… 47
第 203 図　SI15 出土遺物 …… 48
第 204 図　SI16 遺構図 …… 49
第 205 図　SI17 遺構図 …… 49
第 206 図　SI18 遺構図 …… 50
第 207 図　DM16～DO19 グリッド溝状遺構遺構図① …… 53
第 208 図　DM16～DO19 グリッド溝状遺構遺構図② …… 54
第 209 図　DM16～DO19 グリッド溝状遺構出土遺物 …… 55
第 210 図　SD14 遺構図 …… 57
第 211 図　SD14 主な遺物の出土位置 …… 57
第 212 図　SD14 出土遺物 …… 58
第 213 図　SD16 遺構図 …… 59
第 214 図　SD16 出土遺物 …… 59
第 215 図　SN１出土遺物 …… 60
第 216 図　SN１遺構図 …… 61
第 217 図　柱穴状遺構遺構図① …… 62
第 218 図　柱穴状遺構遺構図② …… 63
第 219 図　柱穴状遺構出土遺物 …… 63
第 220 図　土坑列１遺構図 …… 65
第 221 図　土坑列２遺構図 …… 66
第 222 図　土坑列３遺構図 …… 66
第 223 図　土坑列４遺構図 …… 68
第 224 図　土坑列１～４出土遺物 …… 69
第 225 図　その他の土坑遺構図① …… 70
第 226 図　その他の土坑遺構図② …… 72
第 227 図　その他の土坑遺構図③ …… 74
第 228 図　SK128 遺構図 …… 75
第 229 図　SK129 遺構図 …… 75
第 230 図　その他の土坑出土遺物 …… 77
第 231 図　発掘区全域図割付図 …… 95
第 232 図　発掘区全域図分割図① …… 96
第 233 図　発掘区全域図分割図② …… 97
第 234 図　発掘区全域図分割図③ …… 98
第 235 図　発掘区全域図分割図④ …… 99
第 236 図　発掘区全域図分割図⑤ …… 100
第 237 図　発掘区全域図分割図⑥ …… 101
第 238 図　Ⅲ層上面遺構群 …… 103
第 239 図　SM１遺構図① …… 104
第 240 図　SM１遺構図② …… 105
第 241 図　SM１出土杭 …… 105
第 242 図　SK８出土遺物 …… 105
第 243 図　遺物包含層出土遺物① …… 109
第 244 図　遺物包含層出土遺物② …… 110
第 245 図　遺物包含層出土遺物③ …… 111

第 246 図　試料採取位置 …… 119
第 247 図　六里遺跡における花粉分布図 …… 125
第 248 図　稲荷遺跡における花粉分布図 …… 126
第 249 図　六里遺跡及び稲荷遺跡におけるプラント・オパール分布図 …… 132
第 250 図　暦年較正結果 …… 139
第 251 図　鉄滓の SME 観察と EMS 分析結果① …… 142
第 252 図　鉄滓の SME 観察と EMS 分析結果② …… 143
第 253 図　鉄滓の SME 観察と EMS 分析結果③ …… 144
第 254 図　カマド属性分類模式図 …… 146
第 255 図　各時期の竪穴建物 …… 150
第 256 図　六里遺跡における土器埋設遺構の分類 …… 152
第 257 図　土器埋設遺構の長軸方位と配置 …… 153
第 258 図　いんべ遺跡における土器埋設遺構の配置 …… 155
第 259 図　埋設土器の分類と時期区分 …… 157
第 260 図　各区分における組成上の特徴を示す土器 …… 160
第 261 図　土地利用の変遷（Ⅰ期） …… 163
第 262 図　土地利用の変遷（Ⅲ期及びⅣａ期・Ⅳｂ期）165
第 263 図　土地利用の変遷（Ⅳｃ期・Ⅳｄ期及びⅤ期）166
第 264 図　土地利用の変遷（Ⅵ期期及びⅦ・Ⅷ期） …… 167

表目次

表　71　稲荷遺跡種別別遺構検出数 …… 4
表　72　稲荷遺跡出土土器点数 …… 6
表　73　竪穴建物一覧表 …… 78
表　74　竪穴建物カマド属性表 …… 79
表　75　竪穴建物主柱穴一覧表① …… 79
表　76　竪穴建物主柱穴一覧表② …… 80
表　77　竪穴建物壁際溝一覧表 …… 80
表　78　竪穴建物その他の床面遺構一覧表① …… 80
表　79　竪穴建物その他の床面遺構一覧表② …… 81
表　80　溝状遺構一覧表① …… 81
表　81　溝状遺構一覧表② …… 82
表　82　畝溝状遺構群一覧表 …… 82
表　83　柱穴状遺構一覧表 …… 82
表　84　土坑一覧表① …… 83
表　85　土坑一覧表② …… 84
表　86　遺構出土土器観察表① …… 85
表　87　遺構出土土器観察表② …… 86
表　88　遺構出土土器観察表③ …… 87
表　89　遺構出土土器観察表④ …… 88
表　90　遺構出土土器観察表⑤ …… 89
表　91　遺構出土土器観察表⑥ …… 90
表　92　遺構出土土器観察表⑦ …… 91
表　93　遺構出土土器観察表⑧ …… 92
表　94　遺構出土土器観察表⑨ …… 93
表　95　遺構出土土器観察表⑩ …… 94
表　96　遺構出土石器・石製品一覧表 …… 94
表　97　Ⅲ層上面杭痕一覧表 …… 106
表　98　Ⅲ層上面溝状遺構一覧表 …… 106
表　99　SM１等杭一覧表 …… 106
表 100　Ⅲ層上面土坑一覧表 …… 107
表 101　SK８出土土器観察表 …… 107
表 102　遺物包含層出土土器観察表① …… 113
表 103　遺物包含層出土土器観察表② …… 114
表 104　遺物包含層出土土器観察表③ …… 115
表 105　遺物包含層出土土製品一覧表 …… 115
表 106　遺物包含層出土石器・石製品一覧表 …… 115
表 107　遺物包含層出土金属製品一覧表 …… 115
表 108　花粉分析試料一覧表 …… 118
表 109　六里遺跡から産出した花粉胞子一覧表① …… 121
表 110　六里遺跡から産出した花粉胞子一覧表② …… 122
表 111　稲荷遺跡から産出した花粉胞子一覧表 …… 123
表 112　プラント・オパール分析対象試料一覧 …… 129
表 113　六里遺跡試料１ｇ当たりのプラント・オパール個数 131
表 114　稲荷遺跡試料１ｇ当たりのプラント・オパール個数 131
表 115　樹種同定試料一覧及び同定結果 …… 136
表 116　放射性炭素年代測定試料及び処理 …… 138
表 117　測定及び暦年較正の結果 …… 138
表 118　鉄滓成分分析対象試料一覧 …… 139
表 119　蛍光Ｘ線分析による半定量値 …… 140
表 120　EDS 分析結果 …… 140
表 121　西濃地域におけるカマドをもつ竪穴建物一覧表 …… 147
表 122　美濃地域におけるＩｂ・Ｉｃ期の土器埋設遺構 …… 154
表 123　埋設土器の分類と組み合わせ …… 157
表 124　遺構から出土した縄文土器の分類と組成 …… 158
表 125　遺物包含層で出土した縄文土器の分類と組成 …… 159
表 126　古墳時代～古代の土器組成 …… 162
表 127　条里関連遺構と距離 …… 168

挿入写真目次

写真 11　六里遺跡から産出した花粉化石 …… 127
写真 12　稲荷遺跡から産出した花粉化石 …… 128
写真 13　六里遺跡のプラント・オパール …… 134
写真 14　稲荷遺跡のプラント・オパール …… 135
写真 15　六里遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真 …… 137

写真図版目次

図版 1　六里遺跡・稲荷遺跡周辺の地形
図版 2　六里遺跡の土層
図版 3　六里遺跡第 1 調査面検出遺構①
図版 4　六里遺跡第 1 調査面検出遺構②
図版 5　六里遺跡第 1 調査面検出遺構③・第 2 調査面検出遺構①
図版 6　六里遺跡第 2 調査面検出遺構②
図版 7　六里遺跡第 2 調査面検出遺構③
図版 8　六里遺跡第 2 調査面検出遺構④
図版 9　六里遺跡第 2 調査面検出遺構⑤
図版 10　六里遺跡第 2 調査面検出遺構⑥
図版 11　六里遺跡第 2 調査面検出遺構⑦
図版 12　六里遺跡第 2 調査面検出遺構⑧
図版 13　六里遺跡第 2 調査面検出遺構⑨
図版 14　六里遺跡第 2 調査面検出遺構⑩
図版 15　六里遺跡第 2 調査面検出遺構⑪
図版 16　六里遺跡第 2 調査面検出遺構⑫
図版 17　六里遺跡第 2 調査面検出遺構⑬・第 3 調査面検出遺構①
図版 18　六里遺跡第 3 調査面検出遺構②
図版 19　六里遺跡第 3 調査面検出遺構③
図版 20　六里遺跡第 3 調査面検出遺構④
図版 21　六里遺跡第 3 調査面検出遺構⑤
図版 22　六里遺跡第 1 調査面出土遺物①
図版 23　六里遺跡第 1 調査面出土遺物②・第 2 調査面出土遺物①
図版 24　六里遺跡第 2 調査面出土遺物②
図版 25　六里遺跡第 2 調査面出土遺物③
図版 26　六里遺跡第 2 調査面出土遺物④
図版 27　六里遺跡第 2 調査面出土遺物⑤
図版 28　六里遺跡第 2 調査面出土遺物⑥
図版 29　六里遺跡第 2 調査面出土遺物⑦
図版 30　六里遺跡第 2 調査面出土遺物⑧
図版 31　六里遺跡第 2 調査面出土遺物⑨
図版 32　六里遺跡第 2 調査面出土遺物⑩
図版 33　六里遺跡第 2 調査面出土遺物⑪
図版 34　六里遺跡第 3 調査面出土遺物①
図版 35　六里遺跡第 3 調査面出土遺物②
図版 36　六里遺跡第 3 調査面出土遺物③
図版 37　六里遺跡第 3 調査面出土遺物④
図版 38　六里遺跡第 3 調査面出土遺物⑤
図版 39　六里遺跡第 3 調査面出土遺物⑥
図版 40　六里遺跡第 3 調査面出土遺物⑦
図版 41　六里遺跡第 3 調査面出土遺物⑧
図版 42　六里遺跡第 3 調査面出土遺物⑨
図版 43　六里遺跡第 3 調査面出土遺物⑩
図版 44　六里遺跡第 3 調査面出土遺物⑪
図版 45　六里遺跡第 3 調査面出土遺物⑫
図版 46　六里遺跡第 3 調査面出土遺物⑬
図版 47　六里遺跡第 3 調査面出土遺物⑭
図版 48　六里遺跡第 3 調査面出土遺物⑮
図版 49　六里遺跡第 3 調査面出土遺物⑯
図版 50　六里遺跡第 3 調査面出土遺物⑰
図版 51　六里遺跡第 3 調査面出土遺物⑱
図版 52　六里遺跡第 3 調査面出土遺物⑲
図版 53　六里遺跡第 3 調査面出土遺物⑳
図版 54　六里遺跡第 3 調査面出土遺物㉑
図版 55　稲荷遺跡全景及び土層
図版 56　稲荷遺跡検出遺構①
図版 57　稲荷遺跡検出遺構③
図版 58　稲荷遺跡検出遺構④
図版 59　稲荷遺跡検出遺構⑤
図版 60　稲荷遺跡検出遺構⑥
図版 61　稲荷遺跡検出遺構⑦
図版 62　稲荷遺跡検出遺構⑧
図版 63　稲荷遺跡検出遺構⑨
図版 64　稲荷遺跡検出遺構⑩
図版 65　稲荷遺跡出土遺物①
図版 66　稲荷遺跡出土遺物②
図版 67　稲荷遺跡出土遺物③
図版 68　稲荷遺跡出土遺物④
図版 69　稲荷遺跡出土遺物⑤
図版 70　稲荷遺跡出土遺物⑥
図版 71　稲荷遺跡出土遺物⑦
図版 72　稲荷遺跡出土遺物⑧
図版 73　稲荷遺跡出土遺物⑨
図版 74　稲荷遺跡出土遺物⑩
図版 75　稲荷遺跡出土遺物⑪

第４章　稲荷遺跡の調査成果

第１節　基本層序

１　層序

当遺跡は、六里遺跡と同様な沖積平地上に立地しており、河道や自然堤防など起伏を活かした集落や生産域が営まれていた点についても、同じ事が言える。大きく異なる点は、六里遺跡の集落跡が立地する微高地が西側であったのに対し、三水川に近い東側に立地していることが上げられる。

今回の調査では、最も深く掘削した発掘区西端付近の壁面土層を基準に、Ⅰ～Ⅵ層に基本層序を設定した。

（１）Ⅰ層

発掘区内の表土を一括してⅠ層とし、東側宅地の土地改良土をⅠａ層、現在の水田耕作土をⅠｂ層、その下の水田敷土をⅠｃ層として細分した。

Ⅰｂ層は、発掘区全域に認められる。上面の標高は発掘区西端で約 19.8ｍ、東端（宅地西側）で約 19.7ｍであり、ほとんど差がない。土色は灰色（5Y4/1）で、小礫や植物遺体を多く含んでしまりがない。Ⅰｃ層は、黒褐色（2.5Y3/1）で、ややしまりがある。

（２）Ⅱ層

圃場整備以前の水田層と考えられる。土壌分析では、イネ科のプラント・オパールを多量に検出した（第５章第１節）。出土遺物は、六里遺跡と同様に破片が多い。

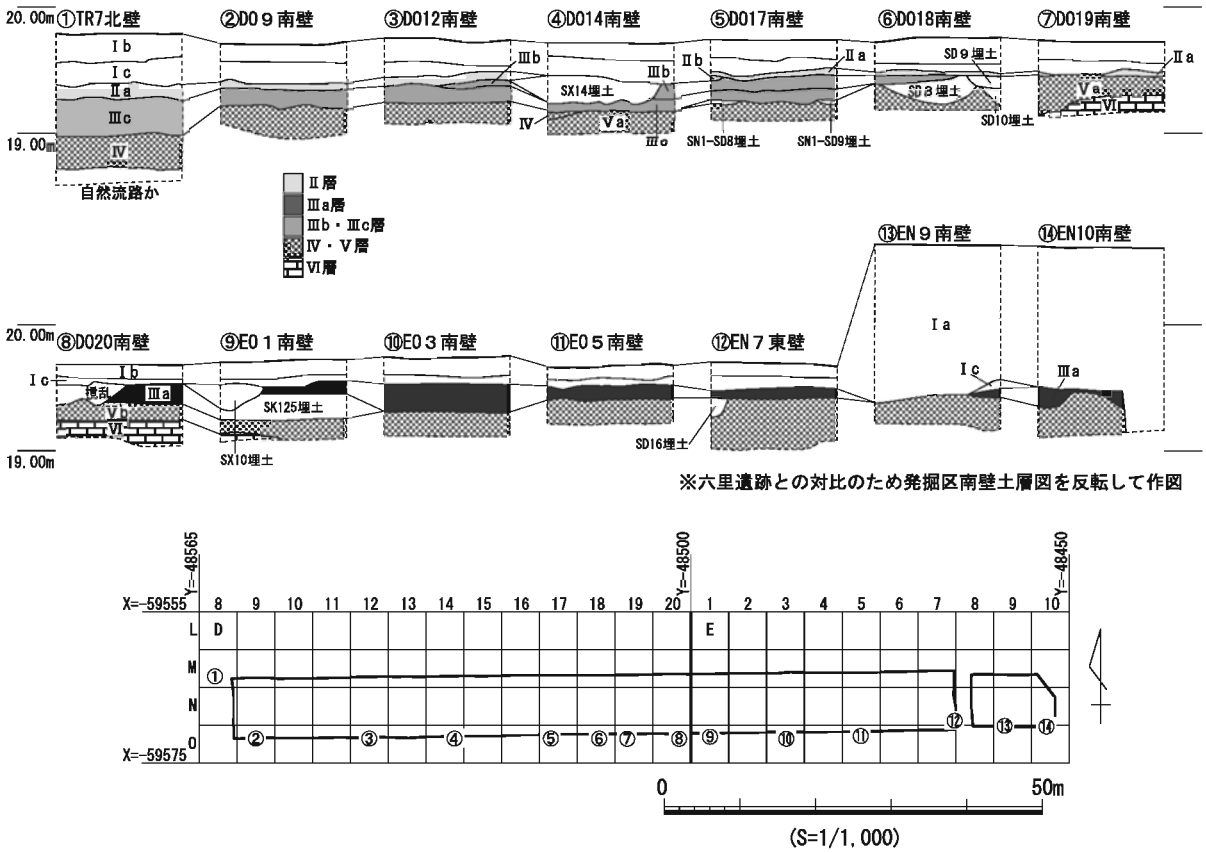
DO19 グリッド（第 160 図⑦）以西に認められる。非常に薄く、堆積が途切れる場所もある。また、DO14 から 17 グリッド(第 160 図④･⑤)の間では２層に分層できる(Ⅱａ･Ⅱｂ層)。いずれも､暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）又はオリーブ褐色（2.5Y4/3）の粘質シルトで、鉄斑やマンガン斑の沈着が顕著にみられる。

（３）Ⅲ層

今回の調査において、遺物包含層とした土層である。Ⅲｂ・Ⅲｃ層は、土壌分析によってイネ科のプラント・オパールを多量に検出したため、水田層と考えられる。主に古代から中世にかけての遺物が含まれる。土質等により３層に細分した。

Ⅲａ層　集落域が立地する微高地上（第 160 図⑧～⑭）にみられる土層で、上面が遺構検出面であるⅤｂ層に土質が似る。Ⅲａ層上面には､Ⅱ層がみられない。DO19 から DO20 グリッドにかけて､砂礫層(Ⅵ層）まで及ぶ撹乱があるため、Ⅲｂ層との先後関係が確認できないが、便宜上「Ⅲａ層」とした。灰黄褐色（10YR4/2）の粘質シルトで、鉄斑やマンガン斑の沈着が顕著にみられる。ブロック状の混ざりが目立ち、耕作土である可能性は高いが、Ⅲｂ・ｃ層ほど粘性はない。

Ⅲｂ層　DO12 から DO18 グリッド（第 160 図③～⑥）にかけて認められ、その範囲は西が DN・DO12 から 13 グリッドの土坑群、東が南北方向の溝 SD ９・10 グリッドまでであり、これらの遺構との関係が考えられる。土色は灰色（5Y4/1）で、粘性が強い。マンガン斑の沈着は僅かで全体に粗砂が混じるなど､六里遺跡のⅢａ層と類似点が多い。DO12 グリッド以西（第 160 図①～③）はⅢｂ層が無く、



第160図　稲荷遺跡土層柱状図

Ⅲｃ層のみとなって地形が若干低くなる。東側の集落が廃絶した後に、Ⅲｃ層の水田域を東に拡張した際の土層である可能性がある。

Ⅲｃ層　D0８からD017グリッド（第160図①～⑤）にかけてみられる堆積で、東端は畝溝状遺構群（SN1）と重複している（第160図⑤）。暗灰黄色（2.5Y4/2）の粘質シルトで、粘性が強い。耕作の影響か下層との混ざりが顕著に見られる。この層の下層が今回の調査面であるが、集落に関する遺構はなく、この土層の堆積範囲が集落が営まれていた時期の水田域である可能性がある。

（４）Ⅳ層

D0８からD014グリッド（第160図①～⑤）にかけてみられる土層である。オリーブ褐色（2.5Y4/3）の粘土で混じりが少ない。耕作の影響か上層のⅢｃ層と層界での混ざりが顕著で、層界付近の土壌で行った分析では、5,000個／ｇのプラント・オパールを確認した（第５章第１節）。試掘確認調査では下層から自然流路と思われる砂層を検出しており、Ｖａ層から西に落ち込む流路埋土の一部である可能性もある。

（５）Ｖ層

集落域の立地する微高地の基盤となっている土層で、土質から２層に細分できる。細分した両層の先後関係は撹乱によって確認できなかったが、便宜上、撹乱の西側を「Ｖａ層」、東側を「Ｖｂ層」とした。なお、発掘区中央付近の遺構や遺物包含層から縄文土器が出土しており、本来当該層に含まれていたと考えられる。

Ｖａ層　DO14 から DO19 グリッド（第 160 図④～⑦）にかけて確認した。土色は暗灰黄色（2.5Y4/2）で、混じりが少ない。

Ｖｂ層　発掘区の東半全域（第 160 図⑧～⑭）にみられる。検出したすべての竪穴建物がこの土層を基盤としている。色調は暗灰黄色（2.5Y4/2）で、上層であるⅢａ層との層界が混ざりのため不明瞭である。河床礫層と思われるⅥ層の影響で、礫が多い部分もみられる。礫層の上面を平坦化するように堆積した、河川の堆積物と考えられる。

（６）Ⅵ層

DO19 グリッド以東で確認した。特に DO19 から EO 1 グリッド（第 160 図⑦～⑨）で、上面が最も高くなり、東へ向かって徐々に低くなる。DO19 と 20 グリッドの間にある撹乱では、当該層の上面が露出していた。また、図示していないが、発掘区東端の宅地跡では、土地改良の影響で当該層まで削平された部分も見られた。

２　調査面と遺構検出面について

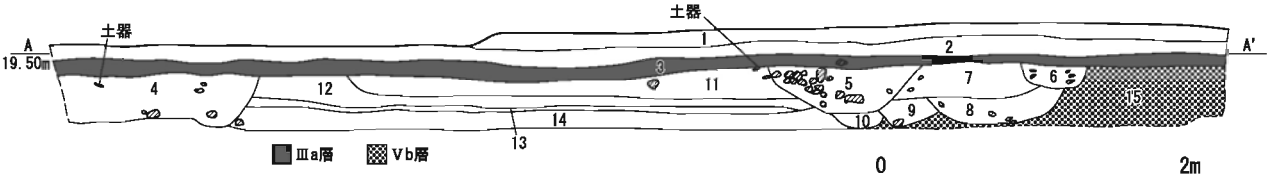
今回の調査における調査面は、Ⅲ層を除去後に露出した面である。DM14 から DO16 グリッドについては、Ⅱ層除去後に SM１を検出したことから、２面の調査を実施している。

遺構検出面は、六里遺跡と同様に遺構の所属する土層を確定できない部分もあることから、遺構検出面を以下のとおり整理した。

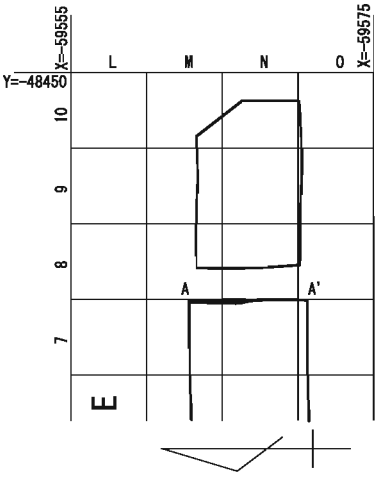
・Ⅱ層除去後の DN14 ～ DO16 における遺構検出面…「Ⅲ層上面」

・Ⅲ層除去後のⅣ層が基盤となる遺構検出面（DM ～ DO14 グリッド以西）…「Ⅳ層上面」

・上記以外のⅢ層除去後の遺構検出面…「Ⅲ層基底面」



1　5Y4/1　灰色粘質シルト　しまりなし　粘性あり　全体に鉄斑沈着　径2mm以下の小礫を1%以下、植物痕を含む　下層との境界明瞭　現代耕作土　Ｉb層
2 2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着(特に下部に集中する箇所あり)　径2mm以下の小礫を1%含む　現代耕作土の敷土　Ｉc層
3　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑、マンガン斑沈着　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色粘質シルトをブロック状に10%含む　遺物包含層　Ⅲa層
4　10YR4/1　褐灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑、マンガン斑沈着　径80mm以下の円礫を5%含む　焼土粒と炭化物を少量含む　SX17埋土
5　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑、マンガン斑沈着　径30～110mmの亜円礫を30%含む　SX18埋土
6　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑、マンガン斑沈着　径30～50mm以下の亜円礫を3%含む　SD16埋土
7　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑、マンガン斑沈着　径30～50mm以下の円礫を5%含む　SK113埋土
8　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体にマンガン斑沈着　径40mm以下の亜円礫を5%含む　SX19埋土
9　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体にマンガン斑沈着　径40mm以下の亜円礫を3%含む　焼土粒と炭化物が少量混じる　SX20埋土
10　7.5YR3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体にマンガン斑沈着　粗砂が混じる　SX21埋土
11　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑、マンガン斑沈着　径10～70mmの円礫を5%含む　SI14埋土
12　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑、マンガン斑沈着　SI14埋土
13　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　SI14埋土
14　10YR4/1　褐灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑濃くマンガン斑沈着　マンガン濃く沈着　径80mm以下の亜円礫を5%含む　SI14埋土
15　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑、マンガン斑沈着　10YR5/2　灰黄褐色粘質シルトをブロック状に7%含む　径50mm以下の円礫を2%含む　Vb層



第161図　発掘区壁面土層図

第２節　遺構・遺物の概要

１　遺構の概要

（１）概要

今回の調査では、古墳時代後期から平安時代にかけての遺構を中心に検出した。遺構種別毎の数量は表 71 のとおりである。第１調査面の遺構群より時期的に新しいと考えられる遺構を、Ⅲ層上面から検出したため（第４章第４節）、表では別に数量を表示した。古墳時代から平安時代にかけての集落跡と溝状遺構の他、畝溝状遺構群や水田域に関する遺構を検出した。遺構の時期決定や掲載に関しては、六里遺跡と統一した（第３章第２節）。

（２）遺構の分類

分類や略記号は、六里遺跡と統一した。ここでは、六里遺跡と異なる遺構の特徴のみを記載する。

表71　稲荷遺構種別別遺構検出数

調査面	SM	SA	SI	SD	SN	SP	SK	合計
第１調査面			18	13	1	10	118	160
（Ⅲ層上面）	1	1		5			10	17
合計	1	1	18	18	1	10	128	177

竪穴建物（ＳＩ）　上屋が想定できる諸条件を供える遺構を竪穴建物とした。当遺跡の竪穴建物はカマドが残存しているものが多く、発掘区壁面付近で検出した遺構で主柱穴が確認できなかった場合でも、カマドが認められる場合は竪穴建物に含めた。また、遺構の重複により残存状態が悪い場合でも、柱穴や壁際溝、整地土が確認できる遺構は竪穴建物とした。ただし、竪穴建物と同規模の竪穴状の掘り込みでも、上記の条件を満たさない場合は、SK とした。

柱穴（ＳＰ）　柱痕跡や柱の当たりが確認でき、柱穴と推定できるものを本類に含めたが、柱穴の建物・工作物と考えられる配置は確認できなかった。

畦畔（ＳＭ）　当遺跡においてはⅢ層上面で検出した大畦畔の痕跡のみであるが、これに伴うと考えられる杭痕を、竪穴建物と同様に「SM １-P ●」として示した。

杭列（ＳＡ）　Ⅲ層上面で検出した杭痕の内、SM １に伴わず列をなすものについてＳＡとした。

（３）遺構の時代・時期

今回の調査における時期区分は、六里遺跡・稲荷遺跡と合わせて、下記のとおりとした。

Ⅰａ期　縄文時代後期
Ⅰｂ期　縄文時代晩期（縄文土器編年：稲荷山式）
Ⅰｃ期　縄文時代晩期（縄文土器編年：西之山式）
Ⅰｄ期　縄文時代晩期（縄文土器編年：五貫森式）
Ⅰｅ期　縄文時代晩期（縄文土器編年：馬見塚式以降）
Ⅱ　期　弥生時代
Ⅲ　期　古墳時代前・中期（土師器編年：廻間Ⅱ式～宇田Ⅱ式）
Ⅳａ期　古墳時代後期（須恵器編年：MT15 ～ TK43 型式）

Ⅳｂ期　古墳時代後期（須恵器編年：美濃須衛窯Ⅱ期後半、蘇原６号窯併行期）

Ⅳｃ期　古墳時代後期（須恵器編年：美濃須衛窯Ⅲ期前半、須衛 65 号窯併行期）

Ⅳｄ期　古墳時代後期（須恵器編年：美濃須衛窯Ⅲ期後半、那加５号窯併行期）

Ⅴａ期　奈良時代前半（須恵器編年：美濃須衛窯Ⅳ－１期）

Ⅴｂ期　奈良時代後半（須恵器編年：美濃須衛窯Ⅳ－２・３～Ⅴ－１期前半）

Ⅵａ期　平安時代前葉（須恵器・灰釉陶器編年：美濃須衛Ⅴ－１期後半・K-90 号窯式期）

Ⅵｂ期　平安時代中葉（灰釉陶器編年：0-53 号窯式期）

Ⅵｃ期　平安時代後葉（灰釉陶器編年：H-72 号窯式期～百代寺窯式期）

Ⅶ　期　鎌倉～室町時代（山茶碗編年：３型式～ 11 型式・古瀬戸系施釉陶器編年：前～後期）

Ⅷ　期　戦国時代・安土桃山時代（大窯編年：１～４期）

Ⅸ　期　江戸時代以降

（４）遺構一覧表

記載内容は、六里遺跡と統一した。

２　遺物の概要

（１）概要

今回の調査では、縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、中近世陶磁器などの土器と、石器・石製品、金属製品等が出土した。この内、土器の出土点数は表 72 のとおりである。なお、「遺物包含層（Ⅱ～Ⅲ層）」としたものはⅡ・Ⅲ層の区別なく掘り下げた際の出土土器である、また、遺物包含層（Ⅳ・Ⅴ層上面）」としたものは、遺構検出作業で出土したもので本来はⅢ層に含まれるが、一定量が出土していることからⅢ層と区別して表示した。この、「Ⅳ・Ⅴ層上面」とした出土土器は、「Ⅲ層」としたものより中世以降のものが少なく、遺構検出面に近い状況を表していると思われる。遺物包含層では中世以降の遺物が比較的多く含まれる一方、遺構ではⅢ層上面を除いて古代以前の遺物のみが出土しており、今回第１調査面で検出した遺構群が、中世以前に廃絶した状況を示すと考えられる。また、六里遺跡とは異なり、明確に弥生時代と判断できる土器が出土していないが、縄文時代晩期と考えられる土器はわずかに認められる。

これらの遺物のうち、遺構の性格や時期などを検討する上で必要な遺物、分類別の代表的な遺物を中心に抽出して報告した。

（２）出土遺物の器種・分類

各遺物の分類は、六里遺跡と統一した。

縄文土器　遺物包含層や遺構埋土中からわずかに出土しているが、二次的な混入の可能性が高い。いずれも摩耗が著しく、時期や器形が判別できる個体は少ない。図示したものについては、六里遺跡のⅣ・Ⅴ層にも含まれるＩｅ期に属すると考えられる。

土師器　古墳時代から中世にかけて製作された素焼きの製品を、すべて土師器と表記した。器種は古墳時代の甕、古代の甕や鍋、甑、焼塩土器、ロクロ土師器、中世の鍋や土師器皿がある。古墳時代後期から古代にかけての甕は、六里遺跡とは異なりＢ類が目立つ。

須恵器　美濃須衛窯Ⅳ－２～Ⅴ－１期と考えられる須恵器がまとまって出土している。六里遺跡で

表72　稲荷遺跡出土土器点数

種別	縄文土器	土師器	須恵器	灰釉陶器	山茶碗	中近世陶磁器	合計
重機掘削・排水溝等	17	568	845	229	61	90	1,810
出土層位不明・排土等	1	21	42	15	6	9	94
遺物包含層（Ⅱ層）		354	551	167	122	118	1,312
遺物包含層（Ⅱ～Ⅲ層）		244	301	29	18	9	601
遺物包含層（Ⅲ層）	5	1,324	1,536	472	249	37	3,623
遺物包含層（Ⅳ・Ⅴ層上面）	5	1,762	1,152	179	13	3	3,114
試掘トレンチ		128	165	32	10	6	341
撹乱		3	6				9
SI	3	1,174	1,115	124			2,416
SD	4	105	143	35			287
SN	4	2	15	5			26
SP		53	31	6			90
SM		28	13	8	8		57
SK		281	195	20	2	1	499
その他の遺構		2					2
合計	39	6,049	6,110	1,321	489	273	14,281

は弥生土器・土師器の出土量が須恵器の約５倍にもなるが、当遺跡では表 72 で示すように、ほぼ同数である。器種は美濃須衛産の坏身Ｂ２類、坏身Ｃ類、坏蓋Ｃ類が大半である。ただし、遺構の少ないⅣ期の坏身・坏蓋Ａ類も少なからず出土しており、さらに時期の降るものも認められる。六里遺跡では、５世紀以降の遺構・遺物が認められ、当遺跡においても何らかの活動があったと考えられる。

灰釉陶器　SI １等では、美濃須衛Ｖ期の遺物と共伴して、K-90 号窯式期の灰釉陶器が出土した。また、時期の降る 0-53 号窯式期の灰釉陶器も竪穴建物（SI ３等）から出土した。K-90 号窯式期に属するとしたものは､器壁が薄手で刷毛塗りで施した灰釉の発色が比較的明瞭である。器種には碗･皿類、瓶類などがあり、耳皿（665）や手付瓶（667）など特殊な器種も含まれる。0-53 号窯式期に属するとしたものは、器壁が厚手で灰釉を漬掛けするもので、碗類の高台端部にやや丸みがある。器種は碗・皿類が多く、体部下半が張る深碗の器形をとるものや、段皿も認められる。なお、当遺跡では、0-53 号窯式期以降の灰釉陶器は極わずかである。

山茶碗　六里遺跡と同様、Ⅲ層内で尾張型のものが目立ち、第７型式以降で東濃型も認められる。器種は碗又は皿であるが、尾張型の片口鉢もわずかにみられる。

中近世陶磁器　古瀬戸系施釉陶器、大窯、瀬戸･美濃、貿易陶磁器などがある。いずれも、Ⅲ層（Ⅳ･Ⅴ層上面を含む）より上層に含まれる。

土製品　Ⅲ層から布目痕が認められる平瓦が１点（913）、表土から鞴の羽口の可能性がある細片が１点出土している。

石器・石製品　竪穴建物と遺物包含層から、砂岩製と泥岩製の砥石が出土しているほか、SI ７で、花崗岩製の台石（724）が出土している。台石はSI ６でも花崗閃緑岩製のものが出土しているが、破片のため図示しなかった。これらについては古代以降の遺物である可能性がある。この他、929 のような磨石・叩石類、チャートの微細な連続剥離をもつ剥片（ＭＦ）が出土しており、縄文土器と同様に二次的な混入と考えられる。なお、六里遺跡の第３調査面で出土したサヌカイト製や下呂

石製の剥片石器は出土しなかった。

木製品　SM １の遺構の構造材として、加工のある杭が３点出土した。

金属製品　銅製の銭貨１点、煙管１点、鉄製品６点、鉛玉１点がある。用途不明の鉄製品が１点(925) Ⅲ層で出土した以外は、いずれもⅡ層より上層から出土した。

（３）遺物観察表

記載内容は、六里遺跡と統一した。

第３節　古墳時代及び古代の遺構・遺物

１　竪穴建物

SI １（第 162 図～ 165 図）

検出状況　EM20 から EN １グリッドにかけて検出した。遺構検出作業の初期段階で、炭化物を多く含む堆積（２層）が露出していた（第 RR ３図）。当初は焼失建物の可能性を念頭において調査を進めていたが、まとまった炭化材は検出できなかった。長軸方位は N-8°-E でわずかに東へ傾く。本遺構の南側で SI ２と重複し、これより新しい。また、床面上から SD14 を検出した。

堆積状況　埋土はＶｂ層に類似する黄灰色の粘質シルトと、炭化物及び焼土を大量に含む黒褐色の粘質シルト（同２層）からなる。２層は掘方の中央部に堆積しており、３層の堆積が廃絶後初期段階に流入して残った窪地状の部分に、炭化物を含む２層が堆積したと考えられる。

床面・掘方　床面はしまりが無く、床面遺構を検出した時点で基盤層に含まれる礫が露出した。床面上で重複する SD14 を検出したため、貼床や整地土はないと判断した。

付属遺構　壁際溝は掘方壁面に沿って検出し、カマド設置位置のみ途切れる。壁際溝の断面形は半円形である。

主柱穴とした遺構（Ｐ１～４）は、Ｐ３を除いて浅い窪み状であり、いずれも柱痕跡などの柱穴の特徴は確認できなかったが、その配置から主柱穴とした。Ｐ１・２・４は形状や埋土が類似する。Ｐ３は他の主柱穴より径が小さくて深く、最下層に黒褐色の粘性が強い土が堆積していた。

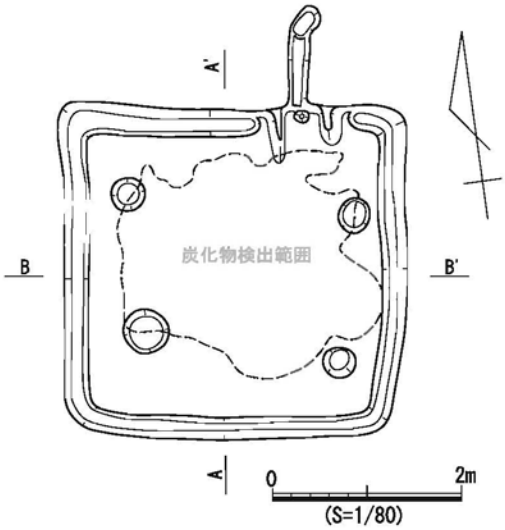
カマドは、掘方北壁の中央東寄りに位置する。炭化物･焼土混じりの堆積土を除去したところ、炭化物の広がりと燃焼部と考えられる被熱範囲（４層）、北壁から延びる袖の一部（７～ 10 層）を検出した。また、被熱範囲北側の壁際から小穴を検出しており、支脚柱が存在した可能性がある。西側袖部の下面に焼土混じりの埋土をもつ小穴があり、埋土上面の一部が被熱範囲に含まれる。この他、カマド設置箇所から掘方の外へ約 1.1ｍ北に延びる煙道を検出した。非常に浅いため、上面が削平されていると考えられる。遺構の北端部はやや窪んでおり、煙道の端部と考えられる。

遺物出土状況　掘方北西部の埋土中から、ほぼ完形の灰釉陶器耳皿（665）が出土した。また、東壁中央の壁際溝上面から、複数の亜角礫と土師器甕や須恵器、灰釉陶器がまとまって出土した。土師器甕（668）は、口縁部から底部までが破砕した状態で出土した。竪穴掘方の壁面に沿うように破片が散布しており、口縁部から体部上半の破片は南側にまとまっていた。カマドからは、

３層上面で灰釉陶器の壺類（659・660）、煙道部北端から須恵器の碗（653）が出土した（第164図）。

出土遺物　SI １及びその付属遺構からは、須恵器、灰釉陶器、土師器、石器１点が出土した。この内、24点を図示した。

647 ～ 658・661 は須恵器である。648 ～ 650 は坏蓋Ｃ類で、647 はＣ類に類似するが口縁端部のかえりがほとんどみられない。651 は坏身Ｂ２類で、器高が低く口縁部が大きく開く。底面は回転ヘラ切り痕が残る。652 は坏身Ｃ類である。底面はヘラ切り痕がナデ消され、ヘラ記号がみられる。653 ～ 656 は碗である。653 はカマド煙道部内から出土しており、破片ではあるが、口縁から底部までの形態がわかる。口縁部が緩やかに外反する。657 は皿である。体部から口縁部にかけて緩やかに内湾しながら立ち上がる。底部内面は使用による摩耗がみられる。底面には回転ヘラ切り痕が明瞭に残り、焼成前に刻まれた２条の沈線（ヘラ記号）が認められる。658 は短頸壺と考えられる。661 は甕である。器壁の外面にタタキ目、内面に当て具痕が明瞭に残る。体部中程に指頭成形痕が残る把手が付されている。



第162図　SI１埋土炭化物検出範囲

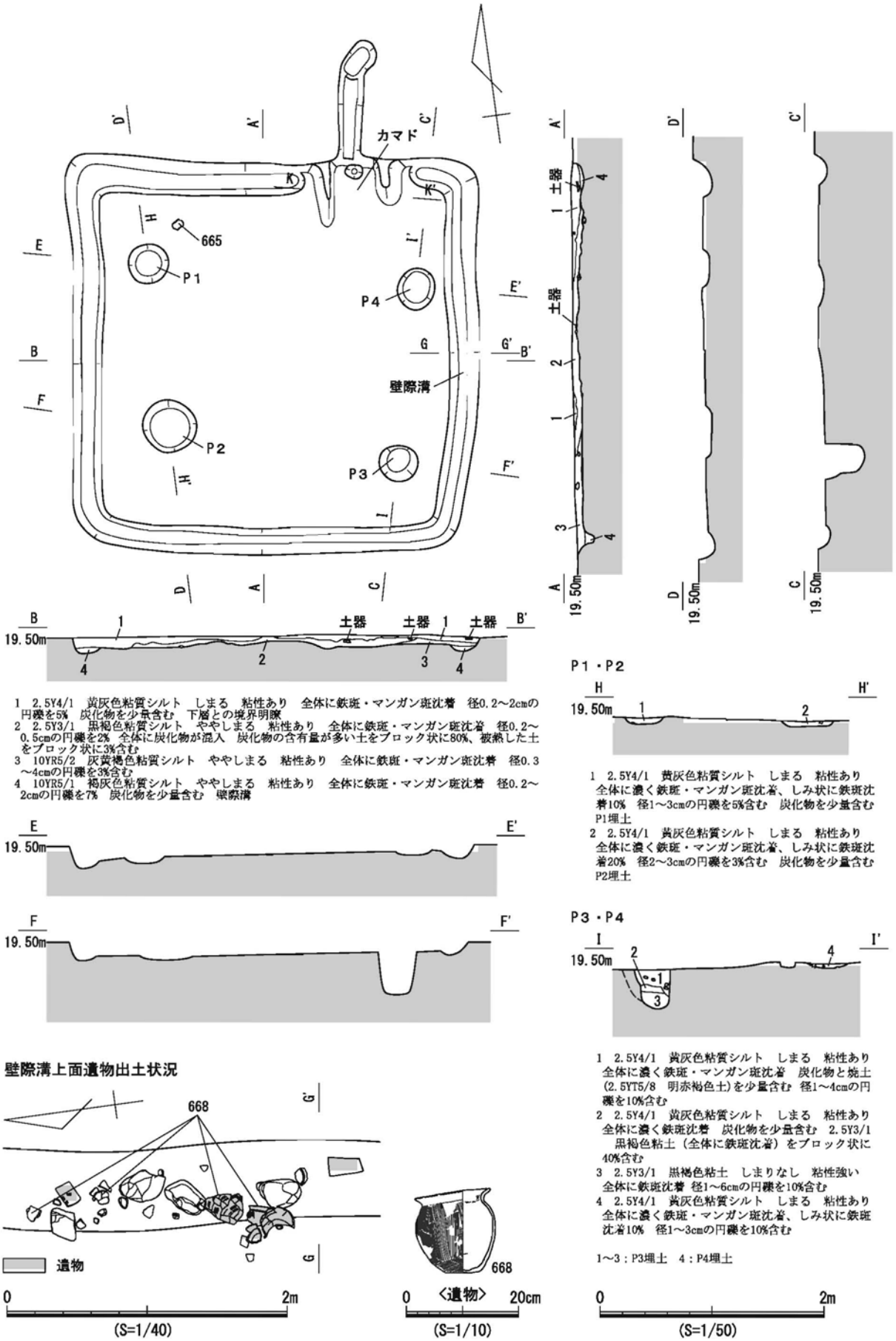
659・660・662 ～ 667 は灰釉陶器である。662・663 は碗である。662 は器壁が薄く、灰釉が刷毛塗りされている。口縁端部が強く外反する。663 は器壁が厚く、灰釉の発色がほとんどみられない。664 は皿である。灰釉や器壁の厚みなどは 662 に似る。665 は耳皿である。器壁が非常に薄い。ロクロで成形した皿の口縁部を折り曲げて、耳皿の形態を作出している。659・660・666 は壺・瓶類である。660 は 659 とともにカマド内から出土しており、同一個体の可能性もある。666 は外面全体に灰釉を施す。667 は手付瓶の把手である。粘土紐を面取りし、細い板状にして器壁に貼り付けたと考えられる。上端には自然釉が付着する。

668 ～ 670 は土師器である。668・669 は甕Ｂ類である。668 は小型品で、器高は 15 ㎝程度である。外面には煤が付着しており、煮炊きに使用したと思われる。底面は平底で胴の上半に最大径をもち、口縁部はくの字に屈曲する。胴部外面は斜方向、口縁部内面には横位の粗いハケを施す。胴部と底部ではハケの方向が異なっており、底部側の方が後から施されている。この部分はやや器壁が厚くなっており、底部と胴部をつなぎ合わせた痕跡と考えられる。底面の凹凸から、底面の粘土板は粘土紐を巻いて成形した可能性がある。670 も 668 と同様くの字に外反する口縁をもつが、屈曲部分が厚く端部が面取りされていることから、鍋と考えられる。

所属時期　出土した須恵器は美濃須衛窯Ｖ -1 期、灰釉陶器は K-90 号窯期のものが大半であることから、Ⅵａ期に位置づけられる。

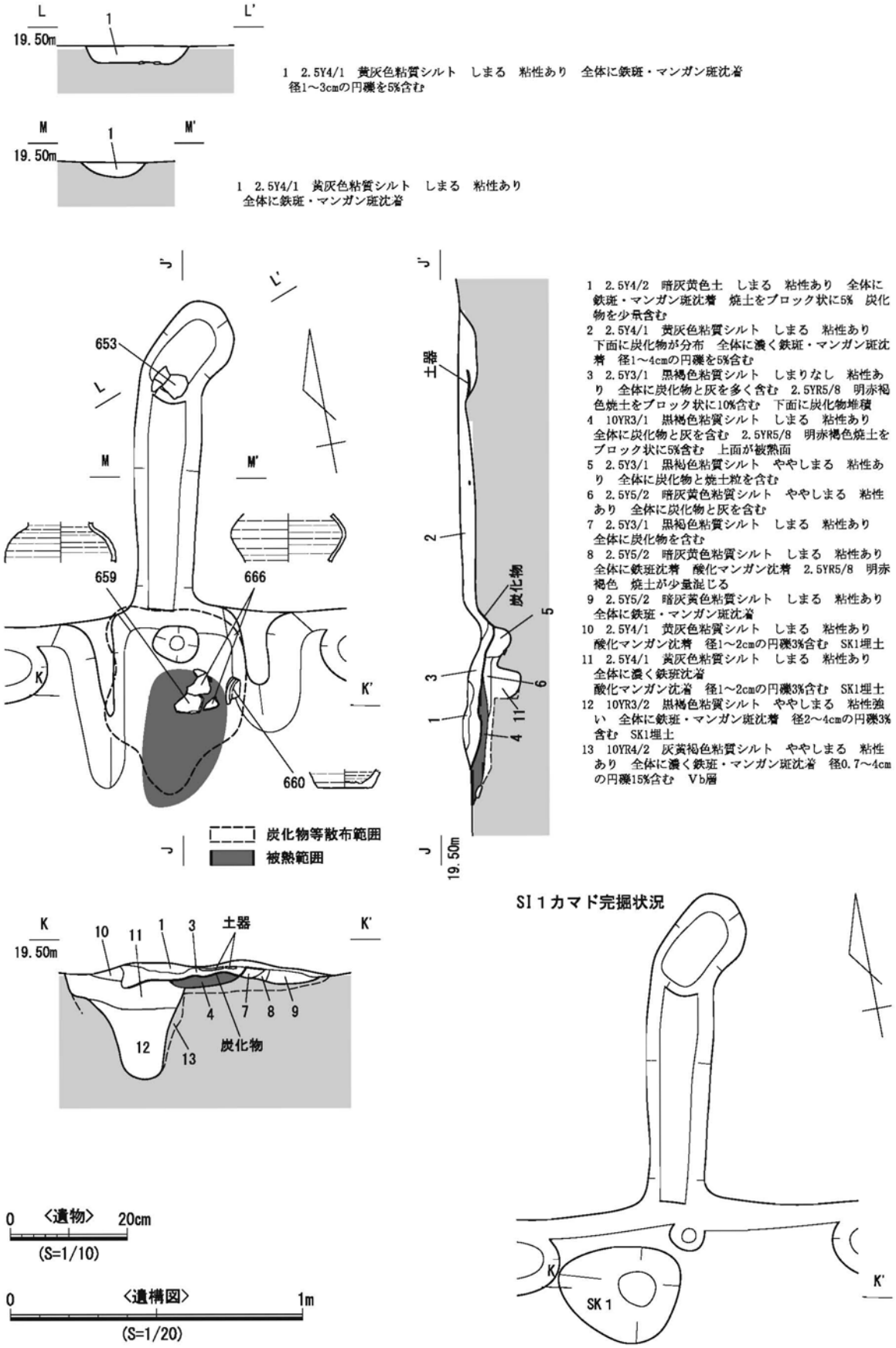
SI ２（第 166・167 図）

検出状況　EN １から E0 １グリッドにかけて検出した。平面形が隅丸方形であると考えられるが、南半分が発掘区外に延びるため全容は不明である。検出した範囲の埋土はＶａ層に酷似してお

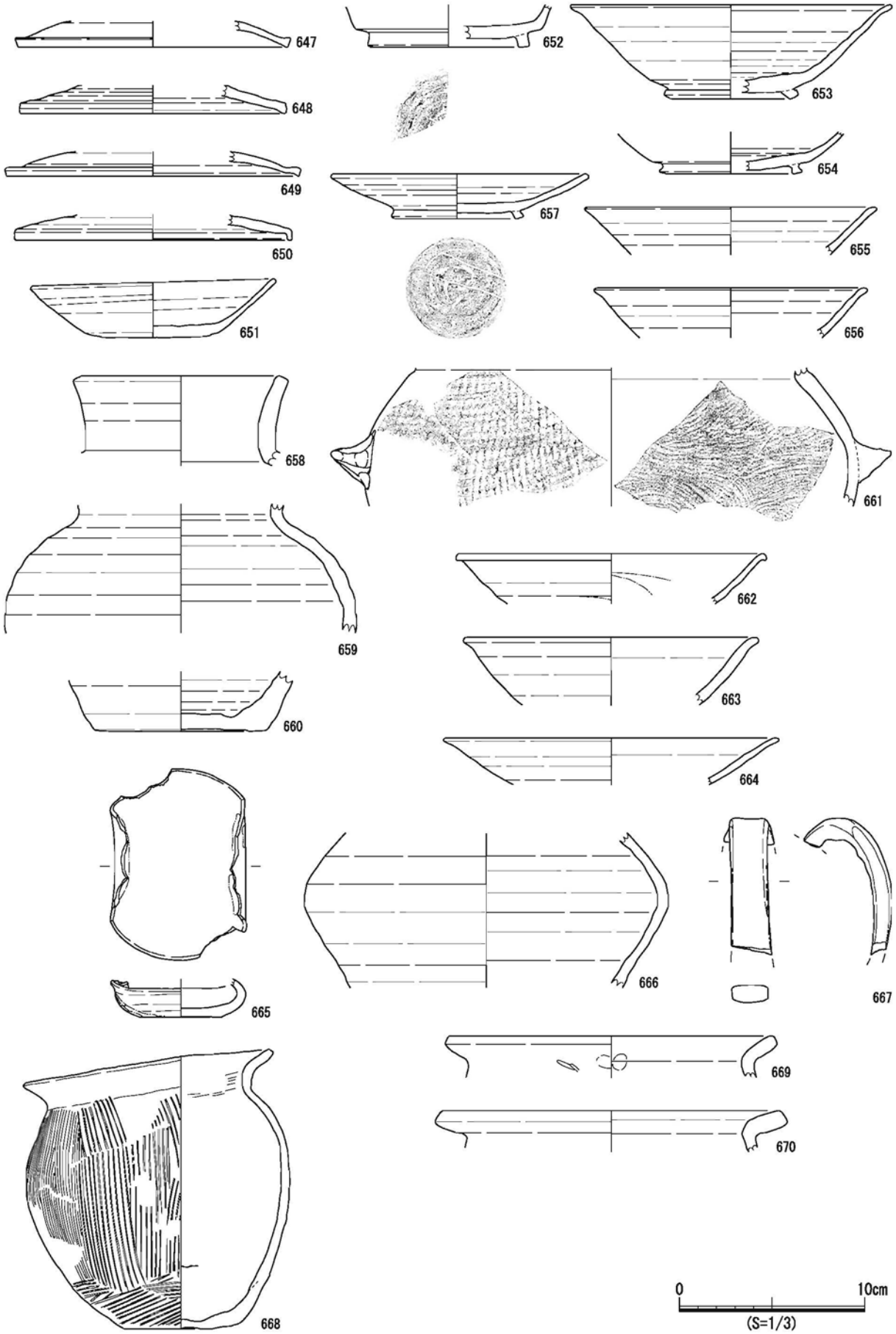


第163図　SI１遺構図①

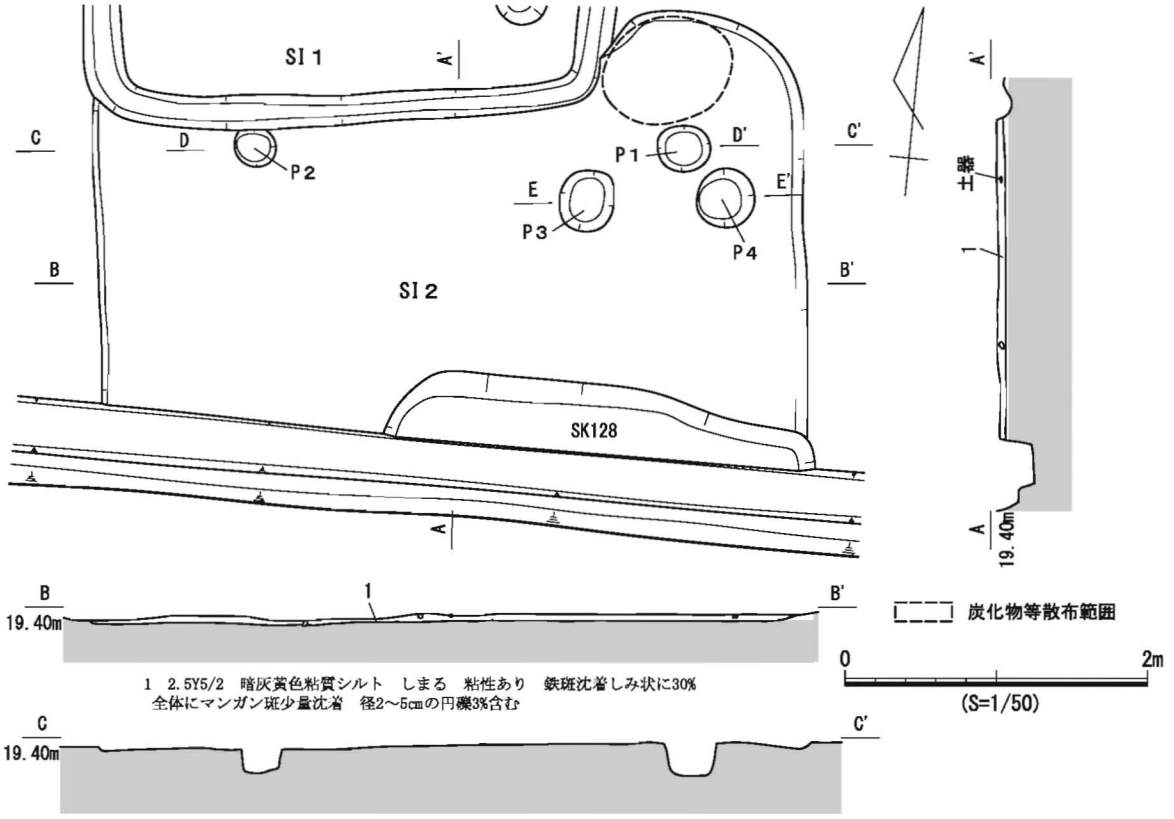
SI１カマド検出状況



第164図　SI１遺構図②



第165図　SI１出土遺物

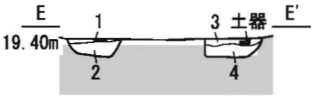


1　2.5Y5/2　暗灰黄色粘質シルト　しまる　粘性あり　鉄斑沈着しみ状に30%
全体にマンガン斑少量沈着　径2～5cmの円礫3%含む

P１・P２

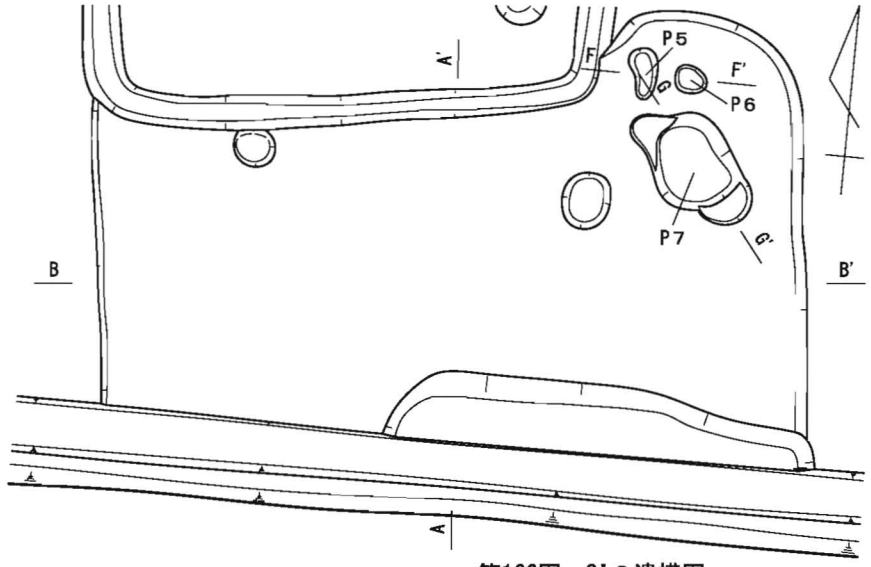
1　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン粒沈着
2　10YR3/1　黒褐色粘質シルト　しまりなし　粘性あり　炭を大量に含む　径1～4cmの円礫を7%含む　土器を含む
3　10YR4/1　褐灰色粘土　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　径2～3cmの円礫を10%含む
4　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に濃く鉄斑・マンガン粒沈着
5　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　径2～6cmの円礫を10%含む
1～3：P1埋土　4・5：P2埋土

P３・P４

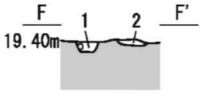


1　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン斑沈着
2　10YR4/1　褐灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン斑濃く沈着　径1～2cmの亜円礫を3%含む
3　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン斑沈着　径2cmの円礫を3%　土器を含む
4　10YR4/1　褐灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン斑濃く沈着　径1～2cmの亜円礫を3%含む
1～2：P3埋土　3・4：P4埋土

SI２掘方完掘状況

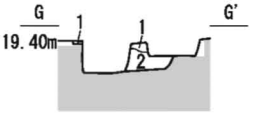


P５・P６



1　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体にマンガン斑沈着　焼土塊を10%含む　炭化物が混じる　P5埋土
2　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体にマンガン斑沈着　焼土と炭化物を少量含む　P6埋土

P７



1　10YR5/2　灰黄褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体にマンガン斑沈着　径0.7～2cmの亜円礫を3%含む　焼土と炭化物を少量含む
2　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体にマンガン斑沈着　径0.5～1cmの亜円礫を5%含む

第166図　SI２遺構図

り、検出当初からSI ２より古いSD14の一部が露出していたことから、埋土が大きく削平されていたと考えられる。長軸方位はN-84°-Eで、SI １とほぼ直交する。SI １及びSD14と重複しており、SI １より古く、SD14より新しい。

堆積状況　埋土が大きく削平されていたため、詳細は不明である。

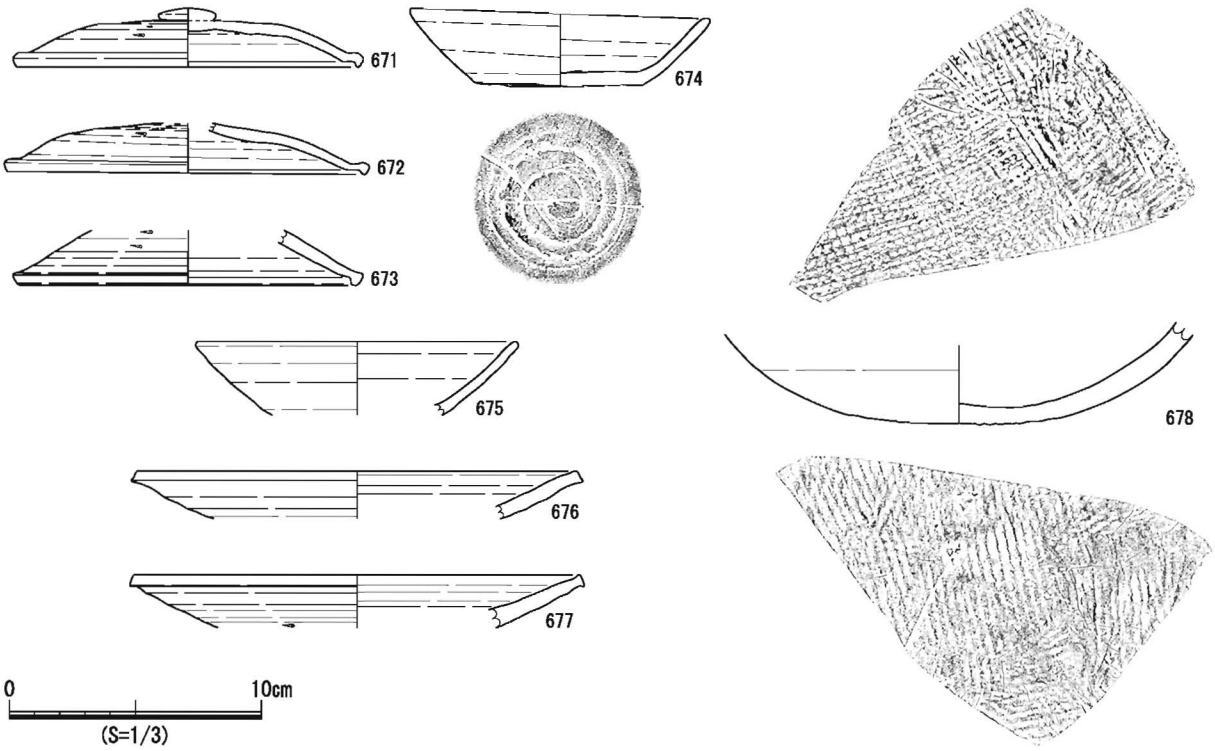
床面・掘方　第166図下図は、北東角付近でＰ１を検出した段階で一度掘削を終了し、その後周囲の土層確認によって埋土が残存していることを確認し、再度掘り下げた後に検出した遺構の図である。このことから、主柱穴のある床面が存在しており、SK ３～５を検出した面が掘方底面と考えられる。

付属遺構　主柱穴としたＰ１・Ｐ２は、柱痕跡は確認できなかったが、形状や掘方がよく似ており、Ｐ１の底面には粘土が堆積していた。遺構の北東角付近から焼土と炭化物の集積を検出したが、カマドの痕跡であるかどうかは不明である。

遺物出土状況　埋土中から遺物が出土しているが、特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物　SI ２及びその付属遺構からは、縄文土器、須恵器、土師器が出土した。この内、８点を図示した。

図示した遺物はいずれも須恵器である。671～673は坏蓋Ｃ類である。いずれも体部中程から頂部にかけて回転ケズリ調整されている。674・675は坏身Ｂ２類である。674は青みがかった色調で、美濃須衛窯産ではない可能性がある。底面に明瞭な回転糸切り痕が残り、１条のヘラ記号が付される。676・677は盤である。ともに口縁端部が直線的に開き、端部が面取りされる形態をとる。678は甕の底部である。底面部分が僅かに平らになるが、丸底に近い。外面にタタキ目、



第167図　SI２出土遺物

内面に当て具痕が残る。

所属時期　出土した須恵器は美濃須衛窯Ｖ－１期に属すると考えられ、埋土中に灰釉陶器が含まれないことからＶｂ期に位置付けられる。

SI ３（第 168 ～ 170 図）

検出状況　EN ２グリッドで検出した。平面形は方形である。周囲の竪穴建物より若干規模が小さく、長軸方位が N-77°-E である。SI ４と重複し、これより新しい。

堆積状況　黄灰色の粘質シルトが堆積しており、基盤層との識別は容易であった。

床面・掘方　硬化した貼床はみられないが、主柱穴と思われる遺構を検出した面を床面とした。掘方の埋土は、北西－南東の対角線を境にして、土質が異なる（第 168 図３・４層）。掘方完掘後、底面から４基の土坑（P ６・８～ 10）とともに、SI ４の主柱穴の可能性がある掘り込み（SI ４-P ４）を検出した。

付属遺構　床面の壁際で検出した窪み状の遺構４基を主柱穴（P １～４）とした。柱痕跡など柱穴の特徴は確認できなかったため、配置から判断した。

カマドは、燃焼部と思われる被熱痕と掘方の東壁面から延びる袖の一部を検出した。東壁に張りだす部分は煙道部と考えられるが、この部分には、カマドの構造材と思われる土とともに被熱していない円礫が入れ込まれていた（Ｉ－Ｉ’１・３・４層）。礫は径 20cm を超えるものが４個、少し小さめなものが３個あり、埋土上部に集中していた。これらと同種の礫が、カマドに隣接するＰ５と、埋土中から２個出土した。燃焼部は検出した袖部の間に位置する。土層図から、カマドの下部土坑の埋土上面（Ｈ－Ｈ’６層）が被熱したと判断した。

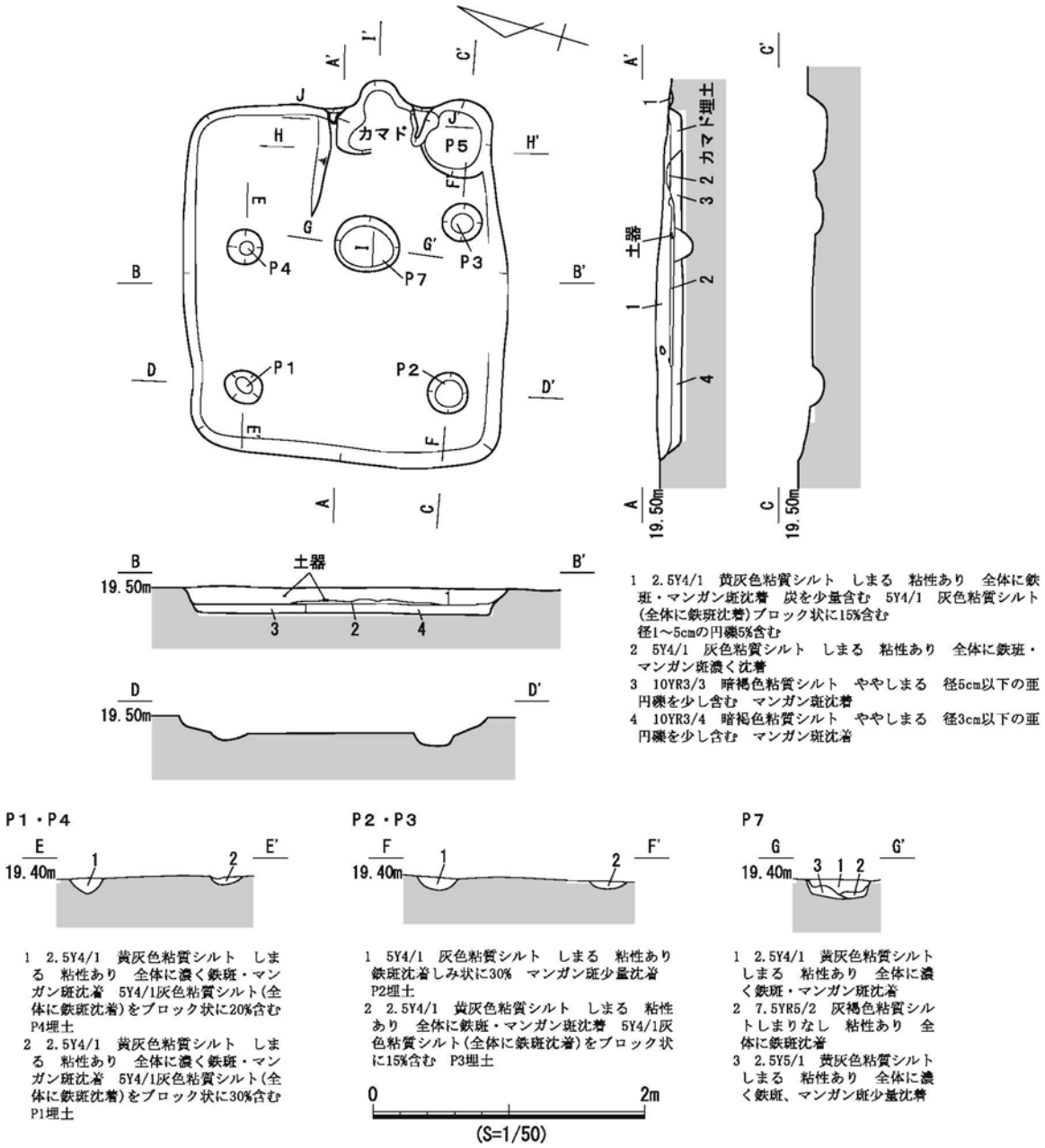
この他、床面上と掘方底面で土坑を検出した。Ｐ５はカマドに接して掘り込まれており、北側の肩が袖部と一体化している。貯蔵穴である可能性がある。

遺物出土状況　カマドやその周辺から、灰釉陶器の完形に近い個体がまとまって出土した（第 169 図 688 ～ 692）。

出土遺物　SI ３及びその付属遺構からは、縄文土器、須恵器、灰釉陶器、土師器が出土した。この内、16 点を図示した。

679 ～ 687 が須恵器である。679・680 は坏蓋Ａ類である。ともに口縁部と体部に明瞭な境がみられない。679 は体部外面が摩耗している。681・682 は坏蓋Ｂ類である。内面に短いかえりを有すが、682 はかなり口縁端部に近い位置に付される。683 は坏蓋Ｃ類である。体部上半に回転ヘラケズリ調整を施す。684 は坏身Ａ類で、短い口縁部が内傾する。685 は坏身Ｃ類である。体部から口縁部にかけて直線的に開く。高台は残存していない。686 は盤である。口縁端部が上方に短く折り返され、底面のやや外側に高めの高台が付される。687 は甕の口縁部破片であるが、焼成不良により全体が摩耗している。

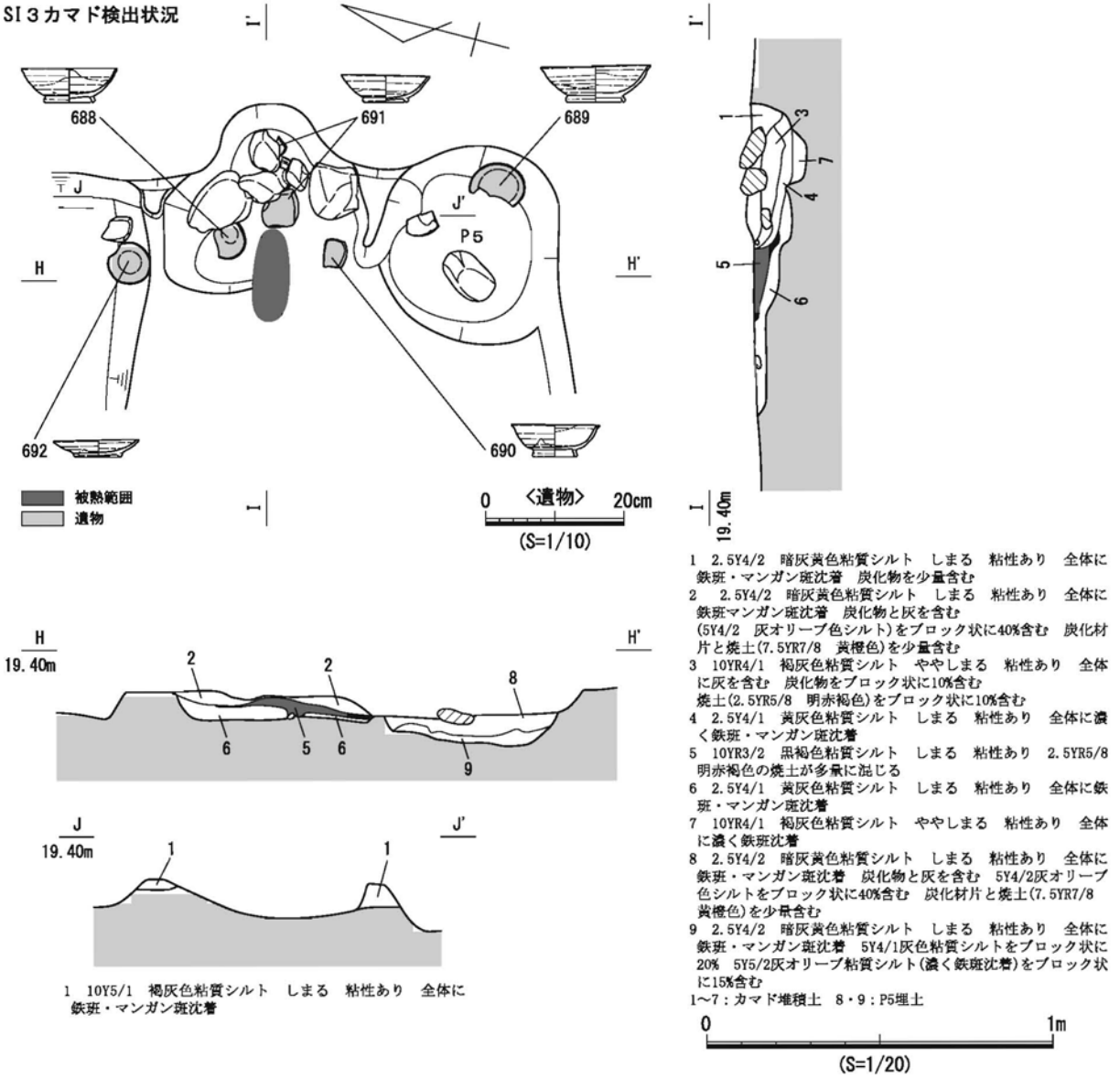
688 ～ 694 は灰釉陶器である。688 と 689 は碗である。688 は体部に丸みがあり、口縁部の外反がほとんどみられない。689 も同様であるが、径が大きい。また 688 は体部外面にヘラケズリ調整がみられるが、689 は回転ナデ調整のみである。689 の底面には、回転糸切り痕が明瞭に残る。灰釉はともに漬け掛けである。690 は、比較的高い高台と外反する口縁端部が特徴の深碗と考えられる。灰釉を漬け掛けで施す。 691 は碗であるが、高台が低く角張る特徴がある。全体的な



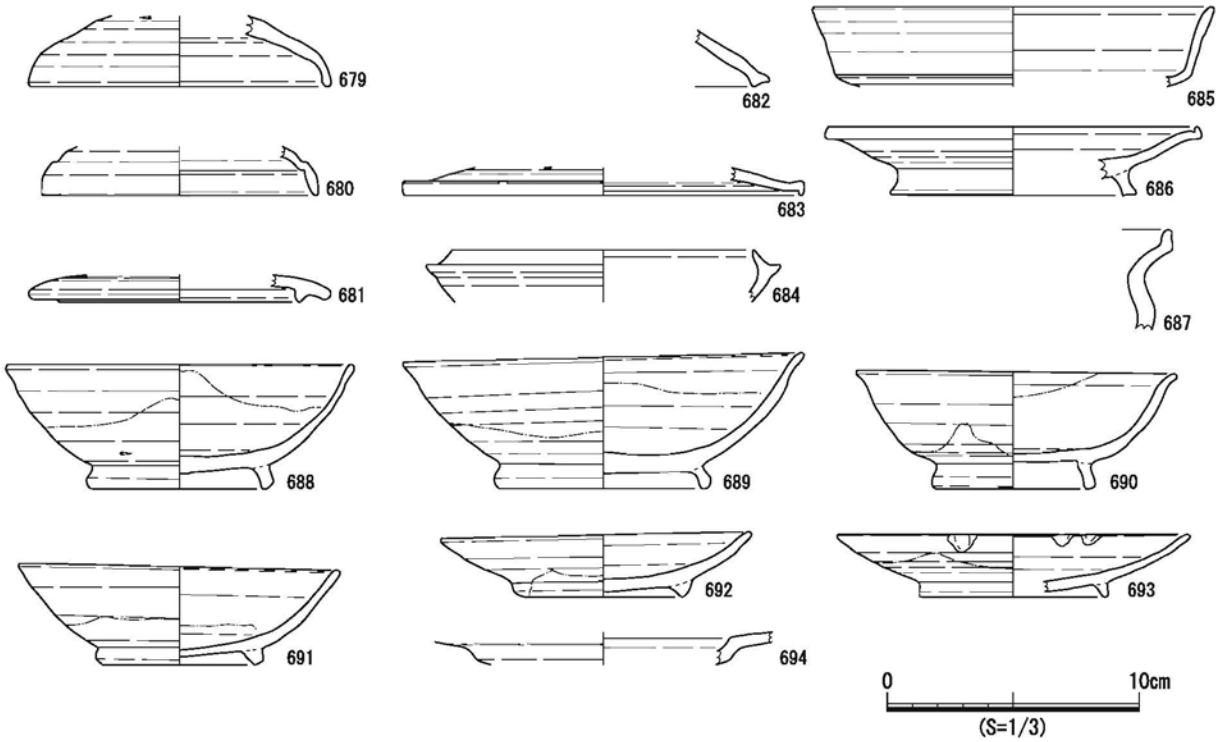
第168図　SI３遺構図①

器高も低い。灰釉を漬け掛けで施す。692・693 は皿である。692 は内面に焼成時の付着物が著しく付着する。693 は口縁端部に意図的な窪みが付されており、輪花皿と思われる。692 よりやや高めの高台が付される。694 は段皿の体部片である。内面に灰釉を施すが、破片であるため詳細は不明である。

所属時期　埋土中の須恵器は破片が多く時期にまとまりがないことから、混入と考えられる。一方灰釉陶器は完形に近い個体が多く、カマド付近に集中することから、竪穴建物廃絶時に遺棄されたと思われる。出土した灰釉陶器が 0-53 号窯式期に属すると考えられることから、Ⅵb 期に位置付けられる。



第169図　SI３遺構図②



第170図　SI３出土遺物

SI ４（第 171 ～ 174 図）

検出状況　EM ２から EN ３グリッドで検出した。平面形は、東西方向に広い長方形である。長軸方位は N-72°-E である。SI ３と SI ５、土坑列４の SK51 ～ 53 と重複し、これらより古い。

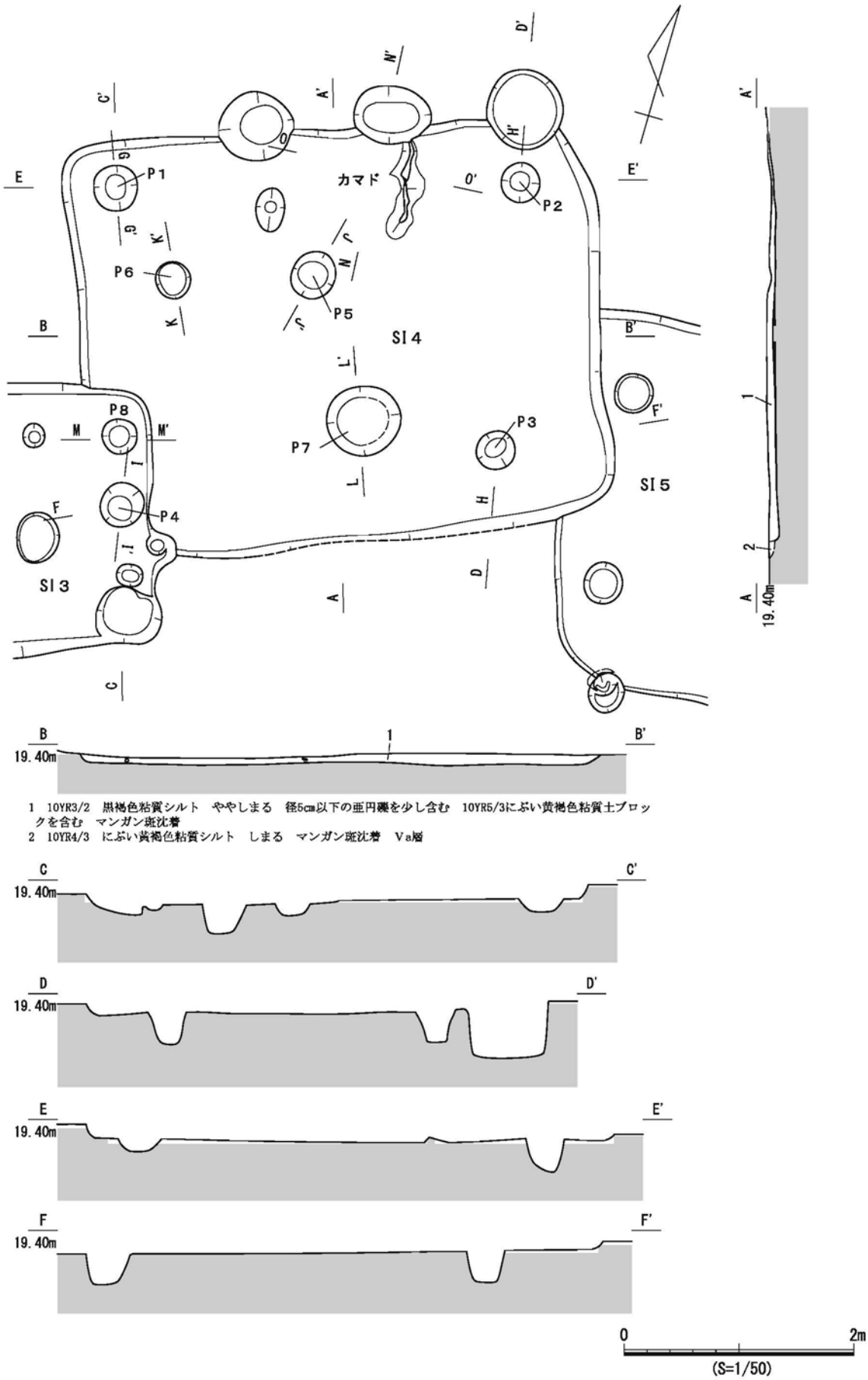
堆積状況　黒褐色の粘質シルトが堆積している。

床面・掘方　貼床や整地土はみられず、主柱穴は掘方底面に直接設置されていた。掘方が非常に浅いため、上面が削平されたと考えられる。

付属遺構　掘方底面で検出した遺構の内、その配置から３基を主柱穴（P １～３）とした。また、SI ３の掘方底面で検出した遺構の内、SI ４の掘方に含まれることが想定される２基を本遺構の付属遺構とし、その内１基を主柱穴とした（P ４）。P ２～４は規模が似ており、P ２には柱痕跡と思われる土層がみられる（第 172 図）。

カマドは掘方北壁中央のほぼ中央に設置されている。燃焼部と思われる被熱痕と東側の袖の一部などを確認した。被熱痕は残存する袖部の西側に位置し、掘方底面やP ９の上面が熱を受けている。この被熱痕の北側に、P11 を掘方とする立石があり、検出面から上に約 13cm 露出していた。支脚柱の可能性があるが、明確な被熱の痕跡は確認できなかった。残存する袖部の南端からは、被熱した長楕円礫を検出した。長軸の長さが約 35 cmある大型礫で、カマドの構造材として用いられていた可能性がある。袖部の除去後、７基の小穴（P10 ～ 15）を検出した。どの土坑の埋土にも焼土や炭化物が混じるが、P11 以外はカマドとの関係は不明である。この他、掘方底面で検出した土坑（P ５～８）についても、性格は不明である。

遺物出土状況　カマドの被熱痕上層から、土師器甕の口縁部から頸部にかけての破片がまとまって出土した（第 172 図 697）。体部から底部の破片は出土していない。



第171図　SI４遺構図①

出土遺物　SI ４及びその付属遺構からは、須恵器、灰釉陶器、土師器が出土した。この内、３点を図示した。

695・696 は、須恵器の坏蓋Ａ類である。ともに口縁部と体部に明確な境界が無い。695 の体部上半には、回転ヘラケズリ痕が残る。697 は土師器の甕Ａ類である。体部外面は斜方向、内面に横位の同様な工具によるハケ調整を施す。口縁部内外面を横ナデ調整し、ハケ目をナデ消す。口縁端部を面取りし、上方に摘み上げる。体部上半の内面には、コゲが付着する。

所属時期　重複関係が周囲の遺構の中では最も古い。出土した須恵器坏蓋は破片であるため明確ではないが、Ⅳｂ期に位置付けられる。

SI ５（第 175 ～ 178 図）

検出状況　EM ３から EN ３グリッドで検出した。遺物包含層の掘削を行った時点で炭化物を多く含む堆積と集積した須恵器等の破片を確認したが、後の遺構検出によって、SI ５の北壁中央に近い埋土上面に位置することが判明した。平面形は、やや歪んだ方形で、煙道部がやや突出している。長軸方位は N-7°　-W である。掘方の北西で SI ４と重複し、これより新しい。

堆積状況　黒褐色の粘質シルトが堆積していた。

床面・掘方　床面の硬化や整地土は確認できなかった。掘方が非常に浅いため、上面が削平されたと考えられる。

付属遺構　掘方底面で検出した遺構の内、その配置から４基を主柱穴（Ｐ１～４）としたが、いずれも浅い窪み状の遺構である。また、掘方底面の南東隅と中央付近から土坑（Ｐ５・６）を検出したが、性格不明である。

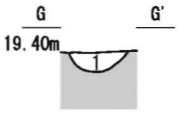
カマドは、掘方北壁のやや東に寄った位置から検出した。当該位置には、SI ５を検出した段階ですでに埋土上面に炭化物が集中していた。破却された構造材と思われる堆積を除去後、袖の一部と被熱痕、炭化物の広がりを検出した。被熱痕は２箇所あり、南側が燃焼部、北側が被熱した煙道部と思われる。袖部にも円形の焼土がみられるが、断面図から、モグラ穴あるいは植物痕に焼土が入り込んだものである可能性が高い。煙道部が掘方北壁の外へ 0.15 m程度突出している。袖部除去後には３基の土坑（Ｐ７～９）を検出した。この内、Ｐ９はカマドの焚口正面にあたり、カマドと何らかの関係があった可能性はあるが、埋土に炭化物が混入するなどの特徴はみられなかった。

遺物出土状況　掘方北西に近い位置の埋土上面から、須恵器や灰釉陶器がまとまって出土した。遺構検出作業の際にすでに露出していたため、遺物包含層出土遺物として取り上げた破片も多い。出土状況から、SI ５の埋没過程で、窪地状になった遺構内に遺棄されたと考えられる。出土位置にまとまりがあるものは（第 175 図）同時に遺棄された可能性があるが、完形になる固体は認められない。猿投産の須恵器の甕（704）や平瓶（702）、灰釉陶器の長頸瓶（703）や小瓶（706）など、特徴的な遺物が出土している。なお、器面がはぜるように割れているものが多いことから、二次焼成を受けている可能性がある。

出土遺物　SI ５（埋土上面含む）及びその付属遺構からは、須恵器、灰釉陶器、土師器が出土した。この内、10 点を図示した。

698 ～ 702・704 は須恵器である。698 は坏蓋Ｃ類で、カマドから出土した。699 は坏身Ａ類である。

P1

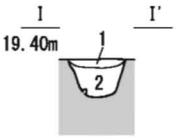


1　2.5Y5/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着・マンガン斑少量沈着　2.5Y4/2　暗灰黄色粘土をブロック状に15%含む　焼土を少量含む

P2・P3

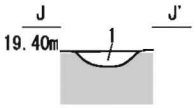
1　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　5Y4/1灰色粘土をブロック状に30%含む
2　5Y4/1　灰色粘土　ややしまる　粘性あり　2.5Y4/1黄灰色粘質シルト（全体に鉄斑沈着）をブロック状に20%含む
3　10YR4/1　褐灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着
4　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　10YR4/3にぶい黄褐色土ブロックを30%含む　マンガン斑沈着
5　10YR4/2　灰黄色粘質シルト　ややしまる　径3cm以下の円礫を少し含む　マンガン斑沈着
1～3：P3埋土　4・5：P2埋土

P4



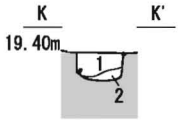
1　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　しまりなし　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑沈着
2　10YR4/2　灰黄色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体にマンガン斑沈着　径4cm以下の円礫を3%含む

P5



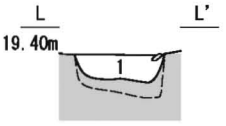
1　10YR3/3　暗褐色粘質シルト　ややしまる　径3cm以下の亜円礫を少し含む　マンガン斑沈着

P6



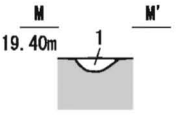
1　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑少量沈着
2　2.5Y5/2　暗灰黄色粘質シルト　しまりなし　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン斑濃く沈着　径0.2～0.7cmの円礫を3%含む

P7



1　10YR4/1　褐灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に濃く酸化マンガン沈着

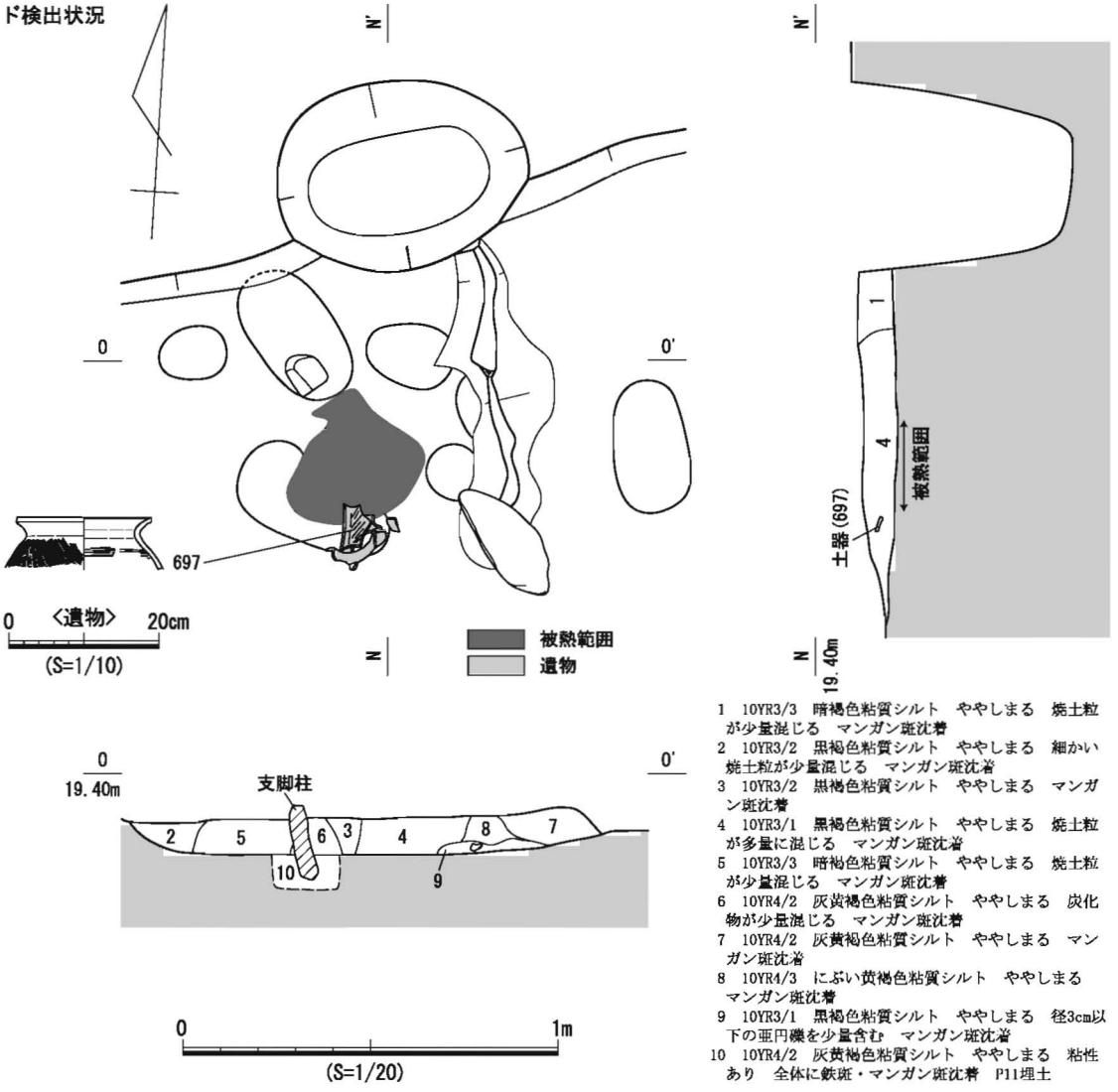
P8



1　10YR3/1　黒褐色粘質シルト　ややしまる　径3cm以下の亜円礫を少し含む　マンガン斑沈着

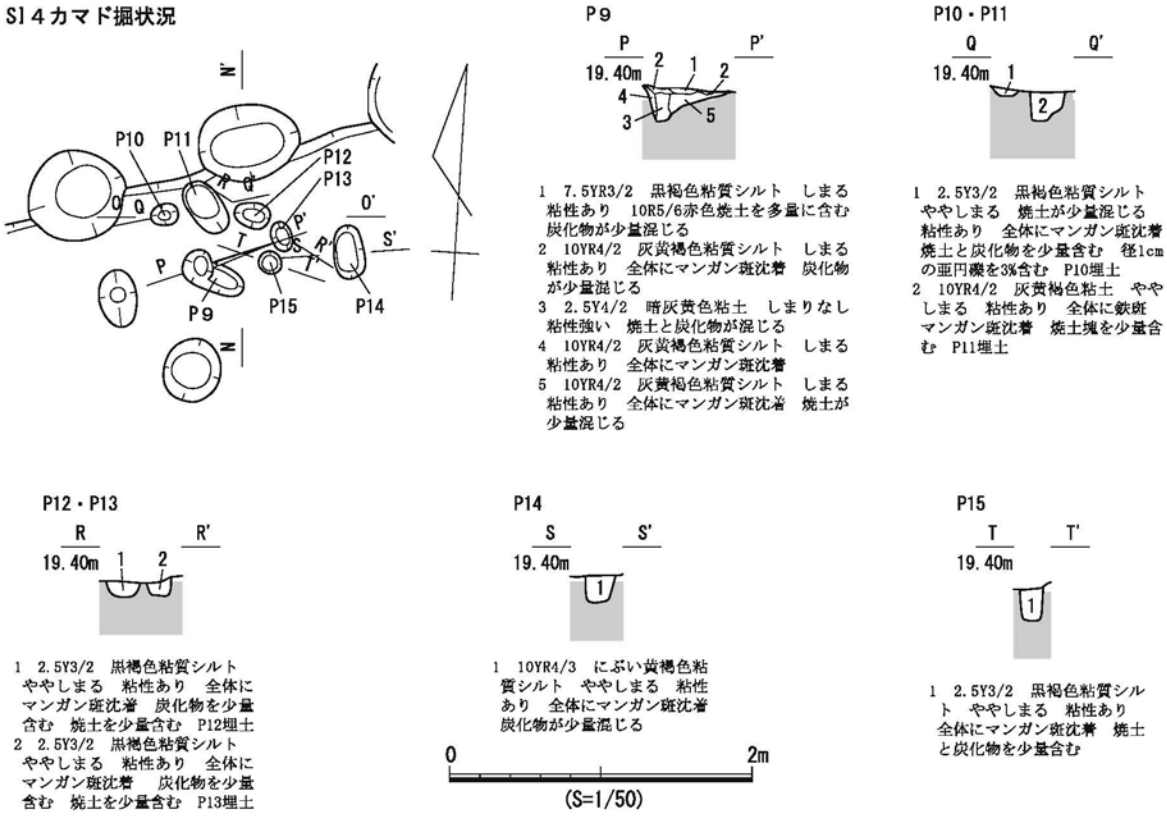
0　2m
(S=1/50)

SI４カマド検出状況

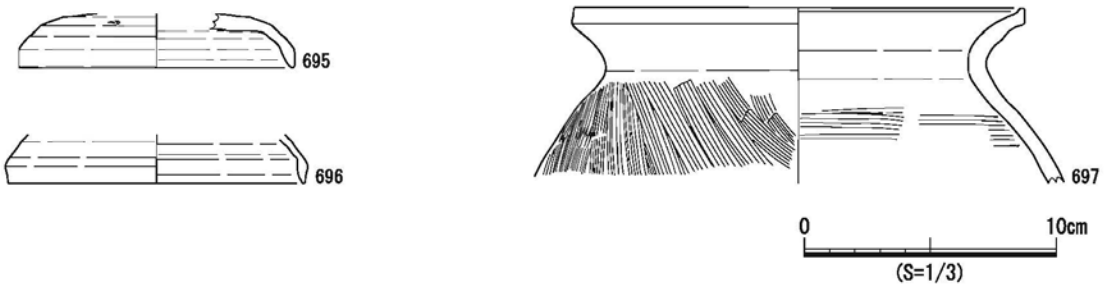


1　10YR3/3　暗褐色粘質シルト　ややしまる　焼土粒が少量混じる　マンガン斑沈着
2　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　細かい焼土粒が少量混じる　マンガン斑沈着
3　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　マンガン斑沈着
4　10YR3/1　黒褐色粘質シルト　ややしまる　焼土粒が多量に混じる　マンガン斑沈着
5　10YR3/3　暗褐色粘質シルト　ややしまる　焼土粒が少量混じる　マンガン斑沈着
6　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　ややしまる　炭化物が少量混じる　マンガン斑沈着
7　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　ややしまる　マンガン斑沈着
8　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質シルト　ややしまる　マンガン斑沈着
9　10YR3/1　黒褐色粘質シルト　ややしまる　径3cm以下の亜円礫を少量含む　マンガン斑沈着
10　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン斑沈着　P11埋土

第172図　SI４遺構図②



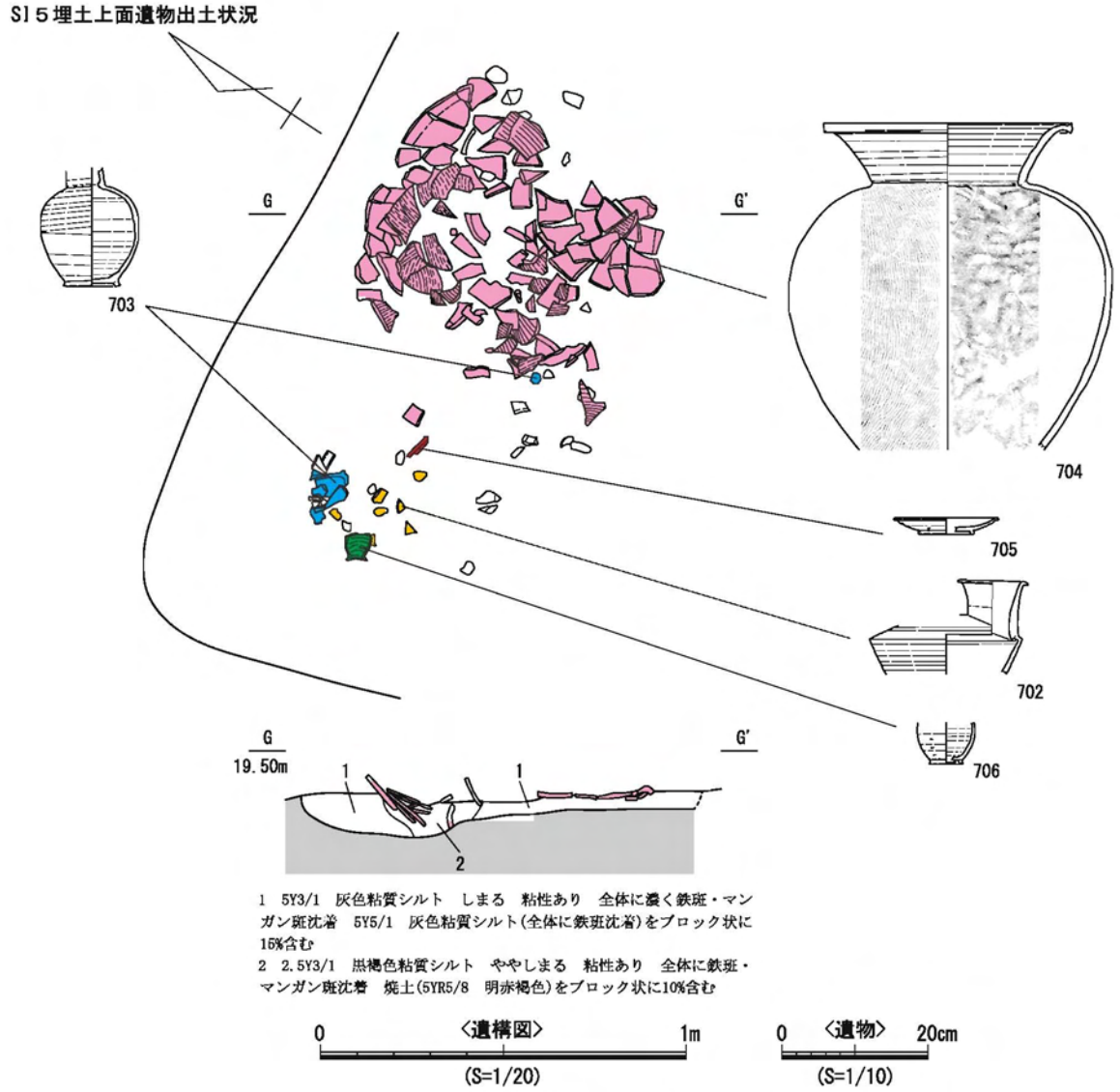
第173図　SI４遺構図③



第174図　SI４出土遺物

口縁部の立ち上がりは短く、やや強く外反する。受部は丸みがあり、境界が明瞭である。底面には回転ヘラケズリを施す。700 は坏身Ｂ２類、701 は碗である。701 は SI １出土の 653 と比較すると体部下半に丸みがあり、高台の断面形が矩形に近い。702・704 は埋土上面で出土した。702 は平瓶である。口縁部は僅かに外側へ傾くが直立に近い。口縁端部は強く外反する。胴部との境には穿孔して差し込んだ製作痕が明瞭に残る。体部外面上半と底面に回転ヘラケズリを施す。内外面に被熱によるものか器面荒れがみられる。704 は甕である。口径が約 30 ㎝ある大型品で、赤みがかった体部外面の色調が特徴である。口縁部を回転ナデ、体部をタタキによって成形する。体部外面にはタタキ目がみられるが、内面には青海波などの当て具痕はなく、複数の凹凸のみが残る。これらの特徴から、猿投産と考えられる。なお、内面に 702 と同様な器面荒れがみられる。

703・705・706 は灰釉陶器である。いずれも埋土上面から出土した。705 は皿であり、口縁端



第175図　SI５遺構図①

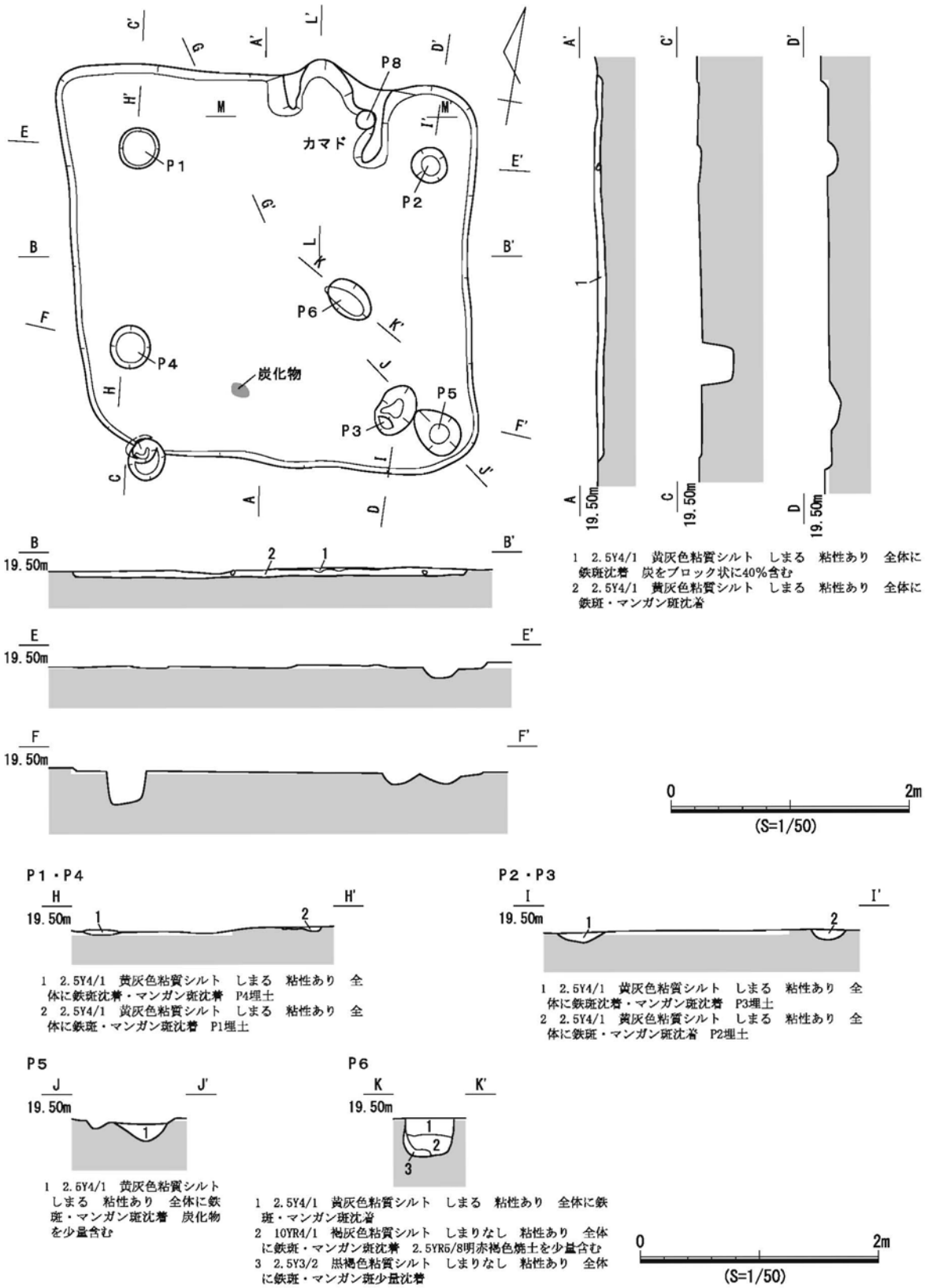
部が強く外反する。灰釉は発色が悪いためほとんど確認できない。703 は長頸瓶である。胴上半に最大径がある丸みを帯びた体部をもつ。底部から体部下半にかけて回転ヘラケズリを施す。高台は底面ではなく体部側に付されており、断面形は矩形である。内外面に 702 と同様の器面荒れがみられる。706 は小瓶である。体部下半の外面が回転ヘラケズリ調整されている。灰釉の施釉は確認できない。702 と同様の器面荒れがみられる。

707 は土師器の甑である。把手部分であり、指ナデによる成形痕が明瞭に残る。

所属時期　埋土上面から出土した遺物はⅥａ期に属すると考えられるが、以下の埋土中からは灰釉陶器が出土していないことから、一時期古いⅤｂ期に位置付くと判断した。

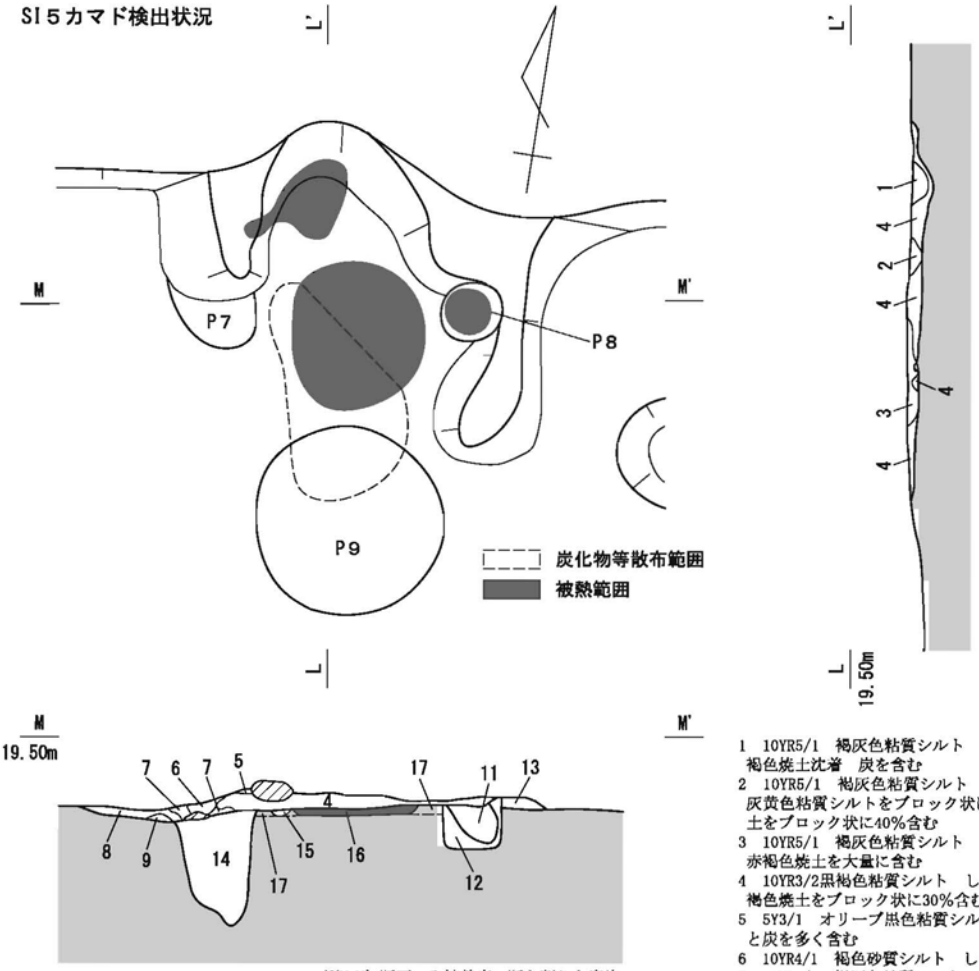
SI ６（第 179 ～ 181 図）

検出状況　EM ４から EN ４グリッドで検出した。北東部分は発掘区外に延びる。平面形はほぼ方形である。長軸方位は N-18°　-W である。掘方の東壁は掘りすぎ等により不明瞭であるが、SK112 の掘方壁面で SI ７との重複関係を確認し、SI ６の方が古いことが判明した。



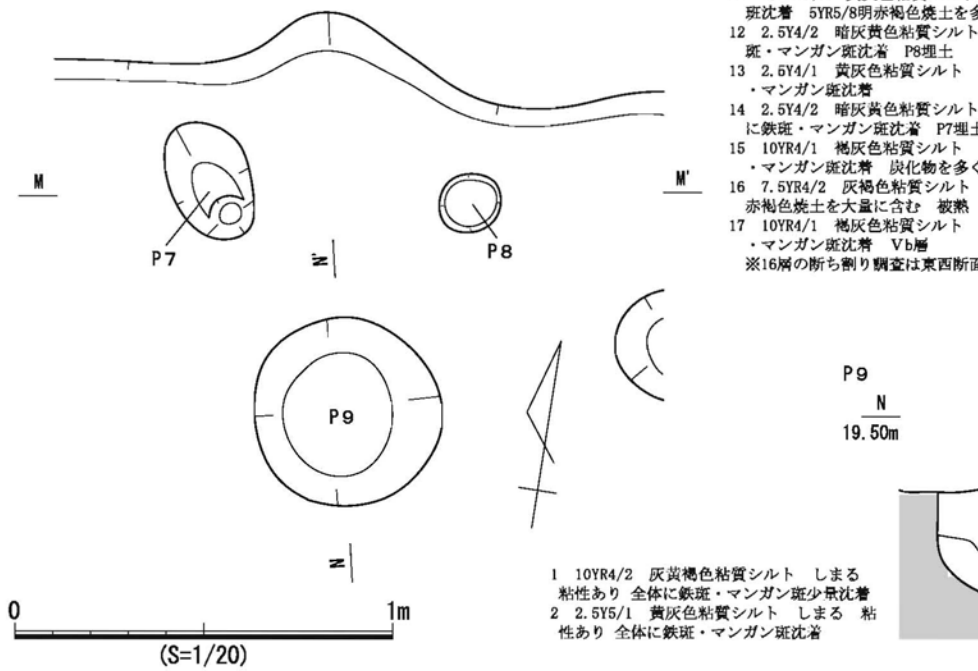
第176図　SI５遺構図②

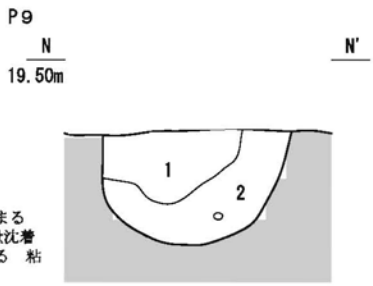
SI５カマド検出状況



1　10YR5/1　褐灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　5YR5/8明赤褐色焼土沈着　炭を含む
2　10YR5/1　褐灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　2.5Y5/2暗灰黄色粘質シルトをブロック状に30%含む　5YR5/8明赤褐色焼土をブロック状に40%含む
3　10YR5/1　褐灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　2.5YR5/8明赤褐色焼土を大量に含む
4　10YR3/2黒褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　2.5YR5/8明赤褐色焼土をブロック状に30%含む　炭を含む
5　5Y3/1　オリーブ黒色粘質シルト　しまりなし　粘性あり　灰と炭を多く含む
6　10YR4/1　褐色砂質シルト　しまりなし　粘性なし
7　10YR4/4　褐灰色粘質シルト　しまる　粘性あり
8　5Y4/1　灰色粘質シルト　しまりなし　粘性強い　全体に鉄斑沈着
9　10YR3/2　黒褐色粘土　しまりあり　粘性あり　10YR7/6明黄褐色土ブロック10%含む　礫含まず
10　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン斑沈着
11　7.5YR4/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　5YR5/8明赤褐色焼土を多く含む
12　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン斑沈着　P8埋土
13　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン斑沈着
14　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質シルト　ややしまる　粘性強い　全体に鉄斑・マンガン斑沈着　P7埋土
15　10YR4/1　褐灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン斑沈着　炭化物を多く含む
16　7.5YR4/2　灰褐色粘質シルト　しまる　粘性なし　2.5Y5/8明赤褐色焼土を大量に含む　被熱
17　10YR4/1　褐灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン斑沈着　Vb層
※16層の断ち割り調査は東西断面でのみ実施

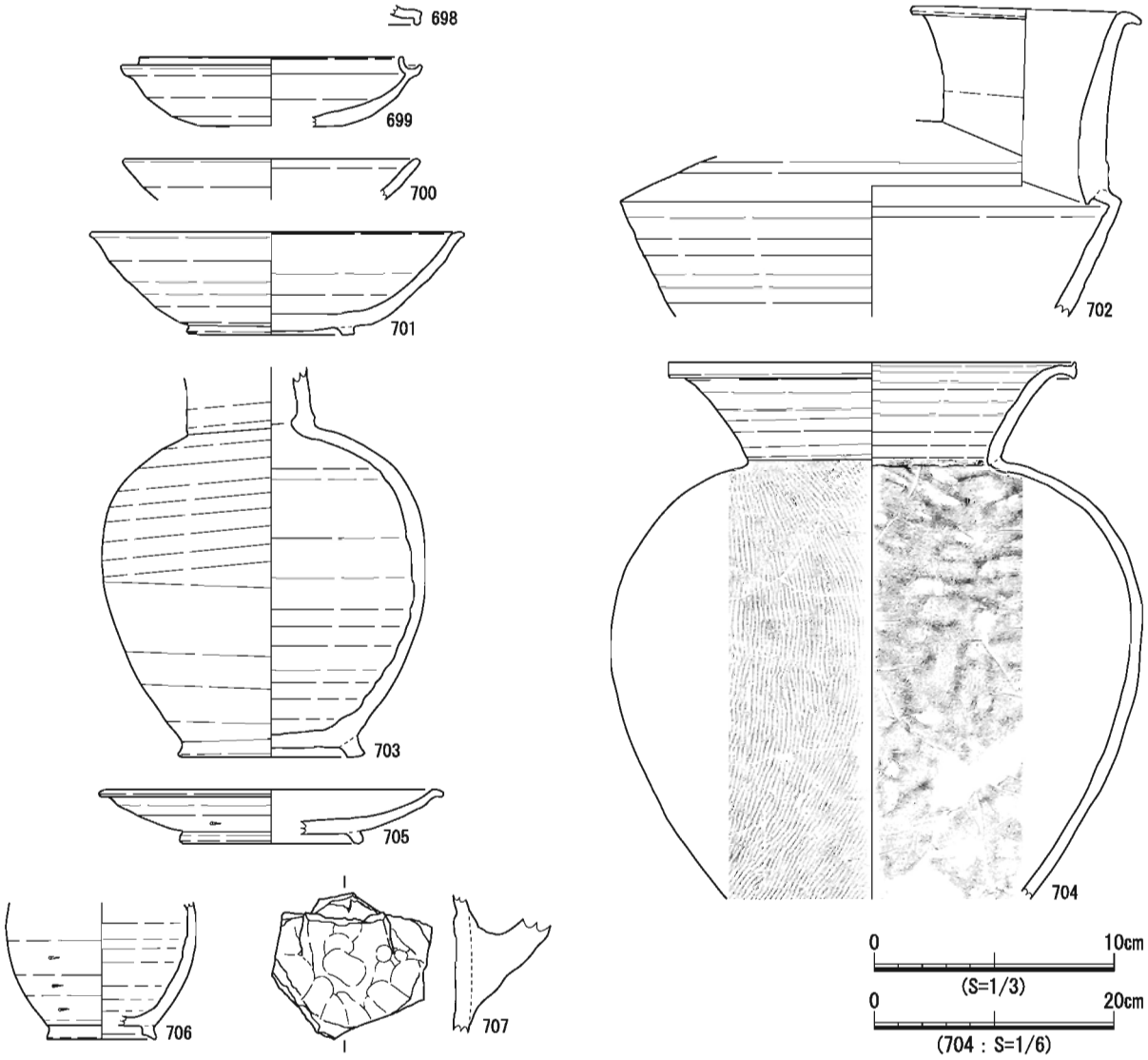
SI５カマド完掘状況





1　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン斑少量沈着
2　2.5Y5/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン斑沈着

第177図　SI５遺構図③



第178図　SI５出土遺物

堆積状況　黒褐色の粘質シルトが堆積していた。

床面・掘方　床面の硬化や整地土はみられなかった。掘方が非常に浅いため、上面が削平されたと考えられる。

付属遺構　掘方底面で検出した遺構の内、その配置から２基を主柱穴（Ｐ１・２）としたが、窪み状の浅い遺構である。また、掘方底面の中央から土坑（Ｐ３）を検出したが、上屋構造に関わる遺構かどうかは不明である。

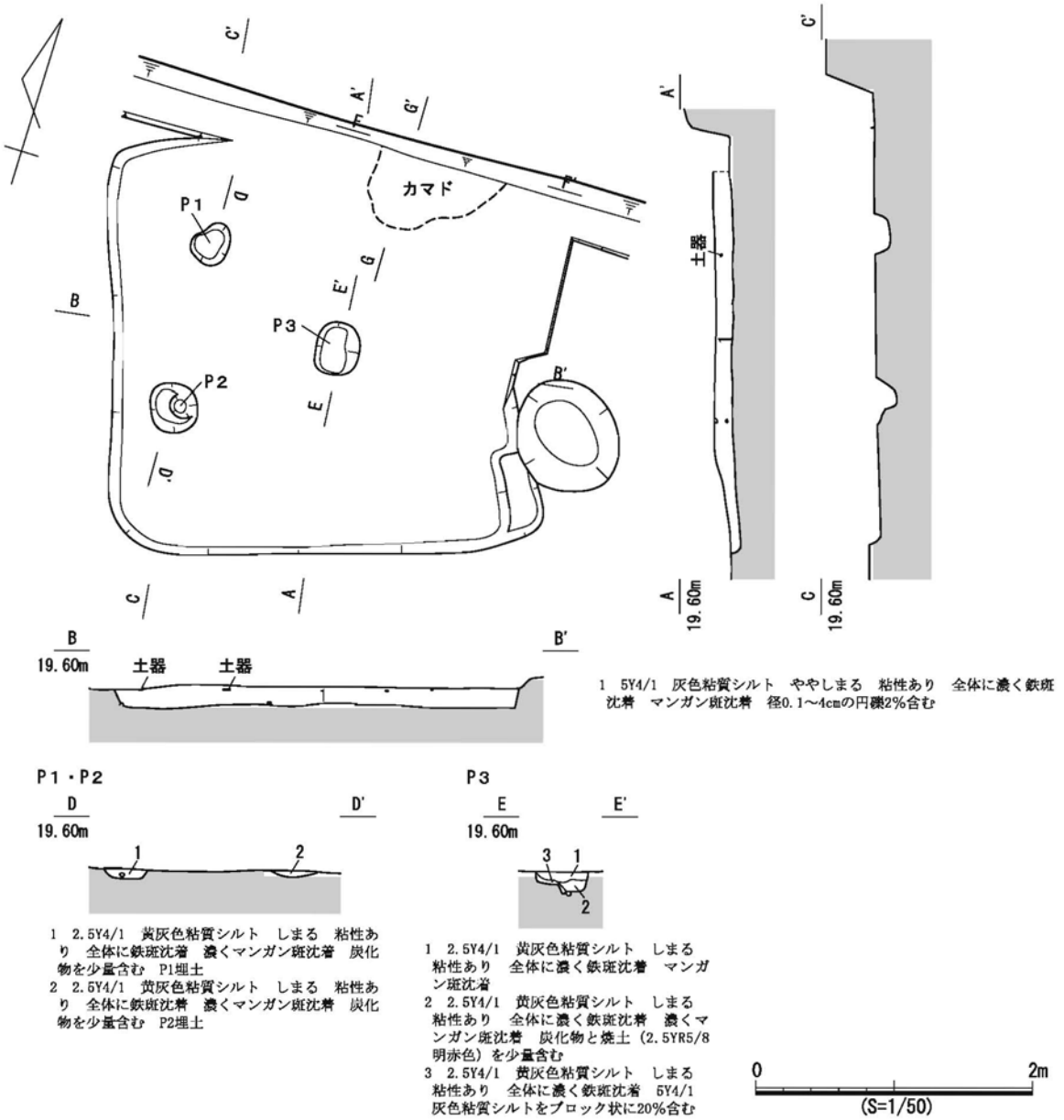
カマドは、掘方北東隅で検出した。破却されたカマド構造材と思われる堆積を除去した結果、薄く広がる炭化物と燃焼部と思われる被熱痕を検出した。なお、構造材の堆積は発掘区北壁でも確認でき、その状況から廃絶時には原形を留めていなかったと思われる。燃焼部と思われる被熱痕は、カマド下部に掘られた土坑の埋土上面にみられる。下部土坑は約0.1ｍの深さがあり、底面で小穴（Ｐ６）を検出した。

遺物出土状況　埋土中から遺物は出土しているが、特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物　SI ６及びその付属遺構からは、須恵器、灰釉陶器、土師器 が出土した。この内、10点を図示した。

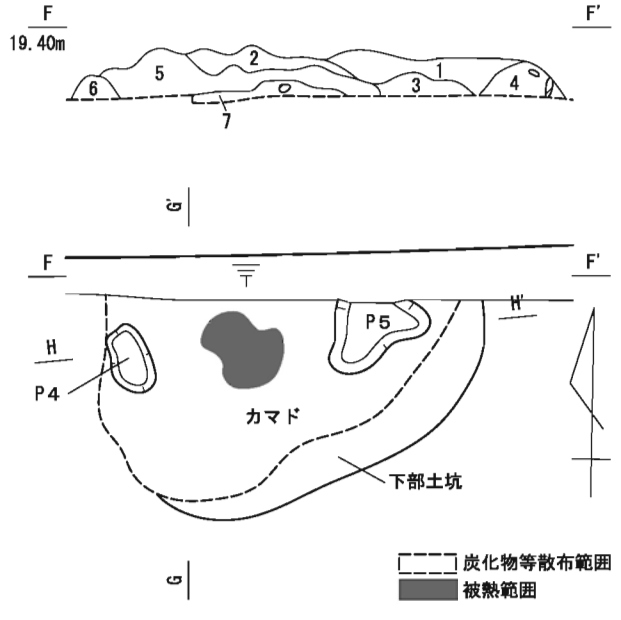
708 ～ 713 は須恵器である。708 は坏身Ａ類である。口縁部は僅かに外反しながら上方に立ち上がる。体部外面下半に回転ヘラケズリ調整を施す。なお、体部外面に原因不明の摩耗がみられる。709 は坏身Ｃ類である。底面が丁寧な回転ヘラケズリによって調整され、底面の内側によった位置に断面形が矩形の高台が付される。710 は器種不明の口縁部である。711 は盤である。口縁部は短く立ち上がり、体部外面下半に回転ヘラケズリ調整を施す。712 は高坏等の脚部と思われる。薄手で胎土の断面が灰赤色である。単位は不明であるが、透かしが付される。713 も高坏等の脚部と考えられる。

714 ～ 717 は土師器である。714 はロクロ土師器の柱状高台をもつ皿である。底面に回転糸切

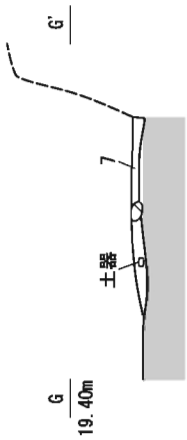


第179図　SI６遺構図①

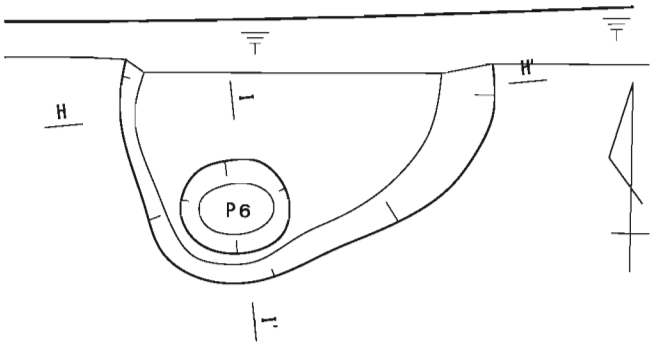
SI６カマド検出状況

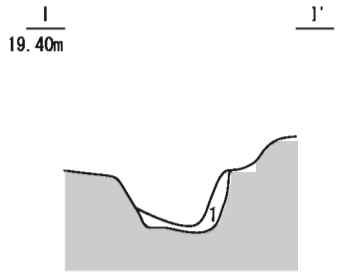


1　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着・マンガン斑沈着　2.5YR5/8明赤褐色焼土をブロック状に10%含む
2　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着・マンガン斑沈着　7.5YR4/2灰褐色をしみ状に40%含む
3　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン斑沈着
4　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン斑沈着　径3～4cmの円礫を10%含む
5　7.5YR4/1　褐灰色粘質シルト　ややしまる　全体に鉄斑沈着・マンガン斑沈着　10YR4/1褐灰色粘質シルトをしみ状に15%含む　2.5YR5/8 明赤褐色焼土をブロック状に10%含む
6　2.5Y5/2　暗灰黄色粘質シルト　しまる　粘性あり　鉄斑・マンガン斑少量沈着
7　7.5YR4/1　褐灰色粘質シルト　ややしまる　全体に鉄斑沈着・マンガン少量沈着　2.5YR5/8明赤褐色焼土と炭化物を少量含む　径3cmの円礫を10%含む

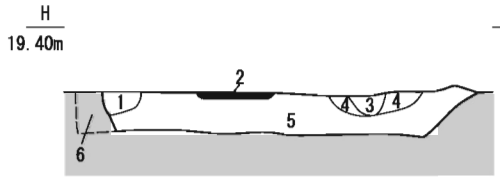


下部土坑完掘後





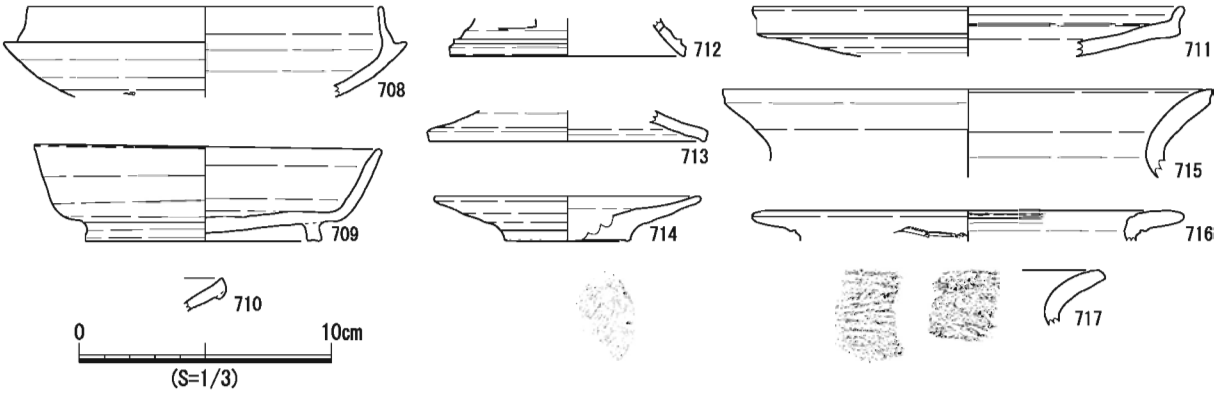
1　10YR4/1　褐灰色粘質シルト　しまりなし　粘性あり　全体に濃くマンガン斑沈着



1　10YR4/1　褐灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　2.5YR5/8明褐色焼土を多量に含む　径0.3～1cmの円礫を3%含む　P4埋土
2　5YR3/3　暗赤褐色焼土　しまりあり　粘性あり　被熱層
3　10YR4/1　褐灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　2.5YR5/8明赤褐色焼土をブロック状に40%含む　P5埋土
4　10YR4/1　褐灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体にマンガン斑沈着　2.5YR6/8明赤褐色焼土を少量含む　P5埋土
5　10YR3/3　暗褐色粘質シルト　ややしまる　径3cm以下の亜円礫少し含む　灰色砂質土ブロックを5%程含む　マンガン斑沈着　下部土坑埋土
6　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　やや粘性あり　マンガン斑沈着　Va層

0　1m
(S=1/20)

第180図　SI６遺構図②



第181図　SI６出土遺物

り痕が残る。715 は甕Ａ類と思われるが、口縁端部の摘み上げはそれほど顕著ではない。716・717 は甕Ｂ類の口縁部破片であり、内外面ともにハケ調整が施されている。

所属時期　出土した遺物に時期差はあるが、カマドから灰釉陶器の破片、埋土からロクロ土師器（714）が出土していることから、Ⅵａ期以降に位置付けられる可能性が高い。なお、遺構の重複からSI ７よりは古いが、SI ７の遺物出土状況もSI ６と同様である。

SI ７（第 182・183 図）

検出状況　EM ４からEN ４グリッドで検出した。遺構北部は発掘区外に延びる。平面形は方形に近い形状であると考えられる。長軸方位はN-58°-E で、南北軸から東に傾く。掘方の西壁は掘りすぎ等により不明瞭であるが、SK112 の掘方壁面でSI ６の重複関係を確認し、SI ７の方が新しいことが判明した。また、南側で重複するSI ８よりも新しい。なお、水田の取水管を通すために掘り残していた畦に遺構の西部がかかっており、当初の掘削で畦にかかっていなかった東部の床面を下げすぎたため、平面図上では床に段がついた状態になっている。

堆積状況　埋土は黄灰色の粘質シルト、掘方埋土は褐灰色の粘質シルトが堆積している。いずれも全体的に鉄斑とマンガン斑が沈着し、Ⅵ層に由来する円礫が混じる。

床面・掘方　前述の畦の除去中に床面土坑（Ｐ２）を検出したことから、遺構東部の床面を掘りすぎてしまっていたことが判明した。検出面から床面までの深さは約 0.08 ｍ、掘方の埋土も約 0.06 ｍで非常に浅い。

付属遺構　床面で検出した遺構の内、Ｐ３は遺構の半分を確認できなかったため、規模・性格ともに不明である。Ｐ１は、排水溝掘削で確認した遺構であるが、その位置から主柱穴とした。ただし、その他の位置で主柱穴と思われる遺構は確認できなかった。Ｐ２は掘方底面から検出した土坑であるが、その性格は不明である。カマドは、発掘区外に位置すると想定される。

遺物出土状況　埋土中から遺物が出土しているが、特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物　SI ７及びその付属遺構からは、須恵器、灰釉陶器、土師器の他、台石と考えられる石器１点が出土した。この内、７点を図示した。

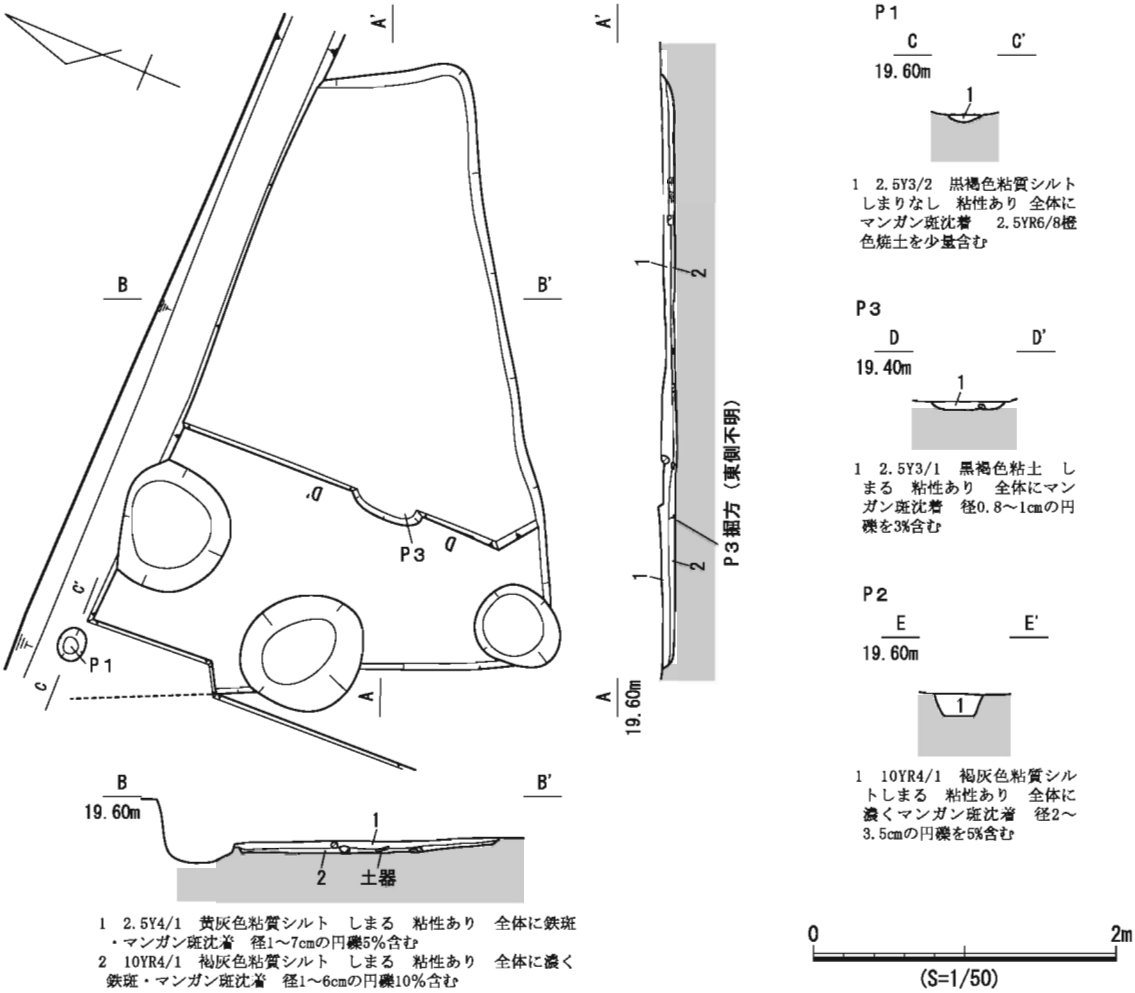
718 ～ 722 は須恵器である。718 は坏蓋Ｃ類である。体部外面が口縁部付近まで回転ヘラケズリ調整される。719・720 は坏身Ａ類である。719 は、口縁部が外反しながら上方に立ち上がり、受部は横方向に突き出す形状をとる。体部は直線的で丸みがない。底面は平坦で、ヘラ切り痕を不定方向にナデ消す。底面周縁には僅かに回転ヘラケズリ調整を施す。720 は、口縁部が内傾し、受部の高さとの差が少ない。721 は坏身Ｂ２類である。焼成不良により、色調が灰白色である。722 は盤である。今回出土した盤の中では最も高い脚台をもち、身との境に透かしを施す。

その他、723 は土師器の甕Ａ類、724 は台石と考えられる。723 は口縁端部の摘み上げと面取りが確認できるが、表面が磨滅している。724 は、扁平な川原石の平坦面にやや窪んだ磨面がみられる。

所属時期　出土した須恵器は、最も新しいもので美濃須衛Ｖ－１期まで確認できる。SI ６・SI ８より新しいため、Ⅵａ期以降に位置付けられる。

SI ８（第 184 ～ 186 図）

検出状況　EM ４からEN ６グリッドで検出した。平面形はやや不整な方形である。遺構の南側は

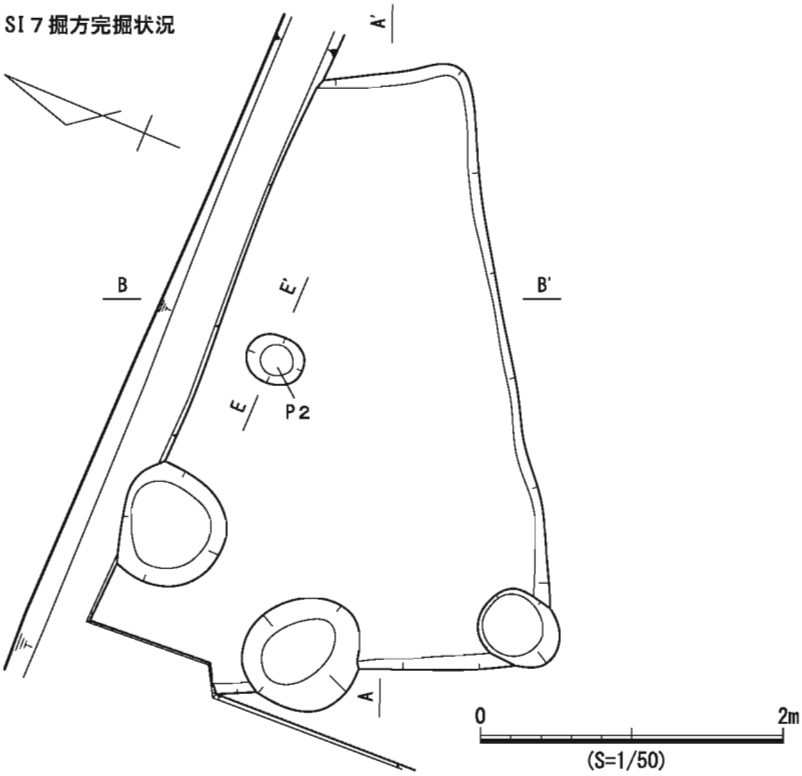


1　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン斑沈着　径1～7cmの円礫5%含む
2　10YR4/1　褐灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に濃く鉄斑・マンガン斑沈着　径1～6cmの円礫10%含む

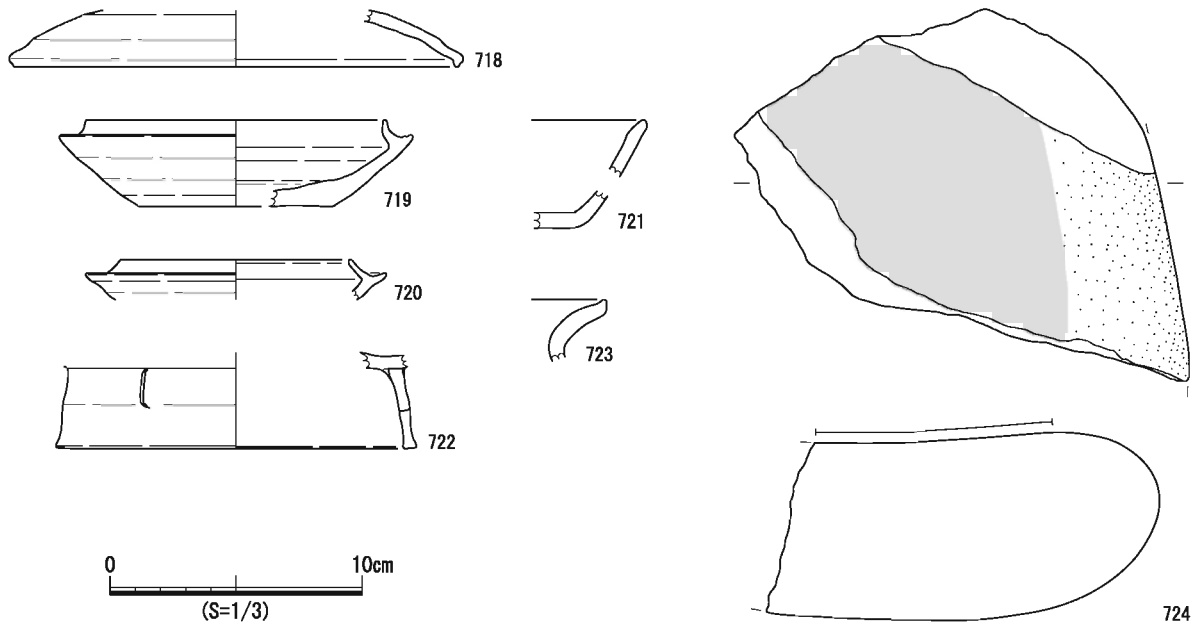
1　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　しまりなし　粘性あり　全体にマンガン斑沈着　2.5YR6/8橙色焼土を少量含む

1　2.5Y3/1　黒褐色粘土　しまる　粘性あり　全体にマンガン斑沈着　径0.8～1cmの円礫を3%含む

1　10YR4/1　褐灰色粘質シルトしまる　粘性あり　全体に濃くマンガン斑沈着　径2～3.5cmの円礫を5%含む



第182図　SI７遺構図



第183図　SI７出土遺物

大きく撹乱されている。長軸方位はN-75°-Eで隣接するSI６やSI７とは若干異なる。北東部で重複するSI７より古い。

堆積状況　暗灰黄色の粘土をブロック状に含む、Ｖｂ層と類似した灰黄褐色の粘質シルトが堆積していた。全体的に鉄斑とマンガン斑が沈着し、礫が少量混じる。

床面・掘方　検出面から掘方底面までが約0.07ｍで非常に浅い。調査の段階で、硬化した床面や整地土は確認できなかったが、SI８カマドの土層における４・６層（Ｈ－Ｈ’・Ｉ－Ｉ’）の上に焼土・炭化物がみられ、完掘状態で盛り上がったような状況になっていることから、４・６層が整地土であった可能性がある。

付属遺構　掘方底面で検出した遺構の内､掘方の四隅に位置する小穴を主柱穴とした（Ｐ１～４）。

カマドは掘方の東壁中央に接して設置されていた痕跡のみを確認した。遺物包含層掘削作業の段階から、すでに焼土･炭化物を確認しており、燃焼部を含めて削平されていた可能性が高い。なお、カマド除去後に小穴を検出したが、その土層断面から、後世の掘り込みと思われる。

遺物出土状況　埋土中から遺物が出土しているが、特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物　SI８及びその付属遺構からは、須恵器、土師器が出土した。ほとんどが破片である。このうち、３点を図示した。725・726は須恵器の坏蓋Ｃ類である。727は土師器の甕の体部破片である。胎土からＢ類と思われる。

所属時期　SI７より古く、出土した須恵器に美濃須衛Ｖ－１期のものが認められることから、Ｖｂ期に位置付けられる。

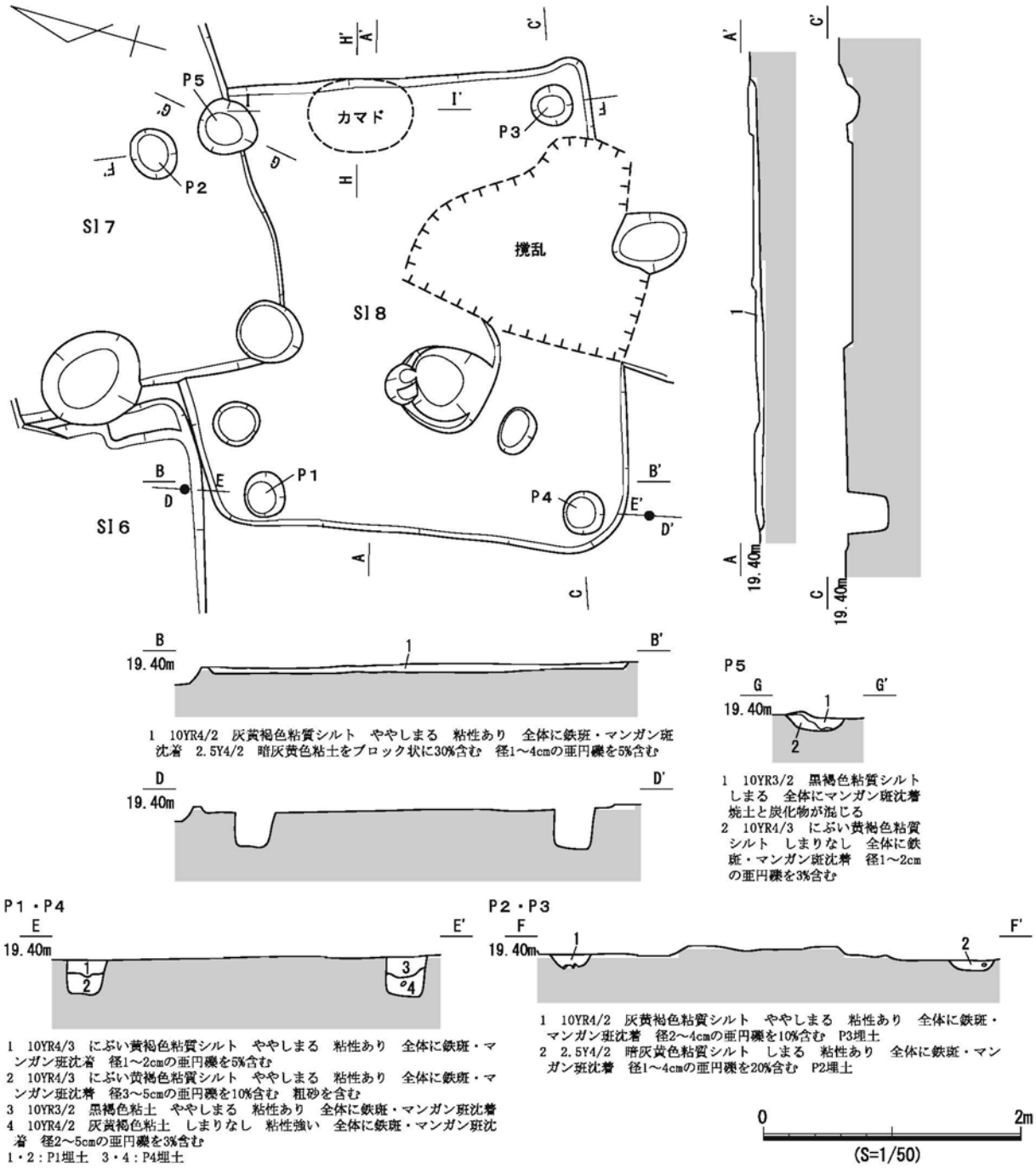
SI９（第187・188図）

検出状況　EM７からEN７グリッドで検出した。遺構の南側が発掘区外へ続くため、全容は不明である。検出作業段階から焼土や炭化物が確認できた。

堆積状況　黄灰色の粘質シルトが堆積しており、多少の差はあるが、埋土の広い範囲で焼土と炭化物の混じりが認められた。

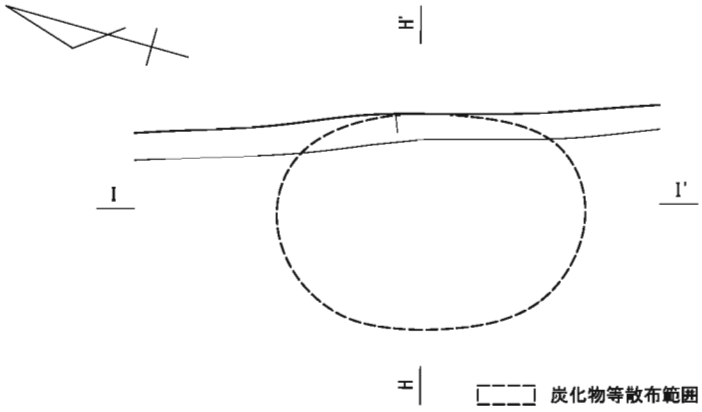
床面・掘方　硬化した床面や整地層は確認できなかった。発掘区壁面土層にみられる壁際溝のある掘方底面と、平面で検出した底面の標高値がほぼ同じであるため、床面の整地は行われていなかったと思われる。

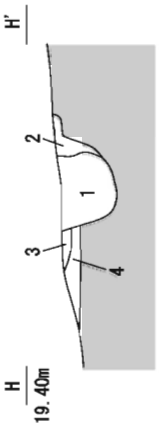
付属遺構　主柱穴は確認できなかった。カマドと考えられる遺構は、掘方の北東隅に近い底面から北壁に接して検出した。Ａ－Ａ’の土層図では、カマドの痕跡と考えられる土坑の上面に灰黄褐色の堆積（２・３・５層）がみられ、破却されたカマドの構造材が堆積していた可能性がある。埋土

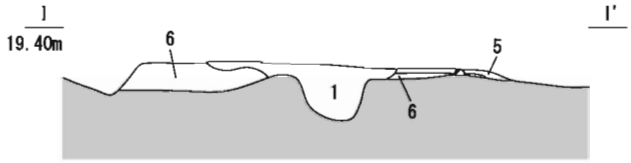


第184図　SI８遺構図①

SI８カマド検出状況

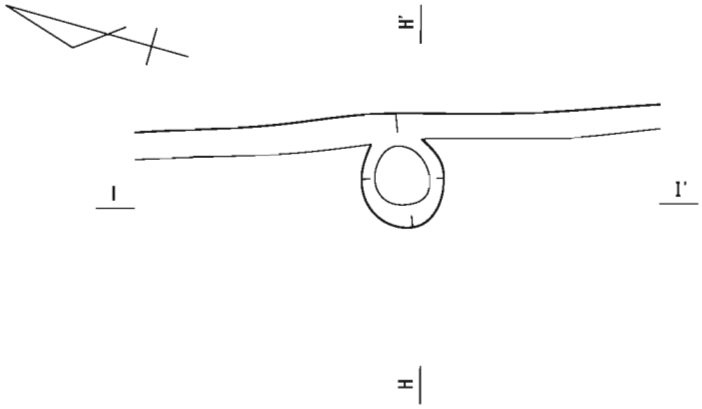


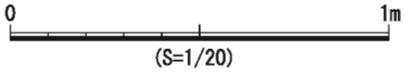




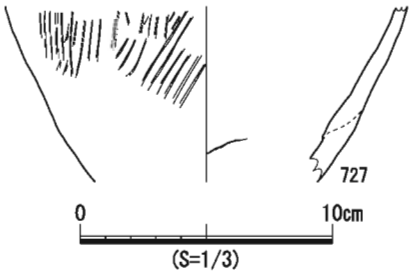
1　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり 炭化物と焼土粒含む
2　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり
3　7.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　焼土塊を多量に含む
4　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　焼土粒含む
5　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　焼土粒を含む
6　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　径1～2cmの亜円礫を5%含む

SI８カマド焼土・炭化物除去状況





第185図　SI８遺構図②



第186図　SI８出土遺物

中に多量の焼土や炭化物を含むが、燃焼部は確認できなかった。完掘後に複数の小穴を検出したが、北壁に最も近い小穴（Ｃ－Ｃ’５・６層）が位置的に支脚柱の掘方である可能性がある。

なお、土層図では壁際溝と考えられる掘方の立ち上がりが確認できるが、平面で検出することはできなかった。

遺物出土状況　埋土中から遺物が出土しているが、特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物　SI ９及びその付属遺構からは、須恵器、灰釉陶器、土師器が出土した。ほとんどが破片である。このうち２点を図示した。

728 は須恵器の坏蓋である。カマドから出土した。厚手で、頂部周縁の広い範囲に回転ヘラケズリ調整を施す。また、摘みの痕跡が残る。口縁端部にかえりがなく、内面にわずかな段がある。729 は土師器の甕Ａ類である。磨滅が激しいが、口縁端部の摘み上げと外面のハケ目が確認できる。

所属時期　カマドから出土した須恵器坏蓋の時期や、埋土中から灰釉陶器が出土していることから、Ⅵａ期に位置付けられる。

SI10（第 189 ～ 191 図）

検出状況　EN ５から E0 ６グリッドで検出した。平面形は隅丸方形である。長軸方位は N-30°-W である。当該範囲は検出作業時に複数の竪穴建物が重複していることが予想されたが、平面では先後関係が確定できなかったため、断ち割り調査などで３軒（SI10 ～ SI12）の切り合いであることを確認した。また、遺構の掘削過程で、掘方南東部の平面形が判明し、方形に近い形状であることを確認した。掘方の北西部で SI11 と重複しこれより新しく、南側では SI12 と重複しこれより古い。

堆積状況　埋土は黒褐色の粘質シルトで、礫と炭化物が混じる。掘方埋土も黒褐色の粘質シルトだが、含まれる礫が大きく、その量が多い。

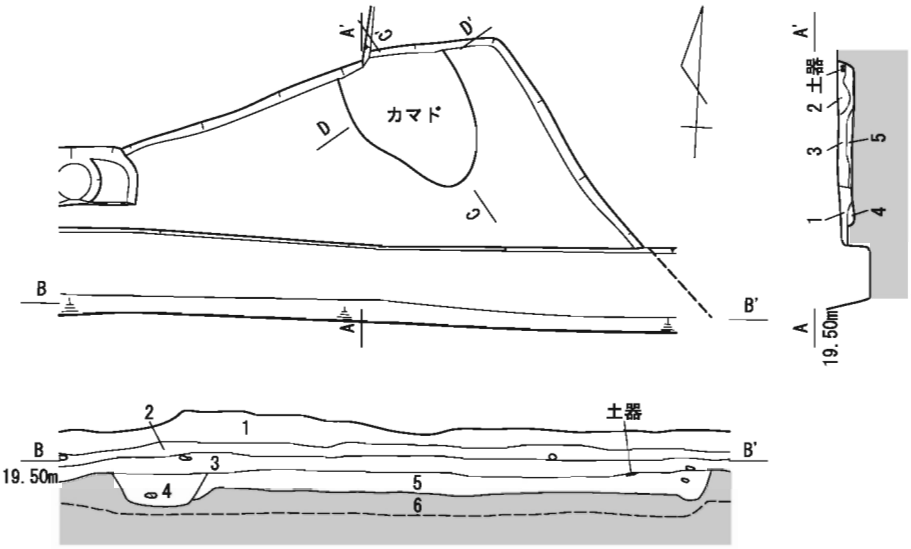
床面・掘方　硬化した床面は確認できなかったが、カマドや主柱穴を検出した４層の上面を床面とした。整地土除去後の掘方底面はⅥ層まで達しており、完掘後は一面礫の状態となった。掘方底面の北西部は一段低くなっており、整地土を充填して床面を整地したと考えられる。

付属遺構　床面の四隅で検出した小穴（Ｐ１～４）を主柱穴とした。いずれも浅い窪み状の遺構であり、柱痕跡等はみられない。

カマドは掘方の北東隅に近い床面で、下部土坑と考えられる遺構を検出した。下部土坑の北東部が掘方の北壁に接している。破却されたカマド構造材と考えられる１層（Ｊ－Ｊ’）を除去した下面で被熱痕を確認した。南北に細長い範囲で検出しているため、燃焼部だけでなく被熱した煙道の一部を含んでいる可能性がある。下部土坑の土層から、黒褐色である粘質シルト（Ｋ－Ｋ’５層）を充填した後に黄褐色の粘質シルト（Ｊ－Ｊ’３層）を敷いてカマドを構築したと考えられる。この他床面上で埋土に焼土と炭化物を多く含む土坑１基（Ｐ５）を検出したが、その性格は不明である。

遺物出土状況　埋土中から多くの遺物が出土しているが、特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物　SI10 及びその付属遺構からは、須恵器、灰釉陶器、土師器、石器が出土した。この内、22 点を図示した。



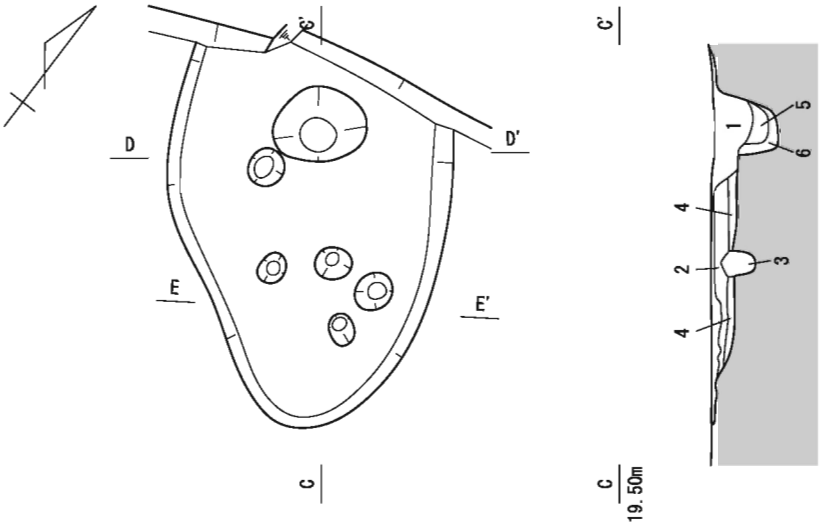
※発掘区南壁土層図を反転して作図

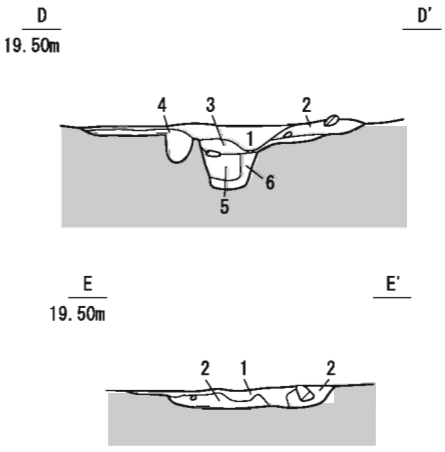
1　Ⅰb層
2　Ⅰc層
3　Ⅲa層
4　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン斑沈着　径4cm以下の亜円礫を7%含む　SX23埋土(発掘区壁面の土層観察のみで確認した遺構)
5　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン沈着　径1～2cmの亜円礫を3%含む　SI9埋土
6　Vb層

1　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に濃くマンガン沈着　焼土塊と炭化物を含む
2　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン斑沈着　焼土粒と炭化物を少量含む
3　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン沈着　径1～2cmの亜円礫を3%含む
4　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に濃くマンガン沈着
5　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン沈着　径1～2cmの亜円礫を3%含む　焼土と炭化物を少量含む

0　2m
(S=1/50)

SI９カマド完掘状況





1　7.5YR3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　5YR5/8　焼土が多量に混じる　炭化物が混じる
2　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　全体に鉄斑沈着　炭化物を少量含む
3　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　全体に鉄斑沈着　炭化物を多量に含む
4　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　全体に鉄斑沈着
5　7.5YR3/2　黒褐色粘質シルト　しまりなし　粘性あり　5YR5/8　焼土が少量混じる　炭化物が混じる
6　7.5YR2/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　炭化物が混じる　全体にマンガン斑沈着

0　1m
(S=1/20)

第187図　SI９遺構図

第188図　SI９出土遺物

730 ～ 746 は須恵器である。730・731 は坏蓋Ｃ類である。ともに頂部周縁の広い範囲に回転ヘラケズリ調整を施す。732 と 733 は坏身Ａ類でともに青黒く焼き締まった胎土が特徴である。732 は体部と受部の境が明瞭で、口縁部は内傾する。体部外面下半に回転ヘラケズリ調整を施す。外面の摩耗が著しい。733 は底部と思われる。底面が窪んで平底のような形状をとる。734 ～ 736 は坏身Ｂ２類である。いずれも焼成不良で白っぽい色調である。なお、736 はカマドから出土している。737 ～ 741 は坏身Ｃ類である。737 と 739 は突出した底面に回転ヘラケズリが施され、その外側に断面形が矩形の高台が付される。738 と 740 は底面が薄く平らで、740 には渦状の明瞭な回転ヘラ切り痕が残る。741 は他のものに比べ大型品で全体的に角張った印象を受ける。内底面に摩耗がみられる。742・743 は盤である。743 は底面が突出し、737・739 と同様な調整を施す。744 ～ 746 は甕である。いずれも外面にはタタキ目、内面に青海波状の当て具痕が残る。

747 ～ 750 は土師器である。747 は台付甕の脚部と考えられる。748 は甕Ｂ類である。カマドから出土した。非常に薄手で、外面にに粗いハケ調整を施す。内面にはコゲが付着する。749 と 750 は甕Ａ類である。748 とは異なり、厚手で赤みがかった胎土をもつ。またハケ目が細かい。

751 は砥石である。角柱状で４面に砥面がみられる。砥面の中央部がやや窪む。砥面が広く、いずれの面を下にしても安定することから、刃物等を研ぐための置き砥石と考えられる。

所属時期　出土した須恵器の時期には若干ばらつきはあるが、美濃須衛Ⅳ -2 ～Ⅴ -1 期に時期的なまとまりがある。これらの須恵器から、Ⅴｂ期に位置付けられる。

SI11（第 192・193 図）

検出状況　EM ５から EN ６グリッドで検出した。平面形は方形である。長軸方位は N-23°　-W で南北軸から西に傾く。遺構の西部については、通常の検出面から約 0.05 ｍ掘り下げた段階で遺構掘方の識別が可能となった。掘方の南東部で SI10 と重複し、これより古い。

堆積状況　遺構埋土・掘方埋土ともに、黒褐色の粘質シルトである。掘方埋土は、場所によって礫の含有率が異なる。全体的にマンガン斑が沈着する。埋土に含まれる礫はⅥ層に由来すると考えられる。

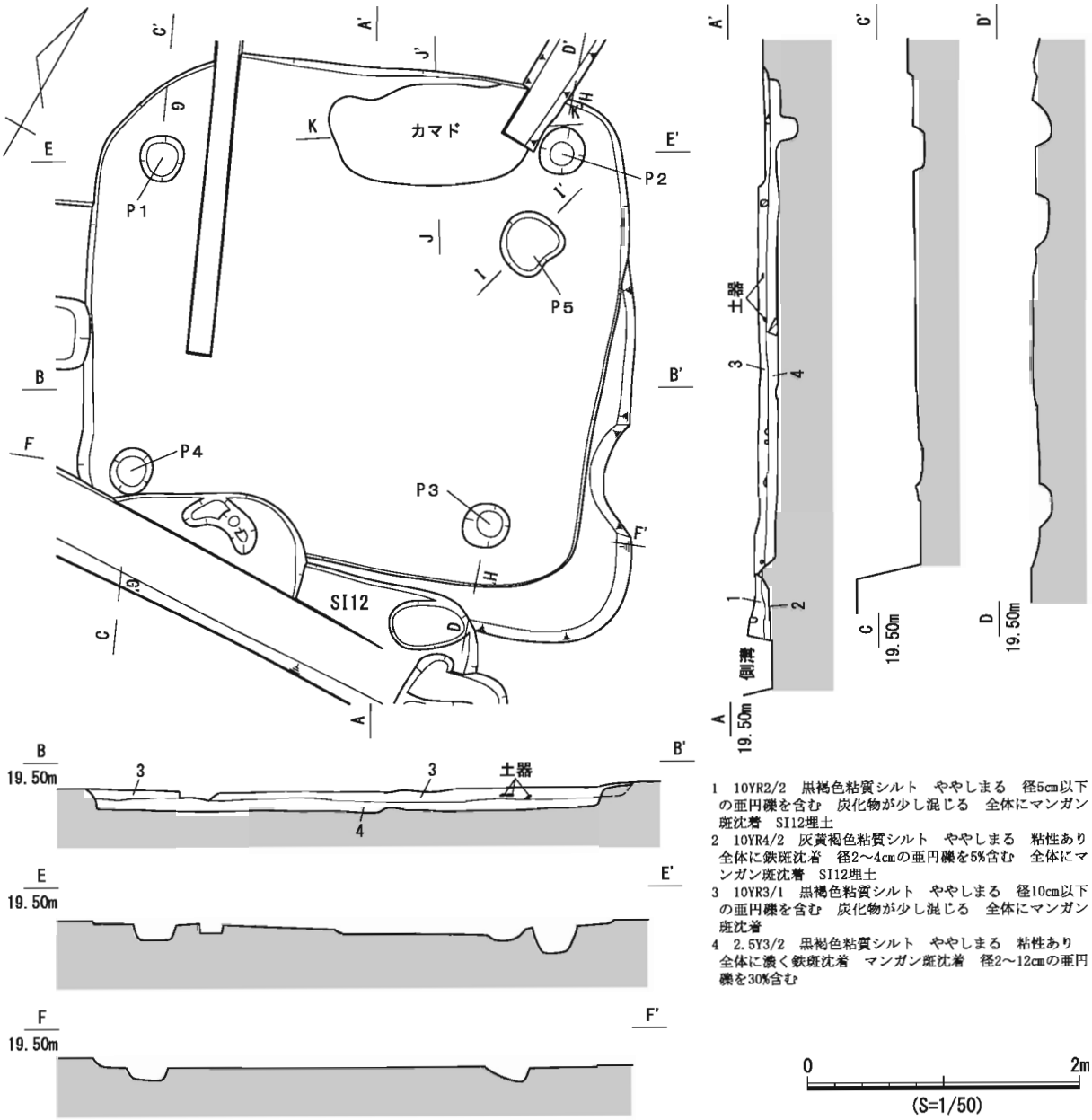
床面・掘方　硬化した貼床はみられないが、主柱穴を検出した面を床面とした。掘方底面は平坦でなく、一部Ⅵ層の礫が露出していた。

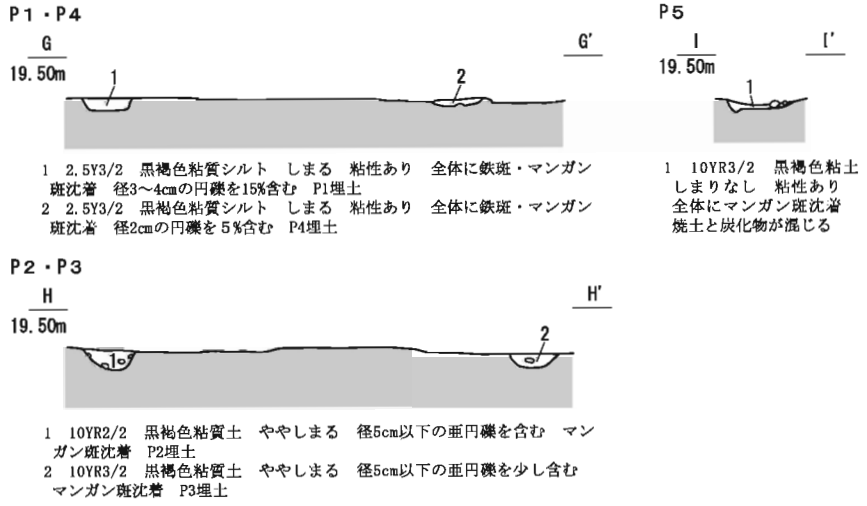
付属遺構　掘方の北西及び南西部の隅で検出した小穴（Ｐ１・Ｐ２）を主柱穴とした。いずれも浅い窪み状の遺構であり、柱痕跡等はみられない。東側の主柱穴は確認できなかった。

カマドの構造は確認できなかったが､床面の北東隅に焼土や炭化物が集積する土坑状の窪み（Ｐ４）があり、そこから平面形が不定形の土坑が掘り込まれていた。この土坑がカマドの下部土坑と考えられるが、明確な被熱面は残存していなかった。

遺物出土状況　埋土中から多くの遺物が出土しているが、特徴的な出土状況はみられなかった。

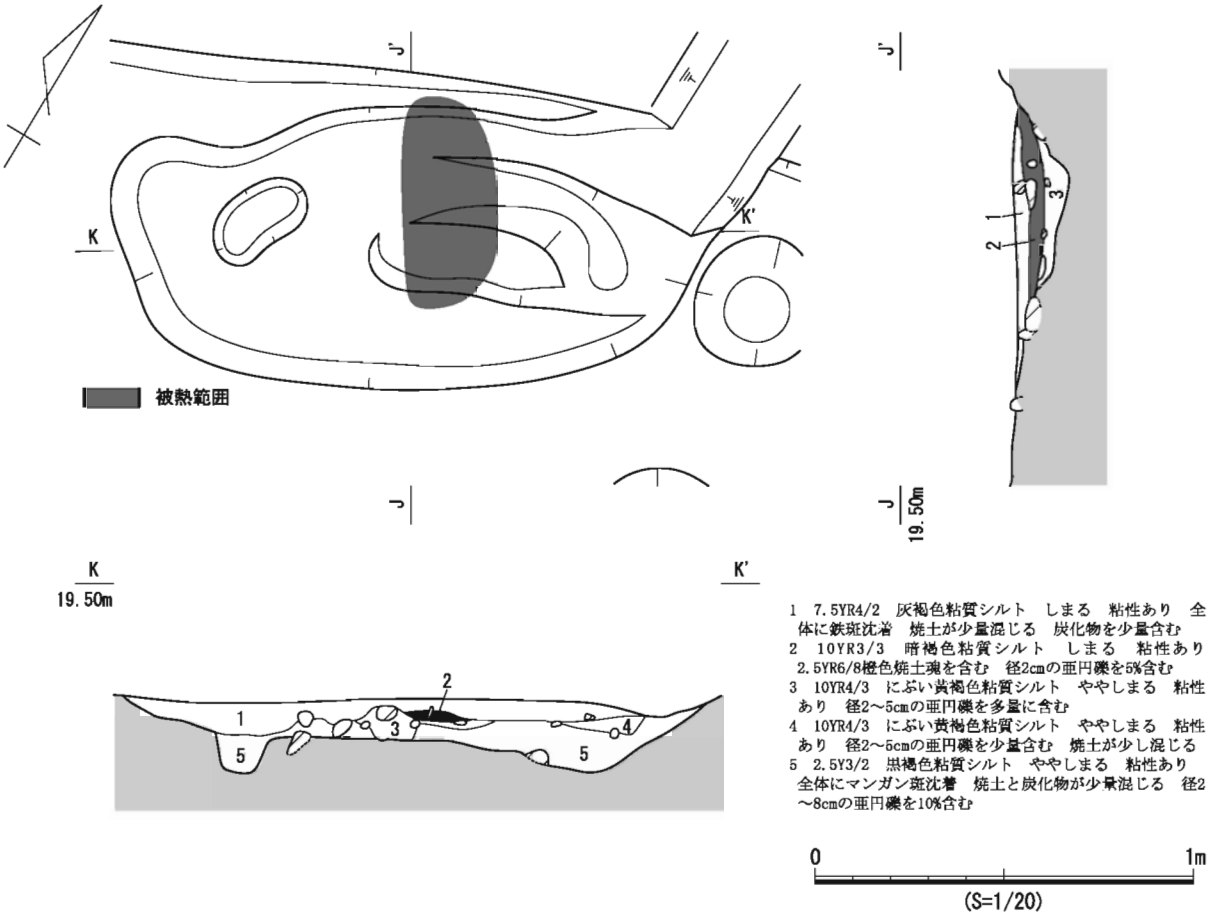
出土遺物　SI10 及びその付属遺構からは、須恵器、灰釉陶器、土師器が出土した。この内、17



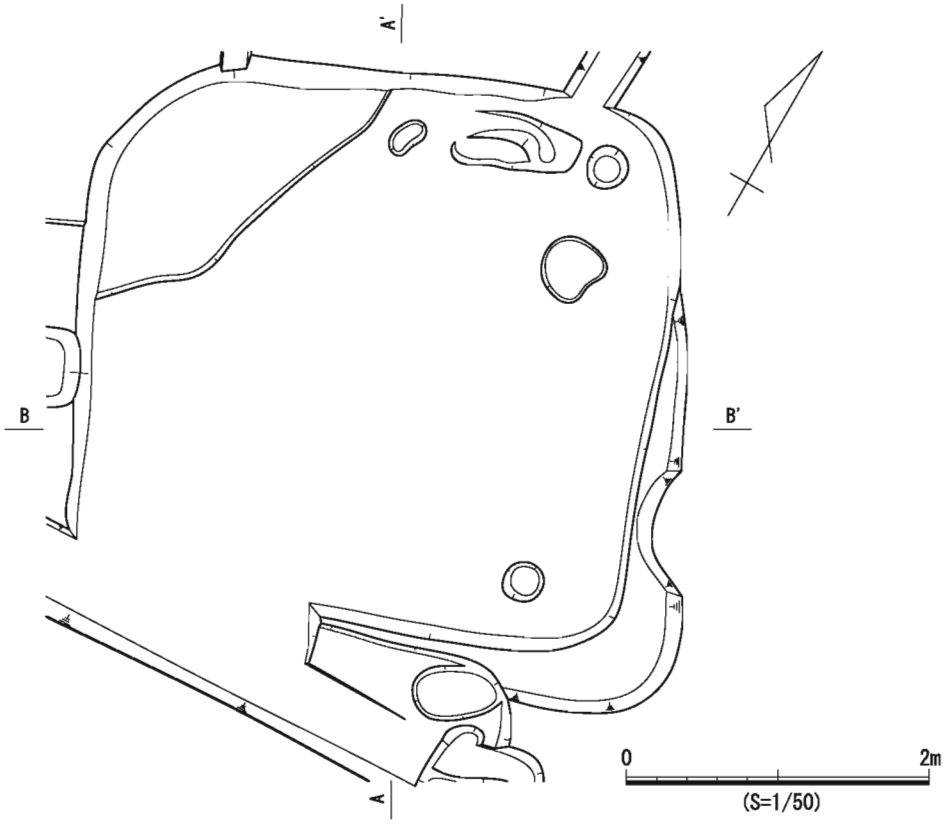


第189図　SI10遺構図①

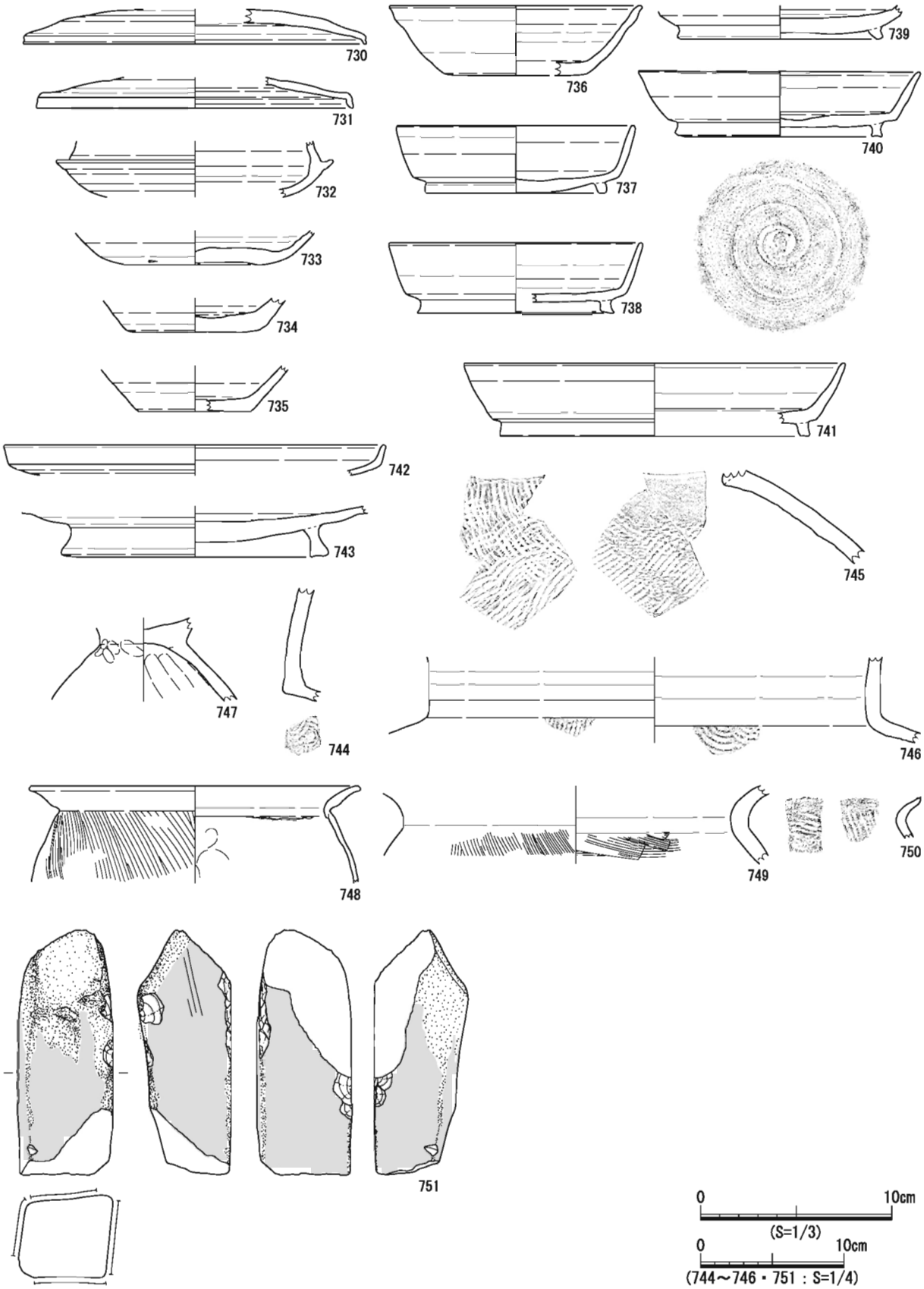
SI10カマド火床検出及び下部土坑完掘状況



SI10掘方完掘状況



第190図　SI10遺構図②



第191図　SI10出土遺物

点を図示した。

752 ～ 767 は須恵器である。752 ～ 755・764 は坏蓋Ｃ類である。カマドから出土した 754 は内面が摩耗し、墨痕のような染みがみられる。転用硯の可能性がある。756 は坏身Ｂ２類、757 ～ 761 が坏身Ｃ類である。762 は青黒い色調で、外面にカキ目を施す。ハソウの可能性があるが、注口部分は残存していない。763・765 は盤である。763 は口縁部の折り返しがやや外反する。766・767 は甕である。766 は 762 と同様に青黒い色調で、焼き締まった印象を受ける。頸部に横位のカキ目を施す。

768 は土師器で甕Ａ類と思われるが、磨滅のため詳細は不明である。

所属時期　遺構の重複では SI10 より古いが、出土した須恵器の大半は美濃須衛Ⅳ -2 ～Ⅴ -1 期で時期差はなく、Ⅴｂ期に位置付けられる。

SI12（第 194 ～ 196 図）

検出状況　E0 ６グリッドで検出した。遺構の南側が発掘区外へ続くため、全容は不明である。検出した当初は、焼土や炭化物を多く含む範囲のみを当該遺構としていたが、SI10・11 との切り合いを確認する断ち割り調査によって遺構東部の掘方を確認したため、当初検出した範囲は SI12 のカマドとした。しかし、カマドを検出した標高が南壁土層で確認できる遺構埋土の上面に近いため（Ｂ－Ｂ’）、それぞれ別の遺構の重複とも考えられる。SI10 と重複しこれより新しいことは判明したが、土層断面図作図後に SI10 周辺が埋土の誤認により掘り下げてしまったため、平面図に切り合いは反映されていない。

堆積状況　埋土は、黒褐色粘質シルトの上層と灰黄褐色粘質シルトの下層（Ａ－Ａ’）に分層することが可能で、発掘区南壁でも２層の堆積を確認した。

床面・掘方　硬化した床面は確認できなかった。検出範囲が狭いため、詳細は不明である。

付属遺構　カマドの燃焼部と思われる被熱範囲は、１層（Ｄ－Ｄ’）除去後に確認した。下部土坑埋土である７・８層が被熱しており、下部土坑上面にカマドの上部構造があったことが推定される。なお、下部土坑底面に不定形の窪みがみられ、支脚柱の掘方であった可能性がある。

この他、掘方完掘後に北東隅や SK114 と接する部分で窪みを確認したが、床面遺構として調査していないため詳細は不明である。

遺物出土状況　埋土中から遺物が出土しているが、特徴的な出土状況はみられなかった。

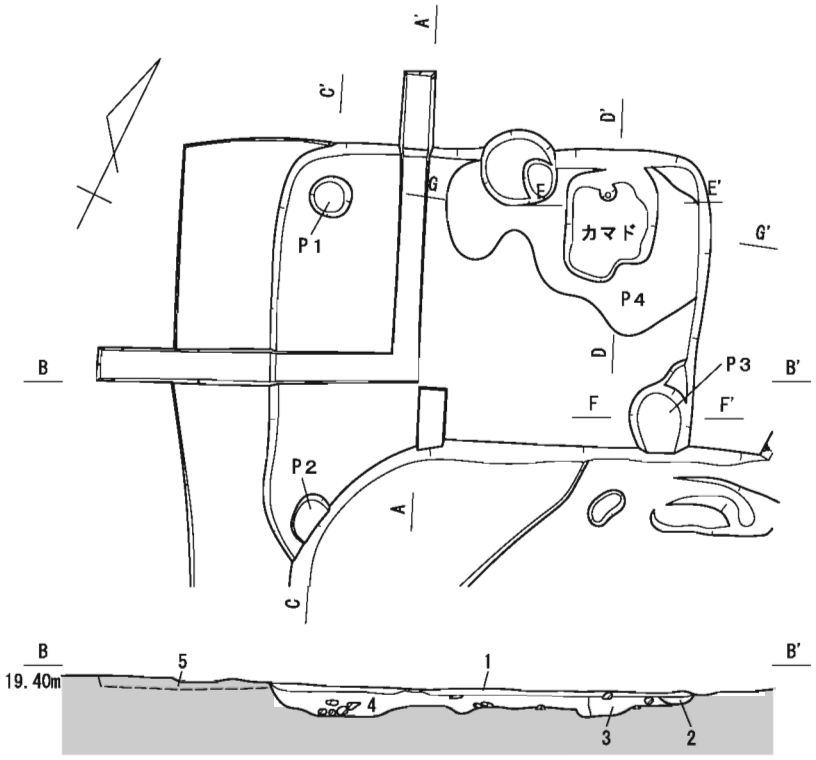
出土遺物　SI12 及びカマドからは、須恵器、土師器が出土した。この内、４点を図示した。

図示した遺物はいずれも須恵器で、771 を除きカマドから出土した。769・770 は坏蓋Ｃ類である。ともに頂部周縁に回転ヘラケズリを施す。771 は坏身Ｃ類である。底面がやや突出し、回転ヘラケズリ調整を施す。高台は断面形が矩形でやや端部に寄った位置に付される。底部内面が摩耗している。772 は盤である。口縁部がやや外反して折り返される。底部内面のみ摩耗している。

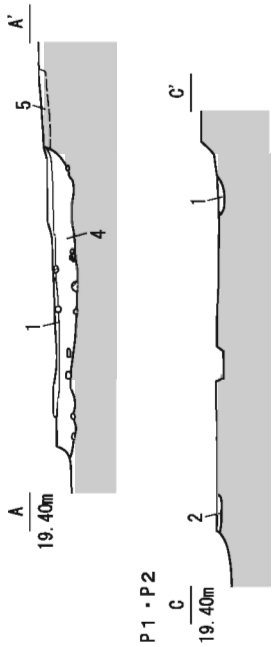
所属時期　遺構の重複では SI10 より新しいが、出土した須恵器は美濃須衛Ⅳ－３～Ⅴ -1 期で時期差はなく、Ⅴｂ期に位置付けられる。

SI13（第 197・198 図）

検出状況　EM ６から EN ６グリッドで検出した。遺構の北側が発掘区外へ続くため、全容は不明である。SK129、SI14 ～ 17 と重複している。この内、SK129 及び SI14 より古く、SI15 ～ 17 より

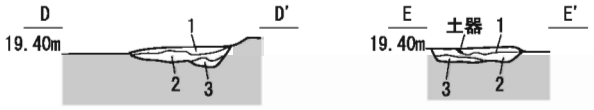


1　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体にマンガン斑沈着　径3cm以下の亜円礫を3%含む　焼土粒と炭化物が少量混じる
2　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に濃くマンガン斑沈着　径10cm以下の亜円礫を7%含む　P3埋土
3　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体にマンガン斑沈着　径12cm以下の亜円礫を大量に含む
4　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に濃くマンガン斑沈着　径10cm以下の亜円礫を7%含む
5　10YR4/3　にぶい灰黄黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体にマンガン斑沈着　Vb層



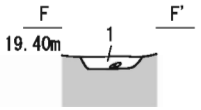
1　7.5Y4/2　灰褐色粘質シルトややしまる　粘性あり　全体にマンガン斑沈着　径1cm以下の亜円礫を7%含む　P1埋土
2　7.5YR3/2　黒褐色粘質シルトややしまる　粘性あり　全体にマンガン斑沈着　P2埋土

カマド



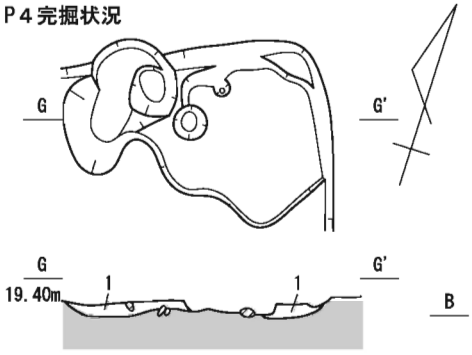
1　10YR3/1　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　焼土塊を多量に含む　炭化物を含む　土器を含む
2　10YR4/1　褐灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　焼土塊と炭化物を含む　径7cm以下の亜円礫を5%含む
3　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　炭化物を少量含む

P3



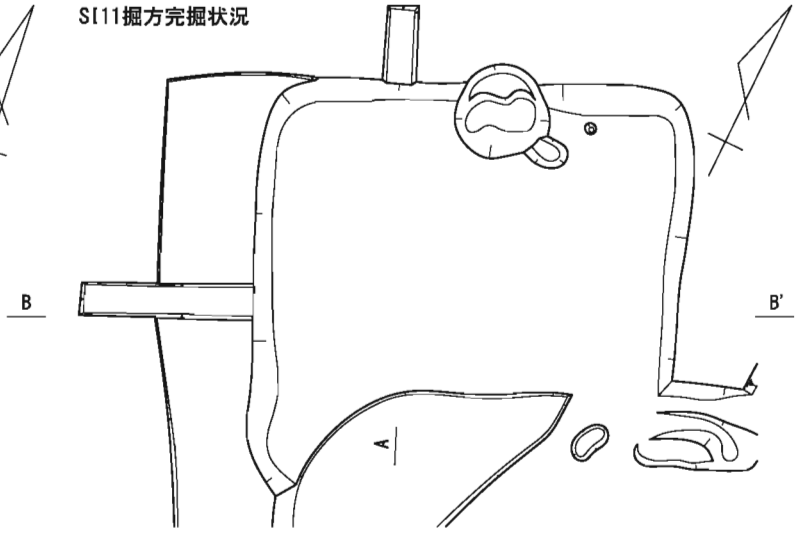
1　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルトしまる　粘性あり　全体にマンガン斑沈着　焼土粒と炭化物を少量含む　径4cm以下の亜円礫を10%含む

P4完掘状況



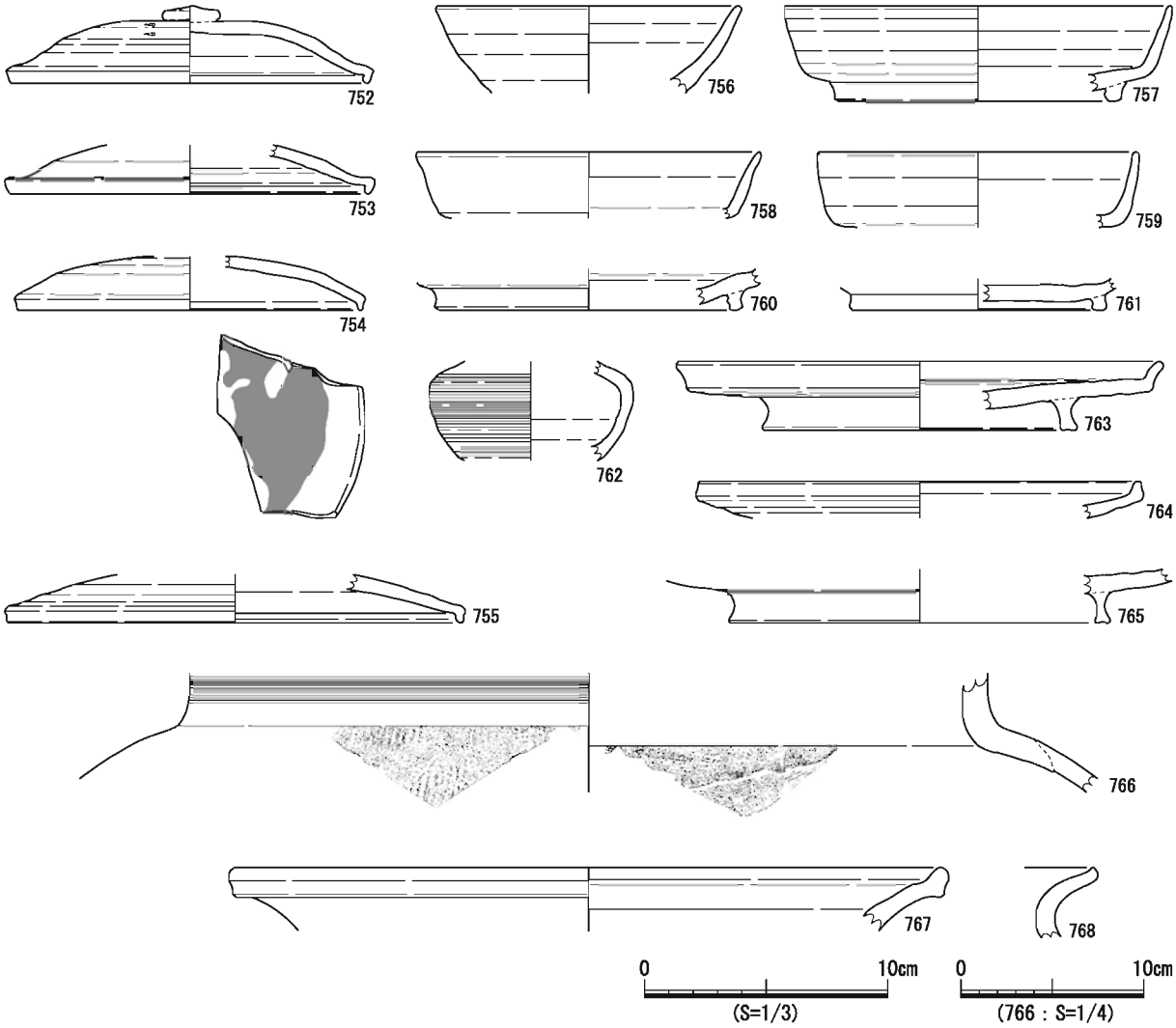
1　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　2.5Y3/2黒褐色粘質シルトをブロック状に30%含む　径5cm以下の亜円礫を10%含む　炭化物と焼土粒を少量含む

SI11掘方完掘状況



0　2m
(S=1/50)

第192図　SI11遺構図



第193図　SI11出土遺物

新しい。

堆積状況　埋土は黒褐色の粘質シルトで、焼土や炭化物を少量含み、小型の円礫が少し混じる。埋土が周囲の竪穴建物とほぼ同じであり、平面での検出は困難であった。

床面・掘方　硬化した貼床や整地土は確認できなかった。

付属遺構　掘方底面で、西壁に沿う壁際溝を検出した。南壁には廻らず、西壁の一部にとどまる。また南西隅の底面で、主柱穴と考えられる小穴（Ｐ１）を検出した。浅い遺構であり、柱痕跡など特徴的な堆積は確認できなかった。

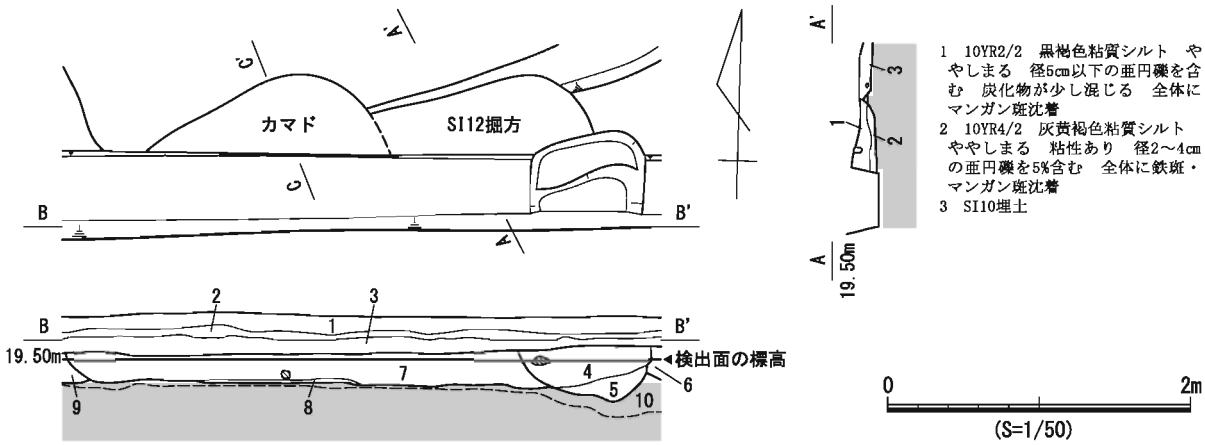
遺物出土状況　埋土中から遺物が出土しているが、特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物　SI13 及びその付属遺構からは、須恵器、土師器が出土した。この内、１点を図示した。

773 は須恵器の坏身Ｃ類である。底面のやや内側に断面形が矩形の高台が付される。

所属時期　遺構の切り合いから SI14 より古く、出土した須恵器が美濃須衛Ⅳ-3 期であることから、Ｖｂ期に位置付けられる。

検出状況

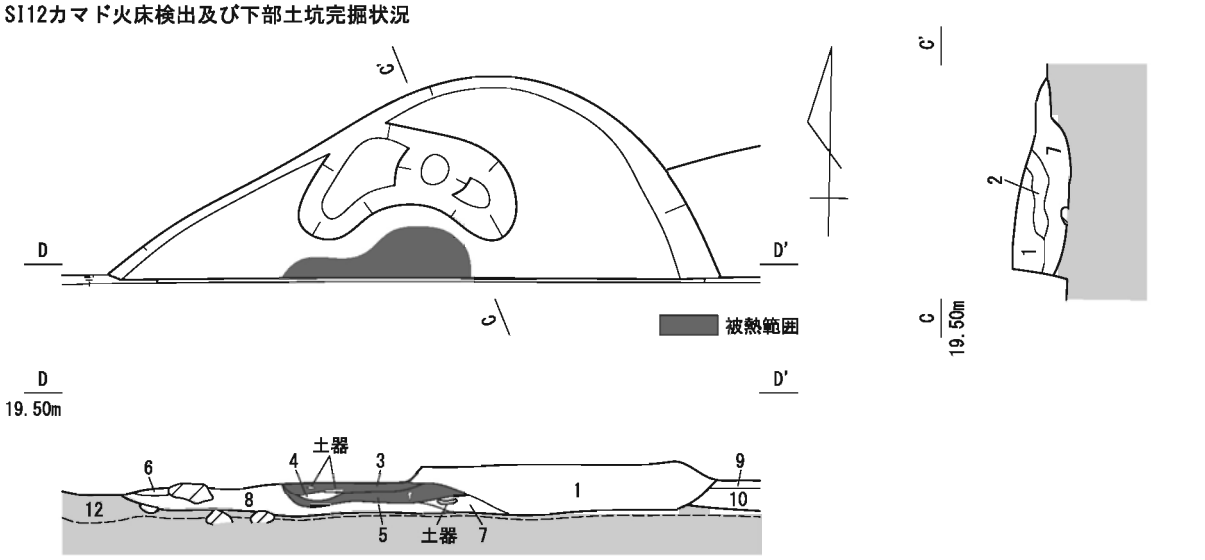


1　10YR2/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　径5cm以下の亜円礫を含む　炭化物が少し混じる　全体にマンガン斑沈着
2　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　径2～4cmの亜円礫を5%含む　全体に鉄斑・マンガン斑沈着
3　SI10埋土

※発掘区南壁土層図を反転して作図

1　Ⅰb層
2　Ⅰc層
3　Ⅲa層
4　10YR2/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　焼土粒・炭化物を少量含む　径2cm以下の円礫を2%含む　SK114埋土
5　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　焼土粒・炭化物を多量に含む　径2cm以下の円礫を2%含む　SK114埋土
6　10YR3/2　黒褐色粘質土　ややしまる　径5cm以下の亜円礫を少し含む　SK116埋土
7　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　径3cm以下の円礫を少し含む　炭化物が混じる　全体に鉄斑沈着　マンガン斑沈着　SI12整地土
8　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑沈着　径4cm以下の亜円礫を5%含む　SI12整地土
9　10YR3/1　黒褐色粘質土　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑沈着　径3cm以下の亜円礫を3%含む　SX5埋土
10　Vb層

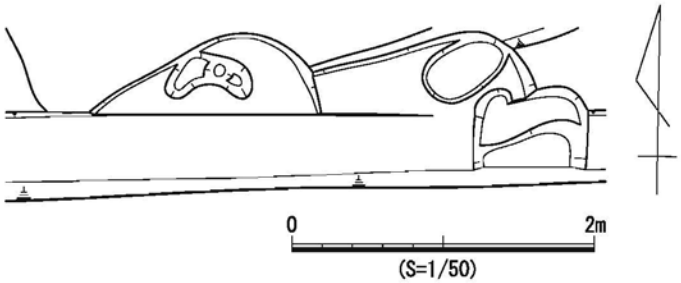
SI12カマド火床検出及び下部土坑完掘状況



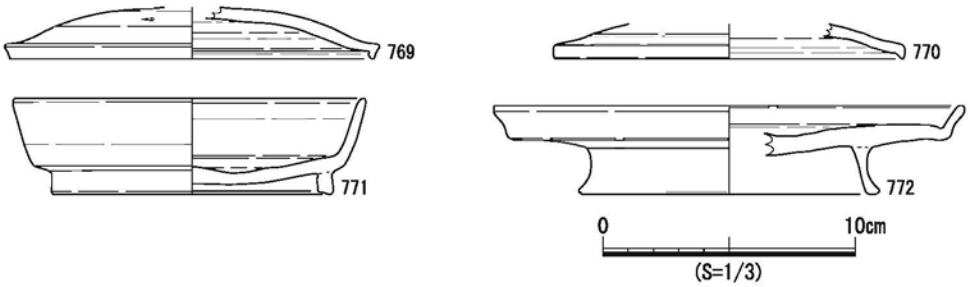
1　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　やや暗色　ややしまる　径3cm以下の円礫を少し含む
2　10YR3/1　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　焼土塊がまじる　炭化物が混じる
3　10YR3/1　黒褐色粘質シルト　ややしまる　焼土塊がまじる　炭化物が混じる
4　10YR2/1　黒色粘質シルト　ややしまる
5　10YR3/1　黒褐色粘質シルト　ややしまる　10YR5/2 灰黄褐色土ブロック（焼土）が混じる
6　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　径10cm以下の亜円礫を少し含む
7　10YR2/1　黒色粘質シルト　ややしまる　細かい焼土粒・炭化物が少しまじる
8　10YR3/2　黒褐色シルト　ややしまる　やや粘性あり
9　10YR2/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　径5cm以下の亜円礫を含む　炭化物が少し混じる　全体にマンガン斑沈着　SI12掘方埋土
10　10YR4/2　炭黄褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　径2～4cmの亜円礫を5%含む　全体にマンガン斑沈着　SI12掘方埋土
11　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質シルト　しまる　Vb層

第194図　SI12遺構図①

SI12掘方完掘状況



第195図　SI12遺構図②



第196図　SI12出土遺物

SI14（第199・200図）

検出状況　EM７からEN７グリッドで検出した。遺構の東側と北側が発掘区外へ続くため全容は不明であるが、検出した一辺が４ｍを超えており、今回検出した竪穴建物の中では最大の規模となる可能性がある。長軸方位はN-3°-Wでほぼ南北軸に近い。遺構の西側でSI13・SI15～18、SK129と重複しているが、そのいずれよりも新しい。

堆積状況　埋土は黄灰色、整地土は褐灰色である粘質シルトが堆積していた。掘方底面がⅥ層に達しているためか、埋土中の礫が多い。

床面・掘方　硬化した貼床は確認できなかった。整地土はＶｂ層に非常によく似ているが、遺物が混入することから整地土であることを確認した。

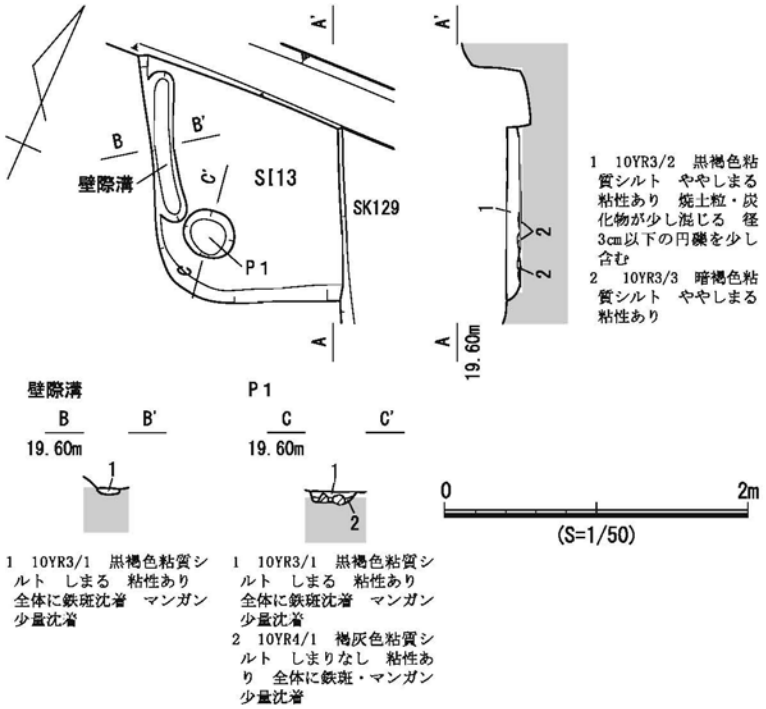
付属遺構　遺構南西隅の床面上で検出した小穴を、主柱穴（Ｐ１）とした。Ｐ１の南側と掘方底面から土坑を３基（Ｐ２～Ｐ４）を検出したが、いずれも浅い窪み状の遺構である。

遺物出土状況　埋土中から遺物が出土しているが、特徴的な出土状況はみられなかった。

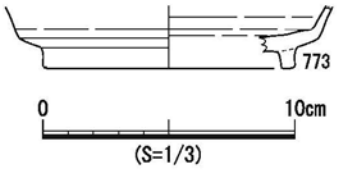
出土遺物　SI14からは、須恵器、灰釉陶器、土師器が出土した。この内、８点を図示した。

774～776は須恵器である。774は須恵器の坏蓋Ｃ類であり、頂部外縁に回転ヘラケズリ調整を施す。内面には重ね焼き痕が残る。775は坏身Ｂ２類である。底面に回転ヘラ切り痕が残る。776は甕の口縁部と考えられる。

777～780は灰釉陶器である。777は碗であり、690と同様な深碗と思われる。底面に回転ヘラケズリ調整が施され、灰釉がわずかに確認できる。778は碗の底部であり、内面が摩耗している。779は高台がやや低く体部が直線的に開くことから皿類と思われる。内面に灰釉が施釉され、圏線が描かれる。780も皿と思われる。底面に回転糸切り痕が明瞭に残る。内面が著しく摩耗し、



第197図　SI13遺構図



第198図　SI13出土遺物

朱墨が付着していることから転用硯と考えられる。

781 はロクロ土師器である。柱状の高台部分であり、底面に回転糸切り痕が残る。

所属時期　周囲の竪穴建物で出土しない灰釉陶器が認められ、遺構の切り合いも周辺の竪穴建物の中で最も新しい。灰釉陶器は 0-53 号窯期に比定されることから、Ⅵｂ期に位置付けられる。

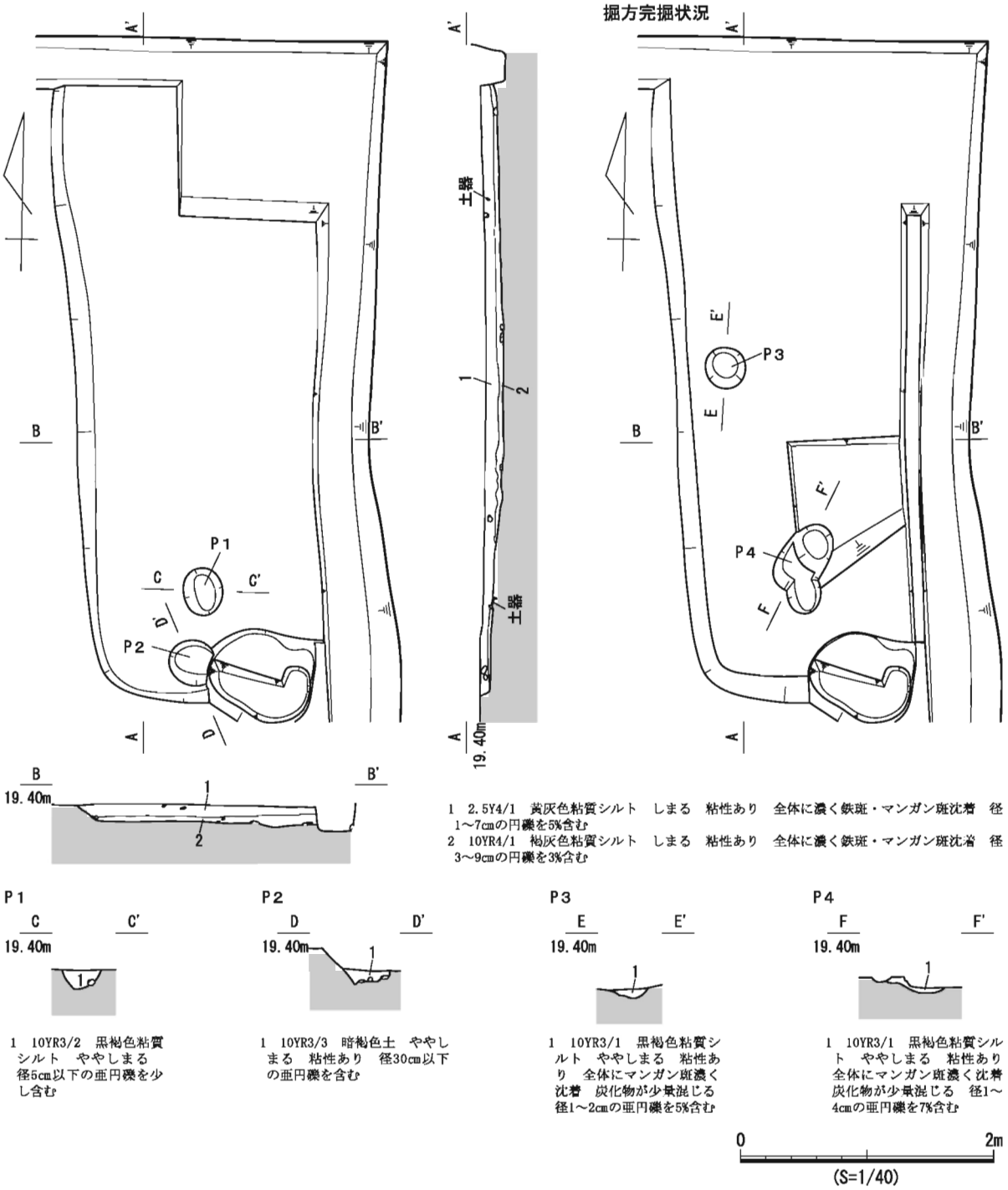
SI15（第 201 ～ 203 図）

検出状況　EM ７から EN ７グリッドで検出した。遺構の東部は SI14･SK126、北部は SI13 と重複し、これより古い。また、遺構の北西部で重複する SI16 よりは新しく、さらに床面上で SI17・18 を検出した。複雑な重複状況から、本来の平面形は不明である。長軸方位は N-23°　-W である。本遺構の検出段階で、焼土を含んだ埋土を遺構西辺中央付近で確認し（Ｂ－Ｂ’）、カマドを備えた竪穴建物として調査を進めた。

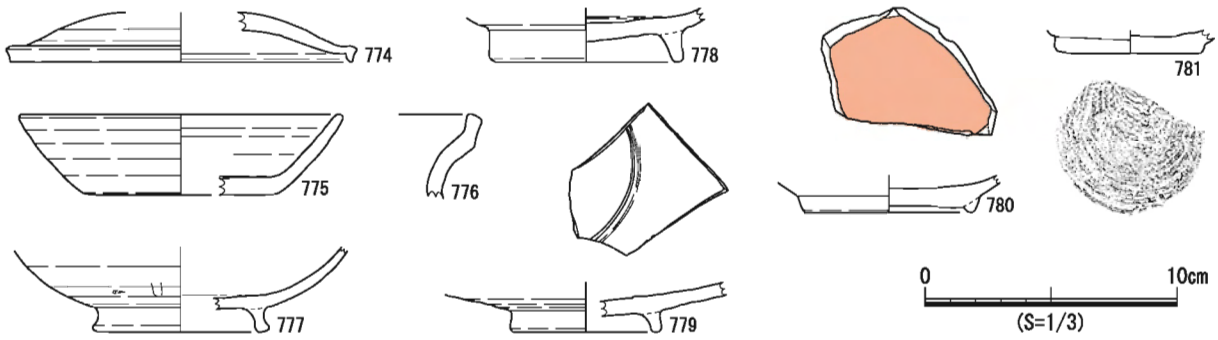
堆積状況　埋土の南部に黒褐色、北部に灰黄褐色の粘質シルトが堆積しており、差異が認められた。全体的にⅥ層に由来するものと思われる礫を含む。

床面・掘方　硬化した床面や整地土は検出できなかったが、カマドを検出した面を床面とした。同じ面で SI17 の掘方や SI18 の壁際溝、小穴３基を検出した。小穴については、本遺構の主柱穴にあたる位置でないことや、SI18 の範囲内であることから、SI18 の床面遺構（SI18-P １～Ｐ３）として取り扱ったため、第 201 図の平面図には図示していない。

付属遺構　主柱穴は確認できなかった。カマドは、掘方西壁中央に接した位置で検出した。今回の調査で掘方の西壁にカマドが設置されるのは本遺構のみである。また、土坑状の窪み底面に設置する点も特異である。袖の一部が残存しており、SI15 掘方から西へ若干張りだした部分から二股に延びる。燃焼部と考えられる被熱痕は、基盤層上面にみられた。また、袖の一部にも被熱



第199図　SI14遺構図



第200図　SI14出土遺物

痕が認められた。カマドの北側にはカマドと同質な埋土で埋没した不定型な張り出しがあるが、その性格は不明である。なお、袖部の除去後に支脚柱痕の可能性がある小穴（Ｐ１）を検出した。

遺物出土状況　カマド内部から、須恵器がまとまって出土した。カマド本体となる土坑からだけでなく、北側の張り出し部からも出土している。完形に近いものは、坏身・坏蓋が多い。いずれもカマドの３層（Ｂ－Ｂ’）より高い位置で出土しており、廃絶後に意図的に投棄したと思われる。

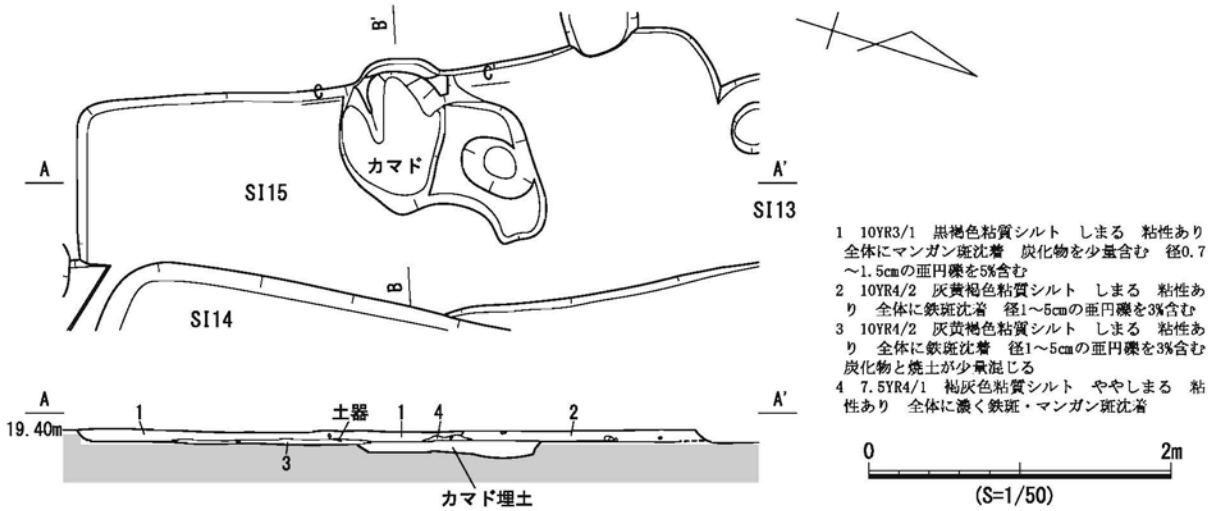
出土遺物　SI15 及びその付属遺構からは、須恵器と土師器が出土した。この内、19 点を図示し、その内 782 ～ 784・789 ～ 796・798・800 がカマドの一括出土遺物である。782 ～ 789・791 ～ 798 は須恵器である。782 ～ 787 は坏蓋Ｃ類である。782 はほぼ完形で、頂部外縁に回転ヘラケズリを施す。783 は完形に近いが口縁部のみ残存しておらず、意図的な打欠きの可能性もある。788 は坏身Ａ類である。青黒い色調で、口縁部が外反しながら上方へ立ち上がる。789・791・792 は坏身Ｂ２類である。789 は回転ヘラ切り痕が丁寧にナデ消されている。793 ～ 797 は坏身Ｃ類である。底面が残存するものは、いずれも丁寧に回転ヘラケズリ調整され、厚みがある。793 には「大□」と書かれた２文字の墨書がある。798 は盤である。坏身Ｃ類と同様に底面が突出し、回転ヘラケズリ調整を施す。

790 は内外面の磨滅で回転ナデ痕が判別できないことや胎土から土師器とした。器形は坏身Ｂ２類に類似する。内面に何らかの付着物がみられる。799・800 は土師器の甕で、799 は甕Ａ類の胴部破片、800 はＢ類である。800 は薄手で口縁部が強く屈曲し、外面に粗いハケ調整を施す。口縁部内面にも横位のハケ目が残り、その下に横位の板ナデがみられる。

所属時期　カマドから出土した一括遺物は、美濃須衛Ⅳ -3 ～Ⅴ -1 期でまとまりがあるため、遺構の時期もＶｂ期に位置づけられる。

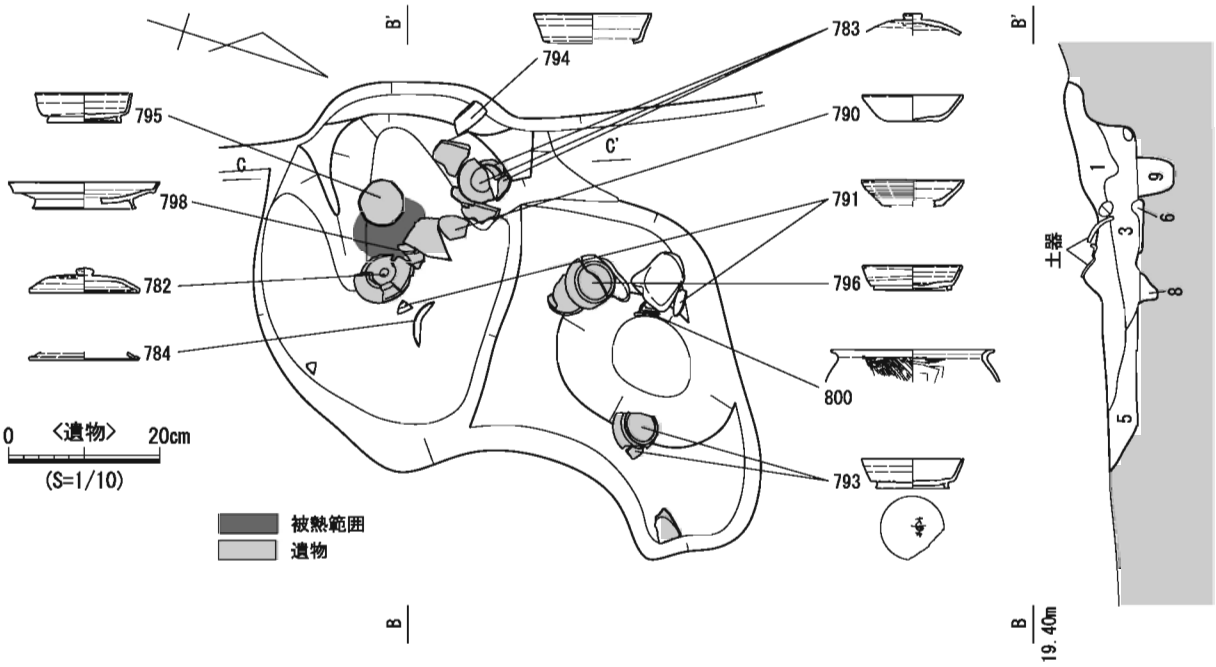
SI16（第 204 図）

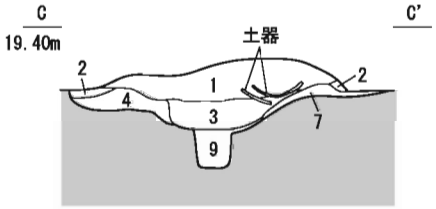
検出状況　EM ７から EN ７グリッドで検出した。北西隅部分のみ残存しているため、平面形の全容は不明である。掘方の東部分が SI13・SI15 と重複し、これらより古い。SI17・18 などとも重複するはずであるが、SI15 によって同じ高さまで削平されているため、新旧を確認することができなかった。



第201図　SI15遺構図①

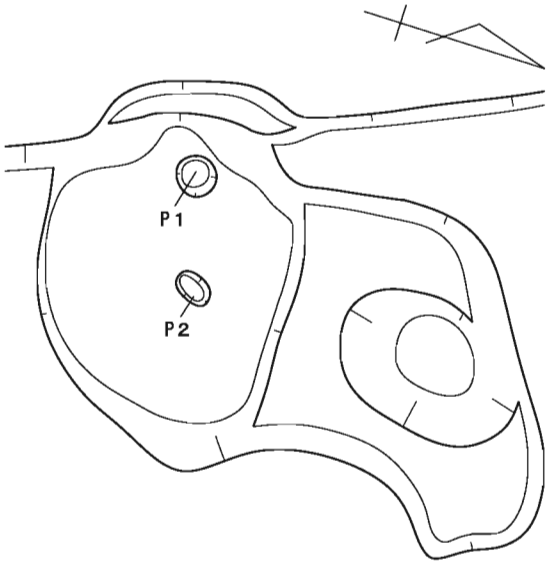
SI15カマド遺物出土状況





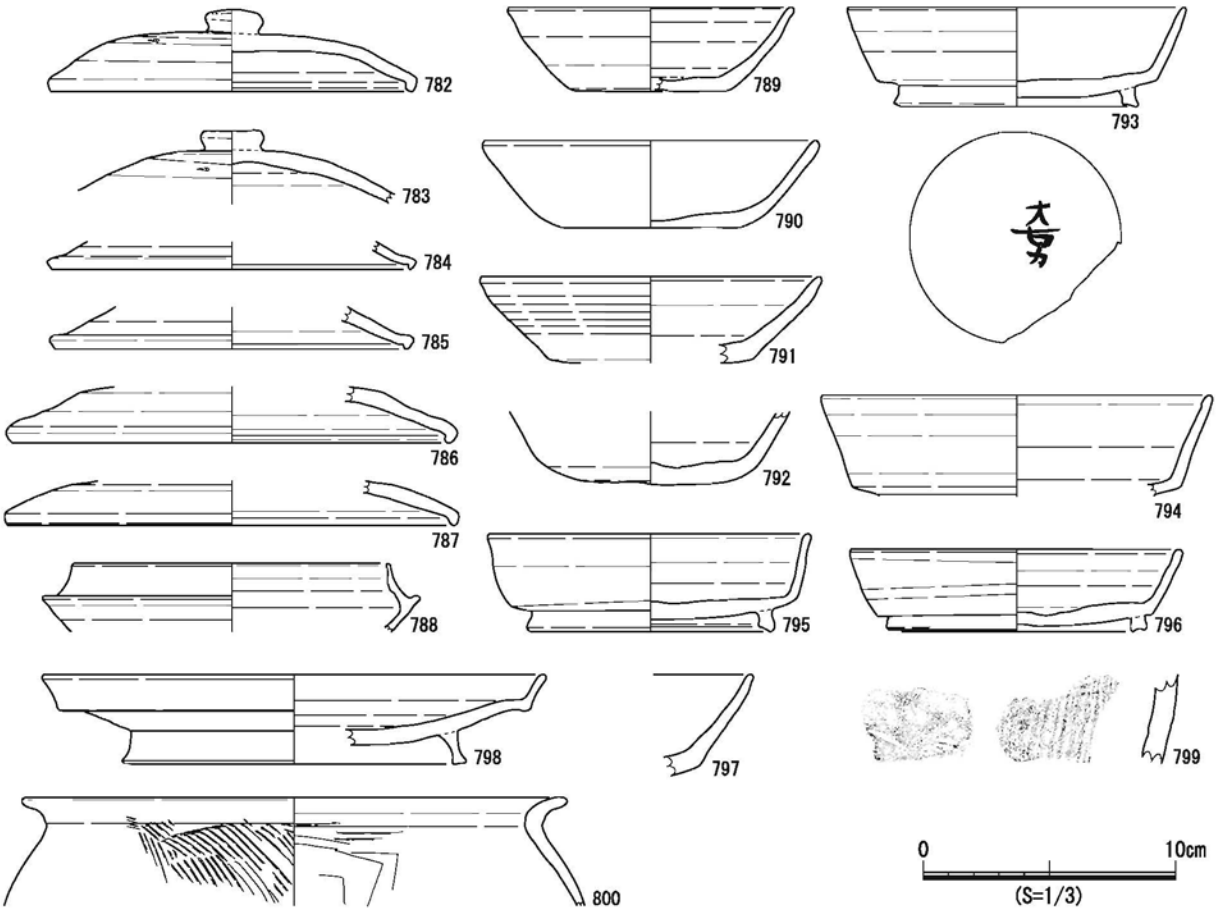
1　10YR3/1　黒褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　5YR5/8明赤褐色焼土を多量に含む　炭化物が混じる
2　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　径1～5cmの亜円礫を3%含む
3　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　径1～3cmの亜円礫を2%含む　焼土を少量含む　炭化物が混じる
4　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン斑沈着　10YR3/1黒褐色粘質シルトをブロック状に20%含む
5　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　炭化物を少量含む
6　10YR3/3　灰褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　被熱
7　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン斑沈着　10YR3/1黒褐色粘質シルトをブロック状に10%含む
8　10YR2/3　黒褐色粘質シルト　しまりなし　粘性あり　焼土粒と炭化物を少量含む　P2埋土
9　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　しまりなし　粘性あり　焼土を多く含む　炭化物を少量含む　P1埋土

SI15カマド完掘状況



0　〈遺構図〉　1m
(S=1/20)

第202図　SI15遺構図②



第203図　SI15出土遺物

堆積状況　黒褐色の粘質シルトが堆積していた。

床面・掘方　硬化した床面や整地土は確認できなかった。

付属遺構　主柱穴やカマドは確認できなかったが、掘方壁面に沿う壁際溝を検出した。壁際溝が浅いため、SI13・SI15との重複部分は削平された可能性が高い。

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。

所属時期　遺構の重複からSI13・SI15より古い遺構であり、Ｖｂ期以前に位置付けられる。

SI17(第205図)

検出状況　EM７からEN７グリッドのSI15床面で検出した。長軸方位や掘方の西壁がSI13とほぼ一致している。調査時の所見で重複を整理するとSI17→SI15→SI13の順となり、同様な長軸方位で建て替えが繰り返された結果、SI17が偶然SI13を南側へ拡張したような掘方になったと考えられる。遺構の西側はSK129と重複し、これより古い。SI18との重複関係は不明である。

堆積状況　埋土がＶｂ層に類似しており、黒褐色シルトのブロックを含むことから、人為的に埋め戻された整地土と判断した。SI13・SI15によって大きく上面が削平されているため、検出した段階で整地土が露出したと考えられる。

床面・掘方　大きく削平されているため、本来の掘方形状は不明である。掘方底面はⅥ層に達し、礫が露出していた。

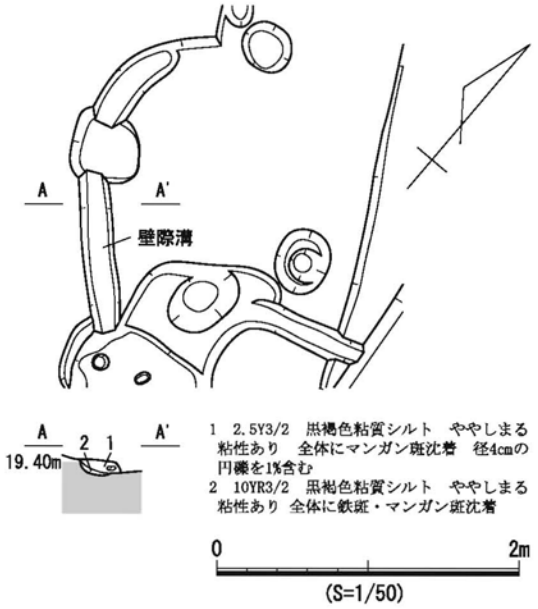
付属遺構　整地土上面で検出した土坑１基（Ｐ１）と掘方底面で検出した土坑２基（Ｐ２・Ｐ３）を付属遺構としたが、いずれも性格不明である。

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。

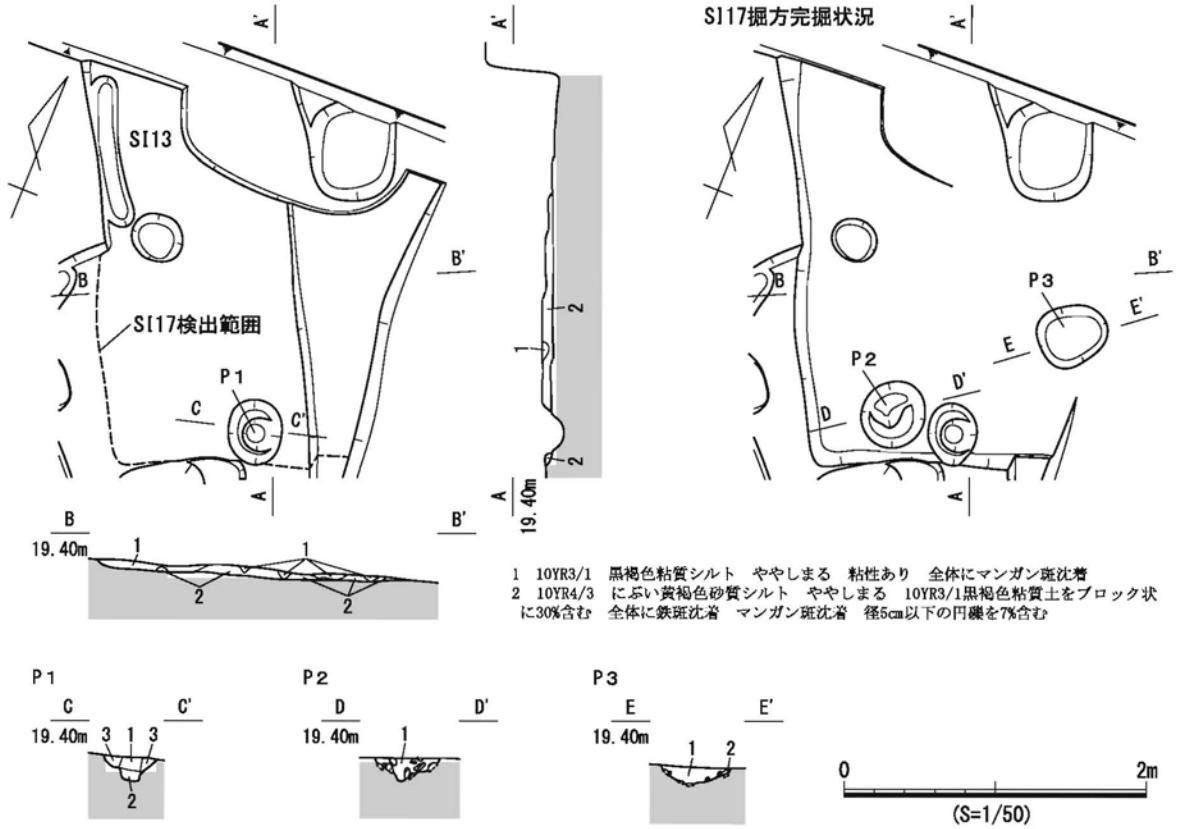
所属時期　遺構の重複からSI13・SI15より古い遺構であり、Ｖｂ期以前に位置付けられる。

SI18（第206図）

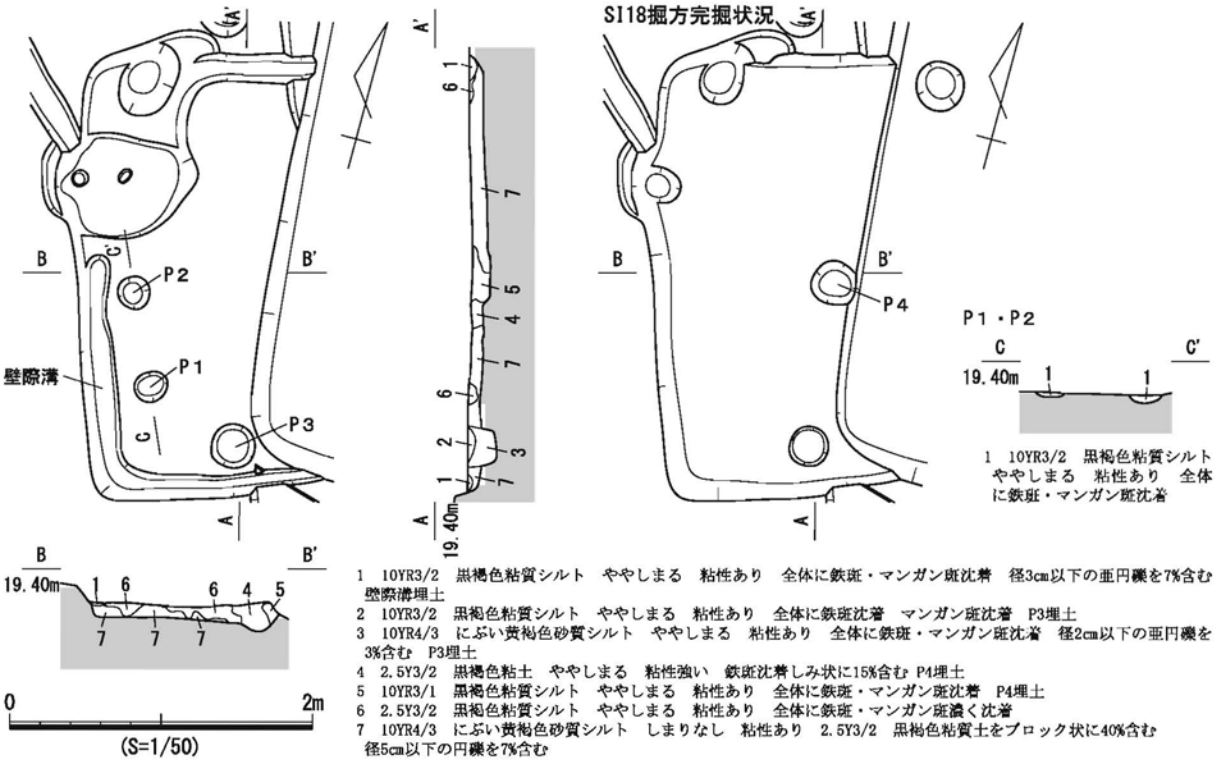
検出状況　EN７グリッドで検出した。SI15の床面で掘方南壁と西壁に沿う壁際溝を検出したが、SI15掘方西壁中央に設置されたカマドに重複して東に延びる溝を検出したことから、これを北壁とした別の竪穴建物に伴うと判断した。しかし、SI15と南側の掘方を完全に共有しているため、SI18の掘方を北側に拡幅してSI15が建てられた可能性も考えられる。遺構東部はSI14と重複しており、これより古い。



第204図　SI16遺構図



第205図　SI17遺構図



第206図　SI18遺構図

堆積状況　検出時点ですでに床面が露出していた。整地土はＶｂ層に類似する砂質シルトに黒褐色粘質シルトのブロックが混入する土質であり、礫を多く含む。

床面・掘方　検出した床面の高さはSI15と同じで段差はないが、壁際溝が浅いことから、SI15に伴う掘削によって上面が削平された可能性もある。掘方底面はⅥ層に達し、礫が露出していた。

付属遺構　床面上で小穴４基を検出し、この内、掘方南西隅に近い１基を主柱穴（Ｐ１）とした。その他の遺構（Ｐ２～Ｐ４）はいずれもSI18検出面から掘り込まれており、SI15の床面遺構ともいえるが、SI15の主柱穴といえる位置にないため、SI18に含めた。なお、Ｐ４は掘方底面で検出したため完掘状況の図に示したが、土層断面図（Ｂ－Ｂ’）から床面から掘り込まれた遺構と考えられる。

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。

所属時期　遺構の重複からSI15より古い遺構であるが、SI15がSI18の建て替えとすれば、Ｖｂ期に位置付けられる。

２　溝状遺構

（１）DM16～DO19グリッド溝状遺構群（第207～209図）

竪穴建物が集中する微高地と生産域と考えられる低地の間に、南北に近い方位で設置された溝状遺構群であり、集落域と水田域を区画する区画溝と考えられる。なお、長軸方位が南北軸にほぼ一致する溝状遺構については、大野郡の条里地割導入後に設置された可能性がある。

SD６・７

検出状況　DM16 から DO18 グリッドで検出した。長軸方位は、SD ６が N-39°-W、SD ７が 35°で、ほぼ平行している。SD ６の方が新しく、若干浅い。

堆積状況　SD ６は単層で、流水の痕跡は認められない。SD7 は、上層の埋土にブロックが多く、人為的に埋め戻されたと思われる。流水の痕跡は認められない。また、土層の堆積状況から、再掘削が行われた可能性がある。

掘方　両遺構ともに、遺構の南北で底面レベルがほぼ同じであり、流水の方向は不明である。SD ６は SK43 と重複しているが、SK43 東側に接する SD ６底面が窪んでおり、この窪みと SK43 の埋土が同一であることを確認した。SK43 と SD ６底面の窪みが SD ６に付属する何らかの遺構であり、一括して埋め戻された可能性がある。

遺物出土状況　SD ６は、埋土中から須恵器を中心に土器が出土している。須恵器の鉄鉢（804）や平瓶（806）のように復元可能な個体も認められる。SD ７は遺物がほとんど出土しなかった。

出土遺物　SD ６からは須恵器、灰釉陶器、土師器が出土している。この内、９点を図示した。

801 ～ 807 は須恵器である。801 は坏身Ｂ２類の可能性がある。焼成不良により橙色で、非常に脆い。胎土から美濃須衛産ではないと考えられる。802・803 は坏身Ｃ類である。802 は底面に回転ヘラ切り痕が残り、内面が摩耗している。804･805 は鉄鉢である。804 はほぼ完形品であるが、まとまっては出土していない。やや焼成不良で、灰白色である。805 は 804 より若干径が小さい。底部内面に自然釉が付着している。806 は平瓶である。口縁部と把手、底面を欠く。SI ５の埋土上面から出土した 702 と比較すると若干小型で丸みのある印象を受ける。体部上半まで回転ヘラケズリによって調整される。807 は甕又は鉢の底部と思われる。底面には調整の痕跡が認められない。

808 は灰釉陶器の壺・瓶類である。外面全体が回転ヘラケズリによって調整される。外面上半に灰釉を施す。精緻な胎土が特徴的で、東濃産である可能性がある。

809 は土師器の鍋である。外面と口縁部に粗いハケによる調整が施され、体部内面には板ナデ痕が残る。破片の下端には把手の一部が残存する。

所属時期　出土した須恵器はＶｂ期のものが目立つが、同一層内に 808 などの灰釉陶器も混在している。そのため、最終的に埋没した時期はⅥａ期以降と考えられる。SD ７は、SD ６と平行して設置されていることから、SD ７から SD ６へ付け替えが行われた可能性が高い。

SD ８・９

検出状況　DM18 から DO18 グリッドで検出した。SD ８・９ともに長軸方位が N- １°-E で、平行して設置されている。ともに SD10・SD13 と重複しており、これより新しい。なお、発掘区北壁の土層観察により、SD ９がⅢ層上面から掘り込まれている状況を確認しており、Ⅶ期以降の遺構と考えられる。

堆積状況　SD ８は単層で、粘質のある埋土が堆積していた。SD ９は、下層埋土にブロックが多く混じる。両遺構とも流水の痕跡は認められない。

底面・掘方　両遺構ともに、南北で底面の高さがほぼ同じであり、流水方向は不明である。

遺物出土状況　埋土中から土器の破片が出土しているが、特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物　SD ８・９ともに、縄文土器、須恵器、灰釉陶器、土師器が出土している。いずれも

破片であり、図示可能な遺物は出土しなかった。

所属時期　SD ８・９などの北から西へ傾く長軸方位とは異なり、南北方向に近いことから、条里プラン導入以降に設置されたと考えられる。またSD ９は、SD ８を踏襲して設置された溝状遺構と推定される。

SD10・11

検出状況　DM17からDO18グリッドで検出した。SD10の長軸方位はN-36°-W、SD11は31°傾いており、ほぼ平行している。両遺構とも直線的に設置されているが、SD11の南半は、削平により残存していなかった。SD10の南端でSD ８・９と重複し、これより古い。

堆積状況　SD10はＥ－Ｅ’断面で掘方の壁面から流出したような堆積（３層）が認められ、常時滞水していなかった可能性が高い。SD11は、埋土にブロックが多く認められ、人為的に埋め戻されたと考えられる。なお、SD10の埋土下層を対象に花粉分析を実施したが、花粉化石は検出できなかった（第５章第１節）。

底面・掘方　両遺構ともに、南北で底面レベルがほぼ同じであり、流水の方向は不明である。SD10は明確な断面逆台形の掘方をもつが、SD11は非常に浅い。SD11は、本来検出面より高い位置から掘り込まれていたが、Ⅲ層に伴う耕作などによって削平されたと考えられる。

遺物出土状況　SD10からは遺物が出土しなかった。SD11は埋土から土師器が１点出土した。

出土遺物　図示可能な遺物は出土しなかった。

所属時期　出土遺物から時期を判断することはできない。長軸方位がほぼSD ６・７と同じであり、同じ性格の遺構である可能性がある。

SD12

検出状況　DM19からDO19グリッドで検出した。長軸方位はN-3°-Wで南北軸に近いが、他の溝状遺構とは異なり、平面形がやや湾曲している。

堆積状況　埋土にブロックが多く認められ、Ⅵ層に由来する円礫を多く含む。流水の痕跡はみられなかった。

底面・掘方　南側の方が僅かに深くなることから、設置の際に流水の方向が意識されていた可能性がある。非常に浅いため、本来は検出面より高い位置から掘り込まれていたと考えられる。

遺物出土状況　埋土中から土器の破片が出土したが、特徴的な出土状況はみられなかった。

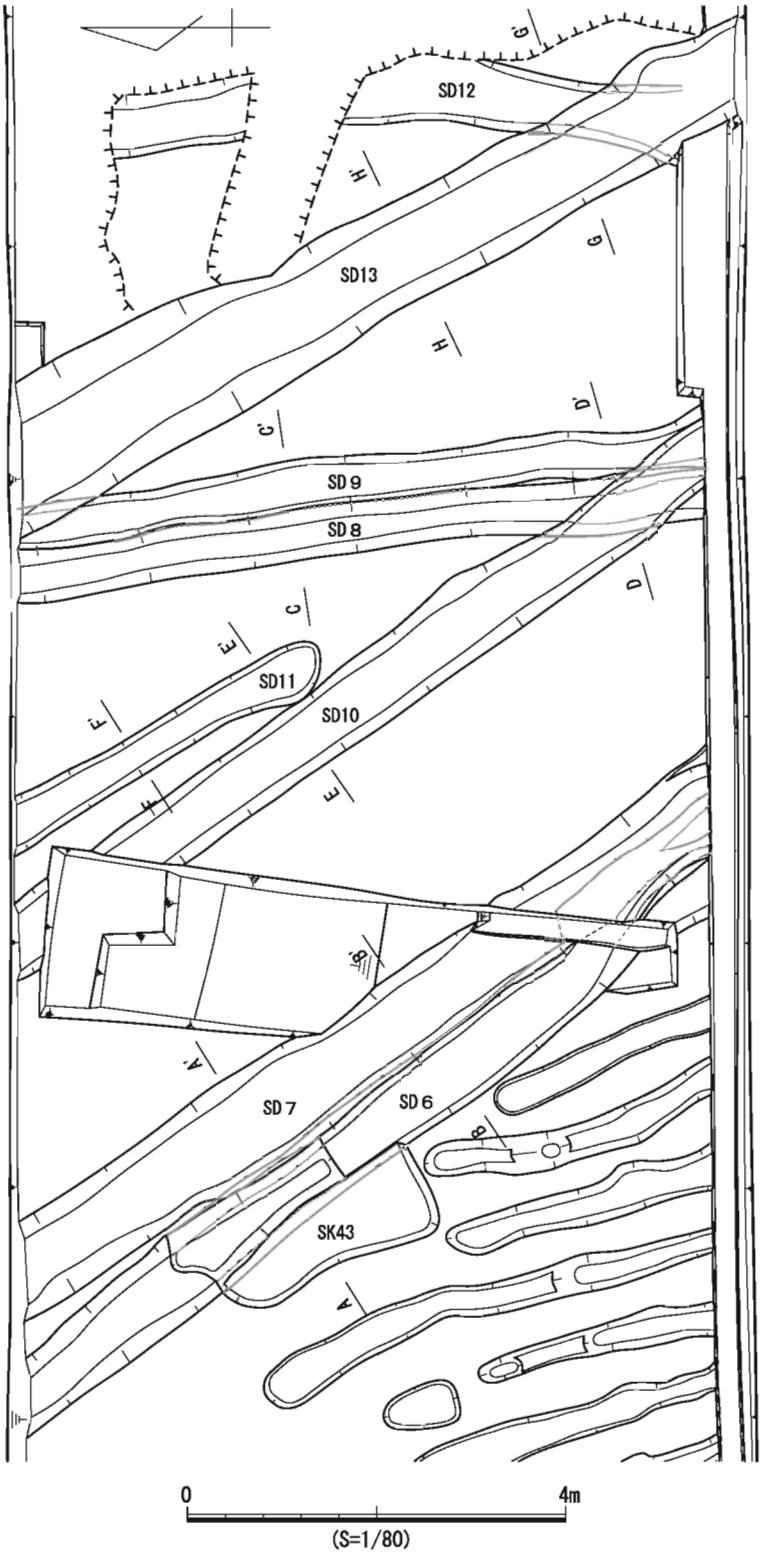
出土遺物　須恵器、灰釉陶器、土師器の破片が出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

所属時期　出土遺物から時期を判断することはできない。DM19からDO19グリッド付近は上層が撹乱されておりⅢ層が残存していないが、米軍撮影の空中写真（第７図）によれば、当該地付近に水路が存在しているため、その影響を受けていると考えられる。SD12は、その前身となる水路である可能性があり、時期的に新しい遺構と判断される。

SD13

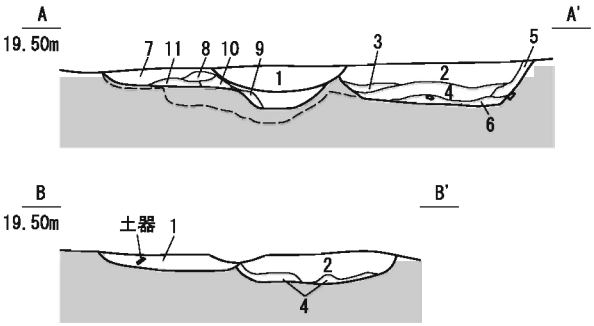
検出状況　DM16からDO19グリッドで検出した。長軸方位はN-30°-Wで、SD ６などとほぼ平行して直線的に設置されている。北端でSD ９、南端でSD12と重複し、これらより古い。

堆積状況　埋土の上層にはブロックが多く混じり、人為的に埋め戻された可能性が高い。一方下層にはブロックがなく、自然堆積である可能性がある。なお、SD12と同様にⅥ層を基盤とすること



第207図　DM16～D019グリッド溝状遺構群遺構図①

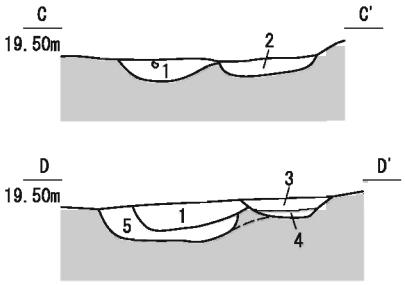
SD６・SD７・SK43



1　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体にマンガン斑少量沈着　鉄斑しみ状に10%沈着
2　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体にマンガン少量沈着　鉄斑しみ状に20%沈着　2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルトブロック状に40%混入
3　2.5Y5/1　黄灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着
4　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体にマンガン斑少量沈着　鉄斑しみ状に20%沈着
5　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　鉄斑しみ状に20%沈着　2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルトブロック状に20%混入
6　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質シルト　しまりなし　粘性あり　全体にマンガン斑沈着　鉄斑しみ状に20%沈着
7　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　鉄分しみ状に10%沈着　5Y4/1灰色粘質シルトブロック状に60%混入
8　2.5Y5/1　黄灰色粘質シルトややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着
9　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまりなし　粘性あり　マンガン斑少量沈着　鉄斑しみ状に20%沈着
10　5Y4/1　灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着
11　5Y4/1　灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　マンガン少量沈着　鉄斑しみ状に20%沈着

1：SD6埋土　2～6：SD7埋土　7～11：SK43埋土

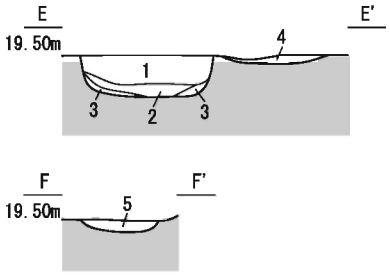
SD８・SD９・SD10



1　5Y4/1　灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　マンガン斑少量沈着　鉄斑しみ状に20%沈着
2　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄分沈着、マンガン斑少量沈着　径0.5～0.8cmの円礫1%含む
3　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑少量沈着
4　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着、マンガン斑少量沈着　5Y5/1灰色粘質シルト(全体に鉄斑沈着)ブロック状に20%混入
5　5Y3/1　オリーブ黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　5Y4/1灰色粘質シルト(全体に鉄斑沈着)ブロック状に20%混入

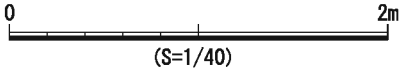
1：SD8埋土　2～4：SD9埋土　5：SD10埋土

SD10・SD11



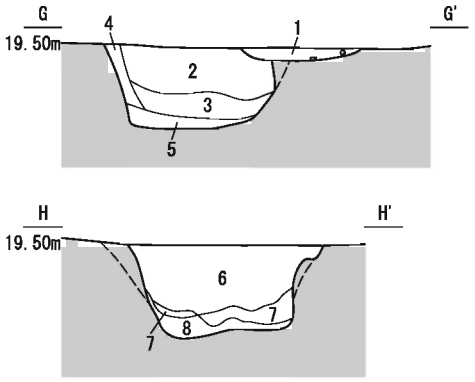
1　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑少量沈着
2　5Y3/1　オリーブ黒色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　鉄斑しみ状に15%沈着　マンガン斑少量沈着
3　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　鉄斑しみ状に30%沈着　ややしまる　粘性あり　鉄斑しみ状に40%沈着　5Y4/1灰色粘質シルトをブロック状に60%混入
4　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑少量沈着　5Y4/1灰色粘質シルト(ややしまる　粘性あり)をブロック状に50%混入
5　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑少量沈着　5Y4/1灰色粘質シルト(全体に鉄斑沈着)ブロック状に50%混入

1～3：SD10埋土　4・5：SD11埋土



(S=1/40)

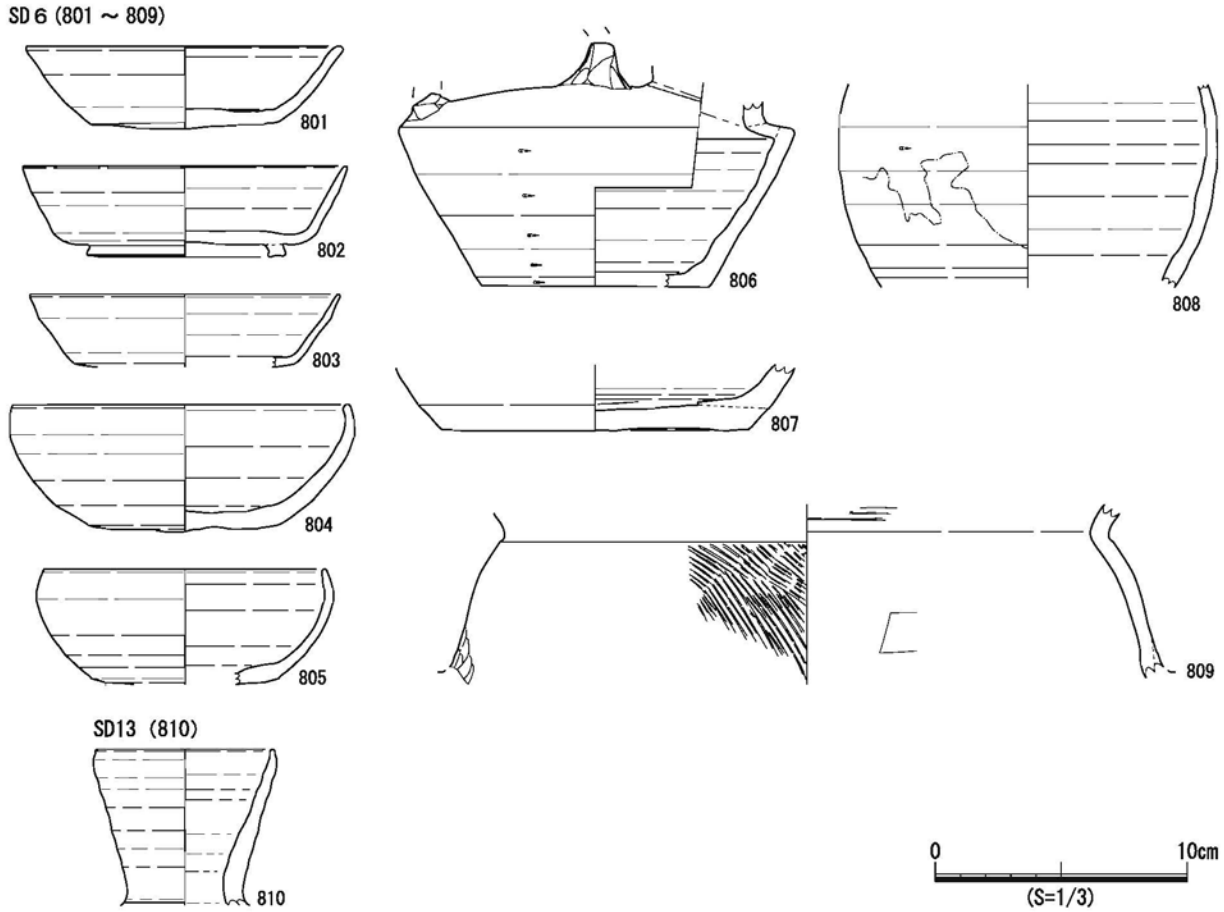
SD12・SD13



1　10Y4/1　褐灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　径1～5cmの円礫5%含む　鉄斑しみ状に10%沈着　マンガン斑少量沈着　2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト(全体に鉄斑沈着)ブロック状に40%混入
2　10YR3/1　黒褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　鉄斑しみ状に15%沈着　全体にマンガン斑少量沈着　10YR4/1褐灰色粘質シルトしみ状に40%混入　径1～4cmの円礫3%・径0.2～0.8cmの円礫2%含む　炭を少量含む
3　10YR3/1　黒褐色粘質シルト　しまりなし　粘性あり　鉄斑しみ状に15%沈着　10YR4/1褐灰色粘質シルトしみ状に20%混入　径1～5cmの円礫5%・径0.2～0.8cmの円礫2%含む
4　10YR3/1　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　鉄斑しみ状に10%沈着　全体にマンガン斑沈着　10YR4/1褐灰色粘質シルトしみ状に40%混入　径1cmの円礫2%・径0.2～0.8cmの円礫2%含む
5　2.5Y5/1　黄灰色砂質シルト　しまりなし　粘性ややあり　全体に鉄斑沈着　径1～3cmの円礫40%含む
6　10YR3/1　黒褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　鉄斑しみ状に15%沈着　全体にマンガン斑少量沈着　10YR4/1褐灰色粘質シルトがしみ状に40%混入　径1～5cmの円礫3%・径0.2～0.8cmの円礫2%含む
7　10YR3/1　黒褐色粘質シルト　しまりなし　粘性あり　鉄斑しみ状に15%沈着　2.5Y5/1黄灰色砂質シルトブロック状に10%混入　10YR4/1褐灰色粘質シルトしみ状に20%混入　径0.2～1cmの円礫2%含む
8　2.5Y5/1　黄灰色砂質シルト　しまりなし　粘性ややあり　全体に鉄斑沈着

1：SD12埋土　2～8：SD13埋土

第208図　DM16～DO19グリッド溝状遺構群遺構図②



第209図　DM16～DO19グリッド溝状遺構群出土遺物

から、埋土に円礫が多く含まれる。流水の痕跡は認められなかった。

底面・掘方　南北で底面の高さがほぼ同じであり、流水の方向は不明である。掘方の断面は逆台形に近く、周辺の溝では最も深く掘り込まれている。

遺物出土状況　埋土中から土器の破片が出土したが、遺構の規模に比して出土遺物は少ない。

出土遺物　須恵器と土師器の破片が出土した。この内、１点を図示した。

810 は平瓶の口縁部と考えられる。頸部から直線的に開き、口縁端部が僅かに内湾する。

所属時期　出土遺物から時期を判断することはできない。長軸方位がほぼSD６・７と同じであり、同様な性格の遺構と考えられる。

（２）SD14（第 210 ～ 212 図）

検出状況　DM20 から EO １グリッドで検出した。長軸方位は N-18°　-W である。わずかに蛇行しており、西側の溝状遺構群とは様相が異なる。SI １・２･SK125 と重複し、いずれの遺構より古い。

堆積状況　比較的遺物を多く含む１層とその下層（２～ 10 層）で様相が異なる。１層はほぼ同質の堆積で一括して埋没している。礫が多く、出土遺物はこの層に限定される。下層は砂質の堆積が目立ち、流水があった可能性がある。また、５層の状況から、５層埋没後に少なくとも１回の再掘削があったと考えられる。なお、埋土下層を対象に花粉分析を実施したが、花粉化石は検出できなかった（第５章第１節）。

底面・掘方　底面の高さが南に向かって低くなっており、流水が意識されている。掘方の断面形は逆台形又は方形に近い形状であるが、１層の堆積部分で若干広がっている。掘方の再掘削が行われた可能性がある。このような改修は、六里遺跡の溝状遺構でも複数確認した（第３章第４節）。

遺物出土状況　すべての出土遺物が、SD14 の検出面から 0.2 m下までで出土しており、１層に含まれていたと考えられる。第 211 図は、主な出土遺物の出土位置を示したものである。ドットは出土遺物の７割程度を表示しているが、①北端に集中していること、②検出面に近いレベルからも遺物出土していることがわかる。①については、出土した遺物に破片が多いことから一括廃棄とは考えにくいため、SI １などとの重複によって、遺物が多い１層が削平された結果と考えられる。②については、灰釉陶器や古代の須恵器が該当し、SI １などで使われていた土器が、僅かな窪みとなって残っていた SD14 に入り込んだことが予想される。それ以外の遺物はⅣ期のものが多いため、当該時期に SD14 の大部分が埋没した可能性が考えられる。

出土遺物　SD14 からは青黒い胎土である須恵器や横瓶などの特徴的な遺物の他、土師器、灰釉陶器が出土した。この内、11 点を図示した。

811 ～ 816 は須恵器である。811 は坏蓋Ａ類の頂部である。胎土が青黒く、頂部の回転ヘラ切り痕が未調整で残される。812 は坏身Ｂ１類の底部である。底面は回転ヘラ切り痕がナデ消されている。813 は須恵器の碗である。底面にヘラ記号が認められ、内底面が摩耗している。814 は、鉢又は甕と考えられる大型器種の口縁部である。外面に２条の横位沈線を施す。815 は横瓶である。体部外面のタタキ目と内面の当て具痕が明瞭に残る。美濃須衛窯産の可能性がある。816 は甕の頸部から体部上半にかけての破片と考えられる。青黒い色調で、焼き締まる。体部外面に平行タタキ目と内面の当て具痕が明瞭に残り、その後に施したカキ目調整が認められる。

817・818 は灰釉陶器である。817 は皿又は鉢の口縁部と思われる。口縁部が強く屈曲する。内外面に灰釉を施す。818 は小碗である。口縁端部が強く外反する。器壁が薄く、底面を除き灰釉を施す。

819･820 は土師器の甕Ａ類である。体部外面には斜位、内面上半には横位のハケ調整を施すが、内面のハケの方が粗い。体部内面下半には指頭調整痕が残る。口縁部は横ナデによって調整され、口縁端部の面取りと摘み上げが認められる。820 は口縁部の器壁が厚く、２段の横ナデを施す。内外面のハケ調整は、よく似た工具が用いられる。

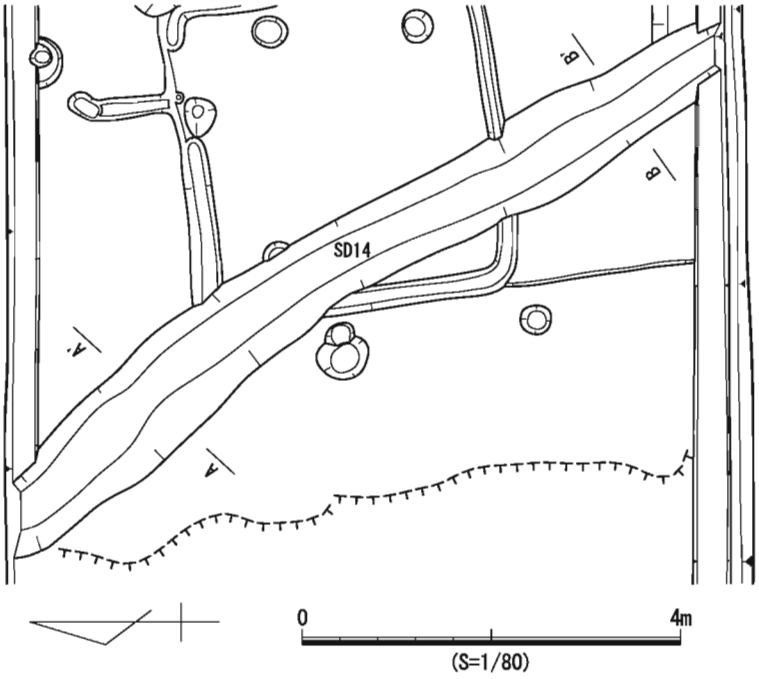
所属時期　Ⅳｂ期以前に水路として設置され、何度かの改修を経てその役割を終えたと思われる。その後、Ⅵａ期の段階で浅い窪地となっていたが、SI １の設置等に伴い完全に埋没したと考えられる。

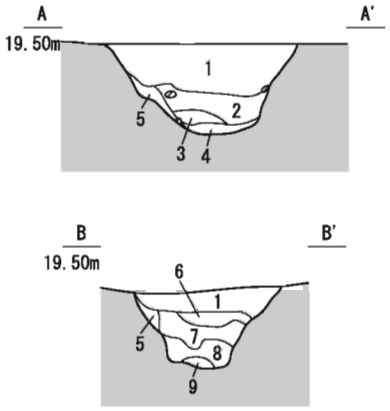
（３）SD16（第 213・214 図）

検出状況　EN ７から E0 ７グリッドで検出した。発掘区東部の重複する竪穴建物群の南側に位置する。長軸方位が N-74°-E であるが、この方位は SD ６などの溝上遺構とは直交せず、Ⅵｂ期の竪穴建物である SI ３の長軸方位とほぼ同じである。SK113 と重複し、これより新しい。

堆積状況　埋土は単層で、特徴的な状況は認められない。

底面・掘方　非常に浅く、断面形状は半円形である。底面の高さは東西でほぼ同じであり、流水の方向は不明である。

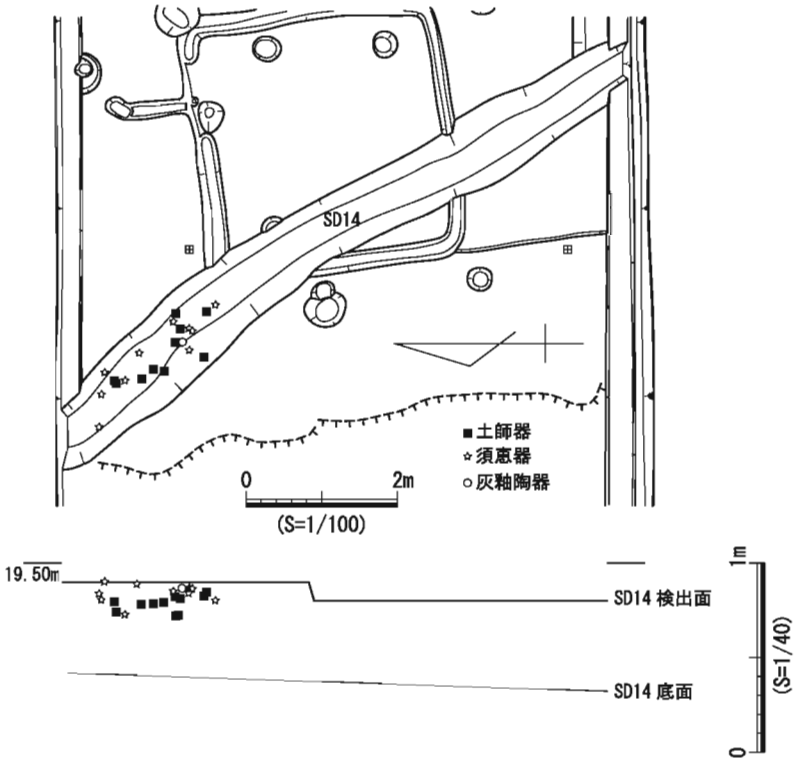




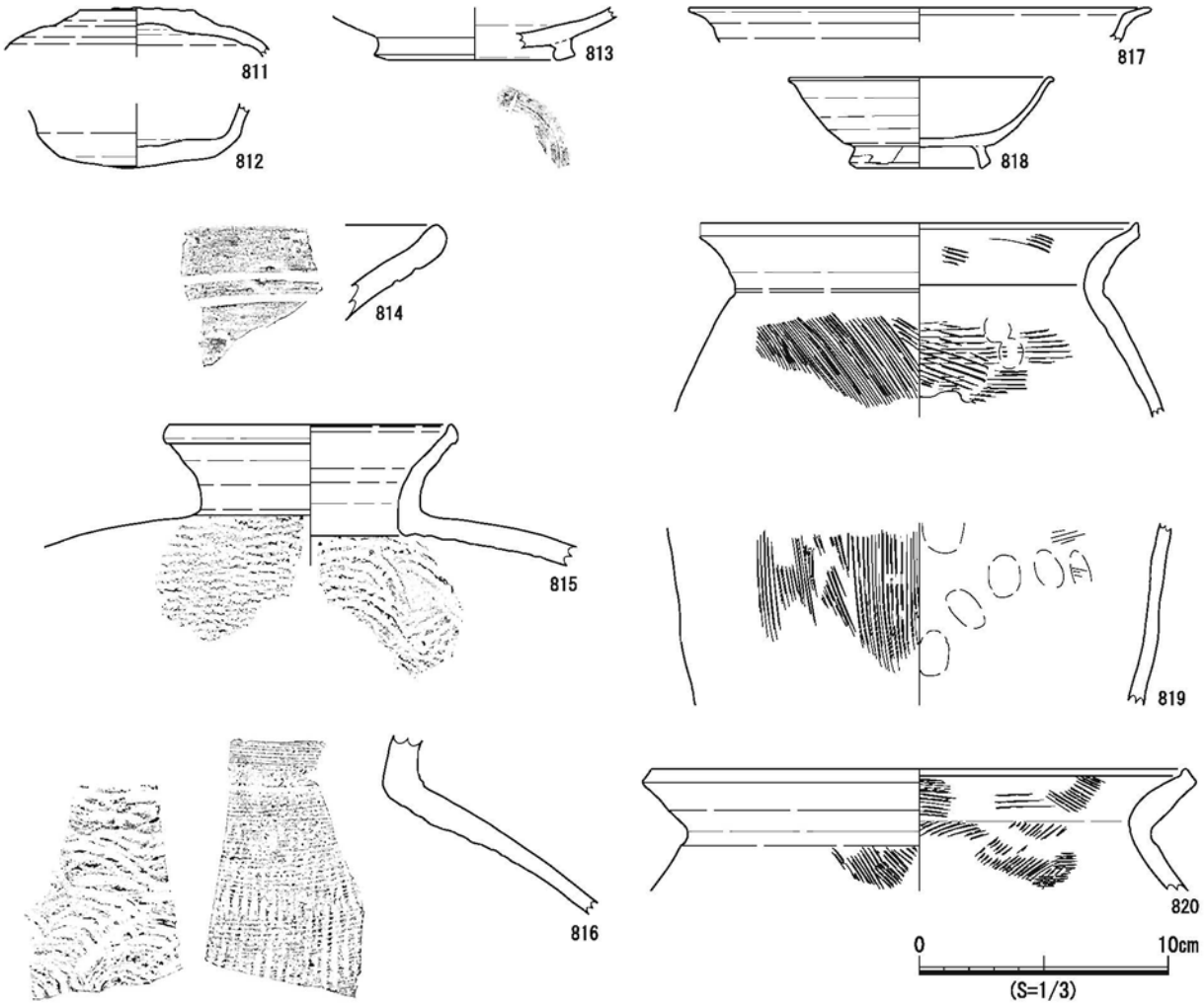
1　7.5YR3/1　黒褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン斑沈着　径3cm以下の亜円礫3%含む
2　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　しまりなし　粘性強い　全体に鉄斑・マンガン斑沈着
3　10YR3/3　暗褐色粘質シルト　しまりなし　粘性あり　全体に濃く鉄斑沈着・マンガン斑沈着
4　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　しまりなし　粘性強い　焼土を少量含む
5　7.5YR4/3　褐色砂質シルト　しまりなし　粘性あり　全体に濃く鉄斑・マンガン斑沈着
6　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　しまりなし　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン斑沈着　径3cm以下の亜円礫を5%含む
7　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　しまりなし　粘性強い　全体に鉄斑・マンガン斑沈着
8　2.5Y3/2　黒褐色砂質シルト　しまりなし　全体に鉄斑沈着
9　10Y4/1　灰色砂質シルト　しまりなし　粘性あり

0　2m
(S=1/40)

第210図　SD14遺構図



第211図　SD14主な遺物の出土位置



第212図　SD14出土遺物

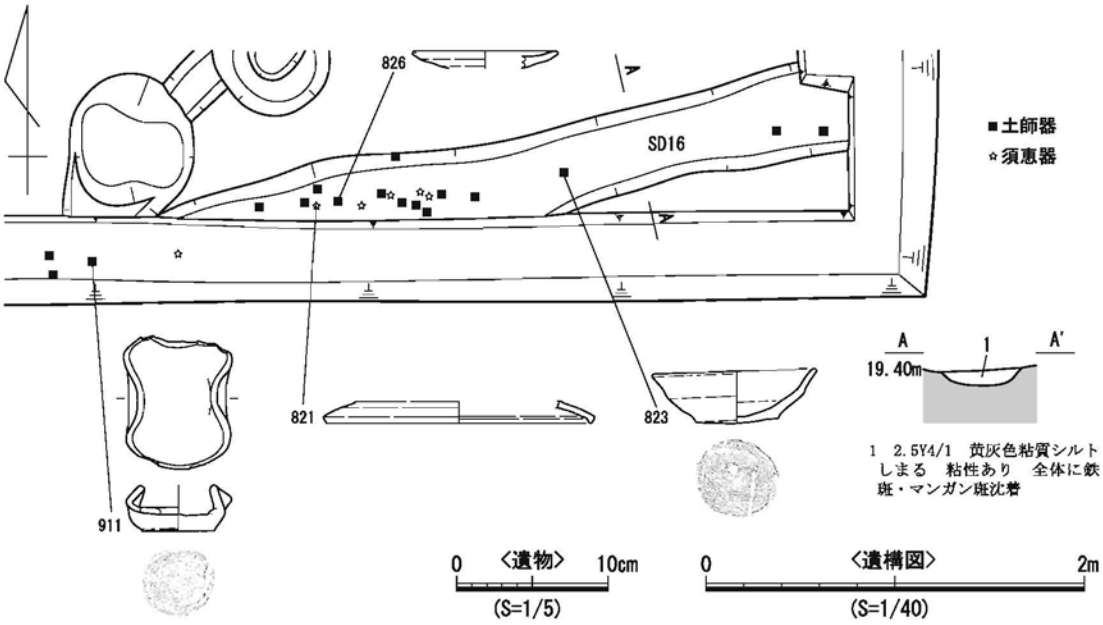
遺物出土状況　遺構の底面から、完形のロクロ土師器の碗（823）が出土した他、多数のロクロ土師器片が出土している。また、排水溝掘削の際出土したロクロ土師器の耳皿（911）もこの遺構から出土した可能性が高く（第 213 図）、本遺構に意図的に廃棄された可能性が高い。なお、遺物包含層掘削の際出土したロクロ土師器（同図 908 ～ 910）も、本遺構の周辺から出土している。

出土遺物　須恵器、灰釉陶器、土師器が出土した。この内６点を図示した。

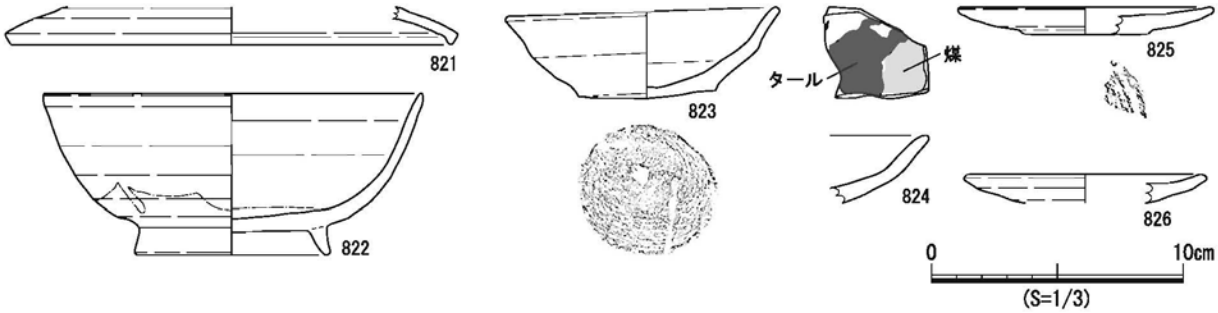
821 は須恵器の坏蓋Ｃ類である。口縁端部外面のみ自然釉が付着しており、重ね焼き痕と考えられる。822 は灰釉陶器の深碗である。底面は回転ヘラケズリで調整されている。口縁部から体部の内外面に灰釉が漬け掛けで施される。内面が摩耗している。

823 ～ 826 はロクロ土師器である。823 は碗であり、ほぼ完形で、柱状の底面に回転糸切り痕が残る。824 も碗と思われるが、内面に煤やタールが付着しているため、灯明皿として使用されたと思われる。825・826 は皿で、825 の底面には不鮮明な回転糸切り痕が残る。

所属時期　出土した灰釉陶器から、Ⅵｂ期に位置付けられる。



第213図　SD16遺構図



第214図　SD16出土遺物

（４）畝溝状遺構群（第 215・216 図）

検出状況　DN15 から D017 グリッドの SD ６西側で検出した。10 条の溝が平行して配置されており、いずれも長軸方位が N-15°　-W である。隣接する SD ６や SK43 とは重複しておらず、長軸方位も異なる。

堆積状況　Ⅲａ層に類似した土壌に、基盤層であるＶｂ層のブロックが混入する。全体的に鉄斑が沈着するが、マンガン斑が沈着しない特徴が認められた。なお、Ｄ７・Ｄ９・D10 の埋土を対象に花粉分析及びプラント・オパール分析を実施した。その結果、花粉分析ではコウヤマキ属などの樹木の他、イネ科の花粉が卓越し、プラント・オパール分析でもイネが 9,000 個 /g 前後検出されており、水田耕作土の可能性が高い上層のⅢ層の影響が強いと考えられる。また、ネザサ節型が多いことから、周辺が開けた日の当たる場所であったことが推定される（第５章第１節）。分析の目的であった米以外の栽培食物に関する知見は得ることができなかった。

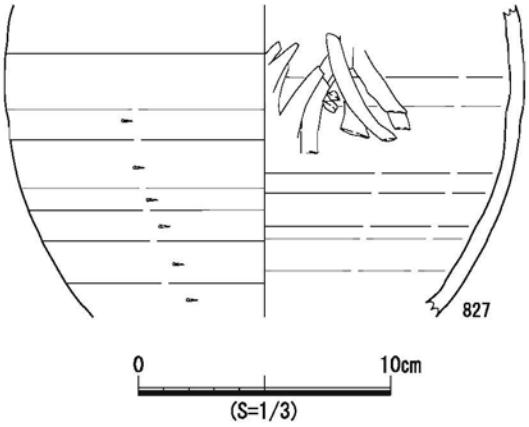
底面・掘方　底面は全体的に凹凸が多く、一定でない。耕作の痕跡という性格を反映していると考えられる。SD ３・SD ４は、上面が削平されて底面の凹凸のみが残った結果、連続する小穴と

して検出したと推定される。

遺物出土状況　埋土中から、土器の破片が出土している。図示した須恵器の壺・瓶類（827）は、SD ６から出土した破片と接合した。

出土遺物　縄文土器、須恵器、灰釉陶器、土師器が出土しているが、ほとんどが破片である。この内、１点を図示した。

827 は須恵器の壺・瓶類である。体部外面下半は回転ヘラケズリ調整が施され、内面には不定方向の深いヘラナデのような痕跡が残る。



第215図　SN１出土遺物

所属時期　出土した 827 は、SD ６から出土した破片と接合しており、埋没時期の近似性を示す。また、灰釉陶器片が出土していることから、Ⅵａ期以降の遺構と考えられる。水田化により当時の耕作土が削平されたと推定される。

３　柱穴状遺構（第 217 ～ 219 図）

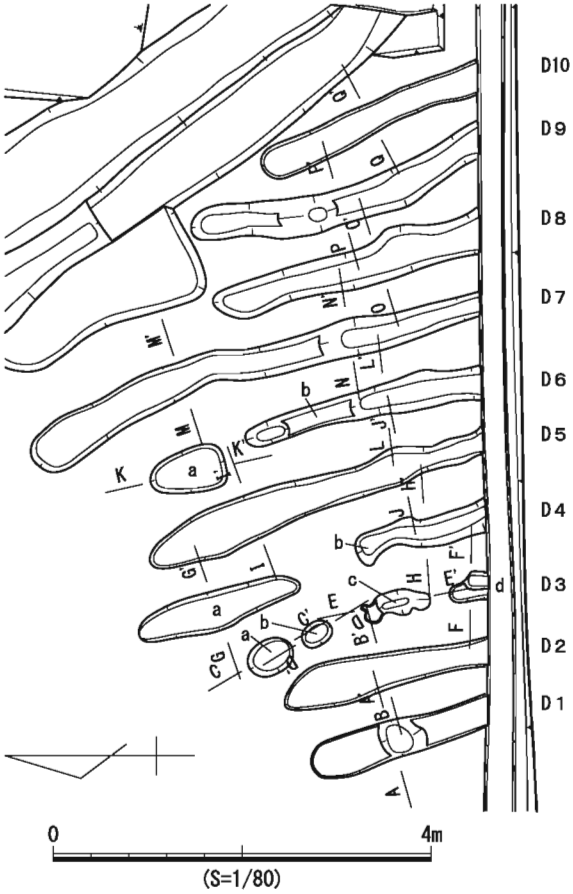
今回の調査で検出した土坑の内、柱が立てられていた可能性がある遺構を柱穴状遺構として抽出した（第４章第２節）。これらの遺構が掘立柱建物や柵を構成する可能性について、竪穴建物の底面から検出した遺構を含めて検討したが、等間隔や平行な配置を確認できなかった。

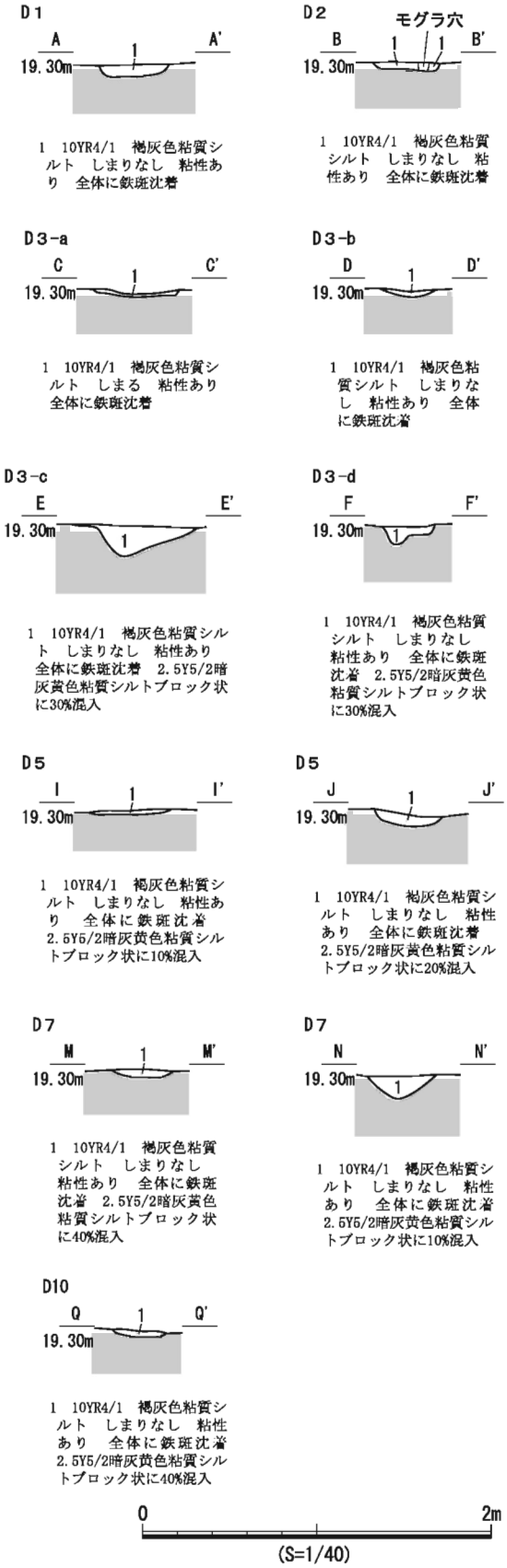
検出状況　DM20 から EN １グリッドで３基（SP １～３）、EN ６・７グリッドで６基（SP ４～９）、EN ９グリッドで１基(SP10)を検出した。平面形が円形や楕円形であるものが多いが、隅丸方形(SP ４・５）や不定形（SP ３・９）のものもある。

SP １は単独で、周囲に同様な遺構は認められない。SP ２と SP ３は約２ｍの間隔で近接しているが、この方位で他に並ぶ遺構は確認できなかった。また、SP ３の南側に約１ｍの間隔で同規模の土坑が２基（SK48・SK50）並んでおり、東側にこの並びに直交する方位で土坑列（SK51 ～ 56）が存在するが、その関係は不明である。SP ４～８は SI10 と SI15 の間にある空閑地に集まっており、周囲に同規模の土坑もみられるが、配置に規則性は認められない。SP ９は SI14 と重複しており、これより新しい。やや離れた位置で検出した SP10 も、周囲に同様な遺構は確認できなかった。

堆積・掘方　掘方では、柱当たりの部分が一段深くなるもの（SP ２・SP ３・SP ５・SP ６・SP ８・SP ９）とならないもの（SP １・SP ４・SP ７・SP10）に分けられる。SP ４・SP ６・SP ８・SP ９では、深くなった部分の周囲にⅥ層に由来する礫群が集中しており、柱を埋め戻す際にⅥ層の礫を利用した可能性がある。

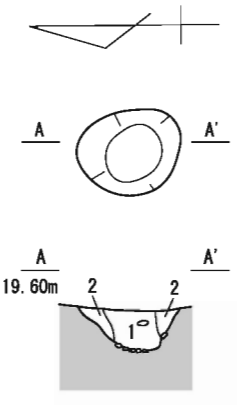
土層堆積では、柱痕跡の上面に別の堆積があるもの（SP ４・SP ７～ 10）と無いもの（SP １～３・SP ５）に分けられる。無いものについては廃絶時まで柱が残されていたと考えられるが、あるものについては、廃絶後の僅かな窪みに落ち込んだ堆積や柱を抜き取る際の再掘削が想定される。しかし、再掘削すれば掘方の形状が変化するはずであり、その可能性を指摘できるのは SP ９のみである。柱痕跡が埋土上面まで達しない原因としては、柱痕跡が断面観察した位置





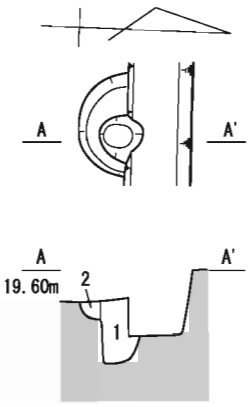
第216図　SN１遺構図

SP１



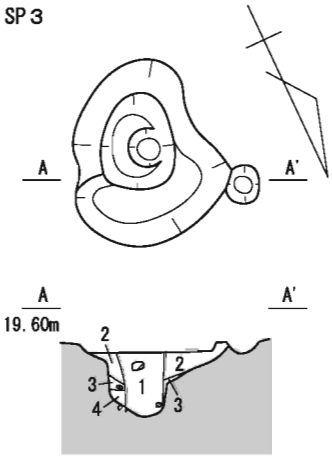
1　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑沈着　炭を少量含む　5Y5/1灰色粘質シルト(全体に濃く鉄斑沈着)をブロック状に10%含む
2　5Y5/1　灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に濃く鉄斑沈着　マンガン斑沈着　径1～3cmの円礫を10%含む　炭を少量含む

SP２



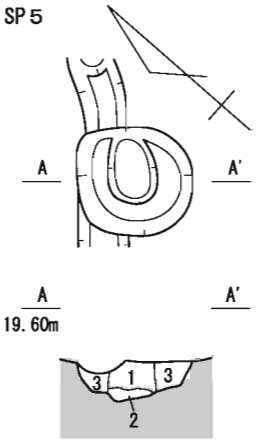
1　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑沈着
2　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑沈着

SP３



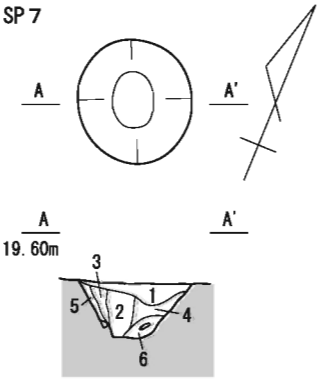
1　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑沈着　径4～6cmの円礫3%含む
2　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色土　しまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑沈着　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト（全体に鉄斑沈着）をブロック状に20%含む
3　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に濃く鉄斑沈着　マンガン斑沈着
4　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着

SP５



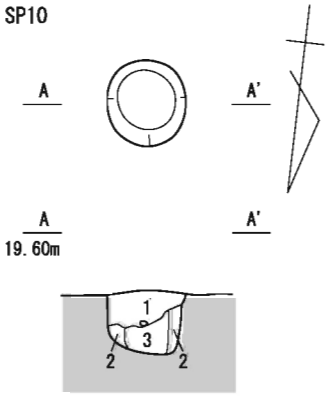
1　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる
2　10YR3/1　黒褐色粘質シルト　ややしまる
3　10YR2/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　径3cm以下の亜円礫を少し含む

SP７



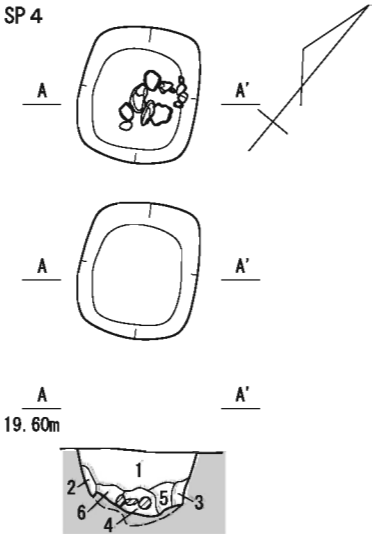
1　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に濃く鉄斑沈着　マンガン斑沈着
2　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に濃く鉄斑沈着
3　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に濃く鉄斑沈着
4　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に濃く鉄斑沈着　径0.5～3cmの円礫7%含む
5　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に濃く鉄斑沈着　径0.2～0.3cmの円礫2%含む
6　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に濃く鉄斑沈着　径1～5cmの円礫30%含む

SP10



1　10YR4/1　褐灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑少量沈着　径3cmの円礫を2%含む
2　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまりなし　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑沈着　2.5Y3/2黒褐色粘質シルトをブロック状に30%含む
3　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　しまりなし　粘性あり　鉄斑しみ状に20%沈着

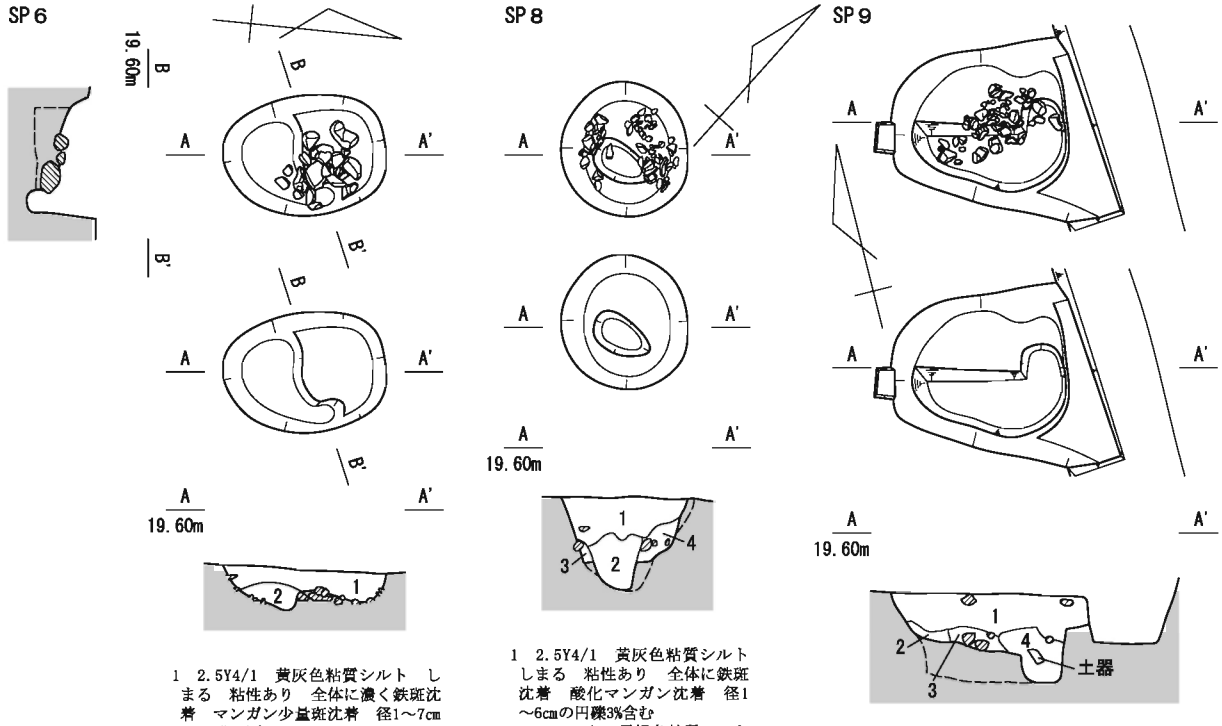
SP４



1　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑沈着　径1～3cmの円礫5%含む
2　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に濃く鉄斑沈着
3　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着
4　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性強い　鉄斑しみ状に15%沈着　径5～9cmの円礫50%含む
5　10YR4/1　褐灰色粘質シルト　しまる　全体に鉄斑沈着　濃くマンガン斑沈着
6　10YR4/1　褐灰色粘質シルト　しまる　全体に鉄斑沈着　濃くマンガン斑沈着

0　2m
(S=1/40)

第217図　柱穴状遺構遺構図①

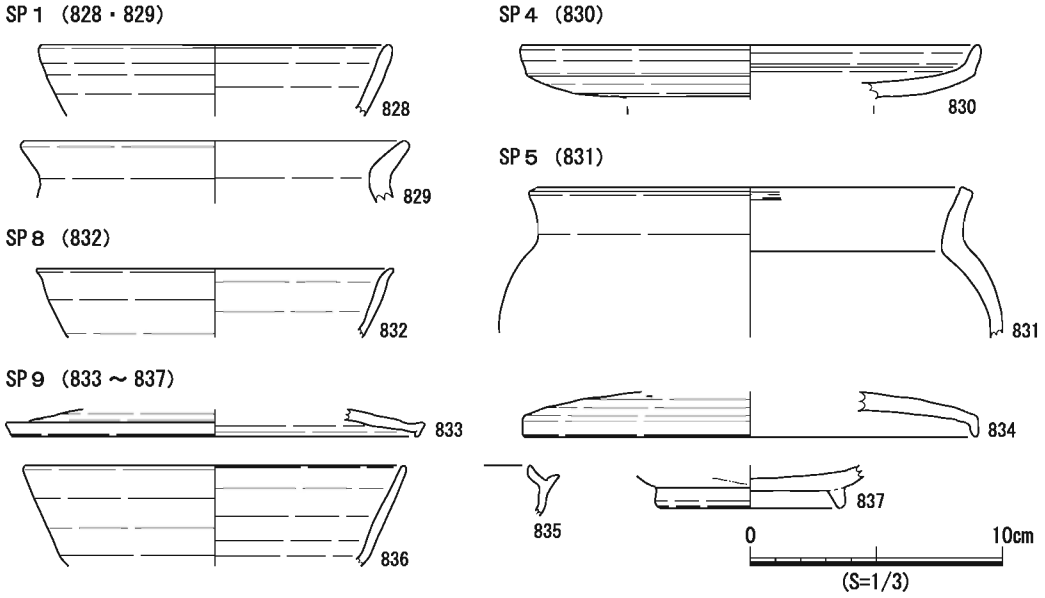


1　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に濃く鉄斑沈着　マンガン少量斑沈着　径1～7cmの円礫2%含む
2　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に濃く鉄斑沈着　径0.5～3cmの円礫7%含む

1　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　酸化マンガン沈着　径1～6cmの円礫3%含む
2　2.5YR3/1　黒褐色粘質シルト　しまりなし　粘性強い　しみ状に20%鉄斑沈着
3　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト　しまりなし　粘性あり　全体に鉄斑沈着　径0.2～0.3cmの円礫3%含む
4　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　全体に鉄斑沈着　径3～7cmの円礫40%含む

1　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　濃くマンガン斑沈着　径1～7cmの円礫を3%含む
2　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に濃く鉄斑沈着　濃く酸化マンガン沈着
3　10YR3/1　黒褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に濃く酸化マンガン沈着　径2～6cmの円礫を50%含む
4　10YR3/1　黒褐色粘質シルト　しまりなし　粘性強い　しみ状に鉄斑15%沈着

第218図　柱穴状遺構遺構図②



第219図　柱穴状遺構出土遺物

に無い場合（SP ６）や、柱そのものが傾いてる場合も考えられるが、柱あたりの状態などから考えると柱は真っ直ぐ立っていた可能性が高い。そのため、掘方が掘削され柱が立てられたものの、次の段階に移る前に柱が抜かれ、廃絶した事が想定される。このような堆積をもつ柱穴状遺構はEN ６・７グリッドに集中しており、同規模な土坑を含めて規則的な配置がみられない状況は、掘立柱建物（柵）が実際に建てられなかったことを示唆しているのかもしれない。

遺物出土状況　SP ３とSP ７を除いて土器片は出土したが、特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物　SP ２・SP ６・SP ９からは須恵器、灰釉陶器、土師器、その他は須恵器と土師器が出土した。この内、10点を図示した。

828は須恵器の坏身Ｃ類と思われる。829は土師器の甕Ｂ類であるが、破片であるためかハケ目が確認できない。830は須恵器の盤であり、底面に高台の痕跡が残る。831は土師器の甕である。小型で口縁部外面に炭化物が付着する。口縁端部の面取りや内面のハケ目からＡ類の１種と思われる。832は須恵器の碗である。口縁端部が僅かに外反する。833・834は須恵器の坏蓋Ｃ類、835は坏身Ａ類、836が坏身Ｃ類である。837は灰釉陶器の碗であり、底部内面が摩耗している。

所属時期　遺構の重複から、SP ９はSI14より新しいため、Ⅵｂ期以降に位置付けられる。同様なSP ４・６・８も同時期の可能性がある。その他の遺構も、Ｖｂ期以降と考えられる。

４　土坑

土坑とした遺構の内、配置に規則性があるものを抽出し「土坑列」として記載した。

（１）土坑列１～３（SK13～34、第220～222図）

検出状況　DM19からDO14グリッドで検出した。当該遺構周辺は、Ⅲ層の掘削後にⅣ層上面で遺構検出を実施したが、不定形でシミ状の落ち込みを多数確認したことから、半割前にその範囲を段掘りし、明確な掘方の有無を判定する作業から行った。その結果、掘り込みを確認できたものを遺構として取り扱った。

遺構としたものの内、一定の間隔で一列に配置がみられる土坑を「土坑列」として抽出した。土坑列１は最も西に位置し（DM10～DO11）、軸の方位は北-26°-Eである。土坑列２は土坑列１から東へ約12ｍに位置し、軸の方位がほぼ南北軸に一致する。土坑列３は土坑列２の南端から派生するように北東に延びており、軸の方位はN-50°-Eである。それぞれの土坑の平面形は、土坑の並びの軸に直交する方位に長軸がある楕円形若しくは不定形で、土坑列１が５基（SK13～SK17）、土坑列２が９基（SK18～SK26）、土坑列３が８基（SK27～SK34）で構成される。

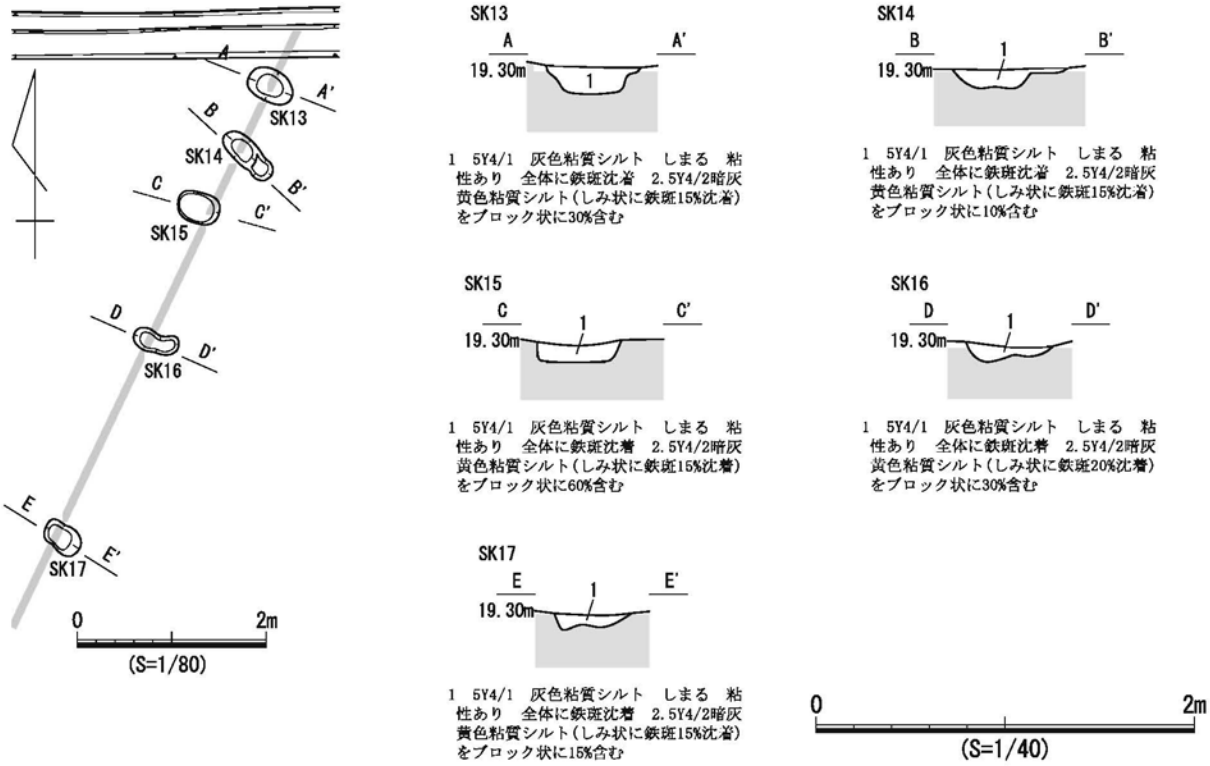
堆積状況　いずれの土坑もⅢｃ層とほぼ同質の埋土に、Ⅳ層がブロック状に混入する。マンガン斑の沈着はみられない。

掘方　いずれも非常に浅く、底面形状も不定なものが多い。意図的に掘り込んだ遺構ではなく、上層からの踏み込みなど、水田耕作に関する遺構と推定される。

遺物出土状況　SK19の埋土から土師器が１点出土した以外に、遺物は出土しなかった。

出土遺物　図示可能な遺物は出土しなかった。

所属時期　Ⅲ層が耕作土であった時期に、何らかの作業に伴ってⅣ層に痕跡が残されたと推定される。Ⅲ層にはⅦ期までの遺物が含まれるが、古代以前にも水田が存在した可能性があるため、



第220図　土坑列１遺構図

詳細な所属時期は不明である。

（２）土坑列４（SK51 ～ 56、223・224 図）

検出状況　EM２からEM３グリッドで検出した。N-70°-Eで、５基の土坑が一列に配置されている。この方位は、隣接する竪穴建物群の長軸とほぼ直交する。平面形はいずれも円形や楕円形である。検出当初は掘立柱建物の柱穴である可能性を考えたが、間隔が 1.0 ～ 1.1 ｍと短く、柱痕跡が確認できないことから、性格不明の配置をもつ土坑群とした。５基の内、西から３基（SK51 ～ 53）はSI ４の北壁に沿うように重複しており、これより新しい。SK54・SK55 は一部発掘区の北壁にかかっているが、配置の間隔等から同様な遺構と判断した。また発掘区壁面の精査でも土層の落ち込みを確認しており（SK56）、位置的に、SK54 の東側に連なる土坑掘方の南端と考えられる。

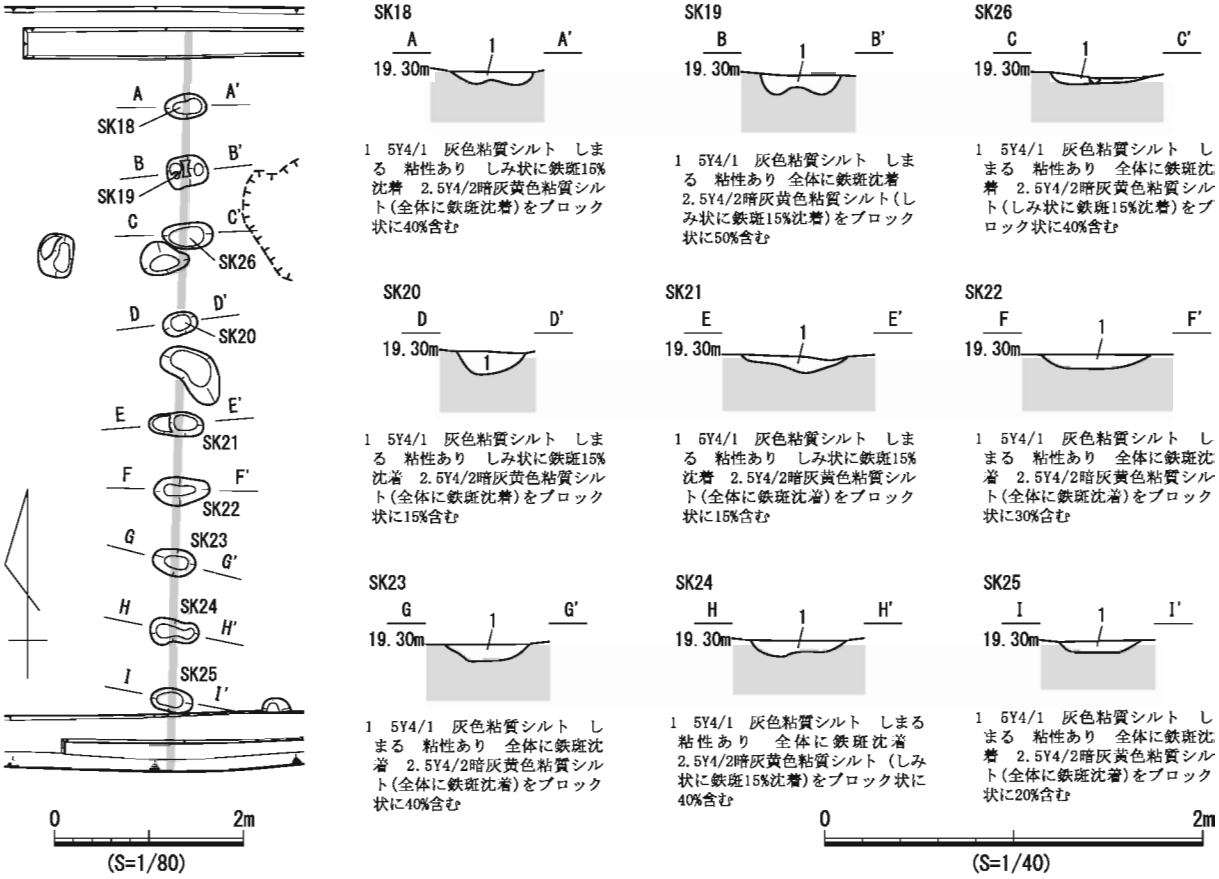
堆積状況　SK52 ～ SK55 まで共通して、上層にブロックや礫が混じる黄灰色粘質シルトがみられるため、人為的に埋め戻されたと考えられる。SK53 は単層であるが、それ以外は下層の一部に黒色の粘質が強い堆積が認められた。SK56 は上層の一部を検出したと考えられる。

掘方　SK52・SK54・SK55 は、底面の高さがほぼ一致し、断面形が逆台形や方形である明瞭な掘方をもつ。SK53 は他の土坑より深く、埋土が単層である点を含めて他の土坑と異なる。

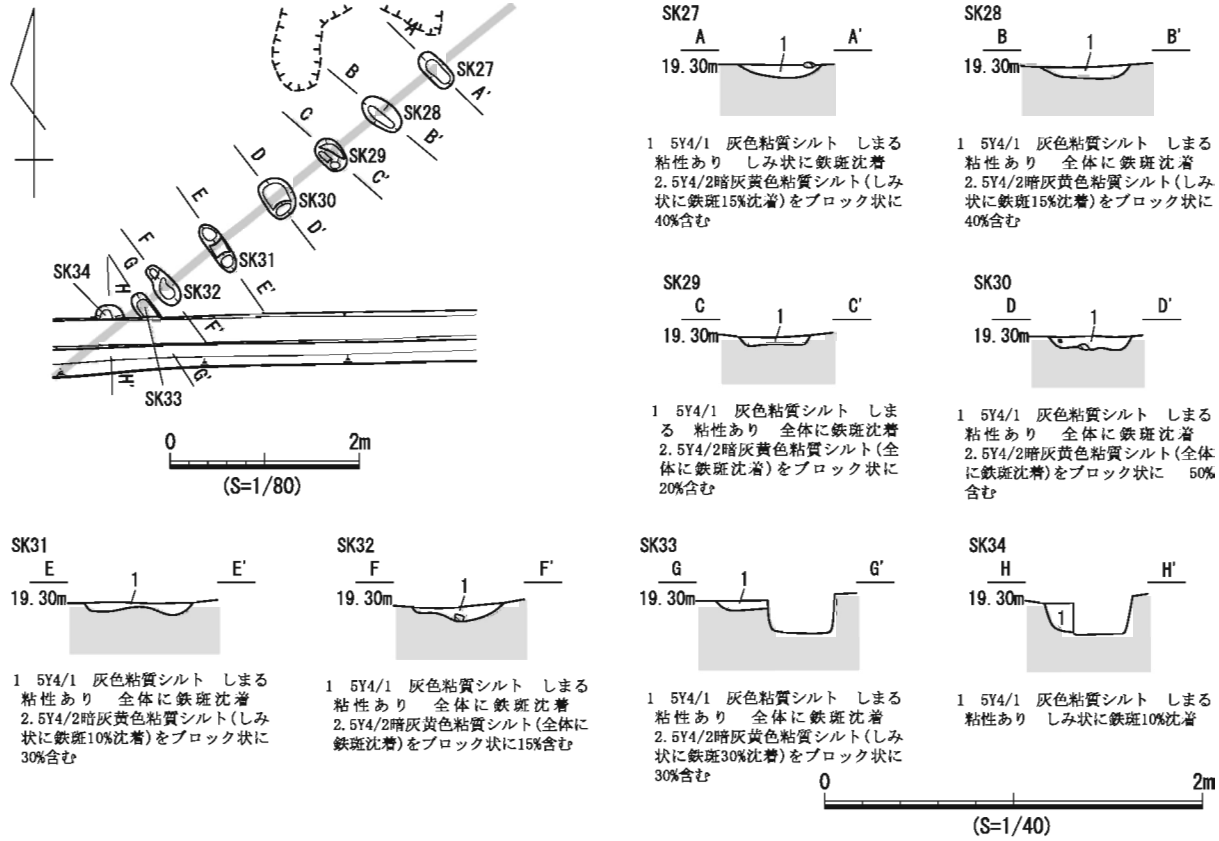
遺物出土状況　SK51 ～ SK53・SK55 から須恵器と土師器が出土している。SK51 は、比較的出土量は多いが、完形になる個体は認められない。１層からの出土遺物が多い（第 223 図）ことから、人為的に埋め戻した埋土に、大部分の遺物が含まれていたと考えられる。

出土遺物　本遺構群から出土した遺物の内、６点を図示した。

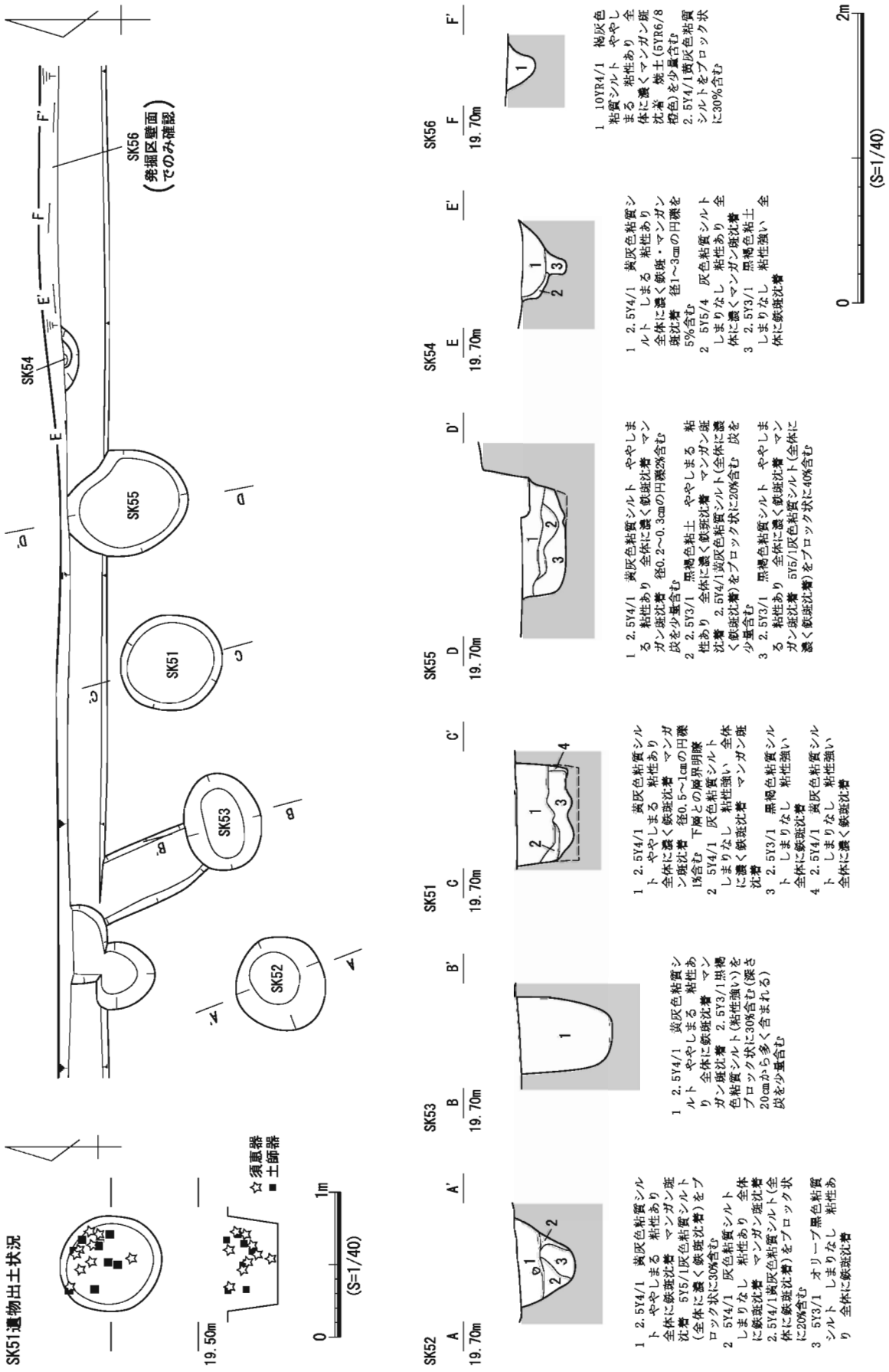
図示した遺物はいずれも須恵器である。838 は坏蓋Ｃ類である。839・840 は坏身Ｃ類である。



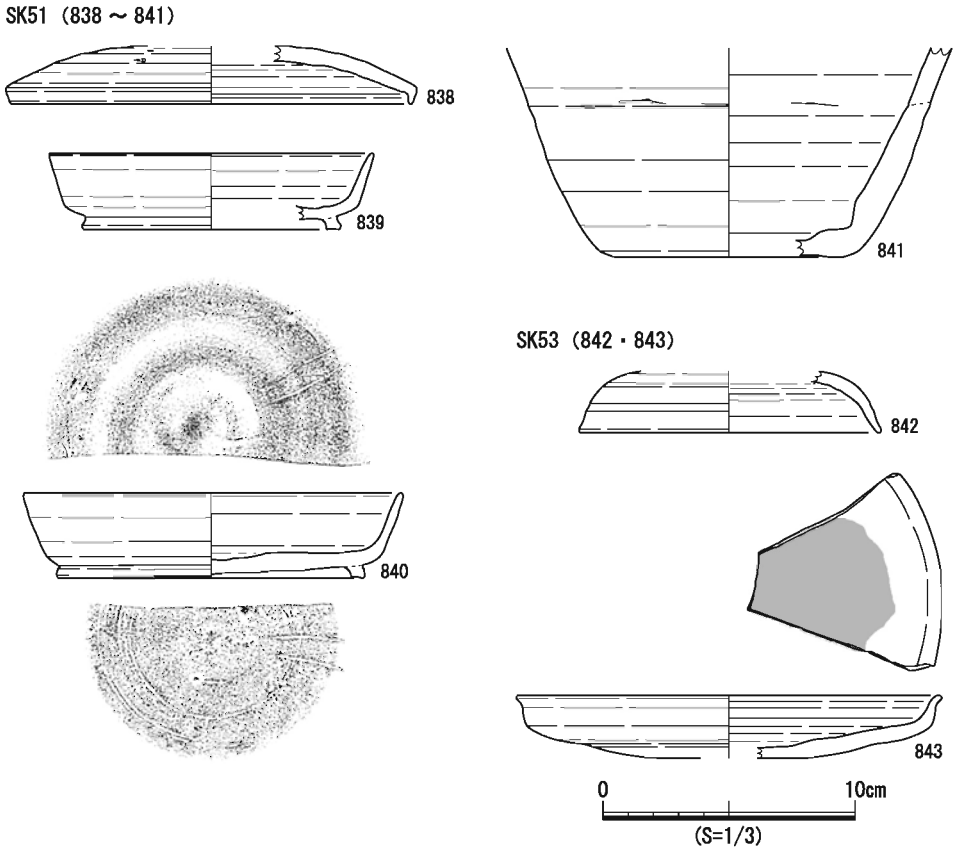
第221図　土坑列２遺構図



第222図　土坑列３遺構図



第223図　土坑列４遺構図



第224図　土坑列１～４出土遺物

840 は底面の回転ヘラ切り痕がナデ消されている。底部内外面のほぼ同じ位置に２条のヘラ記号が刻まれている。841 は壺類の底部である。外面はヘラケズリ調整され、内外面に接合痕が残る。842 は坏蓋Ａ類である。体部と口縁部の境に浅い凹線が施され、口縁端部はやや開き気味になる。体部の外面が摩耗している。843 は高台のないタイプの盤である。内面が摩耗し墨痕が残ることから、転用硯と考えられる。回転ヘラケズリ調整された底面も摩耗している。

所属時期　遺構の重複から、Ⅳｂ期の SI ４より新しい。灰釉陶器が混入しないことや出土した須恵器の年代から、Ｖｂ期には埋没したと考えられる。

（３）その他の土坑

今回の調査で検出した土坑の内、特徴的なものについて以下に述べる。なお、出土遺物については、次項にまとめて記載した。

SK12（第 225 図）　DO ９グリッドで検出した。周辺のⅣ層上面から検出した土坑はほとんどが土坑列１～３のように不定形で浅かったが、本遺構については明瞭な掘方がみられた。また、埋土もⅢ層とは明確に異なる黒褐色粘質シルトが堆積していた。性格は不明であるが、意図的に掘削された遺構と考えられる。出土遺物や遺構の重複がないため、所属時期は不明である。

SK42（第 225 図）　DN15 グリッドで検出した。SK12 と同様に、周囲の土坑と異なる明確な掘方がみられた。埋土についても同様である。出土遺物や遺構の重複がないため、所属時期は不明である。

SK44（第225図）　EM１からEN１グリッドで検出した。SI １と重複し、これより古い。平面形はほぼ円形である。断面形は底面がやや狭い逆三角形に近い形状である。遺物は、土師器の破片が出土している。SI １より古いため、VI a 期以前の遺構と考えられる。

SK48（第225図）　EM１グリッドで検出した。竪穴建物がない空閑地に、SP ３・SK50などとともに設置されている。この３基の並びは、土坑列４と直交するような方位にみえるが、その関係は不明である。平面形は東西に長い楕円形で、断面形は２段になっている。２段の掘り込みに対応する土層がみられないことから意図的にこのような形状にされたと思われるが、その理由は不明である。なお、埋土にはブロックやVI層に由来する円礫が多く混じり、人為的に埋められたと考えられる。遺物は、土師器と須恵器の破片が出土している。時期判別可能な遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

SK49・50（第225・230図）　EN１からEN２グリッドで検出した。両遺構は重複しており、SK49の方が新しい。平面形はSK49が円形、SK50が方形に近い形状である。SK50は断面形も方形に近く、特に南側が底面に対し壁面が垂直に近い形状をとる。埋土にはブロックやVI層に由来すると思われる円礫が多く混じるため、人為的に埋められたと考えられるが、土層の状況から、複数の遺構であった可能性がある。遺物はSK49から灰釉陶器（845）、SK50から須恵器と土師器の破片が出土している。SH49は灰釉陶器が出土したことから、VI a 期以降の遺構と考えられる。

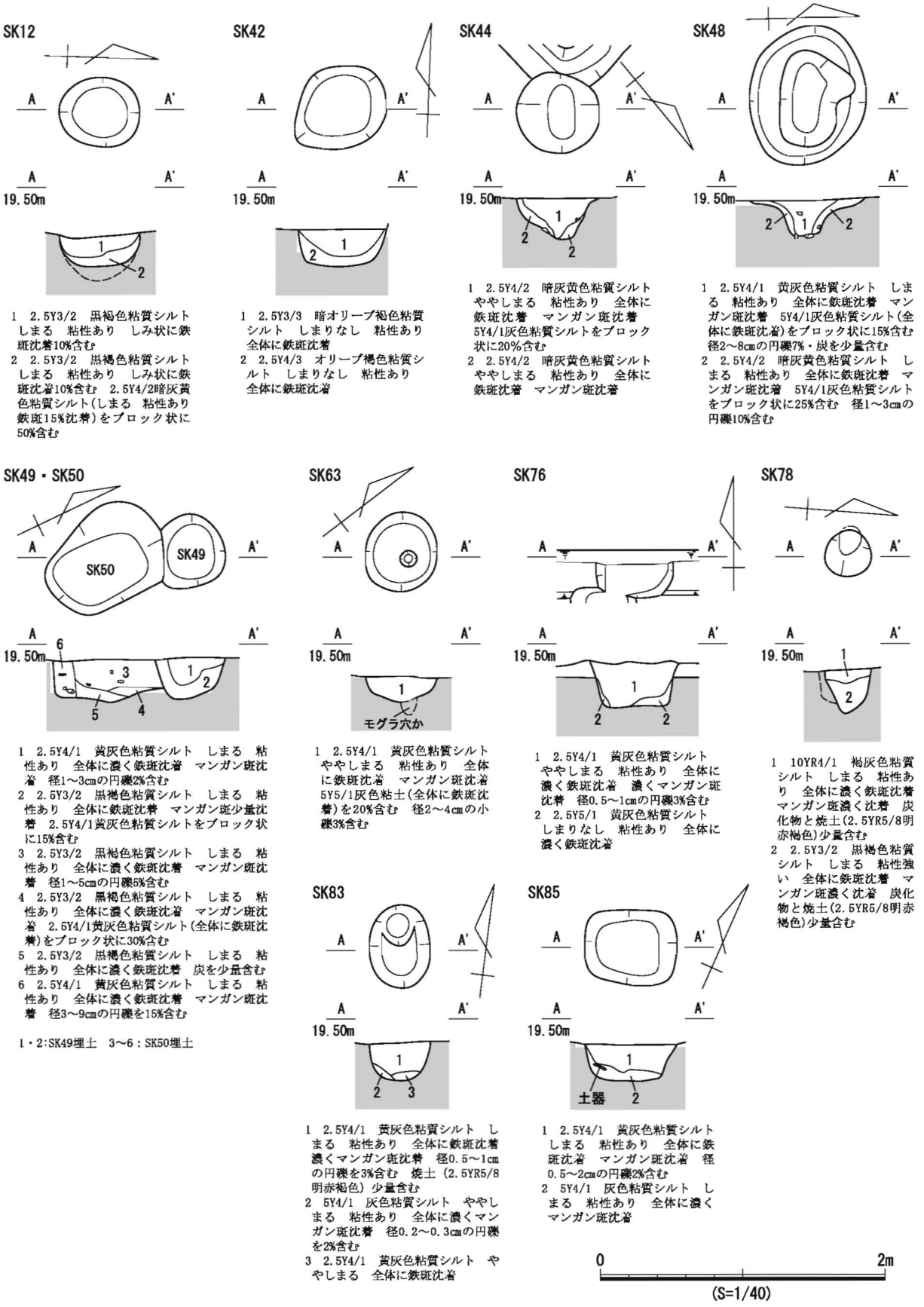
SK63（第225・230図）　EN２グリッドで検出した。西側にSI ３、北側にSI ４が隣接しているが重複しない。平面形は円形、断面形は半円形である。埋土は単層であるが、比較的多くの遺物が含まれる。遺物は大半が土師器の破片であり、わずかに須恵器（846）と灰釉陶器の破片が混じる。詳細な時期は不明であるが、灰釉陶器が混入することから、VI a 期以降の遺構と考えられる。

SK76（第225図）　EM２グリッドの排水溝底面で検出した。遺構の北半が発掘区外に延びる。SK58と重複し、これより古い。全容は不明であるが、検出した範囲の平面形は方形である。また、断面形も方形に近く、底面に対して壁面がほぼ垂直に掘り込まれる。土坑列４の北側に位置しているが、その関係は不明である。出土遺物がないため、所属時期は不明である。

SK78（第225図）　EN３グリッドで検出した。平面形は円形で、断面は三角形に近い形状をとる。埋土中に焼土や炭化物が混入しており、土師器や灰釉陶器の破片が含まれる。以上の状況から、掘方が削平された竪穴建物のカマドに関連する遺構である可能性がある。詳細な時期は不明であるが、灰釉陶器が混入することから、VI a 期以降の遺構と考えられる。

SK83（第225・230図）　EN５グリッドで検出した。西側にSI ９が隣接するが、重複しない。平面形は南北が長い楕円形で、断面形は半円形である。遺構底面の北部が若干深くなっているが、詳細は不明である。埋土中に焼土や炭化物が混入しており、須恵器（848等）が出土している。SK78と同様に、掘方が削平された竪穴建物の一部である可能性がある。所属時期は、灰釉陶器が混入しないことや848の時期から、Ｖｂ期に属すると考えられる。

SK85（第225・230図）　EN５グリッドで検出した。東側でSI10と重複し、これより新しい。平面形は方形で、断面形も方形に近い。長軸方位がSI10とほぼ直交しており、この点はSP ４のような方形の遺構と共通している。埋土中から須恵器(849･850等)や土師器の破片が出土している。出土した須恵器から、Ｖｂ期に属する遺構と考えられる。



SK12

1　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　しみ状に鉄斑沈着10%含む
2　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　しみ状に鉄斑沈着10%含む　2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト(しまる　粘性あり　鉄斑15%沈着)をブロック状に50%含む

SK42

1　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色粘質シルト　しまりなし　粘性あり　全体に鉄斑沈着
2　2.5Y4/3　オリーブ褐色粘質シルト　しまりなし　粘性あり　全体に鉄斑沈着

SK44

1　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑沈着　5Y4/1灰色粘質シルトをブロック状に20%含む
2　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑沈着

SK48

1　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑沈着　5Y4/1灰色粘質シルト(全体に鉄斑沈着)をブロック状に15%含む　径2～8cmの円礫7%・炭を少量含む
2　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑沈着　5Y4/1灰色粘質シルトをブロック状に25%含む　径1～3cmの円礫10%含む

SK49・SK50

1　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に濃く鉄斑沈着　マンガン斑沈着　径1～3cmの円礫2%含む
2　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑少量沈着　2.5Y4/1黄灰色粘質シルトをブロック状に15%含む
3　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に濃く鉄斑沈着　マンガン斑沈着　径1～5cmの円礫5%含む
4　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に濃く鉄斑沈着　マンガン斑沈着　2.5Y4/1黄灰色粘質シルト(全体に鉄斑沈着)をブロック状に30%含む
5　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に濃く鉄斑沈着　炭を少量含む
6　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に濃く鉄斑沈着　マンガン斑沈着　径3～9cmの円礫を15%含む

1・2:SK49埋土　3～6：SK50埋土

SK63

1　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑沈着　5Y5/1灰色粘土(全体に鉄斑沈着)を20%含む　径2～4cmの小礫3%含む

SK76

1　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に濃く鉄斑沈着　濃くマンガン斑沈着　径0.5～1cmの円礫3%含む
2　2.5Y5/1　黄灰色粘質シルト　しまりなし　粘性あり　全体に濃く鉄斑沈着

SK78

1　10YR4/1　褐灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に濃く鉄斑沈着　マンガン斑濃く沈着　炭化物と焼土(2.5YR5/8明赤褐色)少量含む
2　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　しまる　粘性強い　全体に鉄斑沈着　マンガン斑濃く沈着　炭化物と焼土(2.5YR5/8明赤褐色)少量含む

SK83

1　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　濃くマンガン斑沈着　径0.5～1cmの円礫を3%含む　焼土（2.5YR5/8明赤褐色）少量含む
2　5Y4/1　灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に濃くマンガン斑沈着　径0.2～0.3cmの円礫を2%含む
3　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　ややしまる　全体に鉄斑沈着

SK85

1　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑沈着　径0.5～2cmの円礫2%含む
2　5Y4/1　灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に濃くマンガン斑沈着

第225図　その他の土坑遺構図①

SK86（第226・230図）　EN７からEO７グリッドで検出した。SD15と重複し、これより新しい。平面形は円形で、南側にやや浅い掘り込みが付属するような形状をとるが、この浅い部分はSD15の延長と思われる。断面形は不定な形状で、底面も平坦にならない。本遺構の周辺に、方形や円形である柱穴状遺構や土坑が複数存在するが、それぞれの関係は不明である。埋土中から須恵器（851等）・土師器・灰釉陶器（852）が比較的多く出土している。散布状況を比較すると、土師器や灰釉陶器は表層に近い１層から出土しているのに対し、須恵器は底面に近い２層からも出土している。そのため、１層と２層が異なる経緯で埋没した可能性が考えられる。なお、851は、出土遺物の中で最も深い位置から出土している。所属時期は、灰釉陶器が混入することからⅥａ期以降に埋没したと考えられる。

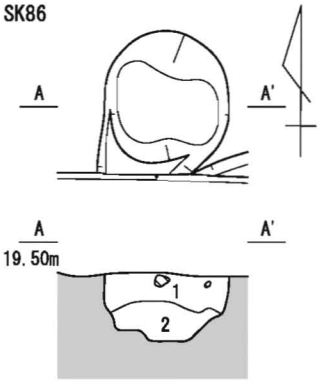
SK89（第226図）　EN７グリッドで検出した。SI15・18の南側に位置し、SP５・SK92とも隣接するが、どの遺構とも重複していない。平面形は方形で、断面形は逆台形の形状をとる。長軸方位は北から西に傾いており、他の方形土坑と共通する。埋土の上層（１層）と下層（２～４層）で大きく堆積が異なっており、特に２層は黒褐色粘質シルトはかなり粘質が強く、礫が混入しない特徴がある。掘方壁面の崩落（３・４層）→滞水等による堆積（２層）→人為的埋没（１層）の過程が想定されるが、土坑の性格は不明である。遺物は、須恵器の破片が出土している。遺構の重複や時期判別可能な出土遺物がないため、所属時期は不明である。

SK109・110（第226・230図）　EN４グリッドで検出した。両遺構は重複しており、SK109の方が新しい。また、両遺構の検出位置がSI８の埋土上面であり、SI８より新しい遺構である。掘方には複数の段があり、複雑な形状である。埋土の状況から考えると、SK109が４回、SK110が２回の掘削・再掘削を経ていると考えられる。このような状況は、後述するSK113・SK121・SK122でも確認できる。遺物は、SK109から土師器・須恵器（854等）、灰釉陶器の破片が出土している。所属時期は、埋土に灰釉陶器が混入し、SI８より新しいことから、Ⅵａ期以降と考えられる。

SK112（第226・230図）　EM４グリッドで検出した。SI６・SI７の埋土上面で検出しており、これらの遺構より新しい。平面では確認できなかったが、土層の状況から２つの土坑が重なっている可能性が高い。遺物のほとんどは上層（１～４層）中に含まれており、下層（５・６層）からの出土は少ない。土師器（856等）、須恵器（855等）の破片が出土しているが、856は１層と６層から出土したものが接合しており、上層の再掘削によって埋土に混入したと考えられる。所属時期はSI６・SI７より新しいためⅥａ期以降に位置付けられる。

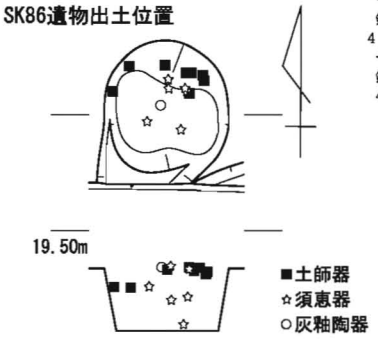
SK114・SK116（第226・230図）　EN６グリッドで検出した。ともにSI12と重複しており、SK114はSI12より新しく、SK116はSI12より古い。したがって、SK116→SI12→SK114の順で構築されたことになる。発掘区南壁にかかっているため全容は不明であるが、検出した範囲ではともに方形に近い平面形である。SK114は底面南部が一段低くなっており、この部分のみSK116よりも深くなる。SK114の埋土中には炭化物や焼土が目立つが、元々はSI12の埋土中に含まれていたものと思われる。遺物は、ともに須恵器（862～864等）や土師器（865）が出土している。所属時期は、SK116がSI12よりも古いことや出土遺物からⅤｂ期に位置付けられる。SK114は、埋土の状況から出土遺物がSI12からの混入である可能性があり、遺構の重複から所属時期が周囲の遺構よりは降ると考えられる。

SK86

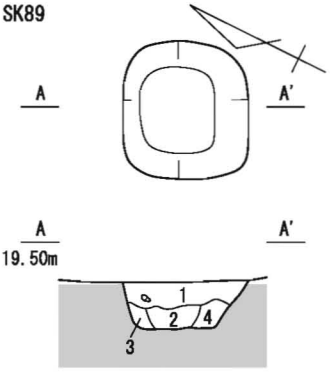


1　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　濃くマンガン斑沈着　下層との層界明瞭　径1～5cmの円礫を10%含む
2　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　鉄斑しみ状に15%沈着

SK86遺物出土位置

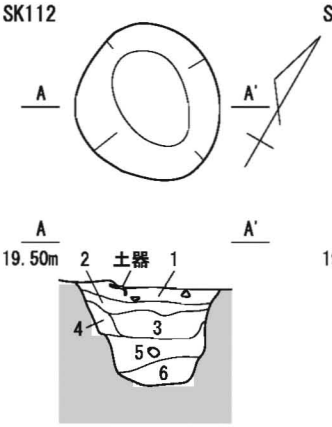


SK89



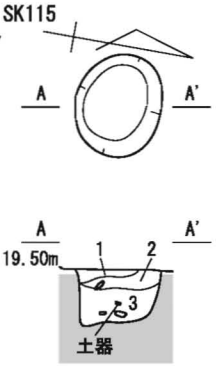
1　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　濃くマンガン斑沈着　径2～3cmの円礫を3%含む
2　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性強い　鉄斑しみ状に20%沈着
3　10YR4/1　褐灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に濃く鉄斑沈着　マンガン斑沈着
4　10YR4/1　褐灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に濃く鉄斑沈着　マンガン斑沈着　径1～4cmの円礫を10%含む

SK112



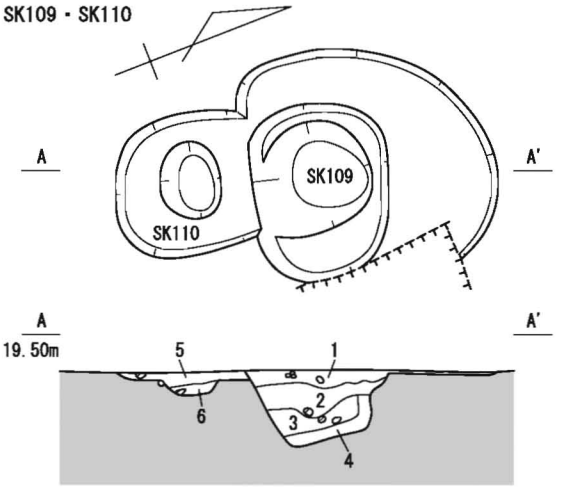
1　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　酸化マンガン沈着　径2～3cmの円礫を5%含む
2　10YR3/3　暗褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体にマンガン斑沈着　径1～4cmの円礫7%含む
3　10YR5/1　褐灰色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体にマンガン斑沈着
4　10YR3/3　暗褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に濃く鉄斑沈着　径1～4cmの円礫10%含む
5　2.5Y5/1　黄灰色砂質シルト　しまりなし　粘性あり　全体に鉄斑沈着　径1～7cmの円礫7%含む
6　5Y5/1　灰色砂質シルト　しまりなし　粘性あり　全体に鉄斑沈着

SK115



1　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑少量沈着
2　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑沈着
3　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑沈着

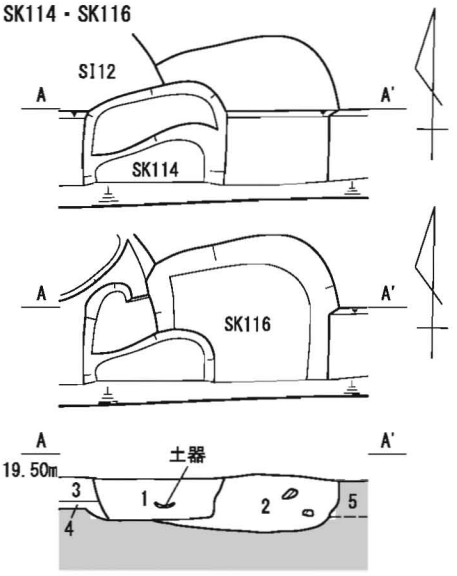
SK109・SK110



1　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　径5cm以下の亜円礫を含む
2　10YR2/3　黒褐色粘質シルト　ややしまる　径5cm以下の亜円礫を含む
3　2.5Y3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　径5cm以下の亜円礫を含む　炭化物が少し混じる
4　10YR3/3　暗褐色粘質シルト　ややしまる　径3cm以下の亜円礫を含む　粗砂が混じる
5　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑少量沈着　径1～4cmの円礫を10%含む
6　10YR3/1　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑沈着　径2～3cmの円礫を15%含む

1～4:SK109埋土　5・6：SK110埋土

SK114・SK116



1　10YR2/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　焼土粒・炭化物を多く含む　径2cm以下の円礫を少し含む
2　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　径5cm以下の亜円礫を少し含む
3　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　やや暗色　ややしまる　径3cm以下の円礫を少し含む　炭化物混入
4　10YR2/2　黒褐色粘質シルト　ややしまる　径5cm以下の亜円礫を含む　炭化物が少量混入　全体にマンガン斑沈着
5　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質シルト　しまる　Vb層

1:SK114埋土　2:SK116埋土　3・4：SI12埋土

0　2m
(S=1/40)

第226図　その他の土坑遺構図②

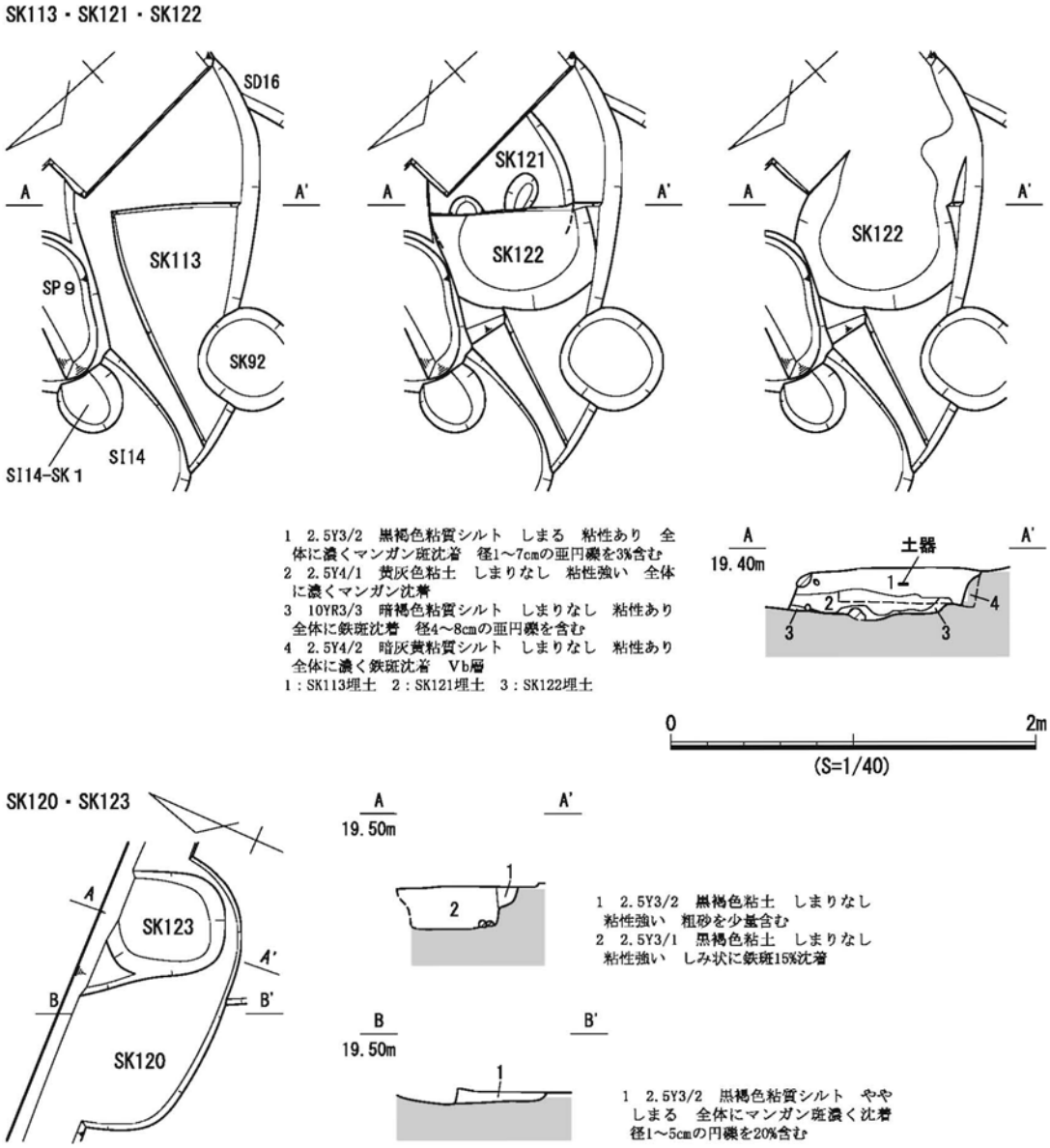
SK115（第 226 図）　EN ６グリッドで検出した。SI10 と SI15 の間にある空閑地に位置し、SP ６、SP ４、SK118 と直線的に並んでいるようにみえるが、平面形状や埋土などに共通点がなく、等間隔にならないことから、土坑列とはしなかった。平面形は円形で、断面形は方形に近い。周辺の SK86 や SK89 とは異なり、下層（３層）にＶｂ層に類似した埋土がみられる。遺物は須恵器の破片が１点のみ出土している。遺構の重複や時期を判別できる出土遺物がないため、所属時期は不明である。

SK113・SK121・SK122（第 227・230 図）　EN ７グリッドで検出した。複雑に重複する SI13 ～ 18 の竪穴建物群の南側に位置し、検出当初は竪穴建物であることを想定していた。掘削を進める過程で、複数の土坑が複雑に重複する遺構であることが判明した。遺構の北側で SI14 と重複しこれより新しく、南側の SD16 よりは古い。EN ７グリッドの発掘区東壁の土層では、さらに多くの遺構が重複する状況が観察され（第 227 図５～ 10 層）、当該箇所で集中して掘削が行われている。なお、各務原市広畑野口遺跡において、「廃棄土坑」とされる７世紀後半の遺構（SK24）が検出されており、複雑な堆積状況や掘方に共通点がみられる（岐阜県文化財保護センター 2010）。本遺構群からは須恵器（858 ～ 861 等）、土師器、灰釉陶器が比較的多く出土しているが、いずれも破片である。所属時期は、SI14 より新しいことからⅥｂ期以降と判断される。

SK120・SK123（第 227・230 図）　EM ７グリッドで検出した。SK120 は SI13 及び SK125 の完掘後にその底面から検出した遺構であり、これらより古い。また SK123 は、SK120 完掘後にその底面から検出した。SK120・SK123 ともに北部が発掘区外であるため全容は不明であるが、平面形は方形に近い形状と考えられる。SK120 は、上面を SI13 や SK125 によって削平されているためか非常に浅い。一方 SK123 は断面形が方形に近い形状をとり、本来は SK85 や SK89 のような方形土坑であったと考えられる。出土遺物は、SK120 から須恵器（866）が１点のみ出土している。所属時期は、遺構の重複からＶｂ期以前と考えられる。

SK128（第 228･230 図）　EN １から EO １グリッドで検出した。掘方の南側が発掘区外であるため、全容は不明である。掘方の北側で SI ２と重複し、これより新しい。SI ２との重複関係を誤認していたため、SI ２の掘削中に平面形を確認した。埋土は、しまりのない黒褐色シルトが堆積していた。なお、南北方向の断面で確認した褐灰色の粘質シルト（A-A’５層）は、発掘区南壁では確認できなかった。掘方の形状から竪穴建物である可能性を考慮して調査を起こったが、硬化した床面や整地土は確認できなかった。遺物は、須恵器、土師器が出土した。所属時期は、SI ２より新しいことから、Ｖｂ期以降に位置付けられる。

SK129（第 229・230 図）　EM ７から EN ７グリッドで検出した。掘方の北側が発掘区外であることや、多くの遺構と重複するため、全容は不明である。掘方の東側で SI14 と重複しこれより古い。SI13 と SI15 とも重複し、これより新しい。SI13･SI15 の掘削後に検出し、その後の土層確認によって SK129 の方が新しいことが判明したため、SI13・SI15 掘削後の掘方を図示している。埋土の上層の状況は不明であるが、当初検出できなかったことから、周囲の竪穴建物と類似した埋土であったと思われる。検出した面から下は、黒褐色粘質シルトが堆積していた。掘方の形状から竪穴建物である可能性を考慮して調査を起こったが、硬化した床面や整地土は確認できなかった。掘方底面はⅥ層に達し、礫が露出した。遺物は、須恵器、土師器が出土した。所属時期は、SI14 よ

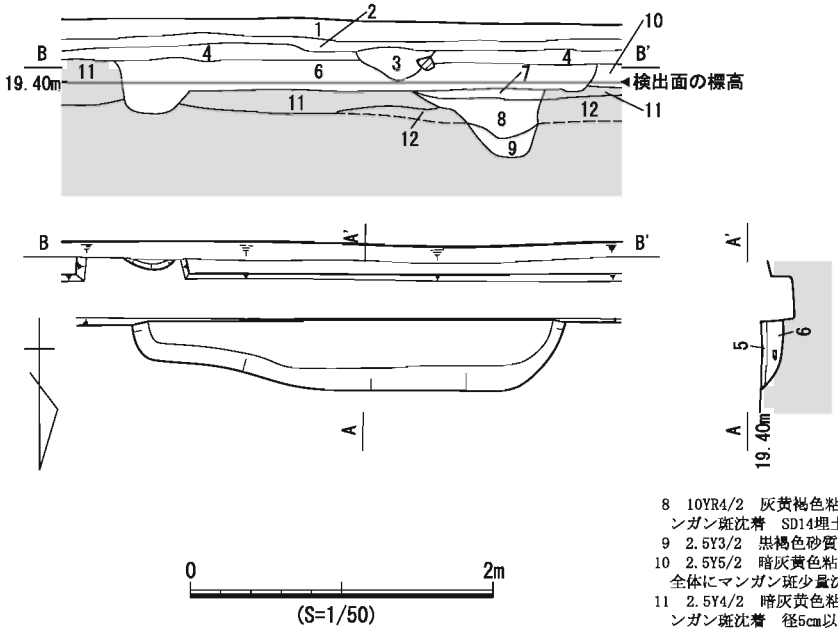


第227図　その他の土坑遺構図③

り新しいことから、Ⅵｂ期以前に位置付けられる。また、掘方西壁の方位が周辺の竪穴建物と長軸方位がほぼ同じであり、Ｖｂ期に属する可能性がある。

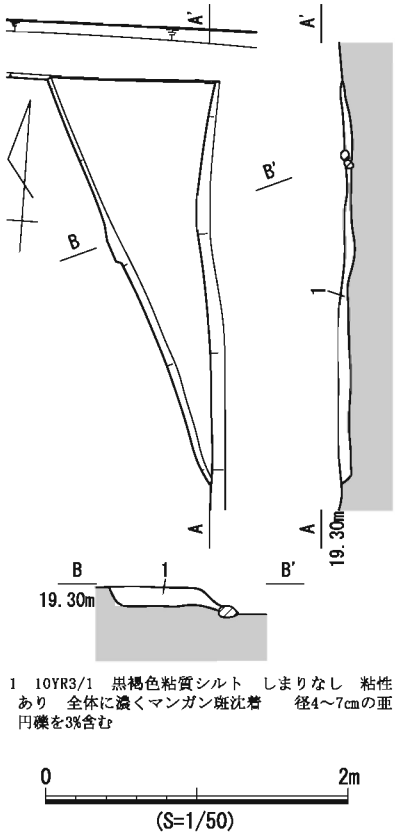
（４）その他の土坑出土遺物（第 230 図）

844 は土師器の甕Ａ類である。体部外面と口縁部内面にハケ調整を施す。口縁部は２段に横ナデされ、口縁端部は面取りと摘み上げがみられる。845 は灰釉陶器の短頸壺である。口縁部が僅かに外反し、体部上半に自然釉が付着する。846 は須恵器の坏蓋Ａ類と思われる。焼成不良により胎土が灰白色である。内面に畿内系の特徴とされる同心円状の当て具痕が残る（渡辺 1996）。847 は須恵器の坏蓋Ｃ類である。848 は須恵器の坏身Ｃ類である。底面が突出し、回転ヘラケズリで調整されている。内面に墨痕が残り、転用硯と考えられる。849 は須恵器の坏蓋Ｃ類、850 は大型の坏身Ｃ類か盤と思われる。850 の底面はナデ調整を施す。851 は須恵器の坏身Ｂ２類で



1　5Y4/1　灰色粘質シルト　しまりなし　粘性あり　全体に鉄斑沈着　径0.2cm以下の小礫を1%以下、植物痕を含む　下層との境界明瞭　現代耕作土　Ⅰb層
2　2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着(特に下部に集中する箇所あり)　径0.2cm以下の小礫を1%含む　現代耕作土敷土　Ⅰc層
3　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン斑沈着　SX10埋土
4　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン斑沈着　2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質シルトをブロック状に10%含む　Ⅲa層
5　10YR4/1　褐灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に濃く鉄斑沈着・マンガン斑沈着　SK128埋土
6　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　しまりなし　粘性あり　全体に濃くマンガン斑沈着　径4～5cmの亜円礫を5%含む　SK128埋土
7　7.5YR3/1　黒褐色粘質シルト　しまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑沈着　径3cm以下の亜円礫を3%含む　SD14埋土
8　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　しまりなし　粘性強い　全体に鉄斑・マンガン斑沈着　SD14埋土
9　2.5Y3/2　黒褐色砂質シルト　しまりなし　全体に鉄斑沈着　SD14埋土
10　2.5Y5/2　暗灰黄色粘質シルト　しまる　粘性あり　鉄斑沈着しみ状に30%　全体にマンガン斑少量沈着　径2～5cmの円礫3%含む　SI2埋土
11　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑・マンガン斑沈着　径5cm以下の円礫を2%含む　Ⅴb層
12　砂礫層　基盤層　Ⅵ層

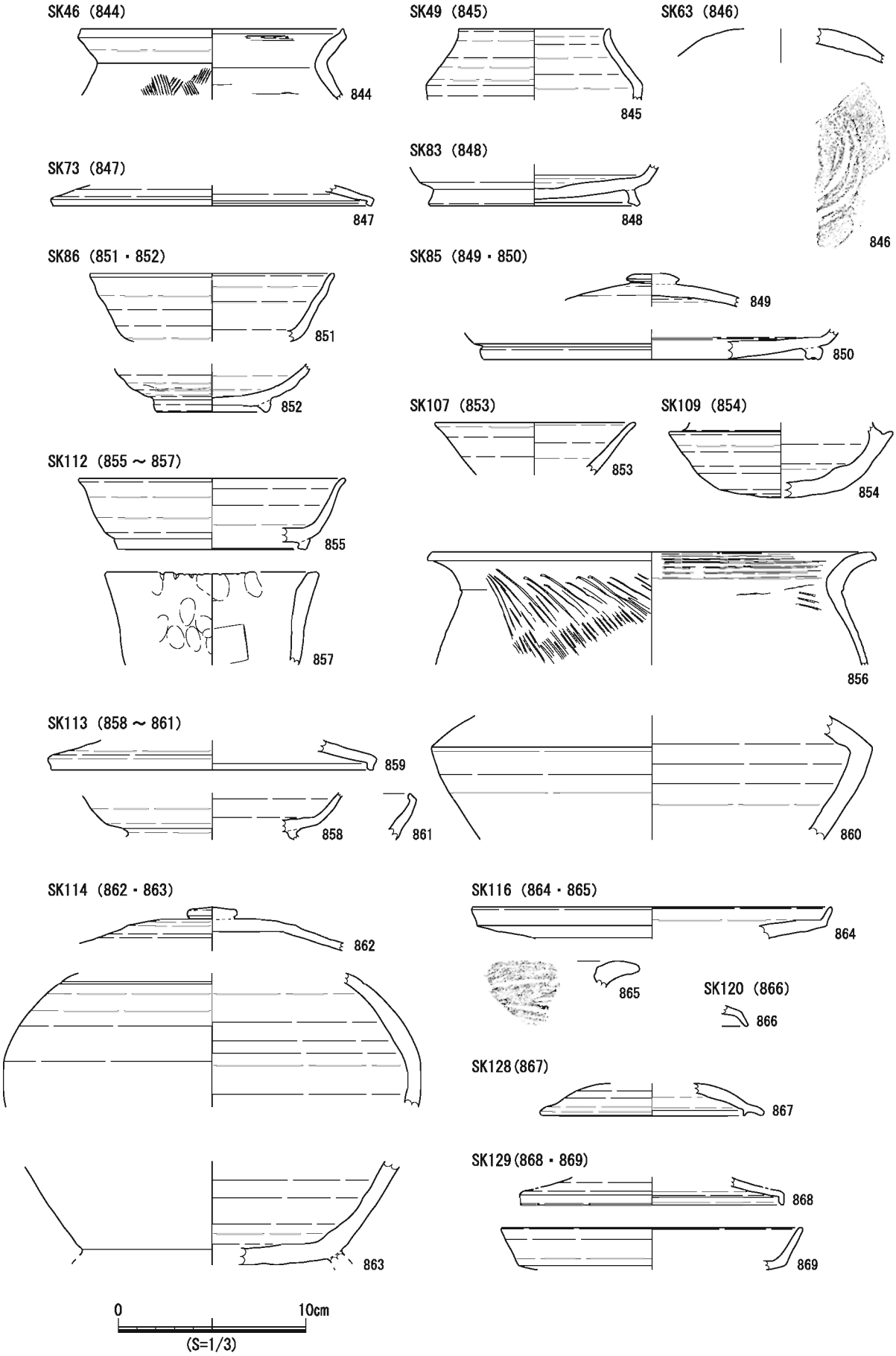
第228図　SK128遺構図



1　10YR3/1　黒褐色粘質シルト　しまりなし　粘性あり　全体に濃くマンガン斑沈着　径4～7cmの亜円礫を3%含む

第229図　SK129遺構図

ある。852 は灰釉陶器の碗である。高台は低く、底面の外側に付される。底面に回転糸切り痕が残る。853 はロクロ土師器の柱状高台碗又は脚高高台皿と思われる。854 は須恵器の坏身Ａ類である。小型であるが器壁が厚い。855 は須恵器の坏身Ｃ類である。高台の位置が底面の外縁寄りに付され、口縁部が緩やかに外反する。856 は土師器の甕Ｂ類である。体部外面と口縁部内面に粗いハケ目が残る。口縁部は強く外反し、口縁端部は指ナデによって面取り状になっている。体部の器壁は薄く、外面に煤が付着する。857 は土師器であり製塩土器の可能性がある。口縁端部には粘土板を折り曲げた際に生じるひび割れが残り、指オサエや板ナデによって成形されている。特に口縁部の器壁が厚い。858 は器種不明であるが、青黒い色調であり畿内系と考えられる。859 は須恵器の坏蓋Ｃ類、860 は瓶類の体部、861 は器種不明の口縁部である。860 は体部上半が屈曲するため、平瓶の可能性がある。862 は須恵器の坏蓋Ｃ類、863 は頸部下に横位の沈線がめぐるため、水瓶と思われる。底部には高台の痕跡が残る。864 は須恵器の盤、865 は土師器の甕Ｂ類である。865 は屈曲が強く内面に粗いハケ目が残る。866 は須恵器の蓋類の口縁部と考えられる。867 は須恵器の坏蓋Ｂ類である。内面にかえりがあり、口縁部より僅かに突出する。868 は須恵器の坏蓋Ｃ類である。外面に重ね焼きによる融着を剥がした痕跡が残る。869 は須恵器の坏身Ｃ類である。口径に比して器高が低い。



第230図　その他の土坑出土遺物

表73　竪穴建物一覧表

遺構番号	地区割り 南北	地区割り 東西	検出面	平面形	長軸（m） 上端	長軸（m） 下端	短軸（m） 上端	短軸（m） 下端	深さ（m）	長軸方位	切り合い 新	切り合い 旧	出土遺物
SI１	EM･EN	20･1	Ⅲ基	方形	3.64	3.06	3.49	2.90	0.13	N　8°　E		SI２ SD４ SD14 SK44	P145 K33 H155 S1
SI２	EN･EO	1	Ⅲ基	方形	4.69	4.50	2.96	2.85	0.06	N　84°　E	SI１ SK128 SX11	SD14	P39 H23 J2
SI３	EN	2	Ⅲ基	方形	2.59	2.40	2.38	2.12	0.12	N　77°　E		SI４	P90 K14 H96 J1 S1
SI４	EM･EN	2･3	Ⅲ基	方形	4.53	4.32	3.67	3.37	0.11	N　72°　E	SI３ SI５ SK51 SK52 SK53 SK62		P8 K3 H42
SI５	EN	3	Ⅲ基	方形	3.30	3.18	3.25	3.08	0.07	N　7°　W	SK77	SI４	P245 K31 H61
SI６	EM･EN	4	Ⅲ基	方形	3.01	2.84	2.85	2.70	0.16	N　18°　W	SI７ SK112		P48 K2 H84
SI７	EM･EN	4･5	Ⅲ基	－	3.98	3.80	(3.04)	(2.94)	0.11	N　58°　E	SK107 SK111 SK112	SI６ SI８	P45 K1 H65 S1
SI８	EN	4･5	Ⅲ基	－	3.52	3.36	3.36	3.32	0.07	N　75°　E	SI７ SK107 SK109 SK119		P7 H19
SI９	EN･EO	4･5	Ⅲ基	方形	(2.82)	(2.74)	(1.60)	(1.50)	0.11	―	SK117		P1 H4
SI10	EM･EN	5･6	Ⅲ基	方形	3.88	3.60	3.66	3.48	0.10	N　30°　W	SI12	SI11 SK85	P136 K1 H200 S1
SI11	EM･EN	5･6	Ⅲ基	方形	2.85	2.70	2.80	2.58	0.16	N　23°　W	SI10 SK84		P82 K2 H92 S1
SI12	EN	6	Ⅲ基	方形	(1.45)	(1.30)	(0.90)	(0.45)	0.19	N　28°　W		SI10 SK114 SK116	P22 H7
SI13	EM	7	Ⅲ基	方形	(1.60)	(1.46)	(1.22)	(1.18)	0.10	―	SI14 SK129	SI15 SI16 SI17 SK91 SK120	P4 H22
SI14	EM･EN	7	Ⅲ基	方形	(4.72)	(4.65)	(2.12)	(1.99)	0.24	N　3°　W	SP９	SI13 SI15 SI18 SK113 SK125 SK129	P78 K12 S1
SI15	EM･EN	7	Ⅲ基	方形	(4.20)	(4.16)	(1.68)	(1.60)	0.14	N　23°　W	SI13 SI14 SI16 SK93 SK129		P43 H37
SI16	EM･EN	7	Ⅲ基	－	―	―	―	―	0.09	―	SI13　SI17 SK93	SI15	
SI17	EM･EN	7	Ⅲ基	方形	(2.75)	(2.48)	(1.79)	(1.70)	0.10	N　24°　W	SI13 SI15 SK129	SI16	H1
SI18	EN	7	Ⅲ基	方形	2.92	2.68	(1.27)	(1.19)	0.11	N　15°　W	SI14 SI15 SK129		H2

表74　竪穴建物カマド属性表

遺構名	地区割り		検出面	検出位置	燃焼部	袖部	下部土坑	煙道部	支脚柱	検出範囲（m）		出土遺物	備考
	南北	東西								長軸	短軸		
SI１カマド	EM EN	1	Ⅲ基	北壁中央東寄り	床面	一部残存	無	掘方外へ突出(1.02m)	抜取穴	1.06	0.23	P8 H4	袖部下に土坑（P5）
SI３カマド	EN	2	Ⅲ基	東壁中央南寄り	下部土坑埋土上面	一部残存	有	掘方外へ突出(0.18m)	無	0.65	0.49	P4 K18 H4 S7	遺物がまとまって出土
SI４カマド	EM	2	Ⅲ基	北壁中央	床面	一部残存	無	不明	支脚柱残存	1.06	0.95	H1 S2	被熱痕上面から土師器甕出土
SI５カマド	EN	3	Ⅲ基	北壁中央東寄り	床面	一部残存	無	掘方外へ突出(0.12m)	無	1.19	0.94	P7 K1 H18	火床手前に土坑（P9）
SI６カマド	EM･EN	4	Ⅲ基	北壁中央東寄り	下部土坑埋土上面	―	有	不明	不明	1.00	0.56	P3 K1 H3	
SI８カマド	EN	5	Ⅲ基	北壁中央	不明	―	無	不明	抜取穴か	0.25	0.21	P10 H25	
SI９カマド	EN	5	Ⅲ基	北壁中央東寄り	不明	―	有	不明	抜取穴か	1.05	0.76	K2	
SI10カマド	EN	6	Ⅲ基	北壁中央東寄り	下部土坑埋土上面	―	有	不明	無	1.59	0.72	P8 K3 H11	
SI11カマド	EN	6	Ⅲ基	北壁中央東寄り	不明	―	有	不明	抜取穴か	0.75	0.64	P11 H2	
SI12カマド	EN	6	Ⅲ基	不明	下部土坑埋土上面	―	有	掘方外へ突出(0.33m)	抜取穴か	1.52	0.48	P13 H36	
SI15カマド	EN	7	Ⅲ基	西壁中央	下部土坑底面	一部残存	有	掘方外へ突出(0.12m)	抜取穴か	1.55	0.87	P32 H15 S2	遺物がまとまって出土

表75　竪穴建物主柱穴一覧表①

遺構名	地区割り		検出面	平面形	堆積	断面形	長軸（m）		短軸（m）		深さ（m）	切り合い		出土遺物
	南北	東西					上端	下端	上端	下端		新	旧	
SI１-P１	EN	1	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.36	0.24	0.33	0.23	0.06			
SI１-P２	EN	1	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.48	0.35	0.43	0.34	0.05			
SI１-P３	EN	1	Ⅲ基	円形	b3	半円形	0.35	0.20	0.32	0.22	0.35			
SI１-P４	EN	1	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.37	0.28	0.33	0.24	0.04			
SI２-P１	EN	1	Ⅲ基	円形	b3	台形	0.35	0.26	0.30	0.22	0.22		SI２-P７	P6
SI２-P２	EN	1	Ⅲ基	円形	b1	台形	0.27	0.22	(0.24)	(0.18)	0.32			
SI３-P１	EN	2	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.28	0.16	0.23	0.10	0.05		SI３-P８	
SI３-P２	EN	2	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.30	0.20	0.26	0.20	0.09		SI３-P10	H3
SI３-P３	EN	2	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.29	0.16	0.26	0.14	0.06			H1
SI３-P４	EN	2	Ⅲ基	円形	a	三角形	0.26	0.10	0.22	0.10	0.11			
SI４-P１	EN	2	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.38	0.22	0.36	0.18	0.13			H1
SI４-P２	EM	3	Ⅲ基	円形	b1	台形	0.34	0.19	0.30	0.18	0.27			
SI４-P３	EM	3	Ⅲ基	円形	d	台形	0.34	0.20	0.29	0.14	0.28			
SI４-P４	EN	2	Ⅲ基	円形	b2	台形	0.37	0.23	0.36	0.20	0.25			
SI５-P１	EN	3	Ⅲ基	円形	a	台形	0.33	0.28	0.32	0.28	0.04			
SI５-P２	EN	3	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.30	0.15	0.25	0.13	0.09			
SI５-P３	EN	3	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.44	0.18	0.28	0.16	0.09	SI５-P５		
SI５-P４	EN	3	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.36	0.24	0.30	0.24	0.04			P1
SI６-P１	EM	4	Ⅲ基	円形	a	台形	0.32	0.22	0.21	0.19	0.07			
SI６-P２	EN	4	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.36	0.10	0.31	0.08	0.05			P1
SI７-P１	EM EN	4	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.22	0.12	0.15	0.10	0.05			
SI８-P１	EN	4	Ⅲ基	円形	b1	方形	0.35	0.25	0.30	0.21	0.27			P1
SI８-P２	EN	5	Ⅲ基	円形	a	台形	0.40	0.30	0.33	0.22	0.08			
SI８-P３	EN	5	Ⅲ基	円形	a	台形	0.32	0.20	0.28	0.16	0.10			
SI８-P４	EN	4	Ⅲ基	円形	b1	方形	0.33	0.25	0.30	0.22	0.31			

表76　竪穴建物主柱穴一覧表②

遺構名	地区割り		検出面	平面形	堆積	断面形	長軸（m）		短軸（m）		深さ（m）	切り合い		出土遺物
	南北	東西					上端	下端	上端	下端		新	旧	
SI10-P１	EN	5	Ⅲ基	円形	a	台形	0.34	0.26	0.29	0.24	0.08			P1
SI10-P２	EN	6	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.33	0.18	0.31	0.18	0.13			
SI10-P３	EN	6	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.34	0.19	0.31	0.19	0.09			
SI10-P４	EN	5	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.34	0.23	0.28	0.22	0.04			
SI11-P１	EN	5	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.28	0.20	0.27	0.20	0.05			
SI11-P２	EN	5	Ⅲ基	－	a	－	0.32	0.27	(0.19)	(0.15)	0.03			
SI13-P１	EM	7	Ⅲ基	円形	b1	台形	0.34	0.25	0.29	0.22	0.08			
SI14-P１	EN	7	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.37	0.28	0.30	0.15	0.15			

※「切り合い」は床面遺構同士のみ掲載

表77　竪穴建物壁際溝一覧表

遺構名	地区割り		検出面	堆積	断面形	幅（m）		深さ（m）	切り合い		出土遺物
	南北	東西				上端	下端		新	旧	
SI１壁際溝	DN・EN	20・1	Ⅲ基	a	半円形	N:0.27 S:0.13 E:0.23 W:0.23	N:0.15 S:0.05 E:0.11 W:0.13	N:0.04 S:0.08 E:0.04 W:0.05			H2
SI13壁際溝	EM	7	Ⅲ基	a	半円形	0.15	0.11	0.05			
SI16壁際溝	EM・EN	7	Ⅲ基	b3	半円形	0.17	0.10	0.02			
SI18壁際溝	EN	7	Ⅲ基	a	半円形	0.20	0.09	0.05			H3

※「切り合い」は床面遺構同士のみ掲載

表78　竪穴建物その他の床面遺構一覧表①

遺構名	地区		検出面	平面形	堆積	断面形	長軸（m）		短軸（m）		深さ（m）	長軸方位	切り合い		出土遺物	備考
	南北	東西					上端	下端	上端	下端			新	旧		
SI１-P５	EM EN	1	Ⅲ基	円形	b1	台形	0.41	0.14	0.31	0.12	0.40	－				袖部下土坑
SI２-P３	EN	1	Ⅲ基	円形	b1	台形	0.41	0.30	0.35	0.22	0.12	－				
SI２-P４	EN	1	Ⅲ基	円形	b1	台形	0.39	0.29	0.37	0.26	0.12	－		SI２ -P７	P4	
SI２-P５	EN	1	Ⅲ基	不定形	a	台形	0.34	0.28	0.18	0.10	0.07	－				
SI２-P６	EM	1	Ⅲ基	円形	a	台形	0.21	0.18	0.16	0.14	0.03	－				
SI２-P７	EM	1	Ⅲ基	円形	d	台形	0.97	(0.38)	0.58	(0.21)	0.21	－	SI２ -P１ SI２ -P３		P3 H1	
SI３-P５	EN	2	Ⅲ基	円形	b1	半円形	0.57	0.42	0.53	0.39	0.16	－			P1 S1	貯蔵穴か
SI３-P６	EN	2	Ⅲ基	楕円形	a	台形	0.23	0.15	0.18	0.10	0.06	N　80°　E				
SI３-P７	EN	2	Ⅲ基	円形	b3	方形	0.48	0.40	0.38	0.22	0.14	－				
SI３-P８	EN	2	Ⅲ基	楕円形	a	台形	0.33	0.26	0.25	0.20	0.05	N　75°　E	SI３ -P１			
SI３-P９	EN	2	Ⅲ基	円形	a	台形	0.48	0.33	0.45	0.26	0.16	－				
SI３-P10	EN	2	Ⅲ基	円形	a	台形	0.28	0.19	0.25	0.17	0.10	－				
SI４-P５	EM	3	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.42	0.26	0.35	0.23	0.10	－				
SI４-P６	EN	2	Ⅲ基	円形	a	三角形	0.32	0.30	0.30	0.24	0.28	－				
SI４-P７	EN	2	Ⅲ基	円形	a	台形	0.65	0.44	0.56	0.42	0.18	－			P1 H3	
SI４-P８	EN	2	Ⅲ基	円形	a	台形	0.30	0.19	0.26	0.17	0.09	－				
SI４-P９	EN	2	Ⅲ基	楕円形	c	不明	0.43	0.13	0.19	0.08	0.22	N　68°　W				
SI４-P10	EM	2	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.18	0.08	0.13	0.06	0.05	－				
SI４-P11	EM	2	Ⅲ基	楕円形	a	不定形	0.39	0.24	0.23	0.08	0.08	N　36°　W				支脚柱掘方
SI４-P12	EM	2	Ⅲ基	楕円形	a	半円形	0.24	0.15	0.15	0.08	0.10	N　87°　W				
SI４-P13	EM	2	Ⅲ基	楕円形	a	台形	0.20	0.13	0.13	0.08	0.11	N　18°　W				
SI４-P14	EM	2	Ⅲ基	楕円形	a	方形	0.35	0.26	0.19	0.14	0.18	N　8°　W				
SI４-P15	EM	2	Ⅲ基	円形	a	方形	0.16	0.10	0.15	0.10	0.26	－				

表79　竪穴建物その他の床面遺構一覧表②

遺構名	地区		検出面	平面形	堆積	断面形	長軸（m）		短軸（m）		深さ（m）	長軸方位	切り合い		出土遺物	備考
	南北	東西					上端	下端	上端	下端			新	旧		
SI５-P５	EN	3	Ⅲ基	楕円形	a	三角形	0.45	0.16	0.30	0.15	0.14	N　60°　W		SI５-P３		
SI５-P６	EN	3	Ⅲ基	楕円形	b3	方形	0.41	0.38	0.25	0.15	0.33	N　60°　W			H4	
SI５-P７	EN	3	Ⅲ基	楕円形	d	三角形	0.33	0.06	0.21	0.04	0.35	N　38°　W				袖部下土坑
SI５-P８	EN	3	Ⅲ基	円形	d	方形	0.15	0.17	0.14	0.13	0.13	－				袖部下土坑
SI５-P９	EM	3	Ⅲ基	円形	b4	半円形	0.50	0.33	0.46	0.29	0.30	－			H7	火床手前の土坑
SI６-P３	EM	4	Ⅲ基	方形	b3	方形	0.38	0.33	0.28	0.20	0.16	N　5°　W			P1 H2	
SI６-P４	EM	4	Ⅲ基	不定形	a	半円形	0.18	0.14	0.11	0.09	0.06	－				
SI６-P５	EM	4	Ⅲ基	不明	b2	半円形	0.25	(0.16)	0.17	0.18	0.05	－				
SI６-P６	EM	4	Ⅲ基	不明	(a)	不明	0.29	0.20	0.24	0.14	0.02	－				下部土坑底面
SI７-P２	EM	5	Ⅲ基	円形	a	台形	0.39	0.22	0.31	0.20	0.15	－			H1	
SI７-P３	EM	5	Ⅲ基	不明	a	台形	(0.48)	(0.42)	(0.10)	(0.10)	0.06	－			P2	東側不明
SI８-P５	EN	5	Ⅲ基	円形	b3	台形	0.46	0.30	0.36	0.24	0.10	－			P3 H4	
SI10-P５	EN	6	Ⅲ基	円形	a	台形	0.44	0.37	0.38	0.34	0.07	－			H3	
SI11-P３	EN	6	Ⅲ基	不定形	a	半円形	0.65	0.58	0.41	0.28	0.10	－			H2	
SI11-P４	EM	6	Ⅲ基	不定形	a	不明	1.75	1.46	0.56	0.47	0.15	－			H5	下部土坑または整地土
SI14-P２	EN	7	Ⅲ基	円形	a	方形	(0.36)	(0.28)	0.30	0.22	0.12	－				
SI14-P３	EM	7	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.33	0.22	0.29	0.20	0.07	－				
SI14-P４	EM	7	Ⅲ基	楕円形	a	方形	0.59	0.24	0.32	0.18	0.04	N　45°　E				
SI15-P１	EN	7	Ⅲ基	円形	a	台形	0.11	0.06	0.10	0.70	0.11	－			P1	
SI15-P２	EN	7	Ⅲ基	円形	a	三角形	0.10	0.08	0.07	0.04	0.03	－				
SI17-P１	EN	7	Ⅲ基	楕円形	c	二段	0.46	0.11	0.39	0.11	0.17	N　21°　W				
SI17-P２	EM	7	Ⅲ基	円形	a	不定形	0.40	0.22	0.40	0.13	0.30	－				
SI17-P３	EM	7	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.52	0.37	0.52	0.30	0.30	－			H1	

※「切り合い」は床面遺構同士のみ掲載

表80　溝状遺構一覧表①

遺構名	地区割り		検出面	堆積	断面形	長さ（m）		幅A（m）		幅B（m）		深さA（m）	深さB（m）	長軸方位	切り合い		出土遺物
	南北	東西				上端	下端	上端	下端	上端	下端				新	旧	
SD６	DM ~DO	16 ~18	Ⅲ基	a	半円形	(8.91)	－	0.73	0.35	0.71	0.52	0.14	0.09	N　39°　W		SD７ SK43	P104 K12 H13
SD７	DM ~DO	16 ~18	Ⅲ基	b2	台形	(8.72)	－	1.04		－	－	0.23	0.16	N　35°　W	SD６		P1 H4 S1
SD８	DM ~DO	18	Ⅲ上	a	半円形	(7.28)	－	0.54	0.24	0.59	0.28	0.14	0.12	N　1°　E	SD９	SD10	J3 P3 H4 K2
SD９	DM ~DO	18	Ⅲ上	b1	台形	(7.28)	－	0.52	0.36	0.46	0.22	0.11	0.15	N　1°　W		SD８ SD13	J1 P8 K6 H12
SD10	DM ~DO	17 18	Ⅲ基	b3	台形	(8.99)	－	0.69	0.45	0.70	0.53	0.22	0.13	N　36°　W	SD８		H4
SD11	DN ~DO	17 18	Ⅲ基	a	半円形	(3.63)	－	0.41	0.17	0.39	0.28	0.05	0.03	N　31°　W			H1
SD12	DM ~DO	19	Ⅲ上	a	半円形	(6.02)	－	0.70	0.43	－	－	0.07	－	N　3°　W		SD13	P3 K1 H3
SD13	DM ~DO	18 19	Ⅲ基	b1	台形	(8.89)	－	1.04	0.62	0.94	0.61	0.49	0.44	N　30°　W	SD９ SD12		P1 H5
SD14	DM ~EO	20 1	Ⅲ基	b1	台形	(8.83)	－	1.05	0.50	－	－	0.56	－	N　18°　W	SI１ SI２ SK128		P13 K6 H36
SD15	EN	7	Ⅲ基	b1	半円形	(1.40)	(1.40)	0.23	0.16	－	－	0.08	－	N　45°　E	SK86	SP５ SK103	

表81　溝状遺構一覧表②

遺構名	地区割り		検出面	堆積	断面形	長さ（m）		幅A（m）		幅B（m）		深さA（m）	深さB（m）	長軸方位	切り合い		出土遺物
	南北	東西				上端	下端	上端	下端	上端	下端				新	旧	
SD16	EN ~EO	7	Ⅲ基	a	半円形	(4.80)	－	0.55	0.50	－	－	0.08	－	－		SK113 SK116	P5 K2 H19
SD17	EN	8 9	Ⅲ基	a	台形	2.64	2.53	(0.21)	(0.18)	－	－	0.08	－	N　75°　E	SK102		
SD18	EN	9	Ⅲ基	a	台形	(0.91)	(0.85)	(0.26)	(0.18)	－	－	0.07	－	N　3°　W		SK105	

表82　畝溝状遺構群一覧表

遺構名	付属遺構	地区割り		検出面	断面形	堆積	長さ（m）		幅A（m）		幅B（m）		深さA（m）	深さB（m）	長軸方位	出土遺物
		南北	東西				上端	下端	上端	下端	上端	下端				
SN１	SN１-D１	DN DO	16	Ⅲ基	台形	a	(1.94)	(1.89)	0.44	0.39	－	－	0.07	－	N　15°　W	P1
SN１	SN１-D２	DN DO	16	Ⅲ基	台形	a	(2.23)	(2.16)	0.48	0.41	－	－	0.04	－	N　15°　W	
SN１	SN１-D３a	DN DO	16	Ⅲ基	台形	a	0.50	0.40	0.35	0.28	－	－	0.02	－	N　30°　W	
SN１	SN１-D３b	DN DO	16	Ⅲ基	半円形	a	0.34	0.28	0.21	0.16	－	－	0.03	－	N　31°　W	
SN１	SN１-D３c	DN DO	16	Ⅲ基	三角形	a	0.71	0.29	0.21	0.07	－	－	0.17	－	N　11°　W	
SN１	SN１-D３d	DN DO	16	Ⅲ基	２段掘込	a	(0.42)	(0.38)	0.28	0.08	－	－	0.10	－	－	
SN１	SN１-D４a	DN DO	16	Ⅲ基	不明	a	1.78	1.73	0.37	0.32	－	－	0.02	－	N　18°　W	
SN１	SN１-D４b	DN DO	16	Ⅲ基	不明	a	(1.43)	(1.34)	0.23	0.14	－	－	0.10	－	N　18°　W	
SN１	SN１-D５	DN DO	16	Ⅲ基	不明	a	(3.70)	(3.65)	0.58	0.45	－	－	0.07	0.06	N　21°　W	
SN１	SN１-D６a	DN DO	16	Ⅲ基	台形	a	0.81	0.70	0.05	0.42	－	－	0.04	－	N　12°　W	P7 K1
SN１	SN１-D６b	DN DO	16	Ⅲ基	半円形	a	(2.57)	(2.41)	0.25	0.20	－	－	0.07	－	N　14°　W	P1
SN１	SN１-D７	DN DO	16 17	Ⅲ基	三角形	a	(3.32)	(3.27)	0.33	0.25	0.28	0.19	0.13	0.11	N　19°　W	
SN１	SN１-D８	DN DO	16 17	Ⅲ基	半円形	a	(2.84)	(2.77)	0.37	0.33	－	－	0.14	－	N　15°　W	P1 K1 H1 J4
SN１	SN１-D９	DN DO	16	Ⅲ基	台形	a	(3.18)	(3.05)	0.38	0.28	－	－	0.13	－	N　18°　W	P4 K1 H1
SN１	SN１-D10	DN DO	16	Ⅲ基	半円形	a	(2.48)	(2.38)	0.33	0.31	－	－	0.04	－	N　23°　W	P1

表83　柱穴状遺構一覧表

遺構名	地区割り		検出面	平面形	堆積	断面形	長軸（m）		短軸（m）		深さ	長軸方位	切り合い		出土遺物
	南北	東西					上端	下端	上端	下端			新	旧	
SP１	DN	20	Ⅲ層基底面	円形	c	三角形	0.53	0.33	0.38	0.30	0.21	－		SK75	P3 H6
SP２	EM	1	Ⅲ層基底面	円形	c	二段	0.55	0.16	0.25	0.12	0.33	－			P3 K1 H3
SP３	EM EN	1	Ⅲ層基底面	不定形	c	２段掘込	0.99	0.12	0.79	0.11	0.34	－	SK47		－
SP４	EN	6	Ⅲ層基底面	方形	c	不定形	0.72	0.54	0.62	0.47	0.36	N　32°　W			P1 H13
SP５	EN	7	Ⅲ層基底面	円形	c	不定形	0.61	0.32	0.51	0.20	0.19	－	SD15		H4
SP６	EN	6	Ⅲ層基底面	楕円形	b1	２段掘込	0.86	0.57	0.60	0.34	0.22	N　15°　W			P2 K1 H3
SP７	EM	6 7	Ⅲ層基底面	円形	c	台形	0.66	0.30	0.57	0.22	0.29	－			－
SP８	EM	6 7	Ⅲ層基底面	円形	c	台形	0.71	0.24	0.58	0.14	0.49	－			P1 H5
SP９	EN	7	Ⅲ層基底面	不明	c	２段掘込	1.06	(0.18)	0.99	(0.14)	0.46	－		SI14 SK113 SK121 SK122 SK124	P20 K4 H18
SP10	EN	9	Ⅲ層基底面	楕円形	c	方形	0.46	0.32	0.40	0.30	0.33	N　83°　E			P1 H1

表84　土坑一覧表①

遺構名	地区割り		検出面	平面形	堆積	断面形	長軸（m）		短軸（m）		深さ（m）	長軸方位	切り合い		出土遺物	備考
	南北	東西					上端	下端	上端	下端			新	旧		
SK11	DN DO	9	Ⅳ上	楕円形	a	台形	0.50	0.30	0.28	0.14	0.11	N　1°　E				
SK12	DO	9	Ⅳ上	円形	b3	半円形	0.57	0.40	0.49	0.36	0.31	―				
SK13	DM	11	Ⅳ上	楕円形	a	台形	0.50	0.30	0.34	0.22	0.14	N　69°　W				土坑列1
SK14	DN	11	Ⅳ上	楕円形	a	二段	0.65	0.26	0.25	0.18	0.10	N　48°　W				土坑列1
SK15	DN	11	Ⅳ上	楕円形	a	台形	0.45	0.38	0.33	0.28	0.10	N　74°　W				土坑列1
SK16	DN	10 11	Ⅳ上	不定形	a	不明	0.49	0.38	0.22	0.17	0.09	N　79°　W				土坑列1
SK17	DN	10	Ⅳ上	不定形	a	不明	0.43	0.27	0.27	0.20	0.09	N　58°　W				土坑列1
SK18	DN	13	Ⅳ上	楕円形	a	不明	0.44	0.31	0.26	0.16	0.07	N　89°　E				土坑列２
SK19	DN	13	Ⅳ上	楕円形	a	不明	0.43	0.13	0.32	0.11	0.10	N　87°　E			H1	土坑列２
SK20	DN	13	Ⅳ上	楕円形	a	半円形	0.37	0.21	0.23	0.16	0.12	N　76°　E				土坑列２
SK21	DN	13	Ⅳ上	楕円形	a	半円形	0.58	0.49	0.22	0.17	0.09	N　86°　E				土坑列２
SK22	DN	13	Ⅳ上	楕円形	a	半円形	0.59	0.33	0.24	0.13	0.08	N　89°　W				土坑列２
SK23	DN	13	Ⅳ上	楕円形	a	台形	0.46	0.25	0.24	0.13	0.09	N　77°　W				土坑列２
SK24	DO	13	Ⅳ上	不定形	a	半円形	0.51	0.40	0.26	0.16	0.08	N　87°　E				土坑列２
SK25	DO	13	Ⅳ上	楕円形	a	半円形	0.44	0.28	0.23	0.16	0.06	N　79°　W				土坑列２
SK26	DN	13	Ⅳ上	楕円形	a	半円形	0.54	0.36	0.24	0.20	0.05	N　86°　E				土坑列２
SK27	DN	14	Ⅳ上	楕円形	a	半円形	0.45	0.31	0.22	0.13	0.07	N　46°　W				土坑列３
SK28	DN	14	Ⅳ上	楕円形	a	台形	0.48	0.34	0.24	0.09	0.06	N　51°　W				土坑列３
SK29	DN	14	Ⅳ上	楕円形	a	台形	0.38	0.11	0.25	0.08	0.05	N　49°　W				土坑列３
SK30	DN	14	Ⅳ上	楕円形	a	台形	0.44	0.18	0.32	0.10	0.07	N　38°　W				土坑列３
SK31	DO	13 14	Ⅳ上	楕円形	a	不明	0.59	0.13	0.19	0.12	0.06	N　34°　W				土坑列３
SK32	DO	13	Ⅳ上	不定形	a	不明	0.48	0.24	0.19	0.14	0.08	N　37°　W				土坑列３
SK33	DO	13	Ⅳ上	不明	a	不明	0.28	0.20	0.18	0.13	0.05	N　33°　W				土坑列３
SK34	DO	13	Ⅳ上	不明	a	台形	0.30	0.13	0.15	0.10	0.15	―				土坑列３
SK35	DM	12	Ⅳ上	楕円形	a	台形	0.45	0.24	0.37	0.23	0.10	N　82°　E				
SK36	DM DN	12	Ⅳ上	不定形	a	不明	0.43	0.34	0.25	0.21	0.08	N　62°　W				
SK37	DN	14	Ⅳ上	楕円形	a	台形	0.43	0.33	0.30	0.23	0.08	N　7°　E				
SK38	DN	14	Ⅳ上	不定形	a	不明	0.98	0.88	0.32	0.27	0.08	N　2°　W				
SK39	DN	13	Ⅳ上	方形	a	半円形	0.46	0.31	0.36	0.17	0.08	N　8°　E			P1	
SK40	DN	13	Ⅳ上	不定形	a	半円形	0.51	0.31	0.31	0.08	0.14	―			K1	
SK41	DN	13	Ⅳ上	不定形	a	半円形	0.74	0.49	0.32	0.27	0.07	N　46°　W			K1	
SK42	DN	15	Ⅲ基	方形	b2	半円形	0.72	0.51	0.53	0.34	0.26	N　9°　E				
SK43	DN	16･17	Ⅲ基	不定形	b3	二段	(9.02)	―	0.81	0.45	0.31	N　14°　E	SD６		P1	
SK44	EM EN	1	Ⅲ基	円形	b2	三角形	0.58	0.40	0.56	0.20	0.29	―	SI１		H3	
SK45	EM	1	Ⅲ基	円形	b3	半円形	0.34	0.20	0.26	0.16	0.13	―		SK74		
SK46	EM	1	Ⅲ基	円形	a	台形	0.38	0.25	0.24	0.15	0.16	―			P4 H3	
SK47	EM	1	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.20	0.12	0.18	0.08	0.07	―		SP３		
SK48	EN	1･2	Ⅲ基	円形	b2	二段	0.98	0.49	0.78	0.24	0.25	―			P1	
SK49	EN	1･2	Ⅲ基	円形	b2	台形	0.52	0.40	0.46	0.32	0.29	―		SK50	P2	
SK50	EN	1･2	Ⅲ基	方形	b3	不明	0.88	0.62	0.57	0.43	0.31	N　13°　W	SK49		P1	
SK51	EM	2･3	Ⅲ基	円形	a	方形	0.68	0.60	0.62	0.55	0.43	―		SI４	P9 H9	土坑列４
SK52	EM	2	Ⅲ基	楕円形	b3	三角形	0.67	0.38	0.58	0.33	0.39	N　65°　E		SI４	P1 H1	土坑列４
SK53	EM	2	Ⅲ基	楕円形	(a)	台形	0.68	0.49	0.50	0.26	0.64	N　77°　E		SK59 SI４	P3 H7	土坑列４
SK54	EM	3	Ⅲ基	円形	b3	二段	0.42	0.08	0.10	0.03	0.30	―			P1	土坑列４
SK55	EM	3	Ⅲ基	円形	b2	台形	0.84	0.70	0.67	0.60	0.30	―			H2	土坑列４
SK56	EM	3	Ⅲ基	―	a	三角形	(0.34)	―	(0.34)	―	0.19	―				土坑列４
SK57	EN	2	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.48	0.25	0.35	0.22	0.16	―			H1	
SK58	EM	2	Ⅲ基	円形	a	台形	0.46	0.30	0.39	0.25	0.28	―		SK76		
SK59	EM	2	Ⅲ基	方形	a	半円形	(0.70)	―	0.44	0.32	0.06	N　24°　W	SK53 SK76			
SK60	EM	2	Ⅲ基	円形	a	台形	0.41	0.27	0.31	0.21	0.11	―				
SK61	EM EN	2	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.58	0.32	0.54	0.31	0.09	―				
SK62	EN	2	Ⅲ基	楕円形	a	三角形	0.42	0.10	0.28	0.09	0.20	N　1°　W		SI４	K1 H1	
SK63	EN	2	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.56	0.42	0.48	0.39	0.18	―			P3 K1 H44	
SK64	EN EO	2	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.37	0.28	0.25	0.12	0.23	―			H44	
SK65	EN EO	2	Ⅲ基	円形	b2	不定形	0.47	0.28	0.34	0.22	0.29	―				
SK66	EN	2･3	Ⅲ基	円形	a	方形	0.17	0.11	0.14	0.10	0.18	―				
SK67	EN	3	Ⅲ基	円形	a	三角形	0.13	0.03	0.10	0.03	0.34	―				
SK68	EN	3	Ⅲ基	円形	a	二段	0.34	0.05	0.28	0.05	0.28	―				
SK69	EN	3	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.30	0.20	0.27	0.15	0.07	―				
SK70	EO	2	Ⅲ基	円形	a	不明	0.21	0.12	0.12	0.08	0.31	―				
SK71	EO	2	Ⅲ基	円形	a	(半円形)	(0.58)	(0.22)	(0.35)	(0.20)	0.20	―			P1 H5	
SK72	EO	2	Ⅲ基	円形	a	(半円形)	(0.40)	(0.27)	(0.16)	(0.09)	0.13	―			H1	

表85　土坑一覧表②

遺構名	地区割り		検出面	平面形	堆積	断面形	長軸（m）		短軸（m）		深さ（m）	長軸方位	切り合い		出土遺物	備考
	南北	東西					上端	下端	上端	下端			新	旧		
SK73	EO	2 3	Ⅲ基	円形	a	方形	(0.34)	(0.25)	(0.24)	(0.19)	0.20	－			P1	
SK74	EM	1	Ⅲ基	円形	a	(半円形)	0.50	0.40	(0.24)	(0.13)	0.10	－	SK45			
SK75	DN	20	Ⅲ基	円形	a	方形	(0.31)	(0.21)	(0.22)	(0.19)	0.18	－	SP１		P1	
SK76	EM	2	Ⅲ基	円形	b2	台形	(0.54)	(0.42)	(0.23)	(0.21)	0.31	－	SK58	SK59		
SK77	EN	3	Ⅲ基	円形	b1	不定形	0.35	0.13	0.27	0.05	0.43	－		SI５		
SK78	EN	3	Ⅲ基	円形	b1	三角形	0.33	0.22	0.30	0.15	0.31	－			K1 H5	
SK79	EN	3	Ⅲ基	円形	b1	方形	0.31	0.22	0.28	0.19	0.19	－			H1	
SK80	SK		Ⅲ基	方形	a	(台形)	(0.94)	(0.78)	(0.45)	(0.50)	0.15	－		SK117	H3	
SK81	DN	20	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.32	0.18	0.28	0.18	0.22	－				
SK82	EN	5	Ⅲ基	円形	b3	不定形	(0.59)	0.48	(0.39)	0.31	0.14	－			H6	
SK83	EN	5	Ⅲ基	楕円形	b1	半円形	0.58	0.17	0.41	0.16	0.27	N　8°　W			P7	
SK84	EM EN	5	Ⅲ基	円形	b1	半円形	0.53	0.22	0.48	0.16	0.20	－		SI11 SI11-SK２	P4 H1	
SK85	EN	5	Ⅲ基	方形	b3	台形	0.65	0.44	0.51	0.28	0.26	N　65°　E		SI６ SI10	P3 H2	
SK86	EN EO	7	Ⅲ基	円形	b1	不定形	(0.77)	0.54	0.66	0.43	0.36	－		SD15	P6 K1 H8	
SK87	EM	6	Ⅲ基	円形	a	台形	0.41	0.22	0.33	0.20	0.10	－				
SK88	EM	6	Ⅲ基	円形	b3	不定形	0.65	0.40	0.55	0.35	0.22	－			P1 H2	
SK89	EN	7	Ⅲ基	方形	d	台形	0.73	0.44	0.65	0.40	0.25	N　64°　E			P1 H3	
SK90	EM	6	Ⅲ基	方形	a	不定形	0.59	0.31	0.54	0.28	0.16	N　63°　E		SK91		
SK91	EM	6	Ⅲ基	不明	a	三角形	(0.59)	(0.45)	(0.52)	0.34	0.18	－	SK90 SI13		H3	
SK92	EN	7	Ⅲ基	円形	a	台形	0.56	0.44	0.49	0.40	0.22	－		SK113	H2	
SK93	EN	7	Ⅲ基	方形	b4	半円形	0.49	0.39	0.48	0.38	0.11	N　60°　E		SI15 SI16		
SK94	EN	8	Ⅲ基	不明	a	不明	(0.50)	(0.41)	(0.33)	(0.27)	0.09	－				
SK95	EN	8	Ⅲ基	不明	a	台形	(0.99)	(0.96)	(0.39)	(0.38)	0.08	N　73°　E			K2 H3	
SK96	EN	9	Ⅲ基	楕円形	a	半円形	0.48	0.38	0.36	0.32	0.12	N　83°　E			H4	
SK97	EN	9	Ⅲ基	円形	a	不定形	0.47	0.37	0.37	0.35	0.06	－		SK98	H1	
SK98	EN	9	Ⅲ基	楕円形	a	不明	0.74	0.59	(0.42)	(0.35)	0.14	N　40°　W	SK97		P1 H2	
SK99	EM EN	9 10	Ⅲ基	不明	a	不明	(0.90)	(0.90)	(0.32)	(0.32)	0.06	－			H3	
SK100	EN	10	Ⅲ基	円形	a	台形	0.30	0.25	0.27	0.24	0.02	－				
SK101	EN	9	Ⅲ基	円形	b3	台形	0.37	0.25	0.33	0.19	0.09	－				
SK102	EN	9	Ⅲ基	円形	a	不定形	0.81	0.76	0.70	0.68	0.08	－		SD17		
SK103	EN	7	Ⅲ基	円形	(a)	方形	0.21	0.14	0.19	0.14	0.13	－	SD15			
SK105	EN	9	Ⅲ基	不明	(a)	不明	0.29	0.10	0.19	0.17	0.19	－	SD18			
SK106	EN	4	Ⅲ基	円形	b2	台形	0.39	0.29	0.37	0.27	0.16	－			P1 H5	
SK107	EN	4	Ⅲ基	円形	b2	台形	0.59	0.40	0.46	0.40	0.09	－		SI７ SI８	K1 H5	
SK108	EN	4	Ⅲ基	円形	a	台形	0.50	0.36	0.43	0.32	0.18	－			P2	
SK109	EN	4	Ⅲ基	円形	b3	台形	1.32	0.42	1.02	0.35	0.41	－		SK110 SI８ SK119	P17 K2 H15	
SK110	EN	4	Ⅲ基	円形	b1	二段	0.75	0.30	0.70	0.18	0.12	－	SK109			
SK111	EM	5	Ⅲ基	円形	b3	台形	(0.83)	(0.60)	(0.66)	(0.53)	0.23	－		SI７	P4 H15	
SK112	EM	4	Ⅲ基	円形	b1	台形	0.81	0.55	0.69	0.37	0.52	－		SI６ SI７	P18 H9	
SK113	EN	7	Ⅲ基	不明	a	不定形	(2.85)	(2.20)	(1.08)	(0.92)	0.19	－	SD16 SP９ SK92 SI14 SK121 SK122	SK124 SK125	P32 K1 H33	
SK114	EN	6	Ⅲ基	方形	a	台形	(0.76)	(0.38)	(0.47)	(0.15)	0.22	N　12°　E	SI12 SK116		P12 H15	
SK115	EN	6	Ⅲ基	楕円形	b3	方形	0.55	0.42	0.43	0.34	0.30	N　86°　E			P1	
SK116	EN	6	Ⅲ基	方形	a	半円形	(0.82)	(0.65)	(0.75)	(0.43)	0.33	N　10°　E	SD16 SI12	SK114	P8 H5	
SK117	EN	4	Ⅲ基	円形	b1	台形	(0.65)	0.23	0.37	(0.23)	0.35	－	SK80	SI９		
SK118	EN	6	Ⅲ基	不明	b1	台形	(0.44)	(0.31)	(0.32)	(0.15)	0.25	－			H1	
SK119	EN	4	Ⅲ基	不明	a	不明	(0.32)	(0.23)	(0.25)		0.19	－	SK109	SI８		
SK120	EM	7	Ⅲ基	不明	a	台形	(1.55)	(1.55)	(0.48)	(0.47)	0.08	－	SI13 SK126	SK123	P1 H2	
SK121	EN	7	Ⅲ基	不明	a	不定形	(0.90)	(0.75)	(0.81)	(0.48)	0.29	－	SP９	SK113 SK122	P4 K2 H2	
SK122	EN	7	Ⅲ基	不明	a	不定形	(1.24)	(0.92)	(0.97)	(0.65)	0.10	－	SK121 SP９	SK113	P4	
SK123	EM	7	Ⅲ基	方形	b4	台形	0.67	(0.50)	0.57	(0.44)	0.24	N　22°　E	SK120		H3	
SK124	EN	7	Ⅲ基	不明	b3	不明	(0.50)	(0.50)	(0.23)	(0.17)	0.08	－	SK113 SP９		K1	
SK125	EN	7	Ⅲ基	不明	b1	不明	(0.46)	(0.46)	(0.23)	(0.23)	0.10	－	SI14 SK113			
SK126	EO	3	Ⅲ基	不明	b1	台形	(0.91)	(0.26)	(0.14)	(0.05)	(0.49)	－				
SK127	EO	2	Ⅲ基	不明	a	台形	(0.28)	(0.16)	(0.10)	(0.06)	(0.37)	－				
SK128	EN	1	Ⅲ基	方形	a	台形	(2.83)	(2.60)	(0.47)	(0.30)	0.15	－		SI２ SD14	P1 H2 K1	
SK129	EM	7	Ⅲ基	方形	a	台形	(2.78)	(2.72)	(1.07)	0.96	0.13	－	SI14	SI13 SI17 SI18 SI15 SK120	P14 H27	

表86　遺構出土土器観察表①

掲載番号	種別	器種	出土位置			口径/底径/器高/最大径(cm)	口縁部残存率(X/12)・底部個体数	胎土(単位：mm)	焼成	色調(内面)(外面)(断面)	器面調整内面/外面	分類・時期	文様・その他(単位：cm)	挿図番号	図版番号
			出土区・グリット	遺構番号	層位										
647	須恵器	坏蓋C	EN1	SI1 ④ —	b Ⅲ	(14.5)/— /(1.4)/—	1.3・—	密　—	良好	N6/ N6/ N7/	回転ナデ／回転ナデ	美濃須衛Ⅴ-1	内面自然釉付着	165	67
648	須恵器	坏蓋C		SI1 ①	a	(14.3)/— /(1.5)/—	1.4・—	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ	美濃須衛Ⅴ-1		165	67
649	須恵器	坏蓋C		SI1 ①	a	(15.7)/— /(1.3)/—	1.5・—	密　—	不良	5Y7/1 5Y7/1 5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ	美濃須衛Ⅴ-1		165	67
650	須恵器	坏蓋C		SI1 ③	a	(14.8)/—/ (1.4)/—	1.0・—	密　—	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ	美濃須衛Ⅴ-1		165	67
651	須恵器	坏身B2		SI1 ② SI1壁際溝	b b	13.0/6.0/3.2 /—	10.0・1	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラ切り痕・ナデ消し	美濃須衛窯Ⅴ-1		165	65
652	須恵器	坏身C		SI1 ②	a	— /(8.7)/(2.3) /—	—・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・ヘラ切り後ナデ消し・貼り付け高台	美濃須衛Ⅳ-3～Ⅴ	内面摩耗、底部外面ヘラ記号	165	67
653	須恵器	碗	EM1 EN1	SI1カマド ② SI1カマド ③ SI1カマド — —	a b b Ⅲ Ⅲ	(17.2)/(6.4) /5.1/—	2.6・0	やや粗(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 5Y7/1	回転ナデ・指ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・回転ヘラ切り後ナデ消し・貼り付け高台	美濃須衛Ⅴ-1		165	67
654	須恵器	碗		SI1 ①	b	— /(7.7)/(2.3) /—	—・0	やや粗(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・ヘラ切り痕・貼り付け高台	美濃須衛Ⅴ-1	内面摩耗	165	67
655	須恵器	碗		SI1 ①	b	(15.5)/— /(2.6)/—	2.5・—	やや粗(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ	美濃須衛Ⅴ-1		165	67
656	須恵器	碗		SI1 ①	b	(14.5)/— /(2.7)/—	3.2・—	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ	美濃須衛Ⅴ-1	口縁部内外面自然釉付着	165	67
657	須恵器	皿		SI1 ②	a	(13.5)/7.1/2 .4/—	3.1・1	やや粗(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ・ヘラ切り後ナデ消し・貼り付け高台	美濃須衛Ⅴ-1	内底面摩耗、底部外面高台内にヘラ記号	165	65
658	須恵器	短頸壺		SI1 ④	a	(10.6)/— /(4.8)/—	2.5・—	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ	在地産か		165	67
659	灰釉陶器	短頸壺		SI1カマド	a	—/—/(7.0)/ —	—・—	密　—	良好	2.5Y7/1 N7/ 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ		外面自然釉付着	165	67
660	灰釉陶器	壺・瓶類		SI1カマド	a	— /(9.4)/(3.2) /—	—・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y8/1 2.5Y8/1 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・底部指オサエ・回転ヘラケズリ		内面全面、外面一部に自然釉付着	165	67
661	須恵器	甕		SI1 ③	b	—/—/(7.5) /—	—・—	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 N7/ 2.5Y7/1	ナデ・当て具痕(同心円)／格子状タタキ・把手部分指ナデ	美濃須衛Ⅳ-3～Ⅴ-1		165	67
662	灰釉陶器	碗		SI1 ③	b	(16.4)/— /(2.7)/—	1.0・—	密　—	良好	N8/ N8/ N8/	回転ナデ／回転ナデ	K-90	灰釉刷毛塗り	165	67
663	灰釉陶器	碗		SI1 ①	a	(15.7)/— /(3.6)/—	1.0・—	密(～φ3の小石をわずかに含む)	良好	2.5Y8/1 2.5Y8/1 5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ		施釉範囲不明	165	67
664	灰釉陶器	皿		SI1 ①	a	(18.0)/— /(2.5)/—	1.0・—	密(～φ2の砂粒を少し含む)	良好	— — 10YR8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	K-90	内外面施釉 釉薬及び色調：灰釉(5Y7/2)	165	67
665	灰釉陶器	耳皿		SI1 ①	a	10.0/4.4/(2. 0)/—	3.7・1	密　—	良好	N8/ N8/ N8/	回転ナデ／回転ナデ・回転糸切り痕	K-90	内面のみ施釉 整形→折り曲げ→施釉の順が明瞭 釉薬及び色調：灰釉(10Y6/2)	165	65
666	灰釉陶器	壺・瓶類	EN2	SI1カマド ② —	a Ⅲ	—/— /(8.3)/(19.6)	—・—	密(～φ2の砂粒をわずかに含む)	良好	10YR7/1 — 10YR8/1	回転ナデ／回転ナデ		内外面に自然釉付着、外面全面灰釉を施釉 釉薬及び色調：灰釉	165	67

表87　遺構出土土器観察表②

掲載番号	種別	器種	出土位置			口径/底径/器高/最大径(cm)	口縁部残存率(X/12)・底部個体数	胎土(単位：mm)	焼成	色調(内面)(外面)(断面)	器面調整内面/外面	分類・時期	文様・その他(単位：cm)	挿図番号	図版番号
			出土区・グリット	遺構番号	層位										
667	灰釉陶器	手付瓶		SI1 ② SI1 ②	a b	−/−/(7.4)/−	−・−	密(〜φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y8/1 2.5Y8/1 2.5Y8/1	指ナデ／指ナデ・面取り	K-90	外面一部自然釉付着 釉薬及び色調：灰釉(7 5Y6/2)	165	65
668	土師器	甕B	EN1	SI1 ② SI1 ① −	a a Ⅲ	13.2/6.3/15.1/14.2	10.6・1	密(〜φ1の砂粒を多く含む)	良好	25Y8/1 10YR7/3 10YR4/1	ヨコナデ・指ナデ・ハケ(口頸部)／ヨコナデ(口縁部)・ハケ(胴・底部)		ハケ(3.0 11〜12条),内外面煤付着	165	65
669	土師器	甕B		SI1 ①	a	17.4/−/(2.2)/−	1.7・−	やや粗(〜φ1の砂粒を多く含む)	良好	10YR7/2 10YR7/2 2.5Y6/1	指オサエ／指オサエ後横ナデ		スス(外面)付着	165	67
670	土師器	鍋		SI1 ①	b	(18.1)/−/(2.2)/−	1.2・−	密(〜φ1の砂粒を多く含む)	良好	10YR7/1 10YR6/2 2.5Y4/1	ヨコナデ・ナデ／ヨコナデ			165	67
671	須恵器	坏蓋C	EN1	SI2 ② −	1 Ⅲ	(13.6)/−/2.4/−	4.6・−	密(〜φ3の砂粒を含む)	良好	5PB7/1 5PB7/1 2.5Y8/1	回転ナデ・ヘラナデ／ナデ・回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛V-1	内面自然釉付着、重ね焼き痕	167	67
672	須恵器	坏蓋C		SI2 ②	1	14.2/−/(2.0)/−	7.9・−	やや粗(〜φ2の長石をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛V-1	内面自然釉付着(重ね焼き痕)	167	67
673	須恵器	坏蓋C		SI2 ③	a	(13.0)/−/(2.2)/−	4.0・−	やや粗(〜φ1の長石をわずかに含む)	良好	2.5Y8/1 N8/ 2.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛V-1	内面自然釉付着	167	67
674	須恵器	坏身B2		SI2 ②	1	11.7/6.6/3.1/−	8.8・1	やや粗(〜φ1の長石をわずかに含む)	良好	N6/ N6/ N6/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラ切り痕	美濃須衛V-1併行期	内底面摩耗、底部ヘラ記号	167	65
675	須恵器	坏身B2		SI2 ②	1	(12.7)/−/(2.9)/−	4.2・−	密(〜φ1の長石をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ	美濃須衛V-1		167	67
676	須恵器	盤		SI2 ①	a	(17.4)/−/(1.9)/−	1.2・−	密(〜φ1の長石をわずかに含む)	良好	7.5Y7/1 N7/ 7.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛V-1		167	67
677	須恵器	盤		SI2-P1 ②	2	(17.6)/−/(2.1)/−	2.6・−	密(〜φ2の長石をわずかに含む)	良好	N7/ N6/ N7/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛V-1		167	67
678	須恵器	甕		SI2-P1 ① SI2-P7 ②	e b	−/5.0/(4.0)/−	−・1	密((底部中心当たりにφ8位の長石を5〜6個)わずかに長石の砂粒含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y7/1	あて具痕／タタキ	美濃須衛V期	内面当て具痕が格子状	167	67
679	須恵器	坏蓋A		SI3 ③	a	(14.8)/−/(2.8)/−	1.0・−	密(〜φ2の長石をやや多く含む)	良好	N6/ N5/ 7.5Y6/3	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	那加5併行期か	外面が一部摩耗	170	67
680	須恵器	坏蓋A		SI3 ②	b	(10.8)/−/(2.0)/−	1.8・−	密(〜φ1の長石・チャートをわずかに含む)	良好	N7/ 2.5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ	那加5併行期か		170	67
681	須恵器	坏蓋B		SI3 ①	a	(9.5)/−/(1.0)/(12.0)	1.0・−	密(〜φ1の長石を極わずかに含む)	不良	N8/ N8/ N8/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	那加5併行期		170	67
682	須恵器	坏蓋B		SI3 ①	a	−/−/(2.2)/−	−・−	密(〜φ2の長石をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ	那加5併行期		170	67
683	須恵器	坏蓋C		SI3 ①	b	(15.7)/−/(1.1)/−	1.3・−	密(〜φ1の長石をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛V-1		170	67
684	須恵器	坏身A		SI3 ②	a	(12.0)/−/(2.1)/(14.0)	1.0・−	密(〜φ1の長石をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ	那加5併行期		170	67
685	須恵器	坏身C		SI3 ④	a	(15.8)/−/(3.2)/−	1.0・−	密(〜φ2のチャート、長石をわずかに含む)	不良	5YR6/4 10YR5/1 5YR6/4	回転ナデ／回転ナデ	猿投産 美濃須衛V-1併行期か	酸化焔焼成	170	67
686	須恵器	盤		SI3 ①	a	(14.6)/(8.7)/2.8/−	1.0・0	密(〜φ1の長石をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ・貼り付け高台	美濃須衛V-1		170	67
687	須恵器	甕		SI3 ③	a	−/−/(4.0)/−	1.0・−	密(〜φ2のチャート、長石をやや多く含む)	不良	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y7/1			還元焔焼成、内外面摩耗	170	67
688	灰釉陶器	碗		SI3カマド	a	(13.6)/6.6/4.9/−	5.4・1	密(〜φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N8/ 2.5Y8/1 N8/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・回転ヘラ切り後ナデ消し・貼り付け高台	O-53	内面に重ね焼痕、内底面摩耗、内外面灰釉漬け掛け、釉薬及び色調：灰釉(2.5Y7/2)	170	65

表88　遺構出土土器観察表③

掲載番号	種別	器種	出土位置			口径/底径/器高/最大径(cm)	口縁部残存率(X/12)・底部個体数	胎土(単位：mm)	焼成	色調(内面)(外面)(断面)	器面調整内面/外面	分類・時期	文様・その他(単位：cm)	挿図番号	図版番号
			出土区・グリット	遺構番号	層位										
689	灰釉陶器	碗		SI3カマド SI3-P5 SI3-P5　② ― ―	1 b a ― ―	15.8/7.8/5.4/―	11.3・1	密(～φ2の砂粒をわずかに含む)	良好	5Y8/1 5Y8/1 5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転糸切り後ナデ・回転糸切り痕・貼り付け高台	O-53	灰釉漬け掛け、釉薬及び色調：灰釉(2.5Y6/2)	170	65
690	灰釉陶器	深碗		SI3カマド SI3-P5　②	a b	12.5/5.8/4.7/―	7.4・1	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N8/ N8/ 5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・回転ヘラ切り後ナデ・貼り付け高台	O-53	灰釉漬け掛け釉薬及び色調：灰釉(5Y6/2)	170	65
691	灰釉陶器	碗	EN2	SI3カマド ―	a Ⅲ	12.6/6.0/4.0/―	11.0・1	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N8/ N8/ 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・ヘラ切り後ナデ・回転ヘラ切り後ナデ・貼り付け高台	O-53	灰釉漬け掛け、釉薬及び色調：灰釉(2.5Y6/2)	170	65
692	灰釉陶器	Ⅲ		SI3カマド	a	12.2/6.2/2.6/―	10.2・1	密　―	良好	― 2.5Y8/1 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・回転ナデケシ・貼り付け高台	O-53	内面に付着物、自然釉付着、灰釉漬け掛け、高台に融着痕、釉薬及び色調：灰釉(7.5Y6/3)	170	65
693	灰釉陶器	輪花Ⅲ		SI3-P5　①	a	(13.8)/(7.4)/2.5/―	3.9・0	密(～φ4の小石を少々含む)	良好	N8/ N8/ 5Y8/1	回転ナデ・指ナデ(底面)／回転ナデ・貼り付け高台	O-53	輪花2ヶ所(指オサエ)、内外面灰釉漬け掛け、釉薬及び色調灰釉(2.5Y7/2)	170	67
694	灰釉陶器	段Ⅲ		SI3　④	a	―/―/(1.3)/―	―・―	密　―	良好	― 2.5Y8/1 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ	K-90	内面に灰釉施釉釉薬及び色調：灰釉(2 5Y8/1)	170	67
695	須恵器	坏蓋A		SI4　②	a	(10.8)/―/(2.1)/―	1.0・―	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N6/ N6/ 5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	猿投産か		174	67
696	須恵器	坏蓋A		SI4　④	a	(11.6)/―/(2.0)/―	1.5・―	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N6/ N6/ 2.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ	猿投産か		174	67
697	土師器	甕A		SI4　④ SI4　② SI4カマド	a a a	17.6/―/(7.0)/―	11.8・0	密(～φ2の砂粒を少し含む)	良好	5YR6/6 7.5YR6/4 10YR8/2	横ナデ・ハケ／口縁部横ナデ・ハケ		ハケ目1.4(8条)	174	65
698	須恵器	坏蓋C		SI5カマド　③	a	―/―/(0.8)/―	―・―	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ	美濃須衛Ⅴ-1		178	68
699	須恵器	坏身A		SI5　②	1	(10.8)/(6.1)/2.9/(12.6)	1.0・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	那加5併行期		178	68
700	須恵器	坏身B2		SI5カマド　②	a	(12.1)/―/(1.7)/―	1.4・―	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N8/ N8/ N8/	回転ナデ／回転ナデ			178	68
701	須恵器	碗	EM20～E04 EN3 EN4	SI5　② ― ― ―	a Ⅰ～Ⅱ Ⅱb Ⅲ	(15.2)/6.9/4.3/―	6.4・1	やや粗(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ 2.5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラ切り後ナデ・貼り付け高台	美濃須衛Ⅴ-1		178	65
702	須恵器	平瓶	EN3、4 EN3	SI5　① SI6カマド　① ― ―	a a Ⅴ層上 Ⅱb	8.2/―/(13.0)/―	5.2・―	密(～φ2の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N8/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛Ⅴ-1	上面全体に自然釉付着、内外面被熱による器面荒れ	178	65
703	灰釉陶器	長頸瓶	EN3	SI5　① ―	a Ⅲ	―/7.8/(16.3)/(13.5)	―・1	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N8/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・回転ヘラケズリ後ナデ・回転糸切り痕・貼り付け高台	猿投産か	外面二次焼成による荒れ、頸部外面自然釉付着	178	65
704	須恵器	甕	DM20～E04 EN3、4 EN7	SI5　① SI5　① SI5カマド　④ ― ― ―	a c a Ⅰ～Ⅲ Ⅱb Ⅴ層上	34.0/―/(44.7)/―	9.8・―	密(～φ1の長石をやや多く含む)	良好	2.5Y6/1 2.5Y6/1 2.5Y6/1	回転ナデ、ナデ、当て具痕(無文)／回転ナデ、タタキ	猿投産	外面に自然釉付着	178	66
705	灰釉陶器	Ⅲ		SI5　①	a	(13.6)/(7.6)/2.3/―	2.8・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・貼り付け高台	K-14か K-90	釉調不明	178	68
706	灰釉陶器	小瓶		SI5　①	a	―/(4.5)/(5.7)/―	―・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N8/ N7/ N8/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・貼り付け高台		内面自然釉付着、表面二次焼成による荒れ	178	68

表89　遺構出土土器観察表④

掲載番号	種別	器種	出土位置			口径/底径/器高/最大径(cm)	口縁部残存率(X/12)・底部個体数	胎土(単位：mm)	焼成	色調(内面)(外面)(断面)	器面調整 内面/外面	分類・時期	文様・その他(単位：cm)	挿図番号	図版番号
			出土区・グリット	遺構番号	層位										
707	土師器	甑		SI5　③	a	−/−/(6.1)/−	−・−	密(〜φ2の砂粒をわずかに含む)	良好	10YR8/2 10YR7/3 10YR8/1	ナデ／ナデ・指ナデ・指オサエ			178	68
708	須恵器	坏身A		SI6　②	b	(13.9)/−/(3.6)/(16.0)	1.3・−	密(〜φ2の長石をやや多く含む)	良好	N6/ N7/ N6/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	畿内系か 6C中頃	外面摩耗	181	68
709	須恵器	坏身C		SI6　④	a	13.6/9.3/3.8/−	8.7・1	やや粗(〜φ7の長石を含み、長石・チャートをわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・貼り付け高台	那加5併行期	外面付着物あり	181	65
710	須恵器	不明		SI6　④	a	−/−/(1.3)/−	1.0・−	密(〜φ2の長石・石英・チャートをやや多く含む)	良好	N5/ N6/ N5/	回転ナデ／回転ナデ			181	68
711	須恵器	盤か		SI6　③	a	(17.0)/−/(2.0)/−	1.0・−	密(〜φ1の長石をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N6/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ			181	68
712	須恵器	高坏脚か		SI6　③	a	−/(9.2)/(1.5)/−	−・0	密(〜φ1の砂粒を多く含む)	良好	10R4/2 N4/ 10R4/2	回転ナデ／回転ナデ	尾張系か	透し(単位不明)	181	68
713	須恵器	高坏脚か		SI6　④	b	(10.8)/−/(1.2)/−	−・−	密　−	良好	N6/ N6/ 10R5/2	回転ナデ／回転ナデ			181	68
714	ロクロ土師器	皿		SI6　②	b	(10.4)/(4.8)/1.8/−	1.0・0	密(〜φ1の長石・チャート・赤色土粒を極わずか含む)	良好	10YR8/2 10YR8/3 10YR8/2	回転ナデ／回転ナデ・回転糸切り痕			181	68
715	土師器	甕A		SI6　④	a	(19.4)/−/(3.5)/−	1.0・−	密(〜φ1の長石・雲母・チャートをやや多く含む)	良好	10YR7/3 5YR7/6 10YR7/3	横ナデ／横ナデ			181	68
716	土師器	甕B		SI6　②	a	(17.1)/−/(1.2)/−	1.0・−	密(〜φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	10YR8/2 10YR8/2 N3/	横ナデ・ハケ・ナデ／横ナデ			181	68
717	土師器	甕B		SI6-P3　①	a	−/−/(2.2)/−	1.0・−	密(〜φ1の砂粒を多く含む)	良好	10YR8/2 10YR7/3 7.5YR2/1	ナデ・ハケ／横ナデ・ハケ			181	68
718	須恵器	坏蓋C		SI7　③	a	(17.5)/−/(2.3)/−	1.1・−	密(〜φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛IV-3〜V-1	焼きひずみ・口縁部内面自然釉付着	183	68
719	須恵器	坏身A		SI7	a	(11.8)/(7.7)/3.5/(14.0)	1.0・0	密(〜φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ 2.5Y7/1 5Y7/1	回転ナデ・底面横ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・ヘラ切り後ナデ消し	那加5併行期	外面自然釉付着	183	68
720	須恵器	坏身A		SI7　④	a	(8.9)/−/(1.6)/(11.9)	1.2・−	密　−	良好	N7/ N7/ N8/	回転ナデ／回転ナデ	畿内系 TK217併行期		183	68
721	須恵器	坏身B2		SI7-P3　①	1	−/−/(4.3)/−	1.0・0	密　−	不良	5Y7/1 5Y7/1 5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ		還元焔焼成	183	68
722	須恵器	盤		SI7	a	−/(14.2)/(3.8)/−	−・0	密(〜φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ・ナデ・貼り付け高台	美濃須衛V-1	透し(単位不明)	183	68
723	土師器	甕A		SI7　①	1	−/−/(2.5)/−	1.0・−	密(〜φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	5YR6/6 7.5YR7/6 7.5YR8/6	不明			183	68
725	須恵器	坏蓋C		SI8カマド　③	a	(14.9)/−/(1.7)/−	1.6・−	密　−	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ	美濃須衛V-1		186	68
726	須恵器	坏蓋C		SI8カマド　③	a	(16.1)/−/(1.2)/−	1.0・−	密(〜φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ			186	68
727	土師器	甕B		SI8カマド　③	a	−/−/(7.0)/−	−・−	密(〜φ2の砂粒を多く含む)	良好	10YR7/1 10YR6/1 10YR4/1	ナデ／ナデ・ハケ		ハケ目(2.16条)、内面接合痕	186	68
728	須恵器	坏蓋	EN5	SI9カマド　① −	a Ⅲ	(15.5)/−/(2.0)/−	2.2・−	密(〜φ2の砂粒を少し含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ・ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛Vか	外面自然釉付着	188	68
729	土師器	甕A		SI9	1	−/−/(2.7)/−	1.0・−	密　−	良好	10YR8/2 10YR8/2 10YR8/1	横ナデか／横ナデか・ハケ			188	68
730	須恵器	坏蓋C		SI10　③	a	(17.8)/−/(1.8)/−	1.0・−	密(〜φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ 2.5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛V-1	外面自然釉付着	191	68

表90　遺構出土土器観察表⑤

掲載番号	種別	器種	出土位置			口径/底径/器高/最大径(cm)	口縁部残存率(X/12)・底部個体数	胎土(単位：mm)	焼成	色調(内面)(外面)(断面)	器面調整内面/外面	分類・時期	文様・その他(単位：cm)	挿図番号	図版番号
			出土区・グリット	遺構番号	層位										
731	須恵器	坏蓋C		SI10 ③	a	(16.5)/—/(1.6)/—	1.0・—	密(～φ2の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛	口縁部外面自然釉付着	191	68
732	須恵器	坏身A		SI10 ③	a	—/—/(3.0)/(14.5)	—・—	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N6/ N6/ N6/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	畿内系6C代		191	68
733	須恵器	坏身A		SI10 ②	b	—/(6.4)/(1.8)/—	—・1	密(～φ2の砂粒を少し含む)	良好	N5/ N4/ N6/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	畿内系6C代		191	68
734	須恵器	坏身B2		SI10 ①	b	—/7.0/(1.8)/—	—・1	密(～φ5の小石を少々含む)	不良	2.5Y8/1 2.5Y8/1 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・ヘラ切り後ナデ	美濃須衛Ⅳ	還元焔焼成、内底面摩耗	191	68
735	須恵器	坏身B2		SI10 ③	a	—/(5.8)/(2.4)/—	—・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	不良	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラ切り後ナデ	美濃須衛Ⅳ	還元焔焼成	191	68
736	須恵器	坏身B2		SI10 カマド ③	b	(13.0)/(7.5)/3.7/—	2.7・0	密(～φ3の砂粒を少し含む)	不良	2.5Y8/1 2.5Y8/1 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・ヘラ切り後ナデ	美濃須衛Ⅳ-2～3	還元焔焼成	191	68
737	須恵器	坏身C		SI10 ④ SI10 ④	1 a	(12.2)/(9.4)/3.1/—	1.5・1	密(～φ2の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 N6/ 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛Ⅳ-3		191	68
738	須恵器	坏身C		SI10 ①	b	(13.2)/(10.2)/3.7/—	3.5・0	密(～φ2の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y8/1	回転ナデ・指ナデ／回転ナデ・回転ヘラ切り後ナデ消し・貼り付け高台	美濃須衛Ⅳ-3		191	68
739	須恵器	坏身C		SI10 ①	a	—/(10.1)/(1.8)/—	—・0	密(～φ2の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ 2.5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ・指ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・貼り付け高台	美濃須衛Ⅳ-3		191	68
740	須恵器	坏身C		SI10 ③	1	14.6/10.7/3.4/—	8.5・1	密(～φ2の砂粒を多く含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラ切り痕・貼り付け高台	美濃須衛Ⅳ-2		191	65
741	須恵器	坏身C		SI10 ③	1	(19.8)/(16.0)/3.8/—	1.5・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 N7/ 2.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ	美濃須衛Ⅳ-2～3	内底面摩耗	191	68
742	須恵器	盤		SI10 ①	a	(19.8)/—/(1.6)/—	1.2・—	やや粗(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ	美濃須衛Ⅳ-2		191	68
743	須恵器	盤	EN6	SI10 ③ —	1 Ⅲ	—/(13.4)/(2.6)/—	—・0	密(～φ2の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ 2.5Y7/1 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・貼り付け高台	美濃須衛		191	68
744	須恵器	甕		SI10 ②	b	—/—/(7.9)/—	—・—	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・当て具痕	美濃須衛	頸部外面自然釉付着	191	68
745	須恵器	甕		SI10 ③	1	—/—/(6.5)/—	—・—	密　—	良好	N7/ 2.5Y7/1 2.5Y8/1	回転ナデ・当て具痕／回転ナデ・タタキ	美濃須衛		191	68
746	須恵器	甕		SI10 ③	1	—/—/(6.0)/—	—・—	密(～φ2の砂粒を多く含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ・当て具痕／回転ナデ・格子タタキ	美濃須衛	外面肩部自然釉付着	191	68
747	土師器	台付甕		SI10 ③	1	—/—/(4.3)/—	—・—	密(～φ2の砂粒を多く含む)	良好	7.5YR7/4 10YR7/3 10Y3/1	指ナデ・ヘラ状工具によるオサエ／指オサエ・指ナデ			191	68
748	土師器	甕B		SI10 カマド ③	a	(16.8)/—/(5.1)/—	2.4・—	密(～φ2の砂粒少し含む)	良好	10R6/6 10R6/8 10R6/6	横ナデ・ナデ・指オサエ／横ナデ・ハケ		内面コゲ付着	191	68
749	土師器	甕A		SI10 ③	b	—/—/(4.1)/—	—・—	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	10YR8/3 5YR7/6 10YR8/2	横ナデ・ハケ／横ナデ・ハケ			191	68
750	土師器	甕A		SI10 ④	d	—/—/(2.2)/—	—・—	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	10YR7/2 10YR6/2 10YR7/1	ハケ／ハケ			191	68
752	須恵器	坏蓋C	DM14	SI11 ④ —	a Ⅱ	(14.7)/—/3.2/—	6.4・—	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛Ⅴ-1		193	69
753	須恵器	坏蓋C		SI11 ③	a	(14.7)/—/(2.0)/—	1.5・—	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N8/ 5Y7/1 N8/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛Ⅳ-2か		193	69
754	須恵器	坏蓋C(転用硯)		SI11カマド ① SI11カマド ④	a 1	(14.0)/—/(2.2)/—	1.4・—	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛Ⅴ-1	内面墨痕	193	66
755	須恵器	坏蓋C		SI11 ②	a	(18.5)/—/(2.0)/—	1.0・—	密　—	良好	N8/ N8/ N8/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛Ⅳ-2		193	69

表91　遺構出土土器観察表⑥

掲載番号	種別	器種	出土位置			口径/底径/器高/最大径(cm)	口縁部残存率(X/12)・底部個体数	胎土(単位：mm)	焼成	色調(内面)(外面)(断面)	器面調整内面/外面	分類・時期	文様・その他(単位：cm)	挿図番号	図版番号
			出土区・グリット	遺構番号	層位										
756	須恵器	坏身B2		SI11 ④ EN5～EM6トレンチ	a a	(12.3)/－ /(3.6)/－	3.6・－	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N8/ N7/ N8/	回転ナデ／回転ナデ	美濃須衛Ⅴ期		193	69
757	須恵器	坏身C		SI11 ④	a	(15.8)/(11.8) /3.9/－	1.0・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N8/ N7/ N8/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・貼り付け高台	美濃須衛Ⅳ-3	内底面摩耗	193	69
758	須恵器	坏身C		SI11 ④	a	(14.0)/－ /(2.7)/－	2.0・－	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N8/ 2.5Y6/1 N8/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛Ⅳ-2		193	69
759	須恵器	坏身C		SI11カマド ④	1	(12.9)/－ /(3.1)/－	1.0・－	やや粗(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛		193	69
760	須恵器	坏身C		SI11 ④	c	－/(12.7) /(1.7)/－	－・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ 2.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・ヘラ切り後ナデ・貼り付け高台	美濃須衛Ⅳ-2か	内底面磨耗	193	69
761	須恵器	坏身C		SI11 ①	a	－/(10.3) /(1.3)/－	－・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 N7/ 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・ヘラ切り後ナデ消し・貼り付け高台	美濃須衛Ⅳ-2か	内底面磨耗	193	69
762	須恵器	はそう		SI11 ③	a	－/－/(4.1) /－	－・－	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N5/ 5R2/1 7.5R4/3	回転ナデ／回転ナデ・カキ目	畿内系7C代	外面肩部自然釉付着	193	69
763	須恵器	盤		SI11 ④	a	(19.7)/(12.9) /2.9/－	1.0・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ・ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・ヘラ切り後ナデ消し・貼り付け高台	美濃須衛Ⅳ-3	内底面摩耗	193	69
764	須恵器	坏蓋C		SI11 ④	a	(18.0)/－ /(1.5)/－	1.0・－	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ 2.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛Ⅳ		193	69
765	須恵器	盤		SI11 ④	a	－/(15.6) /(2.2)/－	－・0	密(～φ3の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 N7/ 2.5Y8/2	回転ナデ／ナデ・回転ヘラケズリ・貼り付け高台	美濃須衛Ⅳ-3		193	69
766	須恵器	甕		SI11 ③ SI11 ②	a a	－/－/(6.5) /－	－・－	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N5/ N5/ N5/	回転ナデ・接合痕をハケナデ・輪積み痕／回転ナデ・タタキ・カキ目か	畿内系		193	69
767	須恵器	甕		SI11 ②	a	(28.9)/－ /(2.6)/－	1.3・－	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	5Y7/1 N7/ N8	回転ナデ／回転ナデ	7C代		193	69
768	土師器	甕A		SI11 ④	a	－/－/(2.9) /－	1.0・－	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	10YR8/2 10YR8/2 10YR8/2	不明			193	69
769	須恵器	坏蓋C		SI12カマド ①	1	(14.4)/－ /(2.0)/－	4.2・－	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ 7.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛Ⅴ-1		196	69
770	須恵器	坏蓋C		SI12カマド ①	1	(13.8)/－ /(1.4)/－	2.1・－	密(～φ2の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛Ⅴ-1	焼きひずみ	196	69
771	須恵器	坏身C		SI12 SI12	b 3	(13.8)/11.0 /3.8/－	5.3・1	密(～φ2の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ 5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラ切り・回転ヘラケズリ(右回転)・貼り付け高台	美濃須衛Ⅳ-3	底部内面摩耗	196	65
772	須恵器	盤		SI12カマド ①	1	(18.6)/(11.6) /3.5/－	4.8・0	密(～φ2の砂粒を少し含む)	良好	N7/ N7/ 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・ヘラ切り後ナデ・貼り付け高台	美濃須衛Ⅳ-3	内外面に自然釉付着	196	66
773	須恵器	坏身C		SI13 ②	1	－/(9.8) /(2.5)/－	－・0	やや粗(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・貼り付け高台	美濃須衛Ⅳ-3		198	69
774	須恵器	坏蓋C		SI14 ①	b	(13.4)/－ /(2.0)/－	1.0・－	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ 2.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛Ⅳ-3	内外面重ね焼き痕	200	69
775	須恵器	坏身B2		SI14	－	(12.7)/(7.8) /3.2/－	1.1・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ 2.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラ切り	美濃須衛Ⅴ-1		200	69
776	須恵器	甕		SI14	1	－/－/(3.4)/ －	1.0・－	やや粗(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 N7/ 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ	美濃須衛Ⅳ-3		200	69

表92　遺構出土土器観察表⑦

掲載番号	種別	器種	出土位置			口径/底径/器高/最大径(cm)	口縁部残存率(X/12)・底部個体数	胎土(単位：mm)	焼成	色調(内面)(外面)(断面)	器面調整 内面/外面	分類・時期	文様・その他(単位：cm)	挿図番号	図版番号
			出土区・グリット	遺構番号	層位										
777	灰釉陶器	碗		SI14　③	a	―/(6.9)/(3.4)/―	―・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y8/1	回転ナデ・ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・貼り付け高台	0-53	釉薬及び色調：灰釉(2.5Y7/3)	200	69
778	灰釉陶器	碗		SI14　④	b	―/7.3/(2.1)/―	―・1	密(～φ2の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y8/1 N8/ 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ヘラケズリ・貼り付け高台	0-53	内底面摩耗	200	69
779	灰釉陶器	皿		SI14　③	a	―/(5.8)/(2.0)/―	―・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	― 2.5Y8/1 5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラ切り後ナデ・貼り付け高台	K-14～K-90	底部内面2重の圏線、釉薬及び色調：灰釉(7.5Y6/2)、内面重ね焼き	200	69
780	灰釉陶器	皿(転用硯)		SI14　③	b	―/(6.6)/(1.5)/―	―・0	密　―	良好	10YR8/1 10YR7/1 2.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・回転糸切り痕・貼り付け高台	0-53	内面摩耗、朱墨付着	200	66
781	ロクロ土師器	不明		SI14　②	a	―/(5.8)/(0.9)/―	―・1	密　―	良好	2.5Y6/1 10YR6/2 10YR8/2	指ナデ／回転糸切り痕			200	69
782	須恵器	坏蓋C	EM7	SI15カマド　③ SI15　③ ―	b a Ⅲ	14.3/―/3.3/―	9.0・―	密(～φ3の砂粒をわずかに含む)	良好	N5/ N6/ N5/	回転ナデ・ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛Ⅳ-3～Ⅴ-1		203	66
783	須恵器	坏蓋C		SI15カマド　①	b	―/―/(2.9)/―	―・―	密(～φ2の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛Ⅳ-3	内面自然釉付着	203	69
784	須恵器	坏蓋C		SI15カマド　③	c	(14.2)/―/(1.1)/―	4.1・―	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ	美濃須衛Ⅴ-1		203	69
785	須恵器	坏蓋C		SI15　④	b	(13.8)/―/(1.7)/―	3.6・―	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ	美濃須衛Ⅴ-1		203	69
786	須恵器	坏蓋C		SI15　②	a	(17.2)/―/(2.2)/―	1.0・―	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N8/ N7/ N8/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛Ⅴ-1		203	69
787	須恵器	坏蓋C		SI15　③	a	(17.8)/―/(1.0)/―	1.0・―	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	5Y7/1 5Y7/1 5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ			203	69
788	須恵器	坏身A		SI15　④	b	(12.4)/―/(2.7)/(15.0)	1.5・―	密(～φ1の砂粒を少し含む)	良好	5B5/1 5B5/1 5R4/1	回転ナデ／回転ナデ	畿内系6C代		203	69
789	須恵器	坏身B2		SI15　④ SI15カマド　③ SI15　③	b b a	(11.1)/(6.5)/3.4/―	3.9・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ・ヘラ切り後ナデ消し	美濃須衛Ⅴ期		203	69
790	土師器	坏身B2		SI15カマド　③	a	(13.1)/(7.4)/3.5/―	2.9・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	10YR8/2 2.5Y8/1 2.5Y8/1	内外面磨滅		内面漆付着か	203	69
791	須恵器	坏身B2		SI15カマド　② SI15カマド　③	c c	(13.4)/(7.9)/(3.4)/―	2.1・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	不良	N8/ N8/ N8/	回転ナデ／回転ナデ・ヘラ切り後ナデ消し	美濃須衛Ⅳ-3～Ⅴ-1	還元焔焼成、内面摩耗	203	69
792	須恵器	坏身B2		SI15カマド　②	a	―/(6.7)/(2.9)/―	―・1	密(～φ2の砂粒を少し含む)	良好	10YR8/1 10YR8/1 10YR8/1	回転ナデ／回転ナデ・ヘラ切り後ナデ	在地産か		203	69
793	須恵器	坏身C		SI15カマド　②	c	(13.3)/9.7/3.9/―	3.2・1	密(～φ2の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ 2.5Y7/1 N8/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・貼り付け高台	美濃須衛Ⅳ-3	内底面摩耗、外底面墨書「大口」	203	66
794	須恵器	坏身C		SI15カマド　①	a	(15.3)/―/(4.0)/―	2.5・―	密(～φ2の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 N7/ 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛Ⅴ-1		203	69
795	須恵器	坏身C		SI15カマド　③	b	(12.6)/9.8/3.9/―	2.4・1	密(～φ5の小石を少々含む)	良好	N7/ N7/ N8/	回転ナデ・ナデ／回転ナデ・ナデ・ヘラケズリ・貼り付け高台	美濃須衛Ⅳ-3		203	66
796	須恵器	坏身C		SI15カマド　②	a	13.1/10.1/3.3/―	8.1・1	密(～φ3の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N8/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・貼り付け高台	美濃須衛Ⅳ-3～Ⅴ-1		203	66
797	須恵器	坏身C		SI15-P1　①	c	―/―/(4.0)/―	1.0・―	密　―	良好	N8/ N8/ N8/	回転ナデ／回転ナデ・ヘラ切り後ナデ消し	美濃須衛Ⅳ-3～Ⅴ-1		203	69
798	須恵器	盤		SI15カマド　③	b	(19.9)/(13.7)/3.6/―	1.0・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・貼り付け高台	美濃須衛Ⅴ-1		203	69
799	土師器	甕A		SI15　④	b	―/―/(3.6)/―	―・―	密(～φ2の砂粒を少し含む)	良好	10YR7/2 10YR8/2 10YR8/2	ナデ・指オサエ／ハケ		ハケ目(2.4、6条)	203	69

表93　遺構出土土器観察表⑧

掲載番号	種別	器種	出土位置			口径/底径/器高/最大径(cm)	口縁部残存率(X/12)・底部個体数	胎土(単位：mm)	焼成	色調(内面)(外面)(断面)	器面調整内面/外面	分類・時期	文様・その他(単位：cm)	挿図番号	図版番号
			出土区・グリット	遺構番号	層位										
800	土師器	甕B		SI15カマド ②	c	(21.6)/－/(4.3)/－	1.5・－	密(～φ2の小石多く含む)	良好	10YR6/2 10YR8/1 10YR8/1	横ナデ・ハケ・板ナデ／横ナデ・ハケ		ハケ目(2.8、10条)	203	69
801	須恵器	坏身Bか	DM17	SD6 ① SD6 ① SD6 ① －	b a 1 Ⅲ	(12.5)/7.5/3.3/－	1.0・1	密　－	不良	5YR6/6 2.5YR5/6 5YR6/6	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラ切り後ナデ	猿投産か	酸化焔焼成	209	70
802	須恵器	坏身C	DN17 DN16	SD6 ① － －	1 Ⅲ Ⅲ	(12.8)/7.6/3.6/－	1.0・1	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラ切り・貼り付け高台	美濃須衛Ⅴ-1	内底面摩耗	209	70
803	須恵器	坏身C		SD6 ①	1	(12.2)/－/(2.9)/－	1.0・－	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ 5Y6/1 N7/	回転ナデ／回転ナデ	美濃須衛Ⅳ-3		209	70
804	須恵器	鉄鉢		SD6 ① SD6 ① SD6 ①	1 a b	13.3/7.6/5.1/－	8.0・1	やや粗(～φ1の砂粒をわずかに含む)	不良	7.5Y7/1 N7/ 7.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラ切り	美濃須衛Ⅳ-3	還元焔焼成	209	66
805	須恵器	鉄鉢		SD6 ① SD6 ②	c d	(11.0)/(7.4)/(4.6)/－	1.5・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N8/ N7/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラ切り	美濃須衛Ⅳ-3	内面に自然釉付着	209	70
806	須恵器	平瓶	DN15 DN16 DN17	SD6 ③ － － －	b Ⅱ～Ⅲ Ⅲ Ⅲ	－/(9.0)/(9.6)/－	－・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N6/ N7/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ、回転ヘラ切り	畿内系7C代	外面自然釉付着	209	66
807	須恵器	甕か鉢	DN17	SD6 ② －	d Ⅲ	－/(12.2)/(2.6)/－	－・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	不良	5Y8/1 2.5Y8/2 5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・底部無調整	猿投産か	還元焔焼成	209	70
808	灰釉陶器	壺･瓶類		SD6 ②	c	－/－/(8.1)/(15.0)	－・－	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	5Y8/1 5Y8/1 5Y8/1	回転ナデ／回転ヘラケズリ	東濃産か	釉薬及び色調：灰釉(7.5Y6/3)	209	70
809	土師器	鍋		SD6 ②	d	－/－/(7.0)/－	－・－	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	10YR8/1 10YR8/1 10YR8/1	ハケ・板ナデ／横ナデ・ハケ・指オサエ			209	70
810	須恵器	平瓶か		SD3 ③	d	(6.9)/－/(6.2)/－	2.5・－	密(～φ2の砂粒を少し含む)	良好	N4/ N4/ 2.5YR4/1	回転ナデ／回転ナデ	畿内系		209	70
811	須恵器	坏蓋A		SD14 ②	b	－/－/(2.0)/－	－・－	密(～φ1の砂粒を少し含む)	良好	N5/ N5/ N6/	回転ナデ・ナデ／回転ナデ・回転ヘラ切り	畿内系7C代か		212	70
812	須恵器	坏身B2		SD14 ①	a	－/6.2/(2.6)/－	－・1	やや粗(～φ2の砂粒を少し含む)	良好	N8/ N8/ N8/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラ切り後ナデ消し	7c代		212	70
813	須恵器	碗		SD14 ①	a	－/(8.0)/(2.1)/－	－・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ・指ナデ／回転ナデ・貼り付け高台	美濃須衛Ⅴ期	底部外面ヘラ記号、内底面摩耗	212	70
814	須恵器	鉢か甕		SD14 ②	b	－/－/(3.8)/－	1.0・－	密　－	良好	2.5Y7/1 2.5Y5/1 2.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ	畿内系7C代	沈線(幅0.3、2条)	212	70
815	須恵器	横瓶		SD14 ①	c	(11.2)/－/(5.7)/－	1.0・－	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ・当て具痕／回転ナデ・タタキ	美濃須衛7C前半		212	70
816	須恵器	甕		SD14 ①	b	－/－/(7.1)/－	－・－	密(～φ2の砂粒を多く含む)	良好	N5/ N5/ N5/	回転ナデ・当て具痕／回転ナデ・カキ目・タタキ	7C代		212	70
817	灰釉陶器	皿か鉢		SD14 ②	a	(18.6)/－/(1.4)/－	1.0・－	密　－	良好	－ 5Y7/1 5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ		釉薬及び色調：灰釉(7.5Y6/3)	212	70
818	灰釉陶器	小碗	DN20	SD14 ② －	a Ⅲ	10.4/(5.0)/3.7/－	5.4・1	密　－	良好	－ N8/ 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・貼り付け高台	K-90	釉薬及び色調：灰釉(7.5Y6/3)	212	70
819	土師器	甕A	DM20	SD14 ① －	a Ⅲ	(17.4)/－/(19.4)/－	1.0・－	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y8/3 10YR8/3 N2/	横ナデ・ハケ・ナデ指オサエ／横ナデ・ハケ			212	70
820	土師器	甕A		SD14 ②	c	(21.4)/－/(4.9)/－	1.7・－	密(～φ1の砂粒を少し含む)	良好	2.5YR6/8 2.5YR6/8 10YR8/4	横ナデ・ハケ／横ナデ・ハケ			212	70
821	須恵器	坏蓋C		SD16 ①	b	(17.5)/－/(1.5)/－	1.0・－	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛Ⅴ-1	口縁端部外面自然釉付着	214	70
822	灰釉陶器	深碗		SD16	－	(14.9)/7.8/6.4/－	1.1・1	密(～φ3の砂粒をわずかに含む)	良好	N8/ N8/ N8/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・貼り付け高台	0-53	釉薬及び色調：灰釉(7.5Y6/2)内外面灰釉漬け掛け	214	70
823	ロクロ土師器	碗		SD16 ①	a	10.6/5.5/3.7/－	11.5・1	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	7.5Y8/3 7.5Y8/3 7.5Y8/3	回転ナデ／回転ナデ・回転糸切り痕			214	66

表94　遺構出土土器観察表⑨

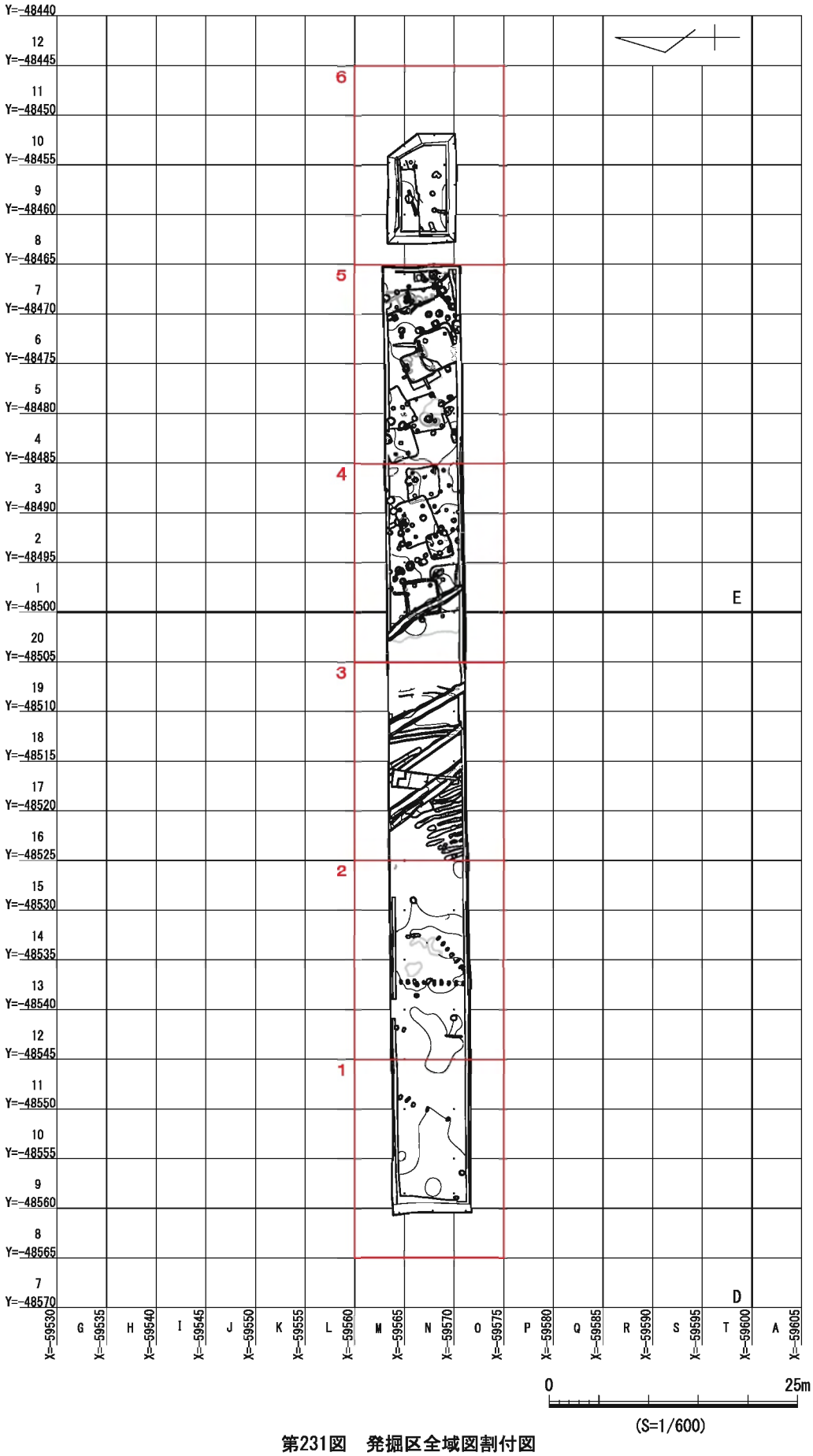
掲載番号	種別	器種	出土位置			口径/底径/器高/最大径(cm)	口縁部残存率(X/12)・底部個体数	胎土(単位：mm)	焼成	色調(内面)(外面)(断面)	器面調整 内面/外面	分類・時期	文様・その他(単位：cm)	挿図番号	図版番号
			出土区・グリット	遺構番号	層位										
824	ロクロ土師器	碗		SD16	—	—/—/(2.7)/—	1.0・—	密　—	良好	2.5Y8/2 2.5Y8/2 2.5Y8/2	回転ナデ／回転ナデ		内面煤・タール付着	214	70
825	ロクロ土師器	皿		SD16	—	(9.8)/(5.0)/1.1/—	1.3・0	密　—	良好	7.5YR8/4 7.5YR8/4 7.5YR8/2	不明／回転糸切り痕			214	70
826	ロクロ土師器か	皿		SD16　①	a	(9.2)/—/(1.1)/—	1.6・—	密　—	良好	10YR8/2 10YR8/2 10YR8/1	不明			214	70
827	須恵器	瓶類	D018 DN15 DN17	SN1-D6b　② SN1-D6b　② SD6　② — — —	a b b Ⅲ Ⅲ Ⅲ	—/—/(12.3)/—	—・—	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/2 2.5Y5/1 2.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・ヘラナデ	猿投産か		215	70
828	須恵器	坏身Cか		SP1　②	b	(13.8)/—/(2.8)/—	1.0・—	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ 2.5Y6/1 2.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ			219	71
829	土師器	甕B		SP1　①	d	(15.0)/—/(2.5)/—	1.3・—	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	10YR6/3 7.5YR6/3 10YR7/3	横ナデ／横ナデ			219	71
830	須恵器	盤		SP4　①	1	(18.0)/—/(2.1)/—	1.0・—	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛Ⅳ-2		219	71
831	土師器	甕A		SP5　①	c	(16.8)/—/(6.0)/—	1.0・—	密(～φ3の砂粒を多く含む)	良好	2.5Y3/1 7.5YR6/6 5Y5/2	横ナデ／		口縁部内面沈線状のハケ目、口縁部外面炭化物付着	219	71
832	須恵器	碗		SP8　②	d	(14.0)/—/(2.7)/—	1.1・—	密　—	不良	10YR7/6 10YR6/1 10YR7/6	回転ナデ／回転ナデ	猿投産	酸化焔焼成	219	71
833	須恵器	坏蓋C		SP9　①	a	(16.0)/—/(1.1)/—	1.0・—	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛Ⅴ-1		219	71
834	須恵器	坏蓋C		SP9　①	1	(18.0)/—/(1.8)/—	1.0・—	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛	外面自然釉付着	219	71
835	須恵器	坏身A		SP9　①	a	—/—/(1.9)/—	1.0・—	密　—	良好	N7/ N7/ 10Y8/1	回転ナデ／回転ナデ	那加5併行		219	71
836	須恵器	坏身C		SP9　①	1	(15.0)/—/(4.0)/—	1.2・—	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5YR7/1 2.5YR7/1 2.5YR8/1	回転ナデ／回転ナデ	美濃須衛Ⅳ		219	71
837	灰釉陶器	碗		SP9　①	b	—/(7.0)/(1.7)/—	—・0	密　—	良好	2.5Y8/1 2.5Y8/1 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラ切り後ナデ・貼り付け高台	K-90か	灰釉漬け掛けか、内底面摩耗 釉薬及び色調：	219	71
838	須恵器	坏蓋C		SK51　②	b	(15.8)/—/(2.3)/—	1.2・—	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛Ⅳ-2		224	72
839	須恵器	坏身C		SK51 SK51	g d	(12.8)/(10.2)/3.0/—	4.4・0	密(～φ2の砂粒を少し含む)	良好	N7/ N7/ 5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・貼り付け高台	美濃須衛Ⅳ-2		224	72
840	須恵器	坏身C		SK51　②	e	(14.8)/12.0/3.4/—	5.9・1	密(～φ2の砂粒を少し含む)	良好	10YR7/1 N6/ 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラ切り後ナデ・貼り付け高台	美濃須衛Ⅳ-2	底部内外面ヘラ記号	224	71
841	須恵器	平瓶か		SK51　②	a	—/(9.0)/(8.3)/—	—・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ 2.5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛Ⅳ		224	72
842	須恵器	坏蓋A		SK53　①	1	(12.0)/—/(2.5)/—	1.0・—	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N6/ 5Y7/1 5Y6/6	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	畿内系7C代	外面摩耗	224	72
843	須恵器	盤(転用硯)		SK53	a	(16.8)/(6.3)/2.5/—	1.9・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 N7/ 5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛Ⅴ期	内面墨痕	224	66
844	土師器	甕A	EMI	SK46　① —	b Ⅱb	(13.8)/—/(3.8)/—	1.8・—	密(～φ3の砂粒を含む)	良好	5YR7/6 7.5YR6/6 7.5Y3/1	ハケ・輪積み痕／ナデ			230	72
845	灰釉陶器	短頸壺		SK49　②	c	(8.0)/—/(3.7)/—	1.6・—	密(～φ2の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ		外面自然釉付着	230	72
846	須恵器	坏蓋Aか		SK63　③	a	—/—/(1.8)/—	—・—	密(～φ4の小石を含む)	不良	2.5Y7/2 2.5Y8/1 2.5Y8/1	回転ナデ／	畿内系	還元焔焼成、内面同心円状の当具痕か	230	71
847	須恵器	坏蓋C		SK73　②	d	(17.0)/—/(1.1)/—	1.0・—	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛Ⅴ-1		230	—

表95　遺構出土土器観察表⑩

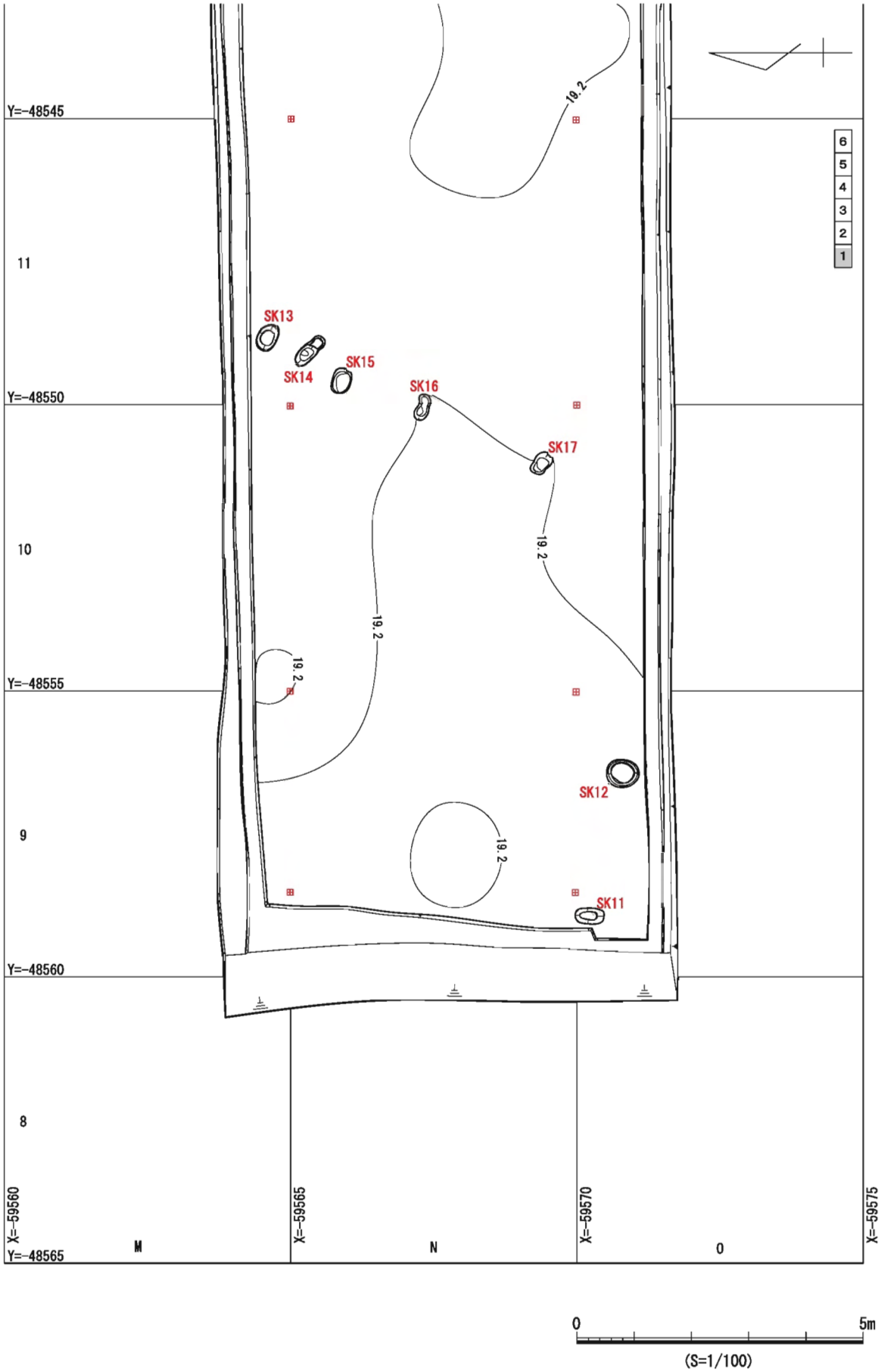
掲載番号	種別	器種	出土位置			口径/底径/器高/最大径(cm)	口縁部残存率(X/12)・底部個体数	胎土(単位：mm)	焼成	色調(内面)(外面)(断面)	器面調整内面/外面	分類・時期	文様・その他(単位：cm)	挿図番号	図版番号
			出土区・グリット	遺構番号	層位										
848	須恵器	坏身C(転用硯)		SK83 ①	1	−/(11.0)/(2.2)/−	−・0	密(〜φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・ヘラケズリ・貼り付け高台	美濃須衛IV-3	内面墨痕、外面自然釉付着	230	72
849	須恵器	坏蓋C		SK85 ①	1	−/−/(1.8)/−	−・−	密(〜φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ 10YR7/1	回転ナデ／回転ヘラケズリ	美濃須衛V-1		230	72
850	須恵器	坏身Cか盤		SK85 ②	b	−/(17.6)/(1.3)/−	−・0	密(〜φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 N7/ 5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・回転糸切り後ナデ・貼り付け高台	美濃須衛		230	72
851	須恵器	坏身B2		SK86 ② SK86 ①	1 d	(12.8)/−/(3.6)/−	3.0・−	密(〜φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ 5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛Ⅲ〜Ⅳ併行期		230	72
852	灰釉陶器	碗		SK86 ①	a	−/(6.0)/−/−	−・0	密(〜φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラ切り後ナデ・貼り付け高台	0-53	釉薬及び色調：灰釉(2.5Y7/1)内外面灰釉施釉	230	72
853	ロクロ土師器	碗		SK107 ①	1	(10.6)/−/(2.8)/−	1.0・−	密(〜φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	5Y7/1 5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ			230	72
854	須恵器	坏身A	EM4	SK109 ① −	a Ⅱb	−/(4.6)/(4.0)/(12.0)	−・0	密　−	不良	2.5Y7/1 2.5Y7/1 5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	畿内系6C代	還元焔焼成	230	72
855	須恵器	坏身C		SK112 ①	3	(14.2)/(10.0)/3.8/−	1.0・0	密(〜φ3の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ 2.5Y7/1 7.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・貼り付け高台	美濃須衛V-1		230	72
856	土師器	甕B		SK112 ① SK112 ①	1 6	(23.4)/−/(6.0)/−	2.6・−	密(〜φ2の砂粒を多く含む)	良好	2.5Y8/1 10YR8/2 2.5Y5/1	ナデ・ハケ／横ナデ・ハケ		外面スス付着	230	72
857	土師器	製塩土器か		SK112 ①	3	(11.2)/−/(5.0)/−	2.5・−	密(〜φ2の砂粒を多く含む)	良好	5YR6/6 7.5YR7/6 10YR8/3	板ナデ・指オサエ／口縁キザミ・指オサエ			230	72
858	須恵器	不明		SK113 ②	b	−/−/(2.5)/−	−・−	密(〜φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N5/ N5/ 7.5R5/1	回転ナデ／回転ナデ・貼り付け高台	畿内系		230	72
859	須恵器	坏蓋C		SK113 ①	a	(17.0)/−/(1.6)/−	1.0・−	密(〜φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ	美濃須衛IV-3〜V-1		230	72
860	須恵器	平瓶か		SK113 ②	c	−/−/(6.6)/(23.4)	−・−	密(〜φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N8/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・削り		体部上半外面自然釉付着	230	72
861	須恵器	不明		SK113 ①	b	−/−/(2.5)/−	1.0・−	密(〜φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N6/ N6/ N7/	回転ナデ／回転ナデ	7C代か		230	72
862	須恵器	坏蓋C		SK114 ①	1	−/−/(2.3)/−	−・−	やや粗(〜φ3の砂粒を少し含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ・ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛IV-3		230	72
863	須恵器	水瓶	E06	SK114 ① SK114 −	1 d Ⅱb	−/−/(15.5)/(22.3)	−・−	密(〜φ2の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・貼り付け高台	美濃須衛IV-2〜3	沈線(幅0.2)	230	72
864	須恵器	盤		SK116 ①	b	(19.0)/−/(1.7)/−	1.0・−	密(〜φ1の砂粒をわずかに含む)	不良	5Y8/1 2.5Y8/1 2.5Y8/2	回転ナデ／回転ナデ	美濃須衛IV期	還元焔焼成	230	72
865	土師器	甕B		SK116 ②	e	−/−/(1.4)/−	1.0・−	密(〜φ1の砂粒を少し含む)	良好	10YR8/3 10YR8/3 10YR8/2	ハケ／横ナデ			230	72
866	須恵器	蓋類		SK120	a	(8.0)/−/(1.1)/−	1.0・−	密(〜φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ	美濃須衛IV-3〜V-1	ミニチュアか	230	72
867	須恵器	坏蓋B		SK128 ②	a	(9.8)/−/(1.7)/(11.9)	1.7・−	密(〜φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	那加5併行期	外面自然釉付着	230	69
868	須恵器	坏蓋C		SK129 ③	a	(13.8)/−/(1.5)/−	1.0・−	密　−	良好	N7/ 5Y7/1 5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ	美濃須衛IV	外面重ね焼き痕、外面に自然釉付着	230	69
869	須恵器	盤か		SK129 ③	a	(15.8)/−/(2.3)/−	1.0・−	密(〜φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 N7/ 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛IV		230	69

表96　遺構出土石器・石製品一覧表

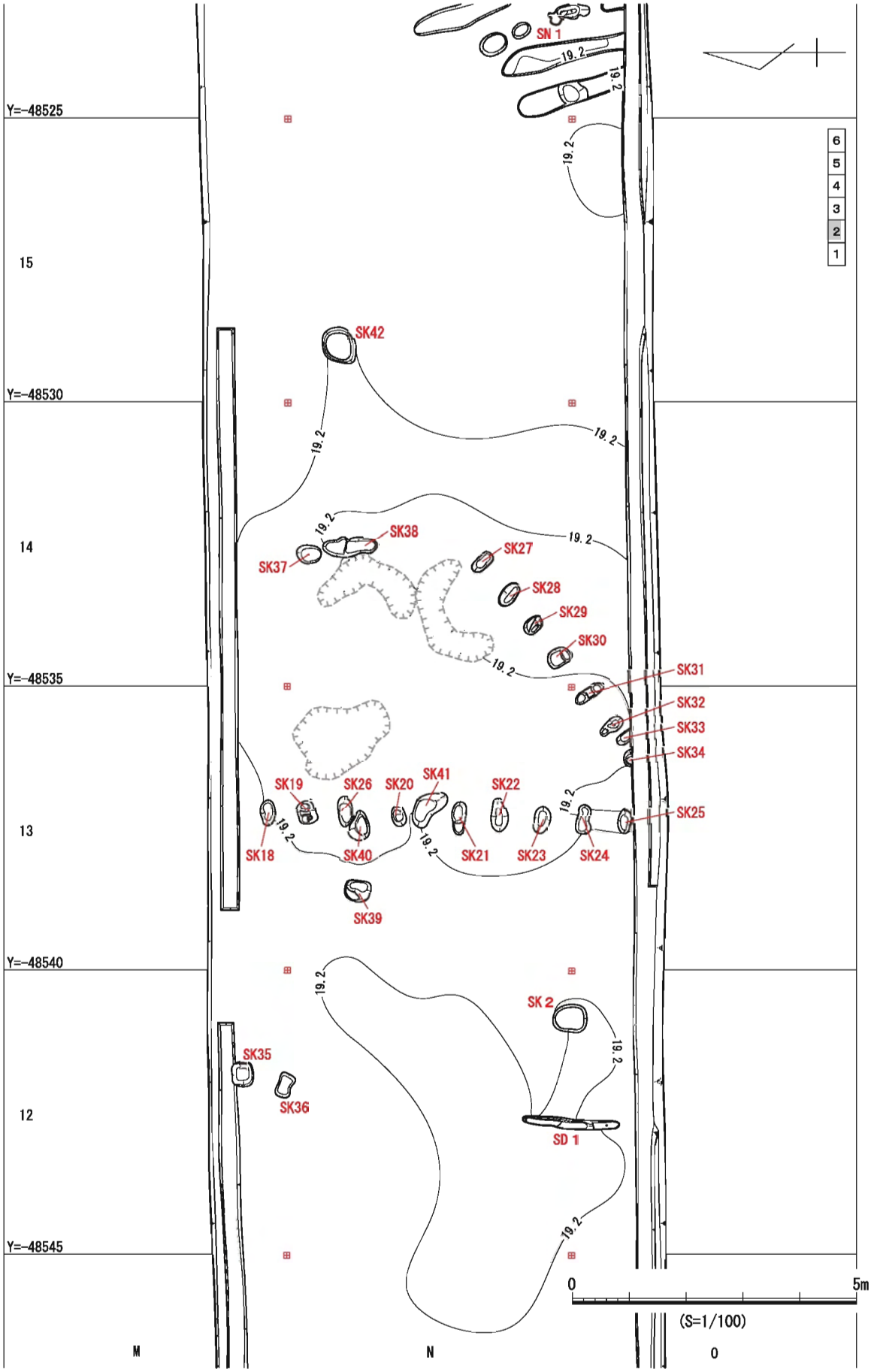
掲載番号	取上番号	器種	出土位置		素材	長軸/短軸/幅・厚さ(cm)			重さ(g)	観察・その他	挿図番号	図版番号
			遺構番号	層位								
751	2834	砥石	SI10 ④	1	砂岩	17.0	6.6	6.5	1100.0		191	75
724	2538	石皿・台石類	SI7 ③	2	花崗岩	(12.5)	(15.6)	(7.3)	(2500.0)		183	75
—	1442	石皿・台石類	SI1 ②	a	花崗閃緑岩	12.2	10.5	(13.0)	(2500.0)		—	—
—	911	磨石・叩石類	SK43 ③	a	砂岩	13.3	6.1	(3.4)	(429.4)	使用痕分類AE	—	—



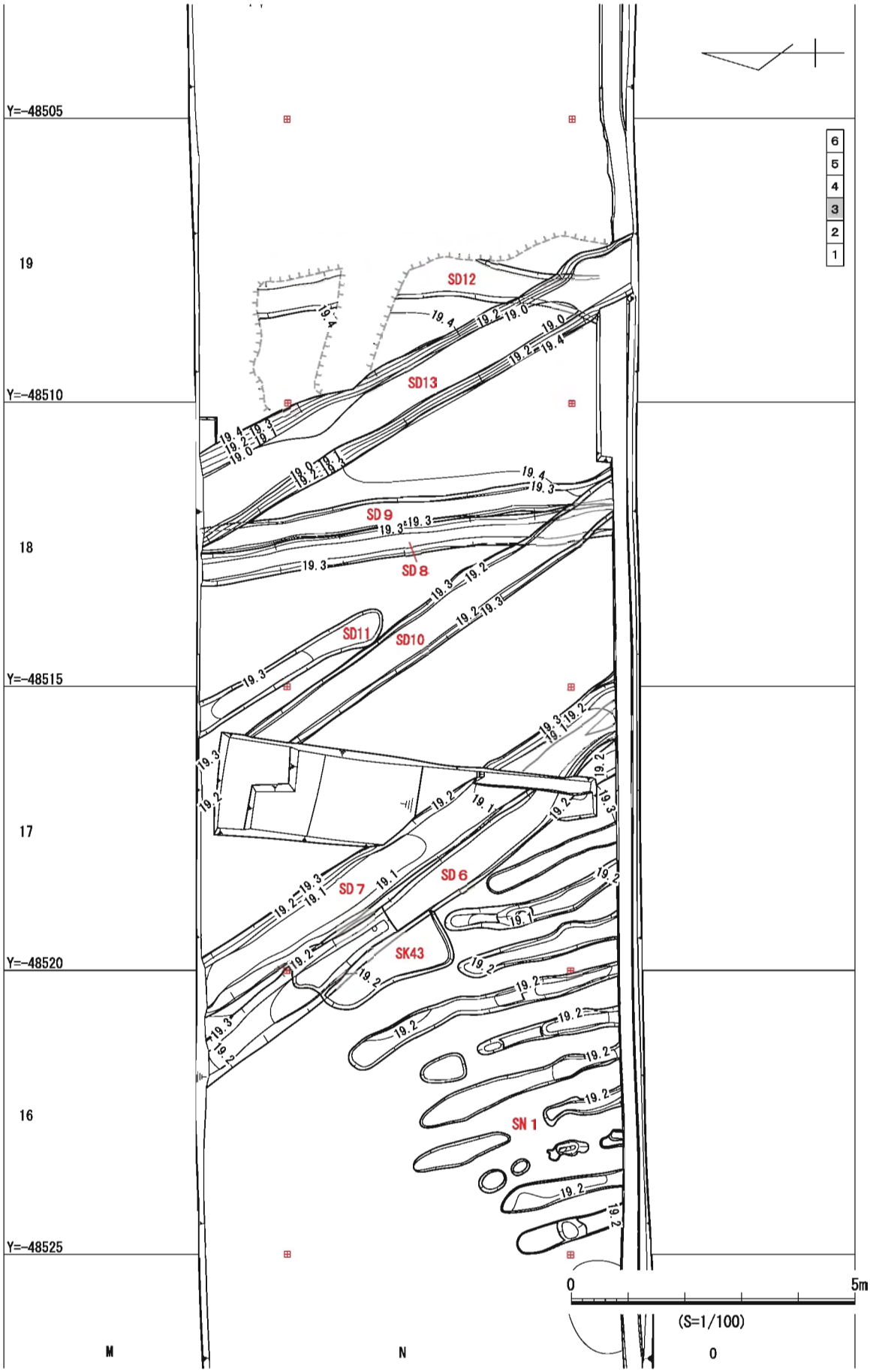
第231図　発掘区全域図割付図



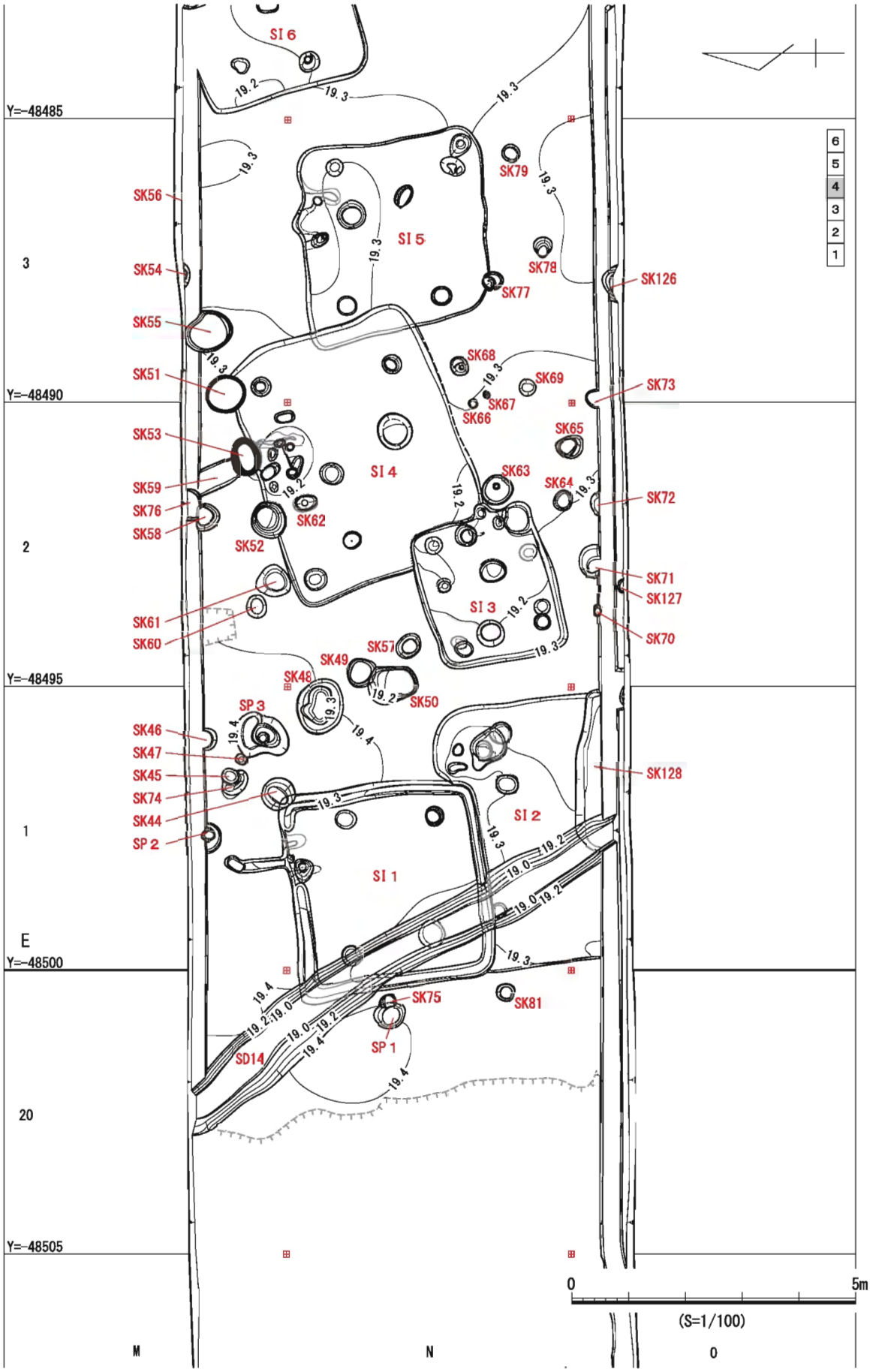
第232図　発掘区全域図分割図①



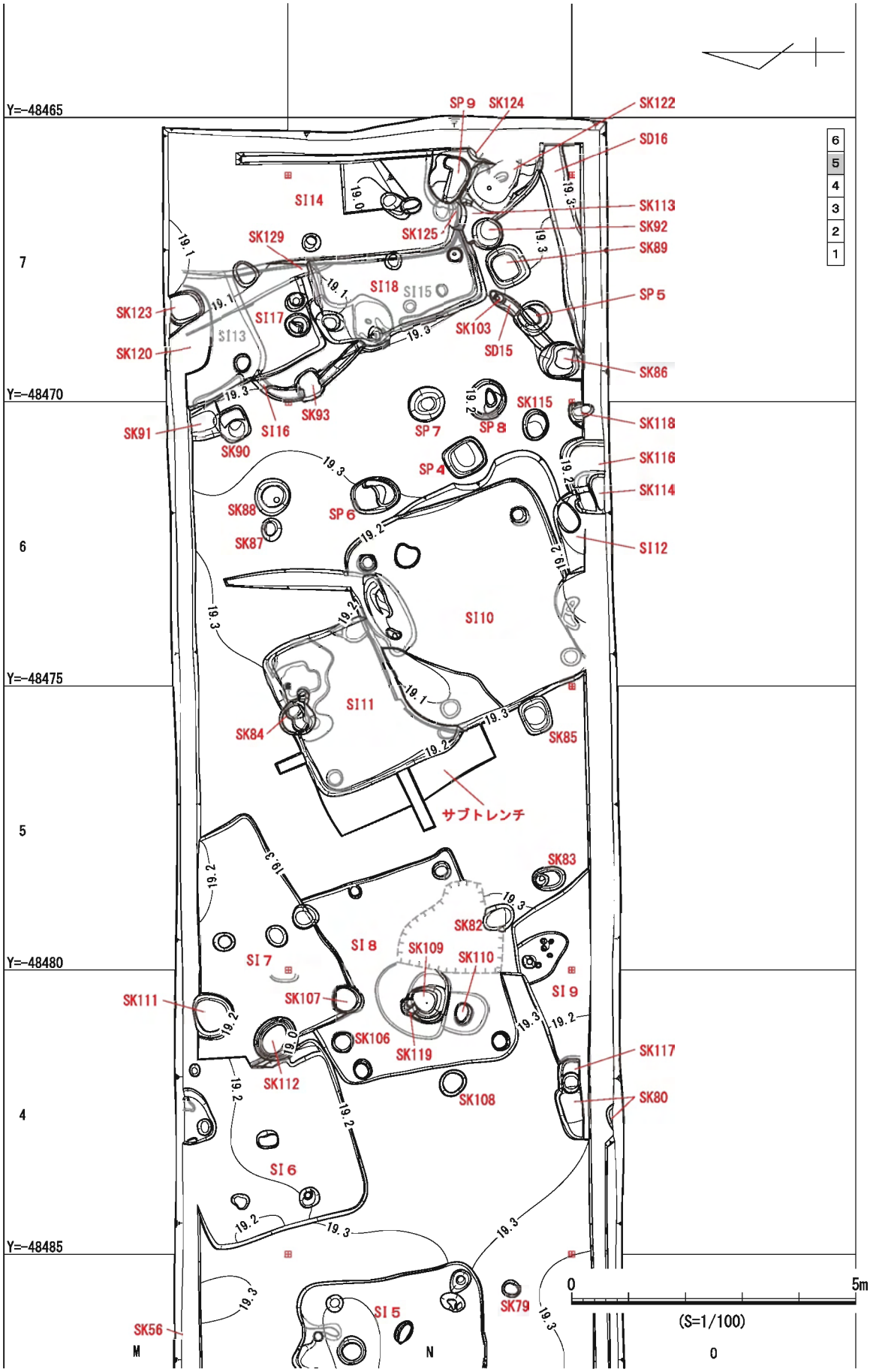
第233図　発掘区全域図分割図②



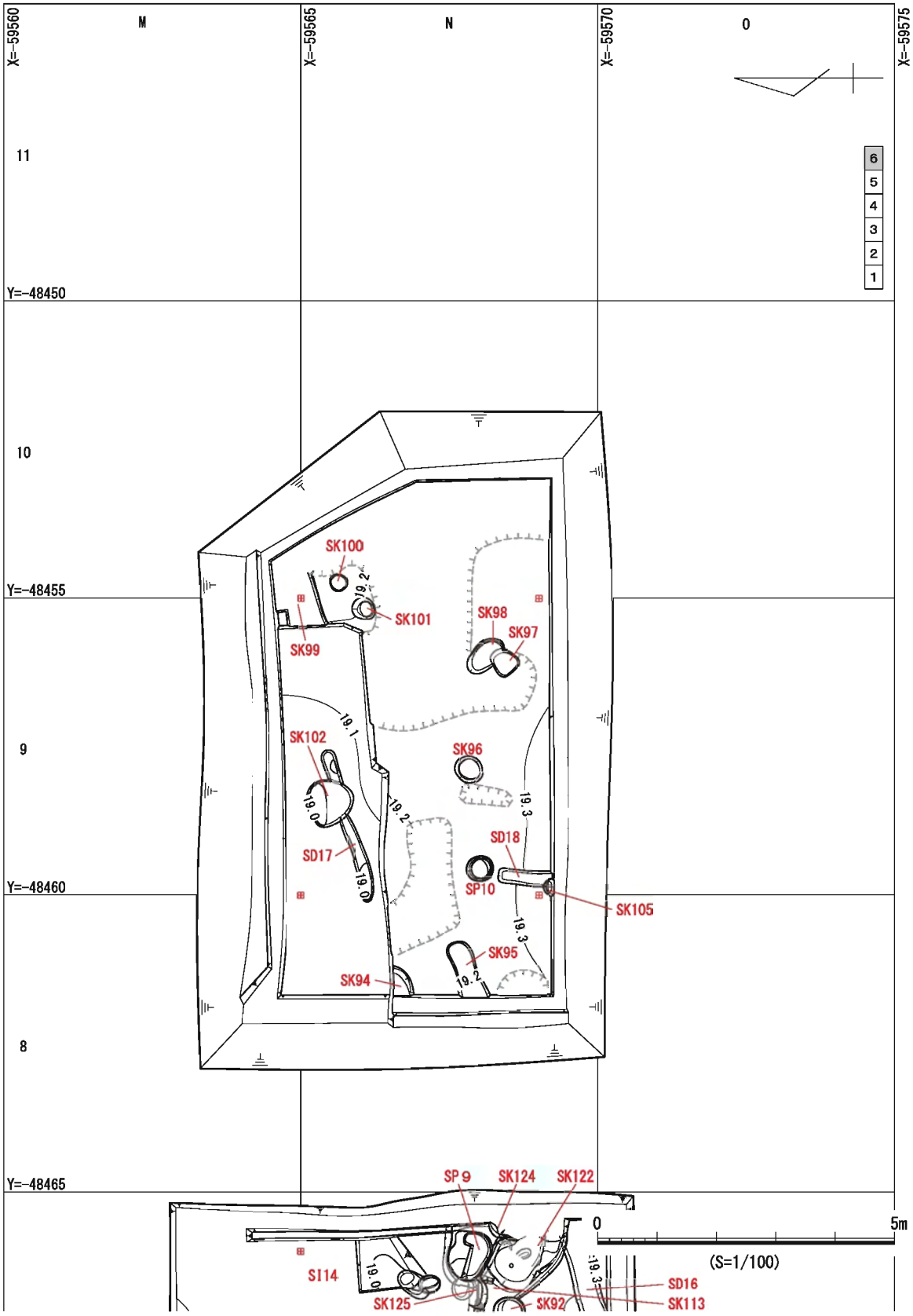
第234図　発掘区全域図分割図③



第235図　発掘区全域図分割図④



第236図　発掘区全域図分割図⑤



第237図　発掘区全域図分割図⑥

第４節　その他の時代の遺構・遺物

DM12 から DO16 グリッドにおける遺物包含層掘削作業中に確認した遺構群で、Ⅲ層上面から検出した。大畦畔の痕跡と考えられる遺構とこれに伴う杭痕、土坑、溝状遺構などがある。層序から、六里遺跡の第１調査面に対応する遺構群と考えられる。

１　大畦畔（SM １　第 238 ～ 241 図）

検出状況　DM15 から DO15 グリッドにかけて検出した。遺物包含層掘削過程で、DM15 グリッドの北東隅付近から円礫で構成される集石を検出したため、この面で周囲の遺構検出を実施したところ、杭穴と南北に延びる帯状の鉄分沈着を確認した。礫は北側の一部にのみ集積し、南側には続かない。杭痕（SP）は平面形が円形の小穴として検出した。その多くは帯状の鉄分沈着範囲に含まれる。以上の状況から水田遺構の大畦畔の痕跡と判断した。この遺構の位置は、大野郡条里プランの坪境推定位置に近い（第２章第２節参照）ことから、何らかの関連が考えられる。

堆積状況　集石は、南北方向に延びる溝状の掘り込みの上面で、平面的に検出した。集石の散布状況から、この溝状遺構と集石が必ずしも関連するとは言い難いが、溝状掘り込みから離れた範囲に礫はみられなかった。溝状遺構の埋土は、上層のⅡ層と類似する。杭痕はすべて断ち割り調査を実施した。その結果、SP19・SP22・SP29 の３基から杭を検出した（第 240 図・241 図）。３基とも検出面から 0.5 m程度の深さまで達しており、その他の杭穴とは様相を異にする。また、断面図を図示した杭穴は深さ 0.1 mを超えるもので、集石の東側に多い。その他の穴はいずれも 0.1 m未満の深さであった。これらの杭穴の埋土は、いずれもⅡ層に類似する。

遺物出土状況　集石周辺から、須恵器、土師器、灰釉陶器、山茶碗の破片が出土した。

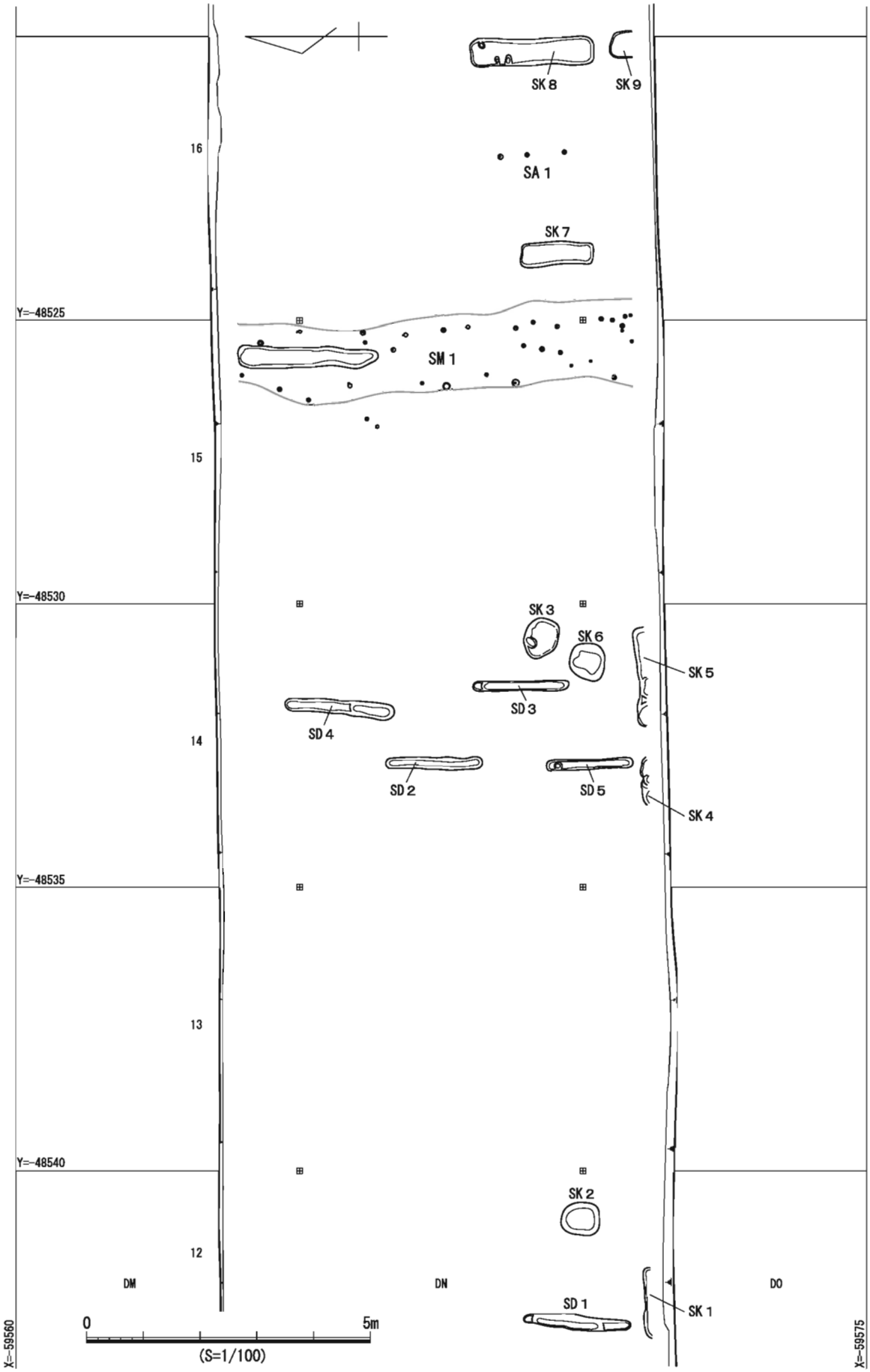
出土遺物　図化可能な遺物は出土しなかった。

所属時期　遺構を確認した面は、層序的に六里遺跡の第１調査面と同じと考えられる。そのため、Ⅷ期以降の遺構であると考えられる。

２　その他の遺構

SM １の他、杭列（SA １）１条、溝状遺構５基、土坑 10 基を検出した。SA １は南北方向に並ぶ３基の杭穴である。SM １と平行して設置されており、SM １からの距離は約 2.6 mある。南北方向の畦畔に伴う遺構の可能性がある。溝状遺構は SM １の西側に分布し、長さ 1.5 ～２m、幅 0.3 m以下の形状で、いずれも南北方向に近い長軸を持つ。土坑は、SM １の西側に分布する平面形が不定形なものと、東側の平面形が長方形の一群があり、長方形のものは溝状遺構と同様に南北方向の長軸をもつ。いずれの遺構もⅡ層と類似する埋土で埋没しており、上層における耕作に関連する遺構と思われる。

遺物は須恵器、土師器、灰釉容器、山茶碗、中近世陶器などが出土しているが、いずれも破片である。この内、SK ８から出土した１点を図示した。870 は古瀬戸系施釉陶器の縁釉小皿である。口縁部内外面に鉄釉が施される。

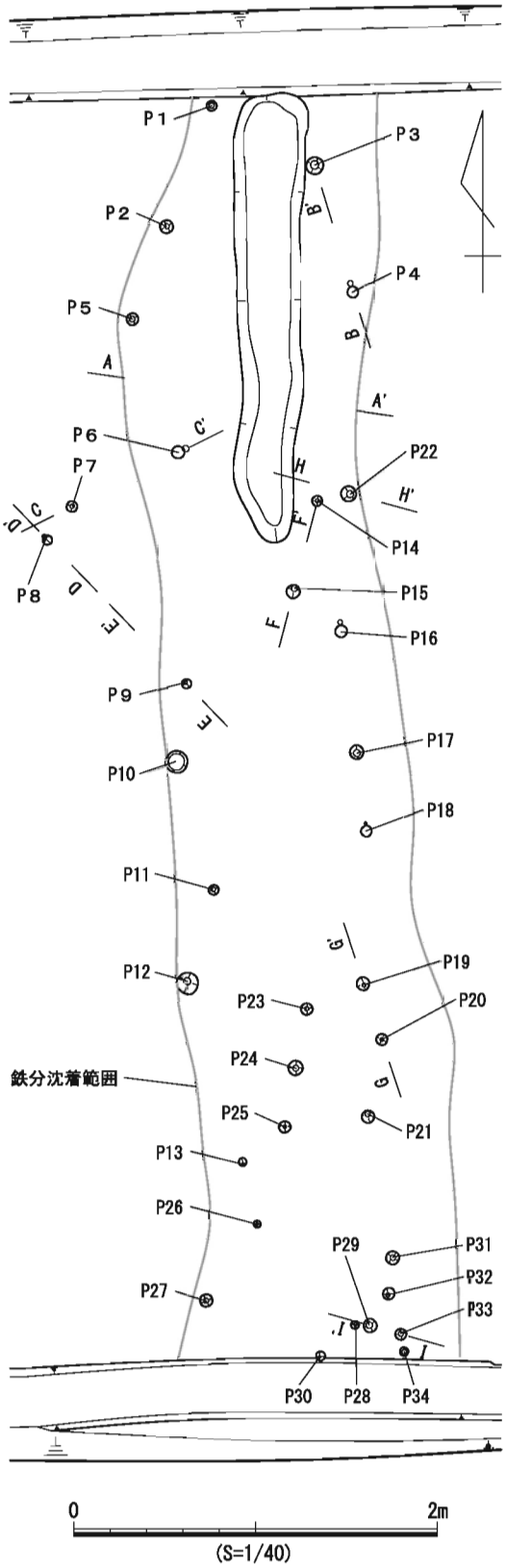


第238図　Ⅲ層上面遺構群（DM12～DO16）

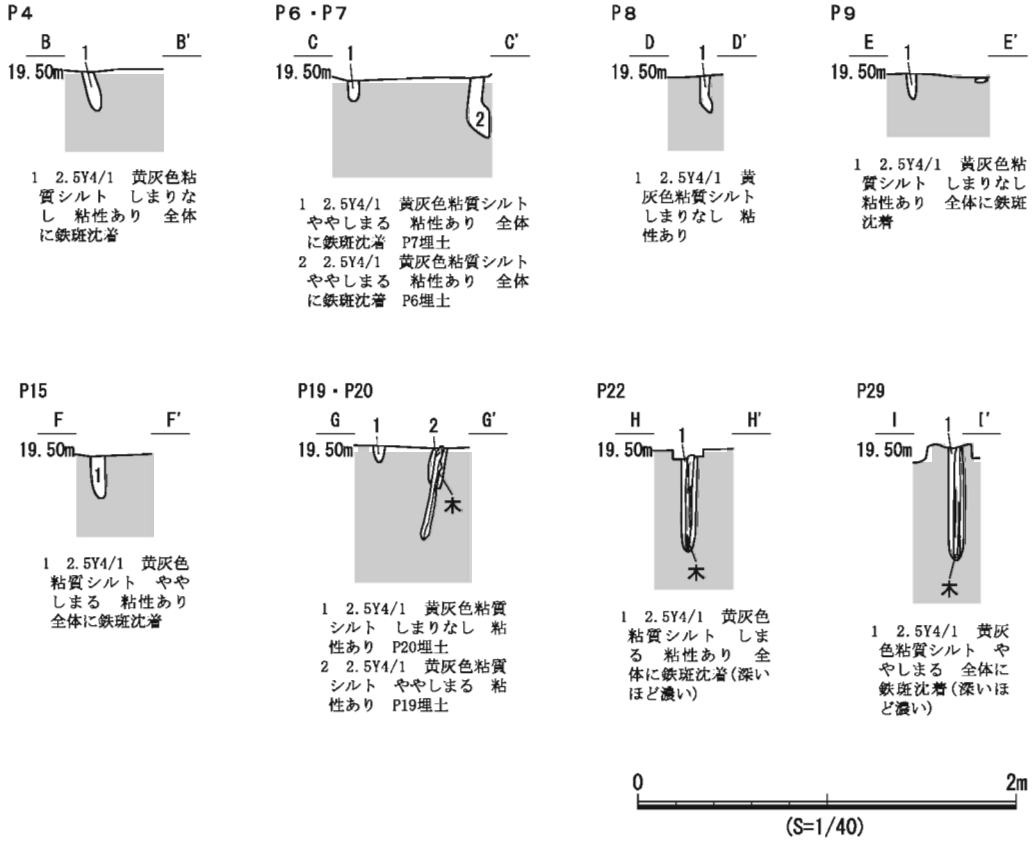
集石検出状況

1　2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　しみ状に鉄斑40%沈着
2　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト　ややしまる　粘性あり　全体に鉄斑沈着　マンガン斑沈着　2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質シルトをブロック状に10%含む　Ⅲb層

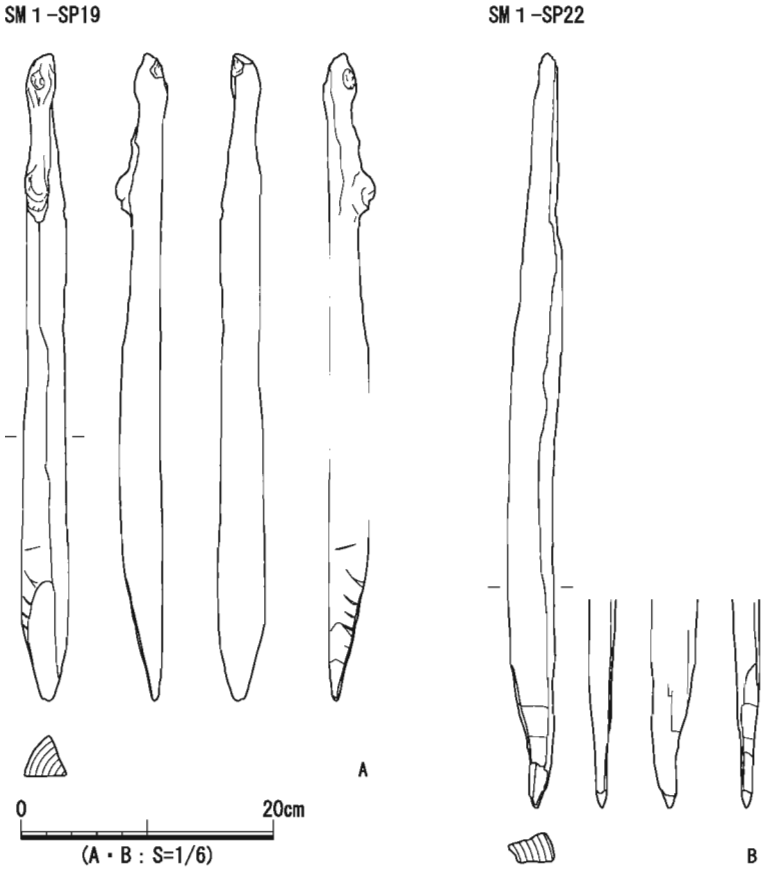
杭穴等検出状況



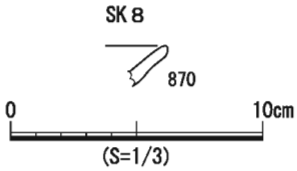
第239図　SM１遺構図①



第240図　SM１遺構図②



第241図　SM１出土杭



第242図　SK８出土遺物

表97　Ⅲ層上面杭痕一覧表

遺構名	地区割り		検出面	長軸（m）		短軸（m）		深さ（m）	備考
	南北	東西		上端	下端	上端	下端		
SM１－P１	DM	15	Ⅲ上	0.06	0.04	0.06	0.04	0.08	SM１
SM１－P２	DM	15	Ⅲ上	0.07	0.04	0.07	0.04	0.09	SM１
SM１－P３	DM	15	Ⅲ上	0.10	0.05	0.09	0.05	0.05	SM１
SM１－P４	DM	15	Ⅲ上	0.09	0.03	0.06	0.03	0.21	SM１
SM１－P５	DN	15	Ⅲ上	0.07	0.04	0.07	0.04	0.09	SM１
SM１－P６	DN	15	Ⅲ上	0.10	0.03	0.07	0.03	0.32	SM１
SM１－P７	DN	15	Ⅲ上	0.06	0.03	0.06	0.03	0.26	SM１
SM１－P８	DN	15	Ⅲ上	0.06	0.03	0.05	0.03	0.33	SM１
SM１－P９	DN	15	Ⅲ上	0.05	0.03	0.05	0.03	0.15	SM１
SM１－P10	DN	15	Ⅲ上	0.12	0.12	0.12	0.12	0.04	SM１
SM１－P11	DN	15	Ⅲ上	0.06	0.03	0.05	0.03	0.32	SM１
SM１－P12	DN	15	Ⅲ上	0.12	0.04	0.12	0.04	0.20	SM１
SM１－P13	DN	15	Ⅲ上	0.05	0.02	0.04	0.02	0.07	SM１
SM１－P14	DN	15	Ⅲ上	0.06	0.02	0.06	0.02	0.54	SM１
SM１－P15	DN	15	Ⅲ上	0.08	0.03	0.07	0.03	0.58	SM１
SM１－P16	DN	15	Ⅲ上	0.09	0.02	0.06	0.02	0.11	SM１
SM１－P17	DN	15	Ⅲ上	0.08	0.03	0.07	0.03	0.08	SM１
SM１－P18	DN	15	Ⅲ上	0.08	0.01	0.06	0.01	0.09	SM１
SM１－P19	DN	15	Ⅲ上	0.07	0.02	0.07	0.02	0.49	SM１
SM１－P20	DN	15	Ⅲ上	0.06	0.02	0.06	0.02	0.12	SM１
SM１－P21	DN	15	Ⅲ上	0.07	0.04	0.07	0.04	0.07	SM１
SM１－P22	DN	15	Ⅲ上	0.09	0.04	0.08	0.04	0.50	SM１
SM１－P23	DN	15	Ⅲ上	0.07	0.04	0.06	0.04	0.04	SM１
SM１－P24	DN	15	Ⅲ上	0.08	0.04	0.08	0.04	0.09	SM１
SM１－P25	DN	15	Ⅲ上	0.07	0.02	0.06	0.02	0.11	SM１
SM１－P26	DO	15	Ⅲ上	0.04	0.02	0.04	0.02	0.15	SM１
SM１－P27	DO	15	Ⅲ上	0.07	0.04	0.07	0.04	0.06	SM１
SM１－P28	DO	15	Ⅲ上	0.05	0.02	0.04	0.02	0.08	SM１
SM１－P29	DO	15	Ⅲ上	0.08	0.04	0.07	0.04	0.62	SM１
SM１－P30	DO	15	Ⅲ上	0.05	0.03	0.05	0.03	0.07	SM１
SM１－P31	DO	16	Ⅲ上	0.07	0.04	0.07	0.04	0.06	SM１
SM１－P32	DO	16	Ⅲ上	0.07	0.02	0.06	0.02	0.07	SM１
SM１－P33	DO	16	Ⅲ上	0.06	0.04	0.06	0.04	0.07	SM１
SM１－P34	DO	16	Ⅲ上	0.05	0.04	0.05	0.04	0.07	SM１
SA１－P１	DN	16	Ⅲ上	0.09	0.03	0.09	0.03	0.13	SA１
SA１－P２	DN	16	Ⅲ上	0.07	0.03	0.07	0.03	0.17	SA１
SA１－P３	DN	16	Ⅲ上	0.07	0.03	0.07	0.03	0.08	SA１

表98　Ⅲ層上面溝状遺構一覧表

遺構名	地区割り		検出面	堆積	断面形	長さ（m）		幅A（m）		深さ（m）	長軸方位	切り合い		出土遺物
	南北	東西				上端	下端	上端	下端			新	旧	
SD１	DN DO	12	Ⅲ上	b3	台形	1.89	1.62	0.27	0.10	0.32	N　3°　E			H1 S1
SD２	DN	14	Ⅲ上	a	半円形	1.70	1.56	0.21	0.08	0.07	N　2°　W			
SD３	DN	14	Ⅲ上	a	半円形	1.69	1.56	0.17	0.12	0.08	N　1°　W			P1 H1
SD４	DM DN	14	Ⅲ上	a	半円形	1.94	1.78	0.24	0.15	0.05	N　4°　E			K1 H1
SD５	DN DO	14	Ⅲ上	a	半円形	1.53	1.40	0.18	0.10	0.09	N　2°　W			P8 K2 H1

表99　SM1出土杭一覧表

掲載番号	取上番号	素材	形態	遺構	長軸/短軸/幅(cm)			備考	挿図番号	図版番号
A	623	木	角材	SM1-P19②	51.3	3.7	3.5		241	71
B	646	木	角材	SM1-P22②	59.7	3.8	3.0		241	71
－	655	木	角材	SM1-P32①	52.0	2.7	2.4	接合2点	－	－

表100　Ⅲ層上面土坑一覧表

遺構名	地区割り		検出面	平面形	堆積	断面形	長軸（m）		短軸（m）		深さ（m）	主軸方位	切り合い		出土遺物
	南北	東西					上端	下端	上端	下端			新	旧	
SK１	DO	12	Ⅲ上	－	a	不明	1.24	1.14	0.13	0.12	0.05	―			
SK２	DN DO	12	Ⅲ上	円形	b3	台形	0.68	0.50	0.46	0.38	0.26	―			P2
SK３	DN	14	Ⅲ上	円形	a	不定形	0.74	0.62	0.59	0.45	0.12	―			P3
SK４	DO	14	Ⅲ上	不定形	a	不明	0.84	0.76	0.10	0.05	0.10	―			K1
SK５	DO	14	Ⅲ上	不定形	a	不明	1.75	1.62	0.17	0.14	0.10	―			
SK６	DN DO	14	Ⅲ上	円形	a	不定形	0.72	0.41	0.58	0.32	0.15	―			
SK７	DN DO	16	Ⅲ上	方形	a	半円形	1.28	1.18	0.41	0.33	0.04	N　4°　W			P6 K1 H3
SK８	DN DO	16~17	Ⅲ上	方形	a	半円形	2.18	2.05	0.46	0.40	0.04	N　1°　W			P8 K3 T1 H1
SK９	DO	16~17	Ⅲ上	方形	a	半円形	0.47	0.42	0.35	0.38	0.06	N　1°　W			P1 H7 K2
SK10	DM	15	Ⅲ上	円形	a	台形	0.38	0.26	0.23	0.14	0.09	―		SM１	P1 Y2

表101　SK８出土土器観察表

掲載番号	種別	器種	出土位置			口径/底径/器高/最大径（cm）	口縁部残存率（X/12）・底部個体数	胎土（単位：mm）	焼成	色調（内面）（外面）（断面）	器面調整 内面/外面	分類・時期	文様・その他（単位：cm）	挿図番号	図版番号
			出土区・グリット	遺構番号	層位										
870	古瀬戸	縁釉小皿		SK8	1	―/―/(1.6)/―	1.0・―	密　―	良好	2.5Y8/2 2.5Y8/2 2.5Y8/2	回転ナデ／回転ナデ	古瀬戸後Ⅳ期古	釉薬及び色調：鉄釉（5YR3/4）口縁部内外面施釉	242	71

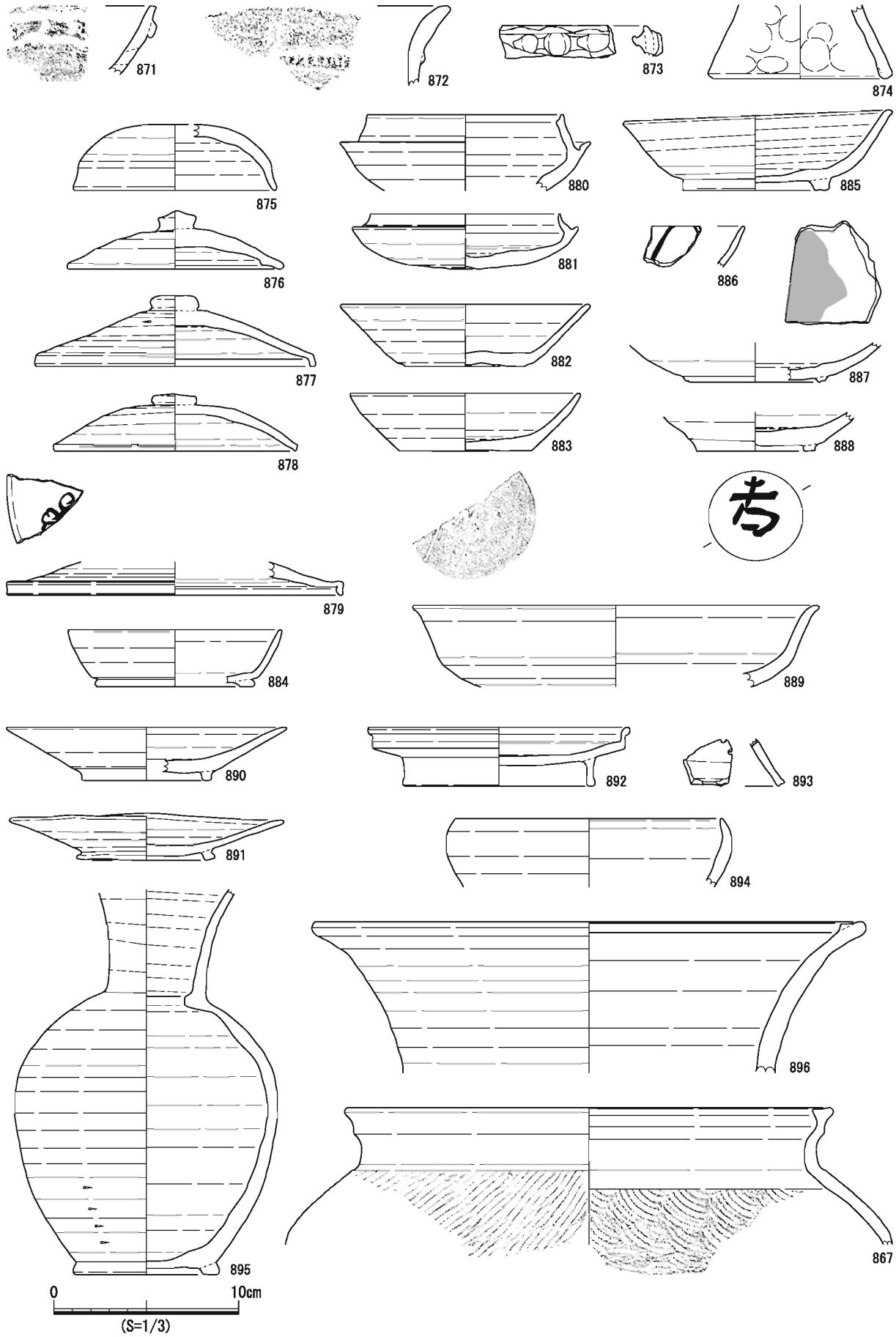
第５節　遺物包含層出土遺物

本項では、遺物包含層であるⅡ層及びⅢ層、試掘坑等から出土した遺物について一括して掲載する（第 243 ～ 245 図）。

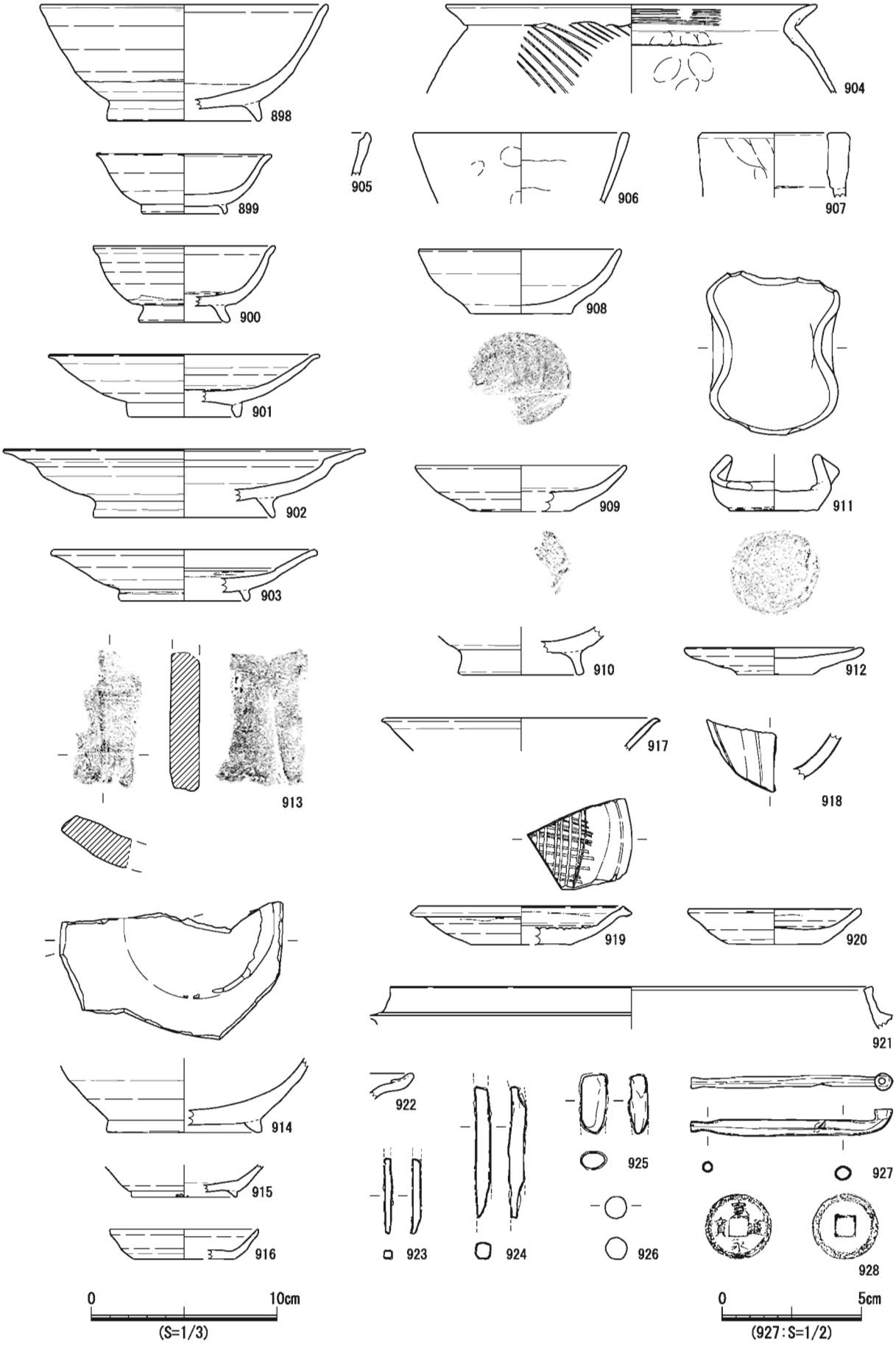
871 ～ 873 は縄文土器である。破片であるため詳細は不明であるが、五貫森式から馬見塚式に比定される土器と思われる。871 は第Ⅱ群Ａ２ｉ類とした。口縁端部が面取りされ、端部からやや下に突帯が貼り付けされる。突帯の上部と側面がナデ調整されるが下部は未調整である。突帯にはヘラ状工具によるＤ字刻みが施される。872 はＡ４類とした。外反する口縁部の屈曲部外面に低い突帯が貼り付けられる。突帯にはヘラ状工具による縦位の連続刻みが施される。873 は浅鉢と思われる。異系統土器（第Ⅱ群Ｄ類）と考えられ、明赤褐色で緻密な胎土をもつ。外面には眼鏡状付帯文が貼り付けられ、内面は受口状に拡幅されている。

874 は土師器の台付甕の脚台である。内外面は指オサエで成形し、端部を内面に拡幅する。

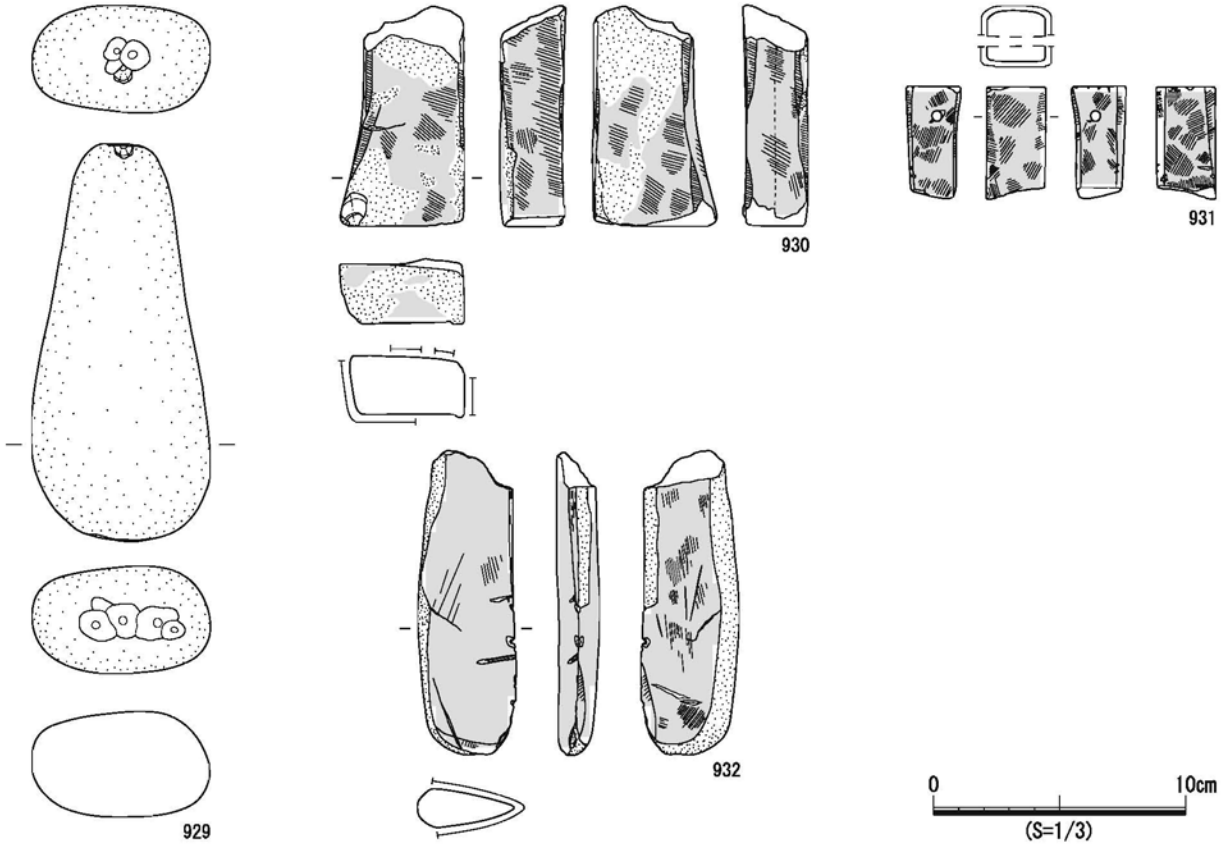
875 ～ 897 は須恵器である。大半は７世紀～９世紀にかけての美濃須衛窯産と思われるが、中には 880 のように５世紀代まで時期が遡るものも含まれる。875 は坏蓋Ａ類で、焼成不良で胎土が灰白色である。口縁部と体部に明確な境はなく、頂部に不定方向のナデが施され、ケズリ調整はみられない。体部外面が摩耗している。876 は坏蓋Ｂ類である。頂部に先端が尖り気味の宝珠摘みが付され、内面の反りは口縁部より下に突出しない。877 ～ 879 は坏蓋Ｃ類である。877 は頂部に回転ケズリ調整が施されるが、その上から再度回転ナデを行っている。878 は径が小さく、口縁端部のかえりが短い。879 は外面に花弁を描いたような墨書がみられる。880・881 は坏身Ａ類である。880 は口縁部がほとんど外反せず、直線的に内傾する。口縁端部に明瞭な段がつけられる。受部は斜め上に向かって直線的に開く。体部外面は回転ヘラケズリ調整が施される。881 は、口縁部がやや外反しながら上方へ立ち上がる。器高が低く、身が浅い。882・883 は坏身Ｂ２類である。ともに体部から口縁部が直線的に開く。882 は底部外面の回転ヘラ切り痕が未調整であるが、883 は板ナデによって平滑に仕上げられ、ヘラ記号がみられる。884 は坏身Ｃ類である。やや丸みのある潰れた高台が付される。885 ～ 888 は碗である。885 は底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁端部のみ僅かに外反する。底部外面は回転ヘラケズリ痕がナデ消され、体部下半は回転ヘラケズリで調整される。底部内面は摩耗している。886 は口縁部破片で坏身の可能性もある。内面に蓮弁文のような墨書が描かれる。887 は内面が摩耗し、墨痕が認められることから転用硯とした。888 は底部外面に「吉」の文字がみられる。889 は金属器写しの碗と思われる。体部から口縁部に掛けて強く内湾し、口縁端部は外反する。体部外面下半には丁寧な回転ヘラケズリが施される。890・891 は須恵器の皿である。ともに底部から口縁部にかけて直線的に開く。891 は底部外面に回転ヘラケズリ調整が施され、底部内面は摩耗している。892・893 は盤である。892 は口縁部が玉縁状になる、遺構出土資料には見られない形状をとる。また底部外面が静止ヘラケズリ調整される点も特異である。893 は盤の脚台であるが、３箇所の小円孔による透かしをもつ。稲田山２号窯（各務原市）などに類例がある。894 は鉄鉢である。口縁部が内湾している。895 は長頸瓶である。体部中程のやや上に最大径をもつ。底部外面は回転へ



第243図　遺物包含層出土遺物①



第244図　遺物包含層出土遺物②



第245図　遺物包含層出土遺物③

ラ切りがナデ消され、体部下半は回転ヘラケズリによって調整される。高台は底部外面の端部に付される。896･897 は甕である。896 は頸部から体部にかけてラッパ状に開く。口縁部内面が肥厚され、受口状になる。897 は口縁の立ち上がりが短く、中程から上方へ折れて二重口縁状になる。口縁端部内面が 896 と同様に肥厚される。体部外面に平行タタキ目、内面に青海波模様の当て具痕が残る。897 は全体的な形状から、体部に把手がつく器形になる可能性がある。

898 ～ 903 は灰釉陶器である。遺構から出土した灰釉陶器と同様に、K-90 号窯～ O-53 号窯式に比定される。898・899 は碗である。898 は底部外面はヘラケズリ調整され、その外縁に高台が付される。体部は内湾しながら開き、口縁部が僅かに外反する。口縁端部には煤が付着し、底部内面は摩耗している。灰釉は漬け掛けで施される。899 は小碗で非常に薄手で丁寧なつくりであるが、胎土に砂粒が多く含まれる。体部は内湾しながら開き、口縁部が外反する。内面に自然釉が付着するが、灰釉は発色が悪いためか確認できない。900 は深碗である。899 と同様に法量が小さいが、高台が高く器壁が厚い。灰釉は漬け掛けで施される。901 は皿である。焼成不良により胎土が灰白色で、軟質である。体部に丸みがあり、口縁部が外反する。外面は不明瞭であるが、口縁部と底部の内面に刷毛塗りと思われる灰釉が明瞭にみられる。902・903 は段皿である。902 はやや厚手で高い高台が付され、内面の段の位置から口縁部が開く。903 は薄手で底部から口縁部にかけて直線的に開く。902 は内面のみ、903 は内外面に漬け掛けで灰釉を施釉する。ともに底面に重ね焼き痕が残る。

904 ～ 907 は、Ⅴ・Ⅵ期に属すると考えられる土師器である。904 は甕Ｂ類である。全体の器壁

が薄く、口縁部のみ折り返しによって肥厚している。体部外面と口縁部に粗いハケ調整が施され、内面には指頭痕が残る。905・906 は焼塩土器の可能性がある口縁部破片である。薄手で、指オサエによって成形される。907 は器種不明の口縁部である。口縁部が肥厚し、口縁端部から内面にかけて横ナデ調整される。外面には指頭痕が残る。

908 ～ 912 はロクロ土師器である。910 を除き、底部外面に回転糸切り痕が認められる。第３節で述べたように、多くが SD16 に関連する遺物と考えられる。908 は柱状高台碗である。ほぼ同じもの（823）が SD16 底面から出土している。909 も柱状高台碗としたが、908 と比べると器高が低い。911 は柱状高台の耳皿である。912 のような皿の口縁部を折り曲げて成形している。910 は脚高高台皿、912 は柱状高台皿である。

913 は、平瓦である。表面に成形時の布目痕がわずかに残る。遺跡の西に位置する大隆寺跡との関連が示唆される遺物である。

914 ～ 920 は中世陶磁器である。山茶碗や古瀬戸系施釉陶器、貿易陶磁器があり、いずれもⅦ期に属する。914 は尾張型山茶碗で、底部内面が著しく摩耗している。見込み部分に重ね焼きによって釉着した別個体の高台が一部付着している。915 は東濃型山茶碗の碗、916 が皿である。917 は白磁の碗である。体部は直線的に開き、口縁端部のみ外反する。内外面に白磁釉が施される。918 は龍泉窯系青磁の碗である。体部下半の破片であり、外面に鎬蓮弁文が施される。919 は古瀬戸系施釉陶器の卸皿である。見込み部分に格子状の卸目が施される。口縁部の内外面には灰釉が施され、底部外面に回転糸切り痕が残る。920 は古瀬戸系施釉陶器の縁釉小皿である。口縁部内外面に鉄釉が施され、底部外面に回転糸切り痕が残る。

921・922 はⅦ期に属すると考えられる土師器であり、921 が羽釜、922 が伊勢型鍋である。

923 ～ 928 は金属製品である。923・924 は角釘である。いずれも基部が折損している。925 は器種不明の鉄製品である。断面形状が楕円形に近い。926 は鉛玉である。火縄銃の弾と考えられる。927 は銅製の煙管である。雁首と吸い口、羅宇が一体となっている。銅板を丸めて製作したと見られ、吸い口から羅宇にかけて合わせ目が残る。928 は銅銭の寛永通寶である。所謂「新寛永」であり、初鋳年は 1668 年である。

929 ～ 932 は石器・石製品である。929 は叩石である。扁平で細長い川原石の両端に敲打痕が残る。それ以外の使用痕は見られない。六里遺跡から出土した磨石・叩石類に形態が類似するのもがあることから、縄文時代晩期に属する可能性がある。930 ～ 932 は砥石である。930 は残存する面すべてに砥面がみられるが、原石の凹凸によって、一部表面に自然面が残る。砥面の状況から手持ち砥石と考えられる。931 も角柱状の砥石であるが、携帯用のためか穿孔されている。折損面を除く全面に赤い付着物があり、赤錆の可能性がある。932 は、他の２つと同様折損しているが、２つの砥面によって断面形状が三角形になるまで使い込まれている。手持ち砥石と考えられる。

表 102　遺物包含層出土土器観察表①

掲載番号	種別	器種	出土位置		口径/底径/器高/最大径(cm)	口縁部残存率(X/12)・底部個体数	胎土(単位：mm)	焼成	色調(内面)(外面)(断面)	器面調整 内面/外面	分類・時期	文様・その他(単位：cm)	挿図番号	図版番号
			出土区・グリット	層位										
871	縄文土器	深鉢	DM20～E04	Ⅰ～Ⅱ	−/−/(3.7)/−	1.0・−	密(～φ2の小石多く含む)	良好	10YR7/3 10YR5/2 10YR6/1	／無調整	第Ⅱ群 A2i	刻目突帯(幅1.0、ヘラ刻みD字)	243	73
872	縄文土器	変容壺か	D018	Ⅱb	−/−/(4.3)/−	1.0・−	密(～φ2の砂粒を多く含む)	良好	7.5YR5/4 7.5YR5/4 7.5YR5/3	ナデ／ナデ	第Ⅱ群 A4	刻目突帯(幅0.9、ヘラ刻み)	243	73
873	縄文土器	浅鉢	DN19	−	−/−/(1.7)/−	1.0・−	密(～φ2の砂粒を含む)	良好	2.5YR5/6 2.5YR5/6 2.5YR5/6	ナデ／ナデ	第Ⅱ群 D		243	73
874	土師器	台付甕	EM20～DE4	Ⅰ～Ⅱ	−/(10.0)/(4.0)/−	−・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y8/2 2.5Y8/2 N3	ナデ・指オサエ／ナデ・指オサエ			243	73
875	須恵器	坏蓋A	EN4	Ⅲ	(11.0)/−/3.6/−	2.8・−	密　−	不良	2.5Y8/1 10YR8/1 10YR8/1	回転ナデ／回転ナデ・不定方向のナデ	7C代	還元焔焼成、外面摩耗	243	74
876	須恵器	坏蓋B	EN3	Ⅲ	(11.2)/−/3.2/−	1.5・−	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N8/ 2.5Y7/1 N8/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	那加5併行期	外面自然釉付着	243	73
877	須恵器	坏蓋C	EM5～E07	Ⅰ～Ⅱ	15.0/−/4.8/−	5.4・−	やや粗(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N8/ N8/ N8/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛 Ⅳ-3	回転ヘラ削り後に再度回転ナデを施している可能性あり	243	73
878	須恵器	坏蓋C	EN4	Ⅱ～Ⅲ	(13.0)/−/3.1/−	5.6・−	密(～φ2の砂粒をわずかに含む)	良好	N6/ N6/ N6/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛 Ⅴ-1		243	73
879	須恵器	坏蓋C	E05	Ⅲ	(18.0)/−/(1.8)/−	1.0・−	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ	美濃須衛 Ⅳ-3	外面に墨書 釈文不明	243	66
880	須恵器	坏身A	EN4	Ⅲ	(10.5)/−/(4.1)/(12.5)	1.0・−	密(～φ2の砂粒を含む)	良好	N7/ N5/ 5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	5C代		243	74
881	須恵器	坏身A	EN3	Ⅲ	(10.2)/(5.9)/3.0/(12.2)	1.0・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ 5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラ切り・ナデ	那加5併行期		243	74
882	須恵器	坏身B2	EM4	Ⅱb	(13.2)/(6.4)/3.4/−	3.2・1	密(～φ2の砂粒を含む)	良好	N6/ N6/ N6/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラ切り痕	美濃須衛 Ⅴ-1		243	74
883	須恵器	坏身B2	EN4	Ⅲ	(12.4)/(7.2)/3.2/−	5.0・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ 2.5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラ切り後板ナデ	美濃須衛 Ⅴ-1	底部ヘラ記号	243	73
884	須恵器	坏身C	TR8	−	(11.4)/(8.4)/3.1/−	2.5・0	密(～φ2の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ・貼り付け高台	美濃須衛 Ⅴ-1		243	74
885	須恵器	碗	EN3 DM20～E04 EN3	Ⅱb Ⅰ～Ⅱ Ⅲ	14.2/8.0/4.3/−	5.7・1	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N6/ N6/ N7/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・回転ヘラケズリ後ナデ・貼り付け高台	美濃須衛 Ⅴ-1	内底面摩耗	243	73
886	須恵器	碗か	DM17	Ⅲ	−/−/(2.2)/−	1.0・−	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	7.5Y7/1 N7/ 7.5Y7/1		美濃須衛 Ⅴ-1	墨書釈文不明	243	66
887	須恵器	碗 (転用硯)	DM18	Ⅱ	−/(7.6)/(2.1)/−	−・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N8/	回転ナデ／回転ナデ・貼り付け高台	美濃須衛 Ⅴ-1	内面摩耗、墨痕	243	66
888	須恵器	碗	DN15	Ⅲ	−/6.4/(2.1)/−	−・1	密(～φ2の砂粒をわずかに含む)	良好	7.5Y7/1 5Y7/1 7.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・貼り付け高台	美濃須衛 Ⅴ-1	墨書(吉)	243	66
889	須恵器	碗 (金属器写)	DN17 DN16	Ⅲ Ⅲ	(22.0)/−/(4.4)/−	1.0・−	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N8/ N8/ 5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ	美濃須衛 Ⅴ-1		243	74
890	須恵器	Ⅲ	EN1	Ⅲ	(15.0)/(7.0)/2.9/−	4.6・0	やや粗　−	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ・ナデ／回転ナデ・貼り付け高台	美濃須衛 Ⅴ-1		243	73
891	須恵器	Ⅲ	EN1 DN20	Ⅲ Ⅲ	14.7/7.4/2.5/−	12.0・1	密　−	良好	N7/ N7/ −	回転ナデ・ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ後ナデ・貼り付け高台	美濃須衛 Ⅴ-1		243	73
892	須恵器	盤	E06	Ⅲ	(14.0)/(10.0)/3.2/−	1.0・0	密(～φ2の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 5Y7/1 2.5Y8/1	回転ナデ・ナデ／回転ナデ・ナデ・底部静止ヘラケズリ・貼り付け高台	美濃須衛 Ⅴ-1		243	74
893	須恵器	盤 (脚部)	DN16	Ⅲ	−/−/(2.4)/−	−・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 N7/ N8/	回転ナデ／回転ナデ	美濃須衛 Ⅳ-3～Ⅴ-1	円孔透かし	243	74
894	須恵器	鉄鉢	EN5～EM6 サブトレンチ		(14.4)/−/(3.7)/−	1.0・−	密　−	良好	N7/ N7/ N8/	回転ナデ／回転ナデ	美濃須衛 Ⅳ-3～Ⅴ-1		243	74

表103　遺物包含層出土土器観察表②

掲載番号	種別	器種	出土位置		口径/底径/器高/最大径(cm)	口縁部残存率(X/12)・底部個体数	胎土(単位：mm)	焼成	色調(内面)(外面)(断面)	器面調整内面/外面	分類・時期	文様・その他(単位：cm)	挿図番号	図版番号
			出土区・グリット	層位										
895	須恵器	長頸瓶	EN3 DM20～E04 EN3	Ⅲ Ⅰ～Ⅲ Ⅱb	―/(7.8) /(20.8)/―	―・1	密(～φ2の砂粒をわずかに含む)	不良	10YR7/1 2.5Y7/1 5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・貼り付け高台	美濃須衛か9C代	還元焔焼成	243	73
896	須恵器	甕	EN5～EM6 サブトレンチ		(29.6)/― /(8.2)/―	1.7・―	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ N8/	回転ナデ／回転ナデ	美濃須衛Ⅴ期		243	74
897	須恵器	甕	E06	Ⅲ	(26.0)/― /(7.4)/―	1.0・―	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	N7/ N7/ 2.5Y7/1	回転ナデ・当て具痕／回転ナデ・タタキ	美濃須衛Ⅴ-1		243	74
898	灰釉陶器	碗	E05～E07	Ⅰ～Ⅱ	(15.2)/(10.0) /6.3/―	2.5・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・貼り付け高台	0-53	釉薬及び色調：灰釉(7.5Y7/1) 内底面摩耗、口縁部スス付着	244	74
899	灰釉陶器	碗	EN3	Ⅱb	9.3/4.4/3.2/ ―	8.4・1	密(～φ3の砂粒を含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 2.5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・貼り付け高台		内底面自然釉付着	244	73
900	灰釉陶器	深碗	EM7 EM5～E07	Ⅰ～Ⅲ Ⅰ～Ⅱ	(9.6)/(4.9) /4.1/―	1.0・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	5Y7/1 5Y7/1 5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・貼り付け高台	0-53	釉薬及び色調：灰釉(5Y7/2) 口縁部内外面灰釉漬け掛け	244	74
901	灰釉陶器	Ⅲ	DN11 DN12	Ⅲ	(14.4)/(5.4) /3.4/―	1.0・0	密(～φ1の砂粒を少し含む)	良好	5Y8/1 5Y8/1 5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラ切り・貼り付け高台	K-90～K-053	釉薬及び色調：灰釉(5Y7/3) 内外面灰釉施釉	244	74
902	灰釉陶器	段Ⅲ	EN3 EN3	Ⅲ Ⅱb	(19.2)/(9.4) /3.8/―	1.3・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	― N8/ N8/	回転ナデ／回転ナデ・回転ヘラケズリ・貼り付け高台	K-90	釉薬及び色調：灰釉(2.5Y7/2) 内面灰釉施釉、内底面重ね焼き痕	244	74
903	灰釉陶器	段Ⅲ	D011	Ⅰ～Ⅲ	(14.1)/(6.7) /2.8/―	1.5・0	密(～φ2の砂粒をわずかに含む)	良好	N8/ N8/ N8/	回転ナデ／回転ナデ・貼り付け高台	0-53	釉薬及び色調：灰釉(7.5Y8/1) 口縁部内外面灰釉漬け掛け	244	74
904	土師器	甕B	E06	Ⅲ	(20.0)/― /(4.8)/―	1.2・―	密(～φ2の砂粒を多く含む)	良好	10YR5/2 10YR6/2 5Y3/1	ハケ・指オサエ／ナデ・ハケ			244	73
905	土師器	製塩土器か	TR9	―	―/―/(2.3)/ ―	1.0・―	密(～φ1の砂粒を少し含む)	良好	N3/ 10YR7/3 10YR8/6	横ナデ／横ナデ・指オサエ		内面スス付着	244	73
906	土師器	製塩土器か	EN5	Ⅲ	(11.0)/― /(3.8)/―	1.0・―	密　―	良好	7.5YR6/6 7.5YR6/4 7.5YR5/1	ナデ・指オサエ／ナデ・指オサエ			244	73
907	土師器	不明	EN5	Ⅲ	(7.8)/― /(3.5)/―	2.0・0	密(～φ2の砂粒を含む)	良好	10YR6/2 10YR6/2 2.5Y6/2	横ナデ／ナデ・指オサエ			244	73
908	ロクロ土師器	碗	E05～E07	Ⅰ～Ⅱ	(10.7)/5.5/3. 5/―	1.2・1	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	10R6/4 7.5YR8/3 7.5YR8/3	回転ナデ／回転ナデ・回転糸切り痕			244	73
909	ロクロ土師器	碗	EN7	Ⅲ	(11.0)/(5.4) /2.5/―	2.2・0	密　―	良好	10YR8/3 5YR7/6 10YR8/2	回転ナデ／回転ナデ・回転糸切り痕			244	73
910	ロクロ土師器	脚高高台Ⅲか	E07	Ⅱb	―/(6.7) /(2.6)/―	―・0	密　―	良好	5YR7/8 5YR7/6 7.5YR8/4	回転ナデ／回転ナデ・貼り付け高台			244	73
911	ロクロ土師器	耳Ⅲ	E07	Ⅰ～Ⅲ	(8.9)/4.7/3.1 /―	9.1・1	密　―	良好	10R6/6 2.5YR7/6 7.5YR8/4	回転ナデ／回転ナデ・回転糸切り痕			244	73
912	ロクロ土師器	Ⅲ	E05～E07	Ⅰ～Ⅱ	(9.4)/4.0/1.5 /―	1.0・1	密　―	良好	2.5Y7/6 7.5YR8/3 7.5YR8/3	回転ナデ／回転ナデ・回転糸切り痕			244	73
914	山茶碗	碗	DN16 DM16	Ⅲ Ⅲ	―/(7.8) /(4.0)/―	―・0	密(～φ1の砂粒を含む)	良好	2.5Y7/1 2.5Y7/1 5Y7/1	回転ナデ／回転ナデ・回転糸切り痕・モミガラ痕・貼り付け高台	尾張型5型式	内底面別個体の高台が融着(重ね焼き痕)、内底面摩耗	244	75
915	山茶碗	碗	DN17	Ⅱ	―/(5.5) /(1.7)/―	―・0	密　―	良好	2.5Y8/2 2.5Y8/2 2.5Y8/2	回転ナデ／回転ナデ・回転糸切り痕・貼り付け高台	東濃型7～8形式		244	75
916	山茶碗	Ⅲ	DN11	Ⅲ	(8.0)/(5.0) /1.6/―	2.0・0	密　―	良好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ／回転ナデ・回転糸切り痕	東濃型	口縁部内外面自然釉付着	244	75
917	貿易陶磁器	白磁碗	DN12	Ⅲ	(15.0)/― /(1.8)/―	1.0・―	密　―	良好	― ― N8/	回転ナデ／回転ナデ	大宰府分類白磁碗Ⅴ-4a	釉薬及び色調：白磁釉(7.5Y7/1)	244	75
918	貿易陶磁器	青磁碗	DN12	Ⅲ	―/―/(2.5)/ ―	―・―	密　―	良好	― ― N8/	―／―	大宰府分類青磁碗ⅡまたはⅢ	釉薬及び色調：青磁釉(2.5G6/1)	244	75

表104　遺物包含層出土土器観察表③

掲載番号	種別	器種	出土位置		口径/底径/器高/最大径(cm)	口縁部残存率(X/12)・底部個体数	胎土(単位：mm)	焼成	色調(内面)(外面)(断面)	器面調整内面/外面	分類・時期	文様・その他(単位：cm)	挿図番号	図版番号
			出土区・グリット	層位										
919	古瀬戸	卸皿	DN13	Ⅲ	(12.0)/(5.4)/2.1/－	1.2・0	密(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.5Y8/1 2.5Y8/1 5Y8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転糸切り痕	古瀬戸 後Ⅲ期	釉薬及び色調：灰釉(7.5Y5/3)	244	75
920	古瀬戸	縁釉小皿	DN16 DM15 DO15	Ⅲ Ⅱ～Ⅲ Ⅲ	(9.2)/5.0/2.0/－	1.8・1	密(～φ3の砂粒をわずかに含む)	良好	10YR8/2 10YR8/2 10YR8/1	回転ナデ／回転ナデ・回転糸切り痕	古瀬戸 後Ⅳ期古	釉薬及び色調：鉄釉(5YR4/2) 口縁部内外面施釉	244	75
921	土師器	羽釜	DM13	Ⅲ	(26.0)/－/(2.3)/－	1.0・－	密(～φ1の砂粒を含む)	良好	10YR5/1 10YR5/1 2.5Y3/1	横ナデ／ナデ・横ナデ			244	73
922	土師器	伊勢型鍋	DN9	Ⅲ	－/－/(1.4)/－	1.0・－	密(～φ2の砂粒を含む)	良好	10YR8/2 10YR7/3 5Y4/1	ナデ／ナデ			244	73

表105　遺物包含層出土土製品一覧表

掲載番号	取上番号	器種	出土位置		素材	長軸/短軸/幅・厚さ(cm)			重さ(g)	観察・その他	挿図番号	図版番号
			出土区・グリット	層位								
913	747	平瓦	DN16	Ⅲ	土	(4.2)	(4.4)	(7.5)	73.5	凹面布目痕、凸面磨滅	244	74
－	168	鞴の羽口	DO19	Ⅰ	土	(2.0)	(1.5)	(1.3)	3.4		－	－

表106　遺物包含層出土石器・石製品一覧表

掲載番号	取上番号	器種	出土位置		素材	長軸/短軸/幅・厚さ(cm)			重さ(g)	観察・その他	挿図番号	図版番号
			出土区・グリット	層位								
930	21	砥石	DM20～EO4	Ⅰ～Ⅱ	砂岩	8.7	4.9	2.5	183.2		245	75
931	2737	砥石	DN15	Ⅰ	泥岩	4.4	2.3	2.1	31.8		245	75
932	1063	砥石	EN3	Ⅱb	泥岩	11.9	3.8	1.7	106.9		245	75
－	267	MF	DN11	Ⅱ	チャート	1.3	1.3	0.4	0.6		－	－
－	323	MF	DN15	Ⅱ	チャート	2.4	1.9	0.5	2.5		－	－
－	42	石皿・台石類	EN7	Ⅰ～Ⅲ	砂岩	7.5	5.0	4.1	238.2		－	－
929	697	磨石・叩石類	DO17	Ⅲ	安山岩	15.8	7.0	4.3	657.7	使用痕分類B	245	75

表107　遺物包含層出土金属製品一覧表

掲載番号	取上番号	器種	出土位置		素材	長軸/短軸/幅・厚さ(cm)			重さ(g)	観察・その他	挿図番号	図版番号
			出土区・グリット	層位								
923	321	角釘	DN15	Ⅱ	鉄	4.1	0.5	0.5	3.0	頂部欠損	244	75
924	242	角釘	DN12	Ⅱ	鉄	(7.1)	0.8	0.9	20.2	両端欠損	244	75
－	33	釘	DM13～DO15	Ⅰ～Ⅱ	鉄	7.2	0.9	0.6	6.6	丸釘	－	－
－	834-8	釘	EN3	Ⅱ	鉄	(4.4)	1.1	0.9	5.8	丸釘か、両端欠損	－	－
925	998	不明鉄製品	EN1	Ⅲ（Ⅴ上面）	鉄	3.2	1.5	0.9	7.8		244	75
926	770	鉛玉	DN20	－	鉛	1.1	1.1	1.1	9.0		244	75
927	382	煙管	DM15	Ⅱ	銅	10.9	8.0	7.5	12.8		244	75
928	333	銭貨	DN13	Ⅱ	銅	2.4	2.4	0.1	2.9	「寛永通宝」、新寛永	244	75
－	233	銭貨	DO11	Ⅱ	銅か	2.3	2.3	0.1	3.8	近代か	－	－

第５章　自然科学分析

第１節　分析の概要と成果

１　花粉分析及びプラント・オパール分析

分析の経緯　六里遺跡・稲荷遺跡では、試掘・確認調査において水田耕作土と推定される堆積（Ⅲ層）を確認した。これを受けて、水田跡であることを検証し、さらに他の作物の有無、種類及び周辺の自然環境を把握することを目的に、花粉分析及びプラント・オパール分析の実施を計画した。その後の調査の進展により、水田跡だけでなく畑跡の可能性がある畝溝状遺構群や古墳時代から古代の溝を検出し、これらの遺構が花粉化石やプラント・オパールを含む可能性がある粘質シルトや粘土で埋没していることから、古代以前の古環境を検証することも分析の目的に含めた。

分析結果と考察　今回の分析試料で、最も古い土壌は六里遺跡のⅣ層・Ⅴ層及び稲荷遺跡のⅣ層であるが、花粉化石を検出することができなかった。プラント・オパールはネザサ節型が多量に産出しているが、このことから当該地は、開けた日の当たる場所であったことが推定され、Ⅳ・Ⅴ層の堆積段階が乾燥状態にあったとする花粉分析の結果とも矛盾しない。以降の時代においても、ネザサ属のプラント・オパールが卓越する状況から、縄文時代晩期以降の地形形成段階において開けた地形となり、大きく地形が変わらなかったと推定される。遺構では、古墳時代前期に設置されたと考えられるSD35の埋土で分析を行ったが、後の遺構やⅢ層と大きな違いを見出すことはできなかった。古墳時代中期以前のSD42も同様である。７世紀代の遺構と考えられるSD54やSD60では栽培植物と考えられるベニバナ属の花粉が僅かに検出されており、新たに栽培が始まった可能性がある。六里遺跡・稲荷遺跡の畝溝状遺構群については、イネ科のプラント・オパールを産出したものと産出しないものが認められる。いずれの遺構もⅢ層の耕作によって耕土が失われているため、検出されたプラント・オパールもその影響を受けていると思われる。条里地割施行前後の遺構と考えられる六里遺跡のSD24・SN27-D13、稲荷遺跡のSN１が揃ってコウヤマキ属が卓越する現象が見られ、当時の植生を反映している可能性がある。Ⅲ層の花粉分析の結果から、丘陵地にコナラ属アカガシ亜属やシイノキ属－マテバシイ属などの照葉樹林が発達し、その上部の山地にはコナラ属コナラ亜属やブナ属などの落葉広葉樹林が分布し、スギ林も存在していたとされる植生が推定されているが、前述のように古墳時代前期以降大きな植生の変化はないと思われる。なお、Ⅲ層には多量のイネ科のプラント・オパールに加え、ソバ属の花粉が検出されており、中世段階から付近でソバの栽培が始まった可能性がある。また、一時期古い水田層と推定される六里遺跡のⅢｂ層でもイネ科のプラント・オパールが検出されており、中世以前にも水田耕作が行われていたと考えられる。六里遺跡・稲荷遺跡ともⅡ層の土壌ではスギ属の花粉化石が減少し、マツ属が増える傾向にある。中世以降、近世から現代にかけての周辺の植生の変化を反映していると推測される。

２　樹種同定及び放射性年代測定

分析の経緯　樹種同定は、六里遺跡第３調査面のSK112出土炭化材を対象に実施した。検出状況（第

３章第５節）から、当時の人々が意図的に集めた材の可能性があり、当時の用材に対する試料を得ると共に、遺跡の古環境の復元や縄文時代晩期の年代の推定に対する一助とするために実施した。また、SI ４出土炭化物の年代測定については、SI ４が六里遺跡発掘区内の集落跡における最終段階の遺構と考えられたが、これを示す明確な遺物が出土しなかったため、時期を考えるための手段として、年代測定を実施した。

分析結果と考察　六里遺跡 SK112 出土の炭化材は、いずれもクリ材であった。分析においては燃料材として優秀である点に触れられているが、縄文時代においてクリは製品や建物の構造材として広く用いらることや、板材の可能性があることを考えると、手元にあった木材を何らかの目的で燃やした可能性も考えられる。また、六里遺跡で活動した当時の人々が選択的にクリ材を入手できる環境にいたことを示していると思われる。年代測定では、第３章第５節でも述べたように、周囲で出土する縄文土器の推定年代とほぼ一致しており、重要なデータを得ることができたと考える。一方 SI ４の炭化材については、概ね７世紀代の測定結果が得られた。これは、遺構の推定年代とは矛盾しないが、年代を絞り込む結果を得ることはできなかった。

３　鉄滓の成分分析

分析の経緯　今回の調査では鍛冶関連遺構を確認することはできなかったが、六里遺跡の SD26 で出土した鉄滓は、７世紀代の可能性がある。遺跡の西方には赤鉄鉱を産出する金生山があり、当該地域を支配する上で金生山の鉄鉱脈が重要であったとの見解がある（八賀 2005）が、現状ではこれに関連する遺構は確認されていない。そのため、鍛冶関連遺物である鉄滓を分析し、鉄に関する資料を蓄積すると共に、遺跡の性格を考える一助とすることを分析の目的とした。

分析結果と考察　分析の結果、分析した３点とも鍛錬鍛冶の鉄滓の可能性が高いとされた。六里遺跡の東に位置する上保本郷遺跡では、集落において中世の鍛錬鍛冶が営まれていたことが判明しており（岐阜県文化財保護センター 2015）、当該地においても付近に同様な遺構が存在した可能性がある。ただし、県内において、古代以前の鍛冶関連遺構は弥勒寺官衙遺跡群（関市教育委員会 2012 等）や野内遺跡（財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2007）など、ごく限られた遺跡でのみ確認されており、SD26 出土の鉄滓が７世紀以前のものとすれば、重要な資料の一つと考えられる。なお、前掲書において八賀氏は、赤坂赤鉄鉱にヒ素が多く含まれることについて述べられており、例として、当時未公表であった東町田遺跡出土の６世紀後半の椀形滓を挙げている。一方東町田遺跡の発掘調査報告書（大垣市教育委員会 2004）では、赤鉄鉱を素材とする可能性が高いとしながら、これまで示されている赤坂産の赤鉄鉱とは特徴が異なるとされており、真相の解明には至っていない。今回の分析では、SD26 出土品のみ僅かにヒ素の酸化物が含まれることを確認したが、このような自然科学分析の蓄積が今後重要になってくると考えられる。

第２節　花粉分析及びプラント・オパール分析

１　花粉分析

六里遺跡･稲荷遺跡では、古墳時代や平安時代の溝の他、中世や近世以降の水田跡を検出している。以下では、稲荷遺跡や六里遺跡で採取した試料について行った花粉分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。なお、分析は森将志（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

対象試料と方法　六里遺跡の分析対象試料（№１～30）は、水田区画（SN ３・SN ９・SN14・SN17・SN24)、畝溝状遺構群（SN26・SN27)、溝状遺構（SD24、SD30、SD35、SD42、SD54、SD60）から採取した計 30 試料である。稲荷遺跡の分析試料（№31～44）は、D011 グリッド、D013 グリッド、D015 グリッドの発掘区壁面土層及び畝溝状遺構群（SN １)、溝状遺構（SD10・SD14）から採取した計 14 試料である（表 108、第 246 図)。これらの試料について、以下の手順で分析を行った。

試料（湿重量約３～４ｇ）を遠沈管にとり、10％水酸化カリウム溶液を加え 10 分間湯煎する。水洗後、46％フッ化水素酸溶液を加え１時間放置する。水洗後、比重分離（比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１の割合の混酸を加え 20 分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは樹木花粉が 200 を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、保存状態の良好な花粉を選んで単体標本（PL Ｃ.1543～1557）を作製し、写真 13・14 に掲載した。

表108　花粉分析試料一覧表

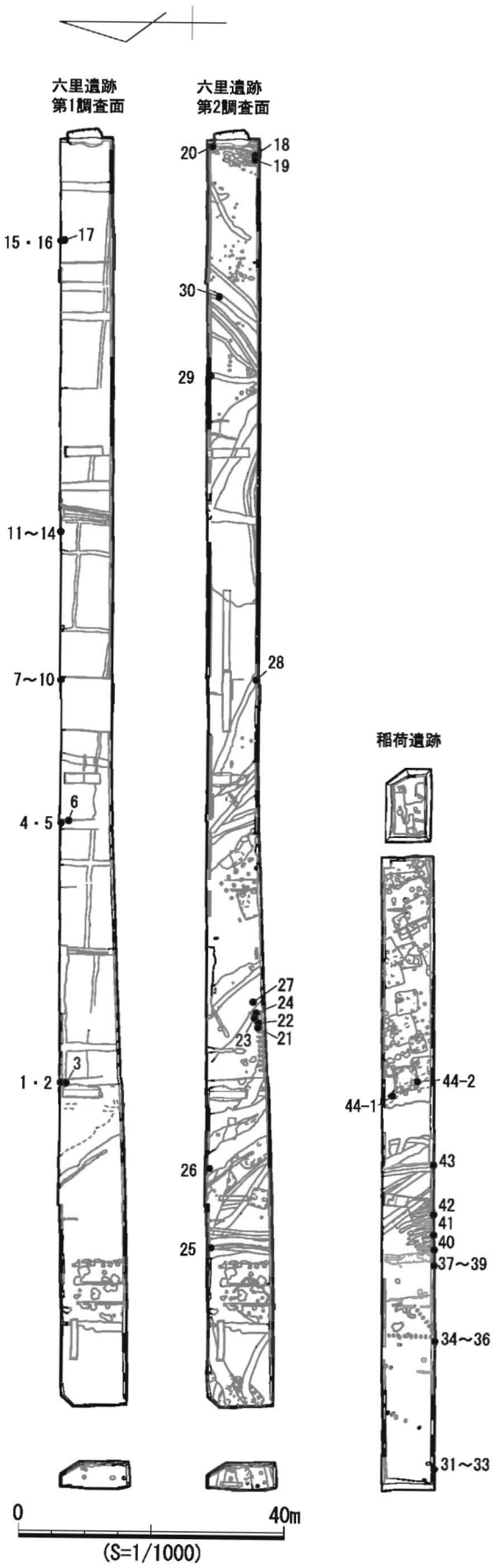
遺跡	種別	採取箇所	層位	土相	試料No.
六里遺跡	水田区画	SN３	Ⅱ層	オリーブ褐色（2.5Y4/3）シルト	1
			Ⅲ層	暗オリーブ色（5Y4/3）シルト	2
			Ⅳ層	灰オリーブ色（5Y4/2）シルト	3
	水田区画	SN９	Ⅱ層	灰オリーブ色（5Y4/2）シルト	4
			Ⅲ層	灰オリーブ色（5Y4/2）シルト	5
			Ⅳ層	灰オリーブ色（5Y4/2）粘土	6
	水田区画	SN14	Ⅱ層	オリーブ黒色（5Y3/2）シルト	7
			Ⅲa層	暗オリーブ色（7.5Y4/3）シルト	8
			Ⅲb層	オリーブ黒色（7.5Y3/2）粘土	9
			Ⅳ層	灰オリーブ色（5Y4/2）粘土	10
	水田区画	SN17	Ⅱ層	暗オリーブ色（5Y4/3）シルト	11
			Ⅲa層	暗オリーブ色（5Y4/3）シルト	12
			Ⅲb層	オリーブ黒色（5Y3/2）粘土	13
			Ⅴ層	オリーブ黒色（5Y3/2）粘土	14
	水田区画	SN24	Ⅱ層	暗オリーブ色（5Y4/3）シルト	15
			Ⅲ層	灰オリーブ色（7.5Y3/2）シルト	16
			Ⅴ層	暗オリーブ色（5Y4/3）粘土	17
	畝状溝跡群	SN26-Ｄ３		灰オリーブ色（5Y4/2）粘土	18
		SN26-Ｄ４		灰オリーブ色（7.5Y6/2）シルト	19
		SN26-Ｄ５		灰オリーブ色（5Y4/2）シルト	20
		SN27-D10		灰オリーブ色（5Y4/2）シルト	21
		SN27-D11		灰オリーブ色（5Y4/2）シルト	22
		SN27-D12		オリーブ黒色（5Y3/2）シルト	23
		SN27-D13		オリーブ黒色（5Y3/2）シルト	24
	溝状遺構	SD24		オリーブ褐色（2.5Y4/3）シルト	25
		SD30		オリーブ黒色（5Y3/2）シルト	26
		SD35		オリーブ黒色（7.5Y3/2）粘土	27
		SD42	最下層	暗灰黄色（2.5Y4/2）粘土	28
		SD54		暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）粘土	29
		SD60		オリーブ黒色（5Y3/2）粘土	30
稲荷遺跡	グリッド	D011	Ⅱ層	オリーブ黒色（5Y3/2）シルト	31
			Ⅲ層	灰オリーブ色（7.5Y4/2）シルト	32
			Ⅳ層	灰オリーブ色（5Y4/2）粘土	33
	グリッド	D013	Ⅱ層	灰オリーブ色（5Y4/2）シルト	34
			Ⅲ層	灰オリーブ色（5Y4/2）シルト	35
			Ⅳ層	暗オリーブ色（5Y4/3）シルト	36
	グリッド	D015	Ⅱ層	黒褐色（2.5Y3/2）シルト	37
			Ⅲ層	暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト	38
			Ⅳ層	オリーブ黒色（2.5Y4/3）粘土	39
	畝状溝跡群	SN１-Ｄ７		暗オリーブ色（5Y4/3）シルト	40
		SN１-Ｄ９		灰オリーブ色（7.5Y4/2）粘土	41
		SN１-D10		灰オリーブ黒色（5Y4/2）粘土	42
	溝状遺構	SD10	最下層	暗灰黄色（2.5Y4/2）粘土	43
		SD14	最下層	暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）粘土	44

分析結果

①六里遺跡（表 109・110、第 247 図）

六里遺跡の 30 試料から検出した花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉 42、草本花粉 35、形態分類を含むシダ植物胞子３の総計 80 である。分布図の樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。なお、樹木花粉 200 未満の試料については検出の有無のみを分布図に示したが、一部の試料（SN ３・SN ９のⅡ層）については産出傾向を把握するために分布図に示した分類群がある。また、図表においてハイフン（－）で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。さらに、クワ科やユキノシタ科、マメ科の花粉には樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れた。

30 試料の検鏡を行った結果、10 試料（SN ３のⅡ層・Ⅳｂ層、SN ９のⅡ層・Ⅳｂ層、SN17 のⅤ層、SN24 のⅡ層・Ⅴ層、SN27）には十分な量の花粉化石が含まれていなかった。十分な量の花粉が得られた試料で産出が目立つ分類群は、マツ属複維管束亜属、コウヤマキ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、シイノキ属－マテバシイ属などである。マツ属複維管束亜属は SN ３と SN ９、SN14 のⅡ層において産出が目立つ。コウヤマキ属は 0.5 ～ 41％の産出率を示し、SN27-D23 と SD24 において産出が多い。スギ属は１～ 27％の産出率を示し、SN14、SN17 では上位層に向かって減少する。コナラ属コナラ亜属とコナラ属アカガシ亜属、シイノキ属－マテバシイ属の産出率は、それぞれ６～ 43％、１～ 23％、１～ 24％である。草本花粉ではイネ科が多く産出しており、８～ 61％の産出率である。また、アブラナ科の産出は SN ３、SN ９、SN14 で多い。その他では、栽



第246図　試料採取位置

培植物のソバ属とベニバナ属が産出しており、ソバ属はSN３のⅡ層、SN14のⅡ層とⅢ層、SN17のⅡ層、SN24のⅡ層とⅢ層、SN26-D4で、ベニバナ属はSD60とS054で産出している。

②稲荷遺跡（表111、第248図）

稲荷遺跡では、14試料から検出した花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉28、草本花粉29、形態分類のシダ植物胞子２の総計59である。分布図の樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。なお、樹木花粉200未満の試料については検出の有無のみを分布図に示した。また、図表においてハイフン（－）で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。さらに、クワ科やマメ科の花粉には樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

14試料の検鏡を行った結果、D013グリッドのⅣ層とD015グリッドのＶａ層、SD10、SD14では十分な量の花粉化石が得られなかった。十分な量の花粉が得られた試料で産出が目立つ分類群は、マツ属複維管束亜属、コウヤマキ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、シイノキ属－マテバシイ属などである。マツ属複維管束亜属は各グリッドのⅡ層において産出が目立つ。特にD015グリッドⅡ層では55％の産出率を示し、突出している。コウヤマキ属は１～37％の産出率を示し、特に畝溝状遺構群で採取した試料（SN26-D ３～５）で産出が多い。スギ属は５～26％の産出率を示し、上位層に向かって減少する。コナラ属コナラ亜属とコナラ属アカガシ亜属、シイノキ属－マテバシイ属の産出率は、それぞれ７～37％、0.5～19％、４～21％である。草本花粉ではイネ科が最も多く産出しており、25～60％の産出率である。また、アブラナ科がD015グリッドのⅡ層で突出しており、33％の産出率を示す。その他では、栽培植物のソバ属がD011グリッドのⅡ層とD013グリッドのⅡ層、D015グリッドのⅡ層とⅢ層で産出している。

古植生について　六里遺跡では、縄文時代晩期の遺物包含層であるＶ層（SN17、SN24下層）は、花粉化石がほとんど含まれていなかった。一般的に花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境に堆積すると紫外線や土壌バクテリアなどによって分解され消失してしまう。そのため、堆積物が酸素と接触する機会の多い堆積環境では花粉が残りにくい。Ｖ層の堆積当時の試料採取箇所周辺は乾燥状態にあったと推測される。Ⅳ層では３試料の分析を行ったが、うち２試料では十分な量の花粉が得られなかった。よって、Ⅳ層堆積時においても一部の場所では乾燥状態にあったと考えられる。SN14のⅣ層では十分な量の花粉化石が得られ、プラント・オパール分析でイネ機動細胞珪酸体も産出しており、草本花粉で水田雑草を含む分類群であるミズアオイ属やキカシグサ属の産出も見られる。しかし、後の確認で、上層との撹拌が認められる箇所の試料を採取したことが判明し、Ⅲ層の分析結果を反映している可能性が高い。

Ⅲ層から産出した樹木花粉では、落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属や照葉樹のコナラ属アカガシ亜属、温帯性針葉樹のスギ属の産出が目立つ。中部・東海地方の植生は「中部・東海地方の植生史」（守田ほか1998）にまとめられており、それによると標高約500ｍ以下の丘陵帯では下部にシイやカシが優占し、上部にカシの優占する常緑広葉樹林が発達する。標高500～1700ｍの山地帯ではブナやミズナラを主とする冷温帯性落葉広葉樹林が発達するが、太平洋側の丘陵帯上部から山地帯下部の移行帯ではモミやツガなどの針葉樹が混交し、しばしば優占する。Ⅲ層から産出する上記の分類群はこうした丘陵帯から山地帯にかけての植生を反映していると考えられる。すなわち、当遺跡周辺の丘

表109　六里遺跡から産出した花粉胞子一覧表①

学名	和名	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	No.14	No.15
樹木																
Podocarpus	マキ属	–	–	–	–	1	–	3	–	2	1	–	3	1	–	–
Abies	モミ属	–	1	–	–	2	–	–	2	9	11	1	2	4	–	–
Tsuga	ツガ属	3	3	–	3	9	–	4	7	3	2	–	4	4	–	–
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	57	9	–	22	20	–	106	14	9	7	11	10	10	–	3
Sciadopitys	コウヤマキ属	3	28	–	–	27	1	1	22	8	7	6	17	6	–	1
Cryptomeria	スギ属	6	43	–	1	36	–	30	27	52	56	11	38	42	2	4
Taxaceae－*Cephalotaxaceae*－*Cupressaceae*	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	–	–	–	–	8	–	2	1	22	16	4	13	43	–	1
Salix	ヤナギ属	–	–	–	–	1	–	–	–	1	1	–	–	1	–	–
Myrica	ヤマモモ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Pterocarya－*Juglans*	サワグルミ属－クルミ属	–	1	–	–	1	–	–	–	2	1	2	3	3	–	1
Carpinus－*Ostrya*	クマシデ属－アサダ属	1	7	–	–	8	–	2	12	4	5	11	7	6	1	11
Corylus	ハシバミ属	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Betula	カバノキ属	–	–	–	–	4	–	1	3	6	–	2	1	2	–	–
Alnus	ハンノキ属	3	7	1	3	4	1	11	8	4	3	16	3	3	–	3
Fagus	ブナ属	–	6	–	–	15	–	1	12	6	9	9	24	18	–	6
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	13	40	–	13	35	–	18	55	34	38	89	41	21	1	10
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	1	17	–	–	18	–	3	30	31	29	22	23	13	–	4
Castanea	クリ属	–	1	–	3	6	–	9	1	4	3	2	3	3	–	–
Castanopsis－*Pasania*	シイノキ属－マテバシイ属	7	40	–	7	8	1	12	12	5	10	15	10	8	–	2
Ulmus－*Zelkova*	ニレ属－ケヤキ属	–	–	–	–	5	–	–	2	5	6	1	1	8	–	–
Celtis－*Aphananthe*	エノキ属－ムクノキ属	–	–	–	–	–	–	–	–	2	–	–	–	1	–	–
Illicium	シキミ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Phellodendron	キハダ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Daphniphyllum	ユズリハ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	1	–	–
Mallotus	アカメガシワ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Rhus－*Toxicodendron*	ヌルデ属－ウルシ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Ilex	モチノキ属	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	1
Celastraceae	ニシキギ科	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Acer	カエデ属	–	–	–	–	1	–	–	2	–	–	–	1	1	–	–
Aesculus	トチノキ属	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	2	–	–	1
Vitis	ブドウ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Parthenocissus	ツタ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2	–	–	–	–
Tilia	シナノキ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Araliaceae	ウコギ科	–	–	–	–	3	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
Aucuba	アオキ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Cornus	ミズキ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Ericaceae	ツツジ科	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Diospyros	カキノキ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Symplocos	ハイノキ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–
Ligustrum	イボタノキ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Fraxinus	トネリコ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2	6	–	–
Lonicera	スイカズラ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
草本																
Typha	ガマ属	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
Alisma	サジオモダカ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Sagittaria	オモダカ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
Gramineae	イネ科	81	79	–	109	406	1	352	203	324	171	100	372	321	–	173
Cyperaceae	カヤツリグサ科	–	2	–	1	5	–	2	1	8	14	1	15	97	–	5
Eriocaulon	ホシクサ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Commelina	ツユクサ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Aneilema	イボクサ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Monochoria	ミズアオイ属	–	–	–	–	1	–	–	1	1	2	2	–	–	–	–
Moraceae	クワ科	–	1	–	–	1	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Polygonum sect. *Persicaria*－*Echinocaulon*	サナエタデ節－ウナギツカミ節	–	1	–	–	1	–	1	1	–	1	–	2	1	–	–
Polygonum sect. *Reynoutria*	イタドリ節	–	–	–	–	–	–	1		–	–	–	–	–	–	–
Fagopyrum	ソバ属	2	–	–	–	–	–	2	4	–	–	3	–	–	–	1
Chenopodiaceae－*Amaranthaceae*	アカザ科－ヒユ科	5	2	–	2	2	–	–	2	–	–	1	2	1	–	–
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	–	–	2	3	–	5	3	10	–	1	5	–	–	3
Ranunculaceae	キンポウゲ科	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Brassicaceae	アブラナ科	528	2	–	857	5	–	779	2	3	3	1	4	2	–	8
Saxifragaceae	ユキノシタ科	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–
Leguminosae	マメ科	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Dunbaria	ノアズキ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Impatiens	ツリフネソウ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Rotala	キカシグサ属	–	4	–	3	7	–	3	5	4	1	3	2	1	–	1
Haloragis	アリノトウグサ属	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	4	–	–	–	1
Apiaceae	セリ科	–	–	–	1	–	–	–	–	2	–	–	1	–	–	–
Labiatae	シソ科	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Solanum	ナス属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Justicia	キツネノマゴ属	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
Plantago	オオバコ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Paederia	ヘクソカズラ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Actinostemma－*Gynostemma*	ゴキヅル属－アマチャヅル属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Ambrosia－*Xanthium*	ブタクサ属－オナモミ属	–	–	–	–	–	–	–	–	1	1	–	–	–	–	–
Carthamus	ベニバナ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Artemisia	ヨモギ属	–	1	–	–	2	–	3	3	4	15	2	5	5	–	1
Tubuliflorae	キク亜科	–	–	–	2	–	–	1	–	2	–	–	3	2	1	–
Liguliflorae	タンポポ亜科	47	12	–	37	15	–	89	7	7	–	7	20	1	–	6
シダ植物																
Salvinia	サンショウモ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
monolete type spore	単条溝胞子	23	9	1	43	8	5	9	22	3	9	7	13	5	13	23
trilete type spore	三条溝胞子	20	3	–	15	5	3	17	16	–	3	8	6	5	3	14
Arboreal pollen	樹木花粉	94	204	1	52	213	3	204	210	210	206	208	210	205	4	48
Nonarboreal pollen	草本花粉	665	104	–	1014	448	1	1240	233	366	208	126	431	433	1	199
Spores	シダ植物胞子	43	12	1	58	13	8	26	38	3	12	15	19	10	16	37
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	802	320	2	1124	674	12	1470	481	579	426	349	660	648	21	284
unknown	不明	3	8	–	–	6	–	6	1	13	4	6	3	10	–	2

表110　六里遺跡から産出した花粉胞子一覧表②

学名	和名	No.16	No.17	No.18	No.19	No.20	No.21	No.22	No.23	No.24	No.25	No.26	No.27	No.28	No.29	No.30
樹木																
Podocarpus	マキ属	–	–	2	1	4	–	–	–	–	6	1	–	1	4	1
Abies	モミ属	–	–	8	1	11	–	–	–	1	2	4	2	8	10	12
Tsuga	ツガ属	4	–	8	2	3	–	–	1	4	31	2	–	5	16	2
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	2	–	16	18	12	–	–	1	6	4	23	6	7	10	4
Sciadopitys	コウヤマキ属	13	1	11	14	10	1	1	2	62	85	8	3	16	16	6
Cryptomeria	スギ属	17	3	39	49	33	–	–	1	9	3	40	36	17	37	42
Taxaceae—Cephalotaxaceae—Cupressaceae	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	4	–	22	11	16	–	–	–	2	–	24	16	4	6	13
Salix	ヤナギ属	–	–	–	–	2	–	–	–	–	–	2	–	1	–	–
Myrica	ヤマモモ属	–	–	–	–	1	–	–	–	–	1	1	–	–	–	1
Pterocarya—Juglans	サワグルミ属－クルミ属	1	–	4	5	11	–	–	–	1	4	3	10	1	–	–
Carpinus—Ostrya	クマシデ属－アサダ属	19	1	13	6	8	–	–	–	2	7	4	8	1	4	5
Corylus	ハシバミ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Betula	カバノキ属	6	–	2	–	2	–	–	–	1	–	6	3	–	–	1
Alnus	ハンノキ属	10	1	4	2	2	–	–	–	–	2	2	19	–	2	5
Fagus	ブナ属	16	1	17	19	18	–	–	–	3	5	12	4	3	13	7
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	59	–	23	13	22	–	–	1	42	18	22	23	51	44	44
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	31	–	24	48	42	–	–	1	15	17	24	11	27	24	26
Castanea	クリ属	11	–	1	12	9	–	–	–	8	1	4	21	2	1	10
Castanopsis—Pasania	シイノキ属－マテバシイ属	6	–	3	4	2	–	–	4	40	14	11	19	47	14	18
Ulmus—Zelkova	ニレ属－ケヤキ属	2	–	5	2	8	–	–	–	1	2	10	8	5	3	2
Celtis—Aphananthe	エノキ属－ムクノキ属	–	–	1	–	1	–	–	–	1	–	2	–	1	–	1
Illicium	シキミ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Phellodendron	キハダ属	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	1	1	–	–
Daphniphyllum	ユズリハ属	2	–	1	2	3	–	–	–	–	2	1	1	–	1	1
Mallotus	アカメガシワ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Rhus—Toxicodendron	ヌルデ属－ウルシ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	3	–	–	–	–
Ilex	モチノキ属	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Celastraceae	ニシキギ科	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Acer	カエデ属	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	1	–
Aesculus	トチノキ属	1	–	1	1	1	–	–	–	–	–	–	12	1	–	–
Vitis	ブドウ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Parthenocissus	ツタ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Tilia	シナノキ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Araliaceae	ウコギ科	1	–	–	–	–	–	–	–	1	1	1	1	–	–	–
Aucuba	アオキ属	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–
Cornus	ミズキ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Ericaceae	ツツジ科	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Diospyros	カキノキ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Symplocos	ハイノキ属	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Ligustrum	イボタノキ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	4
Fraxinus	トネリコ属	–	–	1	–	1	–	–	–	–	–	5	–	–	–	–
Lonicera	スイカズラ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2	–	–	–	–
草本																
Typha	ガマ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2
Alisma	サジオモダカ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Sagittaria	オモダカ属	–	–	4	2	2	–	–	–	–	–	1	–	–	1	–
Gramineae	イネ科	373	3	341	292	305	–	1	3	107	257	248	40	59	72	108
Cyperaceae	カヤツリグサ科	6	–	26	12	16	–	–	–	6	6	21	2	8	9	9
Eriocaulon	ホシクサ属	–	–	1	–		–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Commelina	ツユクサ属	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Aneilema	イボクサ属	–	–	1	–		–	–	–	–	–	1	–	–	–	1
Monochoria	ミズアオイ属	1	–	1	1	1	–	–	–	–	–	3	–	–	–	–
Moraceae	クワ科	1	–	2	1	1	–	–	–	–	1	–	1	–	–	–
Polygonum sect. *Persicaria—Echinocaulon*	ヌナミダグ節－ウナギツカミ節	2	–	1	–	–	–	–	–	3	2	1	–	4	1	1
Polygonum sect. *Reynoutria*	イタドリ節	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–
Fagopyrum	ソバ属	3	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Chenopodiaceae—Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	6	–	–	–	–	–	–	–	2	3	–	–	–	–	2
Caryophyllaceae	ナデシコ科	5	–	–	1	–	–	–	–	4	4	–	–	–	1	2
Ranunculaceae	キンポウゲ科	1	–	1	1	–	–	–	2	–	1	1	–	–	–	–
Brassicaceae	アブラナ科	3	–	1	–	1	–	–	–	12	–	1	–	2	2	1
Saxifragaceae	ユキノシタ科	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	1	–	–	–
Leguminosae	マメ科	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Dunbaria	ノアズキ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Impatiens	ツリフネソウ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	14
Rotala	キカシグサ属	–	–	1	6	4	–	–	–	–	6	1	–	–	–	–
Haloragis	アリノトウグサ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Apiaceae	セリ科	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2	2	–	1	2
Labiatae	シソ科	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	2	–	1
Solanum	ナス属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Justicia	キツネノマゴ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Plantago	オオバコ属	–	–	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
Paederia	ヘクソカズラ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
Actinostemma—Gymnostemma	ゴキヅル属－アマチャヅル属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2	–	–	–	–
Ambrosia—Xanthium	ブタクサ属－オナモミ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Carthamus	ベニバナ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	1
Artemisia	ヨモギ属	9	1	7	9	2	–	–	1	6	5	12	7	19	8	242
Tubuliflorae	キク亜科	3	–	3	–	–	–	1	–	1	–	3	–	11	1	–
Liguliflorae	タンポポ亜科	9	–	9	9	7	1	–	1	56	16	5	3	3	3	4
シダ植物																
Salvinia	サンショウモ属	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
monolete type spore	単条溝胞子	25	–	1	1	1	–	2	3	24	10	1	165	41	4	11
trilete type spore	三条溝胞子	9	2	3	1	–	–	–	2	5	2	4	96	1	4	4
Arboreal pollen	樹木花粉	207	7	206	210	224	1	1	11	200	205	219	207	200	206	207
Nonarboreal pollen	草本花粉	424	4	399	335	341	1	2	7	197	302	309	58	108	100	391
Spores	シダ植物胞子	34	2	4	2	1	–	2	5	29	12	5	261	42	9	15
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	665	13	609	547	566	2	5	23	426	519	533	526	350	315	613
unknown	不明	3	–	2	4	1	–	–	–	2	6	5	8	7	3	2

表111　稲荷遺跡から産出した花粉胞子一覧表

学名	和名	No.31	No.32	No.33	No.34	No.35	No.36	No.37	No.38	No.39	No.40	No.41	No.42	No.43	No.44
樹木															
Podocarpus	マキ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1		
Abies	モミ属	-	-	4	1	1	-	-	2	-			2		2
Tsuga	ツガ属	3	3	10	14	6	-	-	7	-	5	2			
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	19	4	8	21	2	-	115	29	-	2	3	6		
Sciadopitys	コウヤマキ属	3	16	9	9	20	1	2	19	-	79	31	51		2
Cryptomeria	スギ属	10	28	55	12	31	1	36	57	-	20	36	36		-
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	2	8	7	5	2	-	1	1	-	2	6	2		-
Myrica	ヤマモモ属	1	2	-	1	3	-	1		-		2			-
Pterocarya－*Juglans*	サワグルミ属－クルミ属	3	1	2	3	1	-	-	4	-	3		4		-
Carpinus－*Ostrya*	クマシデ属－アサダ属	5	13	5	13	15	-	4	12	1	5	5	6		-
Betula	カバノキ属	2	2	2	3	-	-	3	3	-	2	1			-
Alnus	ハンノキ属	11	6	4	21	5	-	10	7	-	8	3	2		-
Fagus	ブナ属	10	12	25	11	30	-	2	20	-	7	5	15		-
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	73	39	50	59	43	1	15	26	-	43	41	44		-
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	10	40	17	19	29	-	1	11	-	20	32	18		-
Castanea	クリ属	4	3	1	5	3	-	7	2	-		8	5		-
Castanopsis－*Pasania*	シイノキ属－マテバシイ属	41	28	10	12	20	-	9	15	-	9	26	10	1	-
Ulmus－*Zelkova*	ニレ属－ケヤキ属	2	1	3	-	2	1	1	3	-	4	4	3	-	-
Celtis－*Aphananthe*	エノキ属－ムクノキ属	-	-	-	-	1	-	-		-				-	-
Daphniphyllum	ユズリハ属	-	2	-	-	-	-	-		-	2		1	-	-
Mallotus	アカメガシワ属	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Ilex	モチノキ属	-	1	-	-	-	-	-		-				-	-
Acer	カエデ属	1	-	-	-	-	-	-	2	-			1	-	-
Aesculus	トチノキ属	-	-	1	-	-	-	-		-			5	-	-
Araliaceae	ウコギ科	-	1	1	-	-	-	-		-	1	2		-	-
Cornus	ミズキ属	-	-	-	-	1	-	-		-				-	-
Ericaceae	ツツジ科	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ligustrum	イボタノキ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
草本															
Typha	ガマ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Alisma	サジオモダカ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Gramineae	イネ科	187	80	417	515	284	3	372	420	5	257	207	291	3	-
Cyperaceae	カヤツリグサ科	7	7	10	19	7	-	6	9	-	5	5	5	-	-
Commelina	ツユクサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Monochoria	ミズアオイ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Moraceae	クワ科	4	-	-	2	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Rumex	ギシギシ属	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-
Polygonum sect. *Persicaria*-*Echinocaulon*	サナエタデ節－ウナギツカミ節	-	-	-	2	2	-	1	1	-	2	1	-	-	-
Polygonum sect. *Reynoutria*	イタドリ節	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fagopyrum	ソバ属	7	-	-	4	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	10	-	3	4	1	-	2	1	-	3	1	2	-	-
Caryophyllaceae	ナデシコ科	20	1	6	5	2	-	6	2	-	4	2	2	-	-
Thalictrum	カラマツソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	-	-
Ranunculaceae	キンポウゲ科	1	-	1	-	-	-	2	-	-	-	1	-	-	-
Brassicaceae	アブラナ科	24	2	-	28	-	-	317	8	-	6	2	2	-	-
Leguminosae	マメ科	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Geranium	フウロソウ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Impatiens	ツリフネソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Rotala	キカシグサ属	10	7	2	6	6	-	6	6	-	5	25	8	-	-
Haloragis	アリノトウグサ属	5	-	-	4	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Apiaceae	セリ科	-	-	1	1	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Menyanthes	ミツガシワ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Justicia	キツネノマゴ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Patrinia	オミナエシ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Ambrosia－*Xanthium*	ブタクサ属－オナモミ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Artemisia	ヨモギ属	1	12	7	2	2	-	1	2	-	5	15	5	-	1
Tubuliflorae	キク亜科	3	1	13	1	-	-	2	1	-	-	-	1	-	-
Liguliflorae	タンポポ亜科	29	1	8	38	-	-	28	14	-	7	6	13	-	-
シダ植物															
monolete type spore	単条溝胞子	23	-	7	29	6	3	1	2	4	31	13	8	8	12
trilete type spore	三条溝胞子	34	4	1	19	3	1	7	4	2	2	2	11		1
Arboreal pollen	樹木花粉	200	210	215	211	215	4	208	221	1	212	207	212	1	4
Nonarboreal pollen	草本花粉	310	112	468	632	308	3	749	468	5	296	268	331	3	1
Spores	シダ植物胞子	57	4	8	48	9	4	8	6	6	33	15	19	8	13
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	567	326	691	891	532	11	965	695	12	541	490	562	12	18
unknown	不明	4	4	-	14	5	-	4	4	-	6	7	7	3	4

陵地にはコナラ属アカガシ亜属やシイノキ属－マテバシイ属などの照葉樹林が発達しており、その上部の山地にはコナラ属コナラ亜属やブナ属などの落葉広葉樹林が分布していた。また、丘陵帯から山地帯にかけて分布を広げる照葉樹林や落葉広葉樹林のなかにはスギ林も存在していたであろう。

古墳時代から中世にかけての遺構や堆積層から採取した試料の樹木花粉では、顕著な花粉組成の相違がみられず、それほど大きな植生の変化はなかったと考えられる。ただし、スギ属は上位層に向かって減少傾向を示し、時期を経るにしたがって分布を縮小させていたかもしれない。さらに、SN27-D13 や SD24 ではコウヤマキ属が突出しており、コウヤマキが分布を広げていたと推測される。なお、コウヤマキ属の突出した産出状況については、堆積環境の相違が影響している可能性や、局地的な植生を反映している可能性などが考えられるが、詳細は不明である。

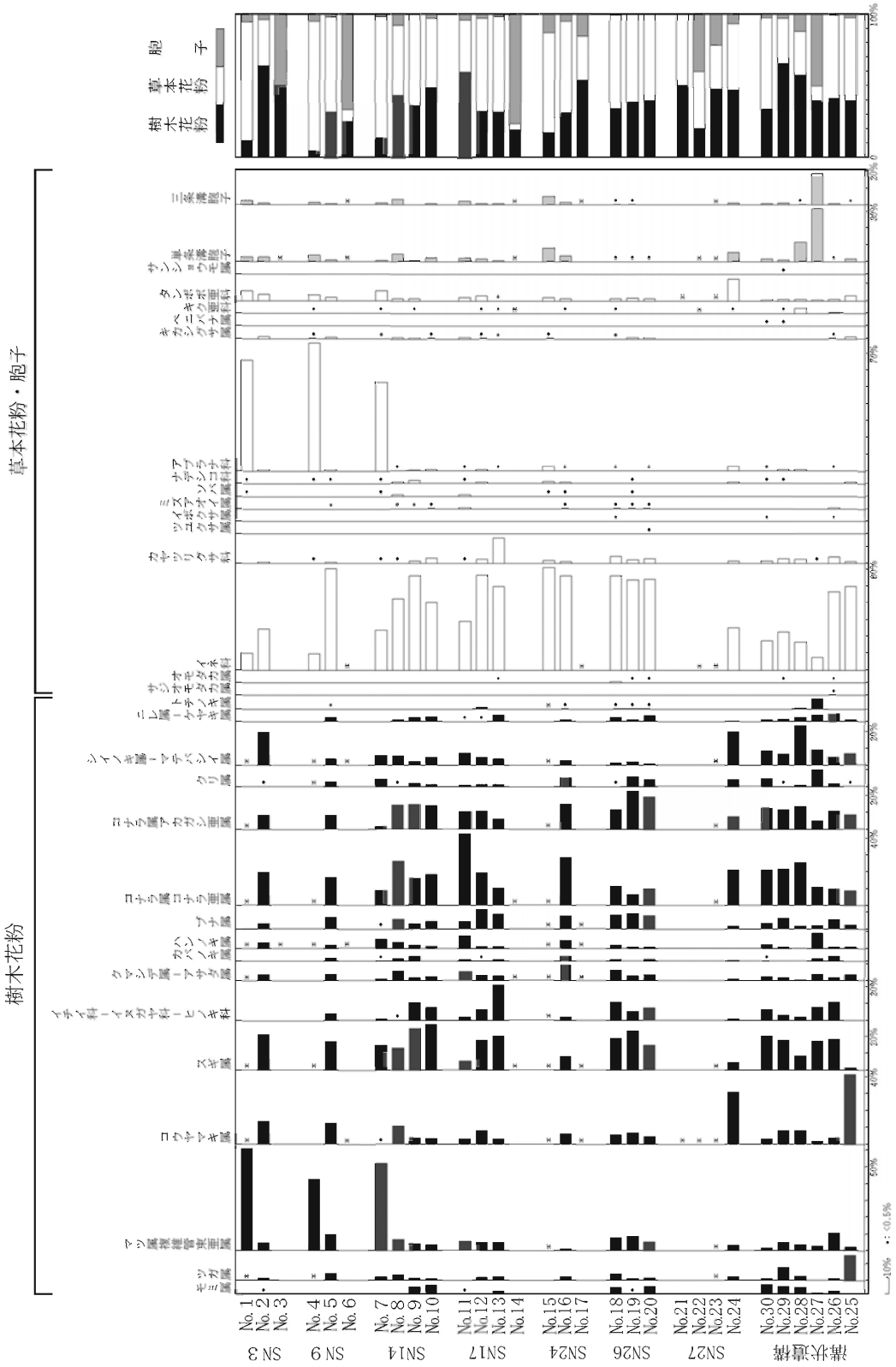
近世以降の耕作土であるⅡ層（SN ３と SN ９、SN14）では、マツ属複維管束亜属が増加している。十分な量の花粉が得られなかった SN ３の SN14 においても樹木花粉で多産するのはマツ属複維管束亜属である（表 109）。これらの採取箇所は六里遺跡の西部に位置するため、おそらく、近世以降では遺跡西部にニヨウマツ類などの二次林が広がっていたと考えられる。さらには、マツ属複維管束亜属の産出が顕著な試料では、アブラナ科の産出も顕著である。稲荷遺跡と同様に水田の一部でアブラナ科が栽培されていたか、水田周辺の畦畔などに野生種が生育していた状況などが推測される。

その他に、栽培植物ではベニバナ属とソバ属の産出も見られた。ベニバナ属は古墳時代後期とみられる SD54 と SD60 で、ソバ属は中世の耕作土であるⅢ層や近世以降の耕作土であるⅡ層を中心とした層準で産出している。ベニバナとソバはともに虫媒花で、広範囲に花粉を散布させないと考えられるため、試料採取箇所周辺において古墳時代後期にはベニバナ栽培が、中世から近世以降にはソバ栽培が行われていたと考えられる。

稲荷遺跡 D013・D015 グリッドのⅣ層では、花粉化石がほとんど含まれていなかった。おそらく、Ⅳ層堆積当時の水田区画周辺は乾燥状態にあったと思われる。D011 グリッドⅣ層では花粉化石が産出しており、落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属やブナ属、照葉樹のコナラ属アカガシ亜属やシイノキ属－マテバシイ属、温帯性針葉樹のスギ属の産出が目立ち、ツガ属やモミ属を伴う。なお、プラント・オパール分析においてもⅣ層ではイネ機動細胞珪酸体を検出しているが、六里遺跡と同様にⅢ層との撹拌がある試料を採取していたことが判明し、本資料についてもⅢ層の分析結果が反映されていると考えられる。畝溝状遺構群から採取した SN １では、コウヤマキ属の産出も目立つ。遺跡周辺の丘陵帯上部から山地帯下部の移行帯においてモミやツガなどと共にコウヤマキも分布を広げていたと思われる。草本花粉ではイネ科が優勢であり、水田雑草を含む分類群であるキカシグサ属を伴っている。

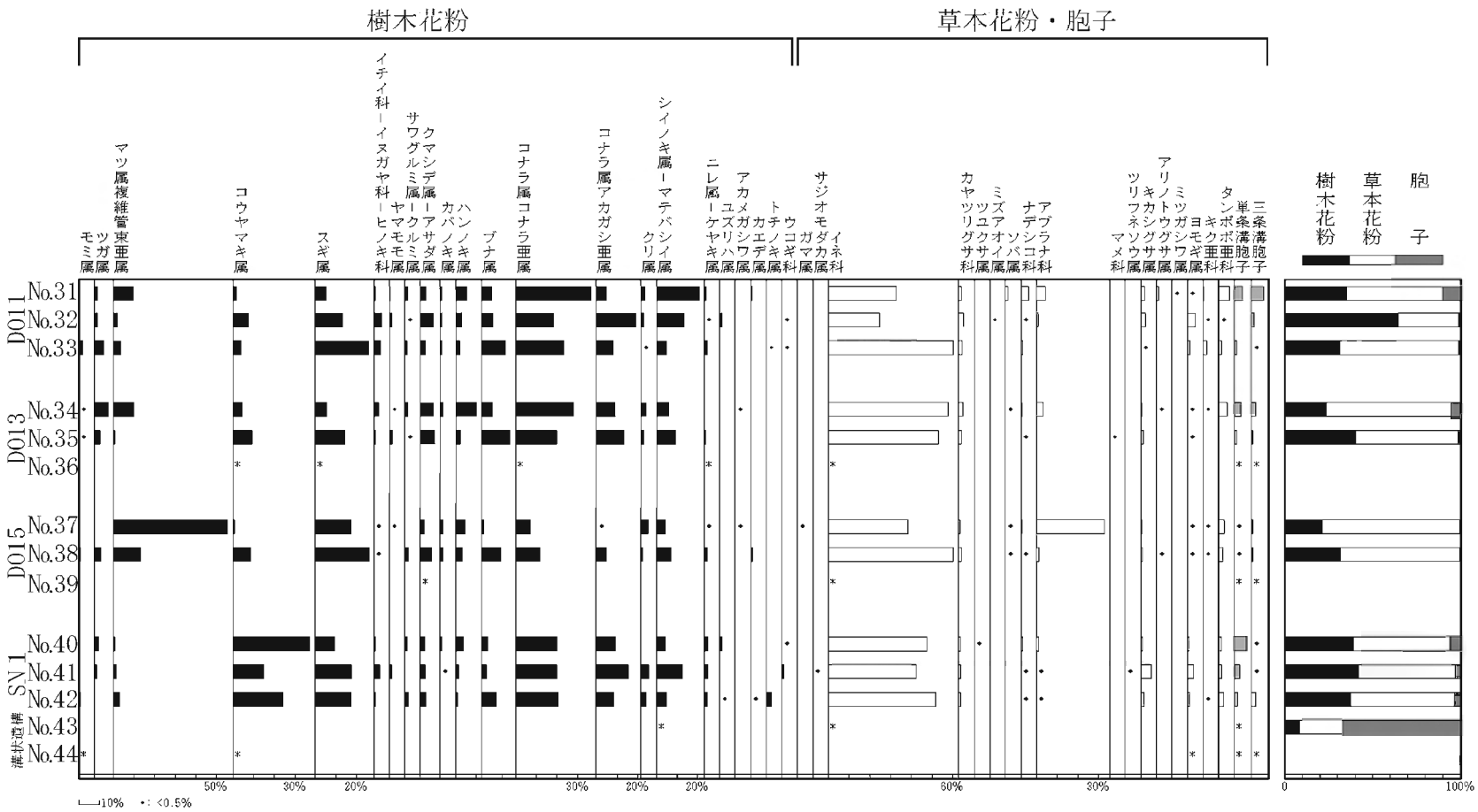
古代以降の水田耕作土であるⅢ層や圃場整備前の耕作土であるⅡ層においても、コナラ亜属などの落葉広葉樹やアカガシ亜属などの照葉樹、スギ属などの温帯性針葉樹が産出しており、遺跡周辺にはⅣ層の堆積時と同様な森林植生が広がっていたと考えられる。ただし、スギ属については上位層に向かって減少傾向を示しているため、スギ林は時期を経るにしたがって分布を縮小させていた可能性がある。代わって、上位層に向かって増加傾向を示すのがマツ属複維管束亜属である。特に D015 グリッドではマツ属複維管束亜属が顕著な産出を示しており、D015 グリッドを中心としてニヨウマツ類の二次林が存在していたと考えられる。また、マツ属複維管束亜属の産出が顕著な試料では、アブラナ科の産出も顕著である。アブラナ科にはナズナ、タネツケバナなどの野生種や蕪、大根といった栽培種が含まれるが、花粉の形態で種を区別するのは難しい。例えば、畦畔にナズナなどの野生種が生育していた状況や、水田の一部において蕪や大根が栽培されていた状況などが推測される。さらには、D011、D013、D015 各グリッドのⅡ層とⅢ層ではソバ属の産出が見られた。ソバは虫媒花で花粉の散布範囲は狭いと考えられるため、試料採取箇所の近辺でソバ栽培が行われていたと推測される。

なお、古代の溝の最下部から採取した SD10 と SD14 では花粉化石が産出しなかった。これらの堆積物は人為的な埋土など、花粉が保存されるのに適した土壌ではなかったと考えられる。



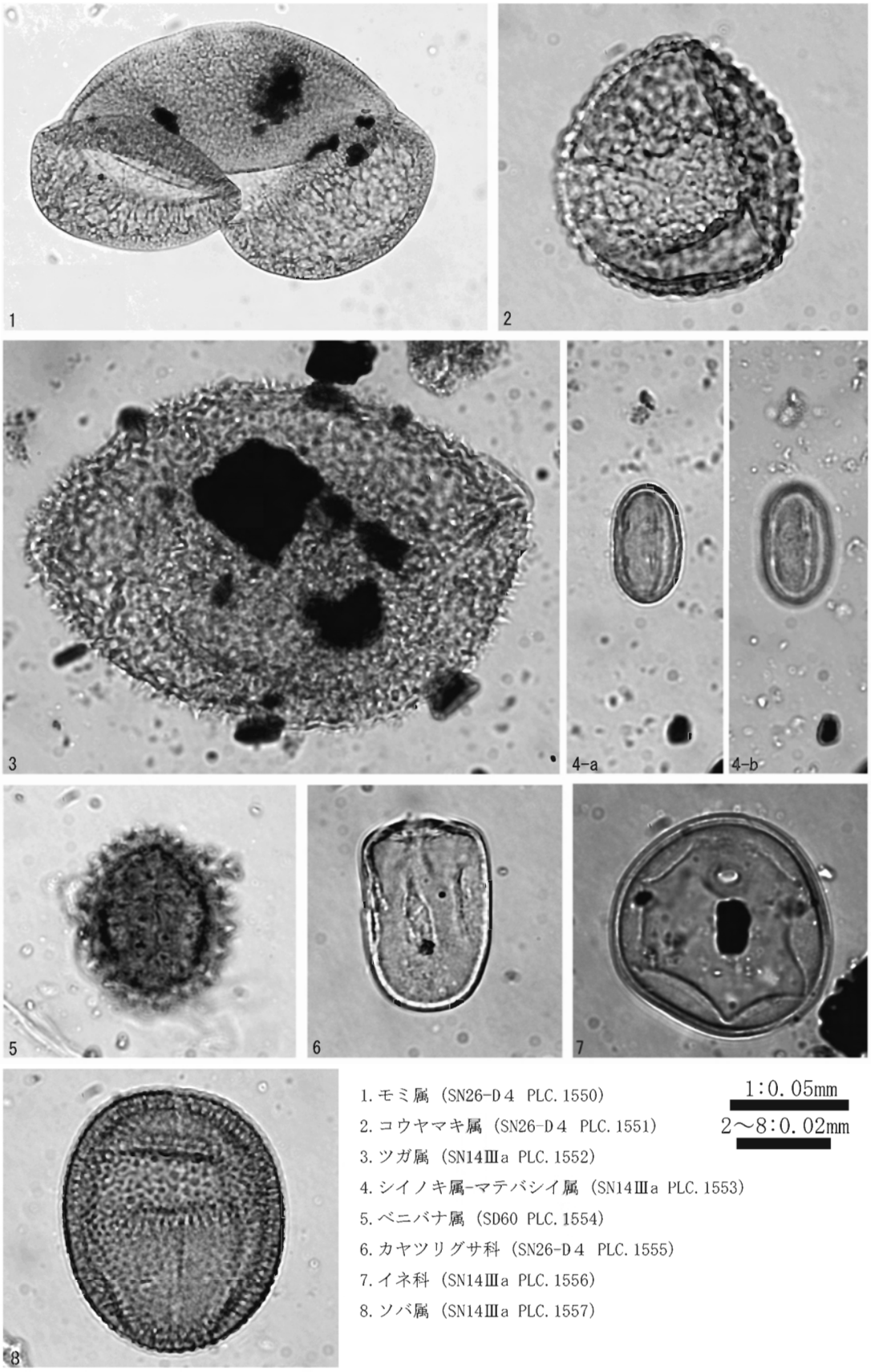
第247図　六里遺跡における花粉分布図

樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は産出花粉胞子総数を基数として百分率で算出した。＊は樹木花粉200個未満の試料について、検出した分類群を示す。



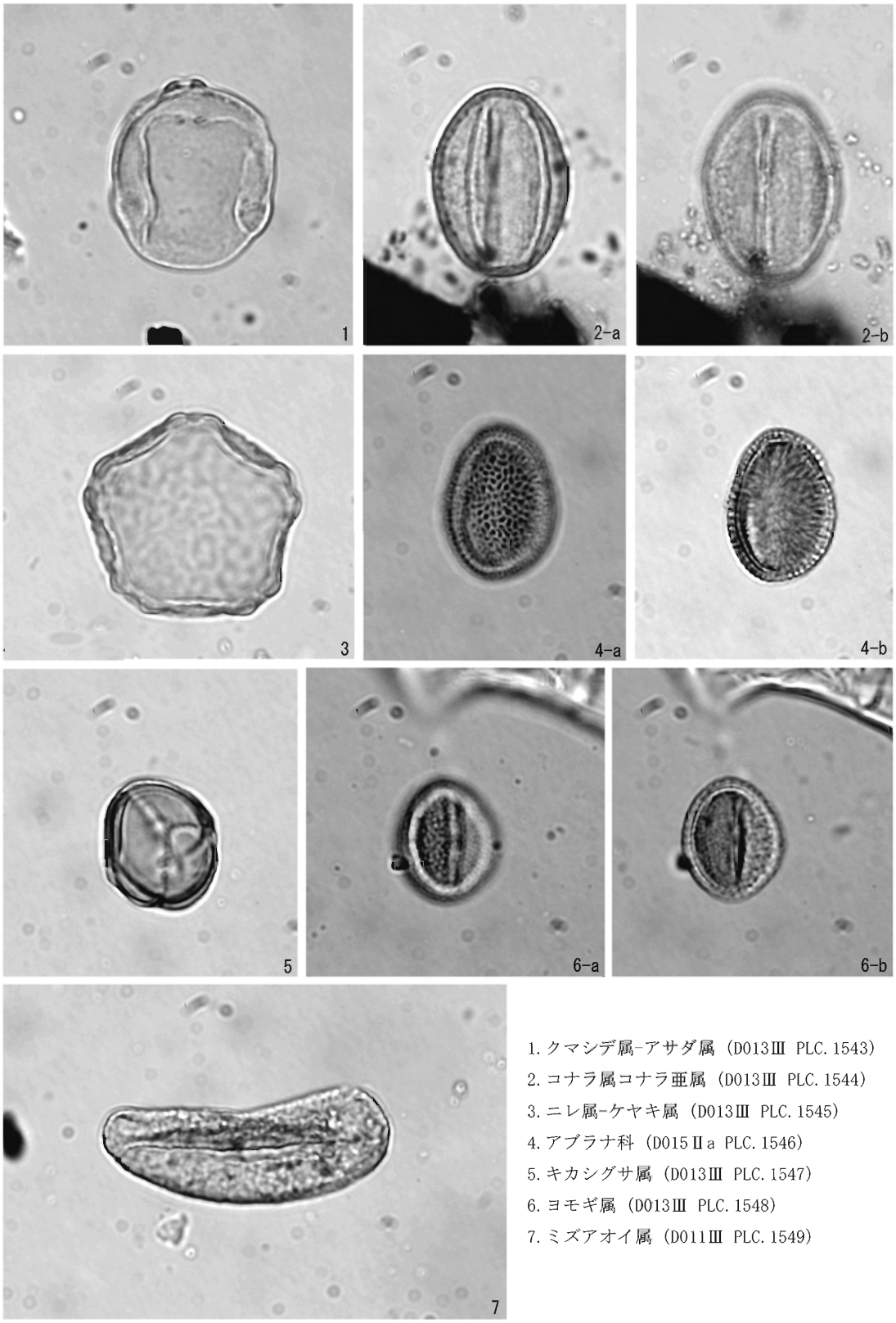
第248図　稲荷遺跡における花粉分布図

樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は産出花粉胞子総数を基数として百分率で算出した。＊は樹木花粉200個未満の試料について、検出した分類群を示す。



1. モミ属（SN26-D４ PLC.1550）
2. コウヤマキ属（SN26-D４ PLC.1551）
3. ツガ属（SN14Ⅲa PLC.1552）
4. シイノキ属-マテバシイ属（SN14Ⅲa PLC.1553）
5. ベニバナ属（SD60 PLC.1554）
6. カヤツリグサ科（SN26-D４ PLC.1555）
7. イネ科（SN14Ⅲa PLC.1556）
8. ソバ属（SN14Ⅲa PLC.1557）

写真11　六里遺跡から産出した花粉化石



1. クマシデ属-アサダ属（D013Ⅲ PLC.1543）
2. コナラ属コナラ亜属（D013Ⅲ PLC.1544）
3. ニレ属-ケヤキ属（D013Ⅲ PLC.1545）
4. アブラナ科（D015Ⅱa PLC.1546）
5. キカシグサ属（D013Ⅲ PLC.1547）
6. ヨモギ属（D013Ⅲ PLC.1548）
7. ミズアオイ属（D011Ⅲ PLC.1549）

写真12　稲荷遺跡から産出した花粉化石

２　プラント・オパール分析

前項の試料の内、耕作に関連する可能性が高い土壌及び比較のために採取した層序の上下層を対象にプラント・オパール分析を実施した。分析は鈴木茂（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

試料と分析方法　六里遺跡の分析対象試料（№１～24）は、水田区画（SN３・SN ９・SN14・SN17・SN24）と畝溝状遺構群（SN26・SN27）から採取した計24試料である。稲荷遺跡の分析試料（№31～42）は、D011グリッド、D013グリッド、D015グリッドの発掘区壁面土層及び畝溝状遺構群（SN １）から採取した計12試料である（表112）。各試料の土相はおおむね灰色系のシルト～粘土である。これら36試料について以下のような手順にしたがってプラント・オパール分析を行った。なお、試料は花粉分析と同位置で採取したものを、同じ番号で表示した。

表112　プラント・オパール分析対象試料一覧

遺跡	種別	採取箇所	層位	土相	試料№
六里遺跡	水田区画	SN３	Ⅱ層	オリーブ褐色（2.5Y4/3）シルト	1
			Ⅲ層	暗オリーブ色（5Y4/3）シルト	2
			Ⅳ層	灰オリーブ色（5Y4/2）シルト	3
	水田区画	SN９	Ⅱ層	灰オリーブ色（5Y4/2）シルト	4
			Ⅲ層	灰オリーブ色（5Y4/2）シルト	5
			Ⅳ層	灰オリーブ色（5Y4/2）粘土	6
	水田区画	SN14	Ⅱ層	オリーブ黒色（5Y3/2）シルト	7
			Ⅲa層	暗オリーブ色（7.5Y4/3）シルト	8
			Ⅲb層	オリーブ黒色（7.5Y3/2）粘土	9
			Ⅳ層	灰オリーブ色（5Y4/2）粘土	10
	水田区画	SN17	Ⅱ層	暗オリーブ色（5Y4/3）シルト	11
			Ⅲa層	暗オリーブ色（5Y4/3）シルト	12
			Ⅲb層	オリーブ黒色（5Y3/2）粘土	13
			Ⅴ層	オリーブ黒色（5Y3/2）粘土	14
	水田区画	SN24	Ⅱ層	暗オリーブ色（5Y4/3）シルト	15
			Ⅲ層	灰オリーブ色（7.5Y3/2）シルト	16
			Ⅴ層	暗オリーブ色（5Y4/3）粘土	17
	畝状溝跡群	SN26-D３		灰オリーブ色（5Y4/2）粘土	18
		SN26-D４		灰オリーブ色（7.5Y6/2）シルト	19
		SN26-D５		灰オリーブ色（5Y4/2）シルト	20
		SN27-D10		灰オリーブ色（5Y4/2）シルト	21
		SN27-D11		灰オリーブ色（5Y4/2）シルト	22
		SN27-D12		オリーブ黒色（5Y3/2）シルト	23
		SN27-D13		オリーブ黒色（5Y3/2）シルト	24
稲荷遺跡	グリッド	D011	Ⅱ層	オリーブ黒色（5Y3/2）シルト	31
			Ⅲ層	灰オリーブ色（7.5Y4/2）シルト	32
			Ⅳ層	灰オリーブ色（5Y4/2）粘土	33
	グリッド	D013	Ⅱ層	灰オリーブ色（5Y4/2）シルト	34
			Ⅲ層	灰オリーブ色（5Y4/2）シルト	35
			Ⅳ層	暗オリーブ色（5Y4/3）シルト	36
	グリッド	D015	Ⅱ層	黒褐色（2.5Y3/2）シルト	37
			Ⅲ層	暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト	38
			Ⅳ層	オリーブ黒色（2.5Y4/3）粘土	39
	畝状溝跡群	SN１-D７		暗オリーブ色（5Y4/3）シルト	40
		SN１-D９		灰オリーブ色（7.5Y4/2）粘土	41
		SN１-D10		灰オリーブ黒色（5Y4/2）粘土	42

六秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約１ｇ（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02ｇのガラスビーズ（直径約0.04mm）を加える。これに30％の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定及び計数はガラスビーズが300個に達するまで行った。

分析結果　同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料１ｇ当たりの各プラント・オパール個数を求め（表113・114）、それらの分布を第249図に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は、試料１ｇ当たりの検出個数である。

①六里遺跡（表113、第249図）

水田区画のⅡ層から５地点とも10,000個を超えるイネのプラント・オパールを検出しており、SN９やSN14では30,000個を超えている。また、イネの穎に形成される珪酸体の破片も少ないながら５地点とも確認した。最も多く検出したのはネザサ節型で、おおむね30,000個前後の個数を示している。次いでウシクサ族が多く、全地点とも10,000個以上を示し、キビ族も10,000個前後を確認した。その他には、ササ属型やヨシ属、シバ属などを確認した。Ⅲａ層からもおおむね10,000個前後のイネ

のプラント・オパールを検出しているが、SN ３では 3,300 個とやや少ない個数を示している。また、本層においてもイネの穎に形成される珪酸体の破片を３地点で確認した。最も多く検出したのはやはりネザサ節型で、おおむね 10,000 個前後を確認した。その他ではウシクサ族が約 4,000 ～ 9,000 個、キビ族が約 2,000 ～ 10,000 個検出している。Ⅲｂ層（SN14 と SN17）からも 6,000 個前後のイネのプラント･オパールを検出しているが、イネの穎に形成される珪酸体は観察されていない。その他には、ネザサ節型やキビ族、ウシクサ族などを若干確認した。Ⅳ層、Ⅴ層のイネのプラント・オパールについては、SN14 のⅢ層の撹拌と考えられるⅣ層上層より若干検出している他は確認できなかった。最も多く検出したのはやはりネザサ節型で、SN ９では 30,000 個を超えている。その他には、ササ属型やキビ族、ウシクサ族などをわずかに確認した。

畝溝状遺構群である SN26 では 5,000 個前後のイネのプラント・オパールを検出した。最も多く検出したのは 14,000 個前後を示しているネザサ節型で、その他に、ササ属型やキビ族、ウシクサ族が 3,000 個前後の産出個数を示している。SN27 では他の試料と比べてプラント・オパールの検出数が少なく、10,000 個を超える分類群は無かった。ただし、D13 より 1,100 個のイネのプラント・オパールを検出した。

②稲荷遺跡（表 114、第 249 図）

D011 グリッドの全３試料から 5,000 個を超えるイネのプラント・オパールを検出しており、Ⅱ層では 10,000 個を超えている。また、Ⅱ層からはイネの穎に形成される珪酸体の破片も確認した。最も多く検出したのはネザサ節型で、３試料とも 10,000 個以上を示している。次いでウシクサ族が多く、Ⅱ層では 10,000 個を超えている。その他には、ササ属型やキビ族などを若干確認した。D013 グリッドでは、Ⅱ層とⅢ層から 10,000 個を超えるイネのプラント・オパールを検出し、イネの穎に形成される珪酸体の破片も若干確認した。最も多く検出したのはネザサ節型で、３試料とも 10,000 個以上を確認した。ウシクサ族はⅡ層とⅢ層で 10,000 個前後を示しており、その他にも、ササ属型やシバ属、キビ族などを確認した。D015 グリッドでは、Ⅱａ層とⅢ層からそれぞれ 26,700 個と 13,500 個のイネのプラント・オパールを検出し、イネの穎に形成される珪酸体も確認した。最も多いのはネザサ節型で、Ⅱ層では 40,000 個を超えている。その他には、ササ属型やキビ族、ウシクサ族などを検出している。

SN １では、Ｄ９と D10 からそれぞれ 9,300 個と 8,900 個のイネのプラント・オパールを検出した。最も多いのはやはりネザサ節型で、Ｄ７とＤ９では 10,000 個を超えている。その他には、ササ属型やキビ族、ウシクサ族などを確認した。

水田耕作について　上記のように、多くの試料からイネのプラント・オパールを検出した。ここで検出個数の目安を示すと、イネのプラント・オパールが試料１ｇ当たり 5,000 個以上検出した地点から推定された水田跡の分布範囲と、実際の発掘調査で判明した水田跡の分布とがよく対応する結果が得られており（藤原 1984)、稲作が行われていたか否かの検証ではこの 5,000 個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。

六里遺跡では、Ⅱ層は近世以降の耕作土、Ⅲａ層は中世の耕作土、Ⅲｂ層は古墳時代から古代の耕作土の可能性がある。先にも記したように、Ⅱ層からは 10,000 個を超えるイネのプラント･オパールが、Ⅲａ層からも 10,000 個前後のイネのプラント・オパールが得られており、耕作土、すなわち

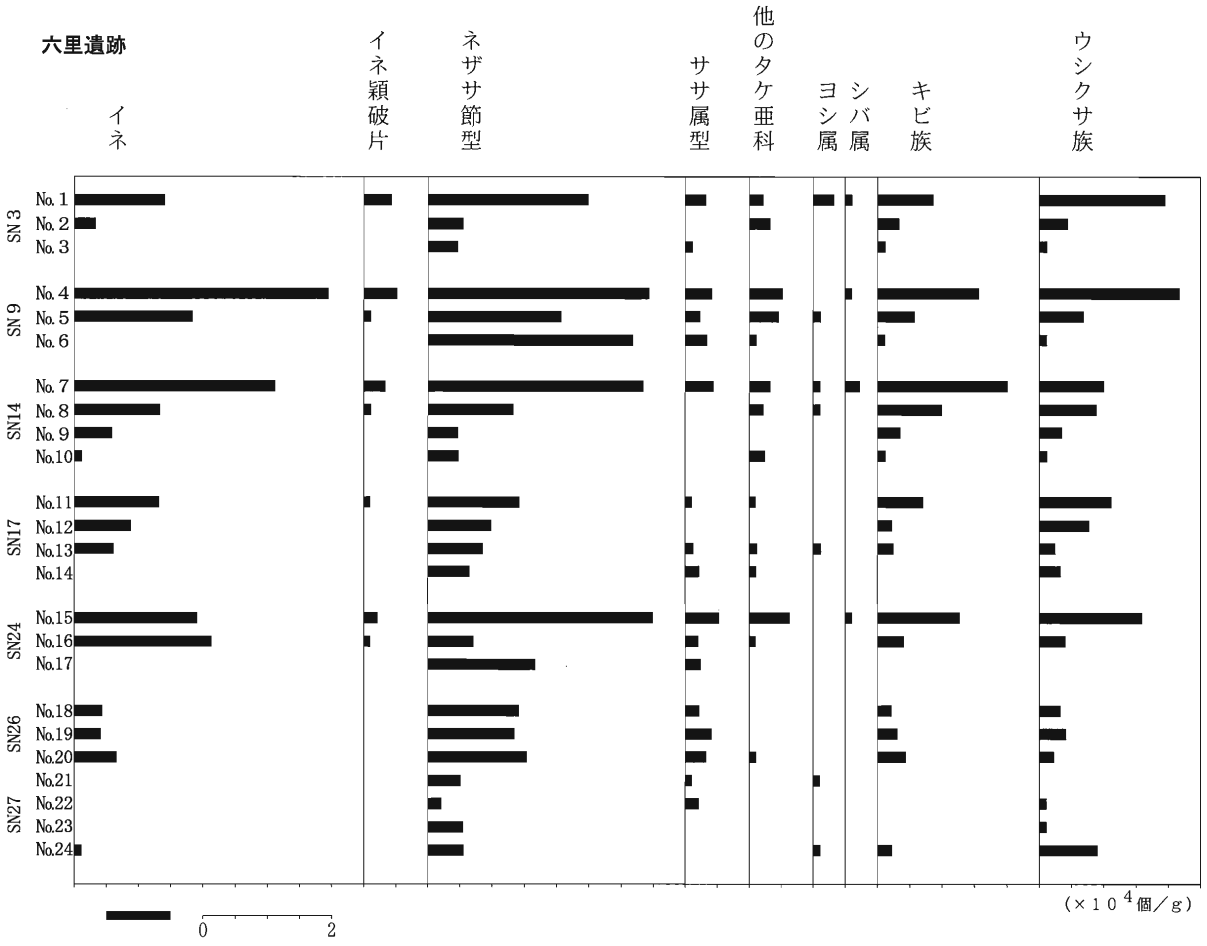
表113　六里遺跡試料１ｇ当たりのプラント・オパール個数

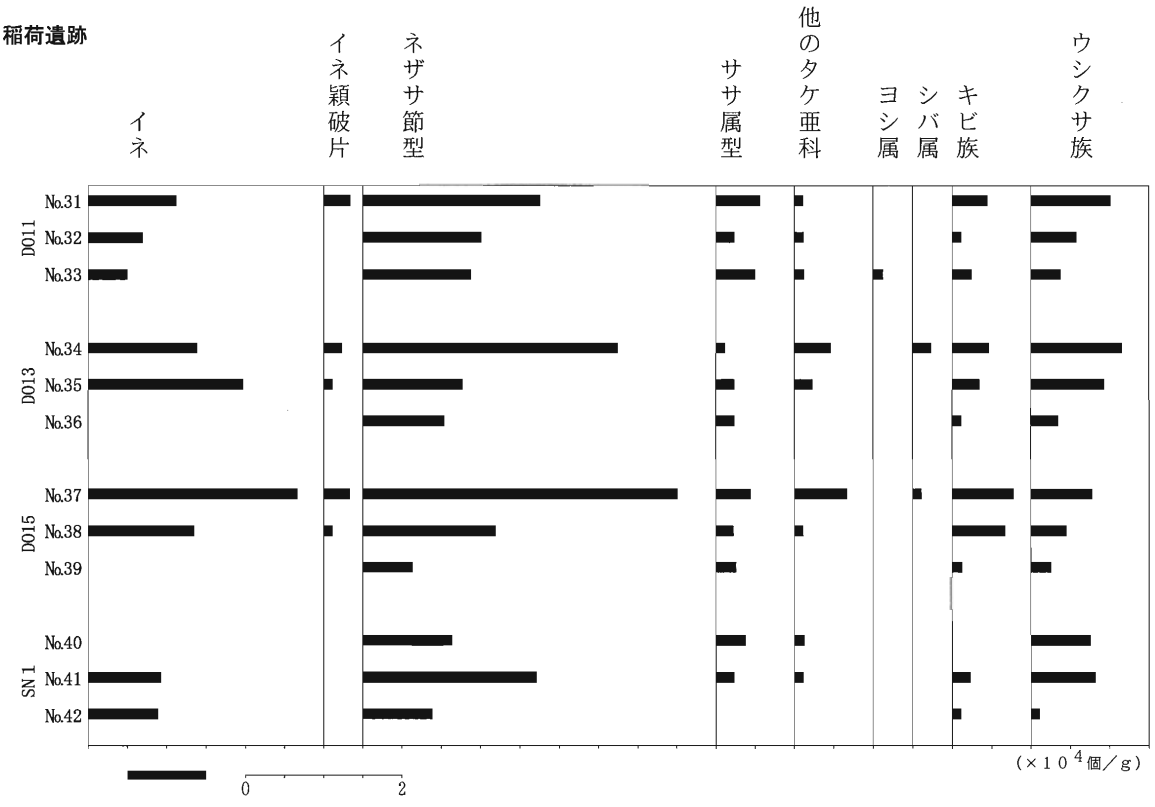
試料番号	採取個所	層位	イネ（個/ｇ）	イネ穎破片（個/ｇ）	ネザサ節型（個/ｇ）	ササ属型（個/ｇ）	他のタケ亜科（個/ｇ）	ヨシ属（個/ｇ）	シバ属（個/ｇ）	キビ族（個/ｇ）	ウシクサ族（個/ｇ）	不明（個/ｇ）
1	SN3	Ⅱ層	14,100	4,300	25,000	3,300	2,200	3,300	1,100	8,700	19,600	4,300
2		Ⅲa層	3,300	0	5,500	0	3,300	0	0	3,300	4,400	2,200
3		Ⅳ層	0	0	4,700	1,200	0	0	0	1,200	1,200	0
4	SN9	Ⅱ層	39,600	5,200	34,400	4,200	5,200	0	1,000	15,600	21,900	8,300
5		Ⅲa層	18,500	1,200	20,800	2,300	4,600	1,200	0	5,800	6,900	4,600
6		Ⅳa層	0	0	31,800	3,400	1,100	0	0	1,100	1,100	10,200
7	SN14	Ⅱ層	31,200	3,300	33,500	4,500	3,300	1,100	2,200	20,100	10,000	12,300
8		Ⅲa層	13,300	1,100	13,300	0	2,200	1,100	0	10,000	8,900	5,600
9		Ⅲb層	5,900	0	4,700	0	0	0	0	3,500	3,500	2,400
10		Ⅳ層	1,200	0	4,800	0	2,400	0	0	1,200	1,200	0
11	SN17	Ⅱ層	13,200	1,000	14,200	1,000	1,000	0	0	7,100	11,200	2,000
12		Ⅲa層	8,800	0	9,900	0	0	0	0	2,200	7,700	7,700
13		Ⅲb層	6,100	0	8,600	1,200	1,200	1,200	0	2,500	2,500	7,400
14		Ⅴ層	0	0	6,500	2,200	1,100	0	0	0	3,300	3,300
15	SN24	Ⅱ層	19,100	2,100	35,000	5,300	6,400	0	1,100	12,700	15,900	12,700
16		Ⅲa層	21,300	1,000	7,100	2,000	1,000	0	0	4,100	4,100	6,100
17		Ⅴ層	0	0	16,800	2,400	0	0	0	0	0	2,400
18	SN26-D3		4,300	0	14,100	2,200	0	0	0	2,200	3,300	2,200
19	SN26-D4		4,100	0	13,400	4,100	0	0	0	3,100	4,100	4,100
20	SN26-D5		6,600	0	15,400	3,300	1,100	0	0	4,400	2,200	9,900
21	SN27-D10		0	0	5,100	1,000	0	1,000	0	0	4,300	0
22	SN27-D11		0	0	2,100	2,100	0	0	0	0	1,100	1,100
23	SN27-D12		0	0	5,500	0	0	0	0	0	1,100	0
24	SN27-D13		1,100	0	5,600	0	0	1,100	0	2,200	9,000	7,900

表114　稲荷遺跡試料１ｇ当たりのプラント・オパール個数

試料番号	採取個所	層位	イネ（個/ｇ）	イネ穎破片（個/ｇ）	ネザサ節型（個/ｇ）	ササ属型（個/ｇ）	他のタケ亜科（個/ｇ）	ヨシ属（個/ｇ）	シバ属（個/ｇ）	キビ族（個/ｇ）	ウシクサ族（個/ｇ）	不明（個/ｇ）
31	D011	Ⅱ層	11,300	3,400	22,500	5,600	1,100	0	0	4,500	10,100	9,000
32		Ⅲ層	7,000	0	15,100	2,300	1,200	0	0	1,200	5,800	1,200
33		Ⅳ層	5,000	0	13,800	5,000	1,300	1,300	0	2,500	3,800	5,000
34	D013	Ⅱ層	13,900	2,300	32,400	1,200	4,600	0	2,300	4,600	11,600	5,800
35		Ⅲ層	19,700	1,200	12,800	2,300	2,300	0	0	3,500	9,300	7,000
36		Ⅴ層	0	0	10,400	2,300	0	0	0	1,200	3,500	3,500
37	D015	Ⅱ層	26,700	3,300	40,100	4,500	6,700	0	1,100	7,800	7,800	10,000
38		Ⅲ層	13,500	1,100	16,900	2,300	1,100	0	0	6,800	4,500	2,300
39		Ⅴ層	0	0	6,400	2,600	0	0	0	1,300	2,600	1,300
40	SN１-D７		0	0	11,400	3,800	1,300	0	0	0	7,600	1,300
41	SN１-D９		9,300	0	22,100	2,300	1,200	0	0	2,300	8,200	1,200
42	SN１-D10		8,900	0	8,900	0	0	0	0	1,100	1,100	4,400

水田耕作を支持する結果が得られたと判断される。また、Ⅲｂ層からも6,000個前後のイネのプラント･オパールを検出しており、Ⅲｂ層においても水田耕作が営まれていた可能性は高いと判断される。なお、SN３のⅢａ層では、イネのプラント・オパールは3,300個で5,000個に達していない。他の分類群も他の試料と比べ検出数が少ない点から、要因は不明であるがSN３のⅢａ層におけるプラント・オパール密度が小さいために少なく表現されたのではないかと思われる。さらに、SN14のⅣ層では1,200個のイネを検出した。この試料では花粉分析においても水田雑草を含む分類群が得られいるが、Ⅲ層との層界付近で採取した試料であるため、Ⅲ層との撹拌が反映された可能性が高い。畝溝状遺構群のSN26-D３とD４におけるイネのプラント･オパールはそれぞれ4,300個と4,100個で､5,000個には達していないもののそれに近い数値を示しており、6,600個を示しているD５の土壌と合わせて水田土壌である可能性は高いと推測される。一方、SN27ではイネのプラント・オパールは得られておらず、D13でも1,100個と少ないことから、SN27の畝溝状遺構群の土壌については水田土壌では





第249図　六里遺跡及び稲荷遺跡におけるプラント・オパール分布図

ない可能性が高いと判断される。

稲荷遺跡では、Ⅱ層、Ⅲ層の試料から7,000個を超えるイネのプラント・オパールを検出した。このうちⅢ層は古代以降の水田耕作土の可能性があると考えられており、今回のプラント・オパール分析ではこれを支持する結果が得られたと判断される。また、Ⅱ層は圃場整備前の耕作土と考えられており、10,000個を超えるイネのプラント・オパールを検出したのは、耕作土、すなわち水田耕作の存在を支持する結果と判断される。なお、D011のⅣ層でも5,000個のイネのプラント・オパールが得られており、花粉分析でも水田雑草を含む分類群を確認したが、六里遺跡のSN14のⅣ層と同様な状況と考えられる。SN１のＤ９・D10からも9,000個前後のイネのプラント・オパールを検出しており、畝溝状遺構群の土壌が水田土壌である可能性は高いと判断される。一方、Ｄ７からイネのプラント・オパールは得られていないため、遺構の性格の評価について慎重に扱う必要がある。

遺跡周辺のイネ科植物　両遺跡ともに、最も多く検出しているネザサ節型のササ類（ケネザサ、ゴキダケなど）については、開けた日の当たる場所での生育が考えられる。このうちケネザサ（ミヤコネザサ）について、愛知県名古屋市周辺の丘陵から稜線下にかけては現在クロマツ－ケネザサ群集やコナラ－ケネザサ群集（谷斜面）が成立している（愛知県1995）。また、ススキ（ウシクサ族）とともに、丘陵のやや平坦な台状地においてススキ－ケネザサ群集を形成している（愛知県1995）。このような状況から、三水川の自然堤防上や丘陵部空き地、林縁部、水田耕作地周辺などの開けた日の当たるところに上記のようなネザサ節型のササ類やウシクサ族が多く生育していたとみられる。一方、ササ属型のササ類（スズタケ、ミヤコザサなど）については、遺跡周辺に成立していたと考えられる落葉広葉樹林（花粉分析の項参照）の下草的存在として生育していたとみられる。また、ヨシ属（ヨシなど）については水田周辺の水路などに、シバ属（シバなど）は畔などに生育していたと推測される。

キビ族については、アワやヒエ、キビといった栽培種に由来するか、エノコログサやスズメノヒエ、イヌビエなどの野生種に由来するかについて現時点においては形態からは分類できず不明である。しかしながら、上記のように遺跡周辺では古墳時代から古代以降において水田耕作が営まれていたと考えられるため、検出したキビ族にはタイヌビエなどの稲作にともなう野生種が含まれている可能性がある。

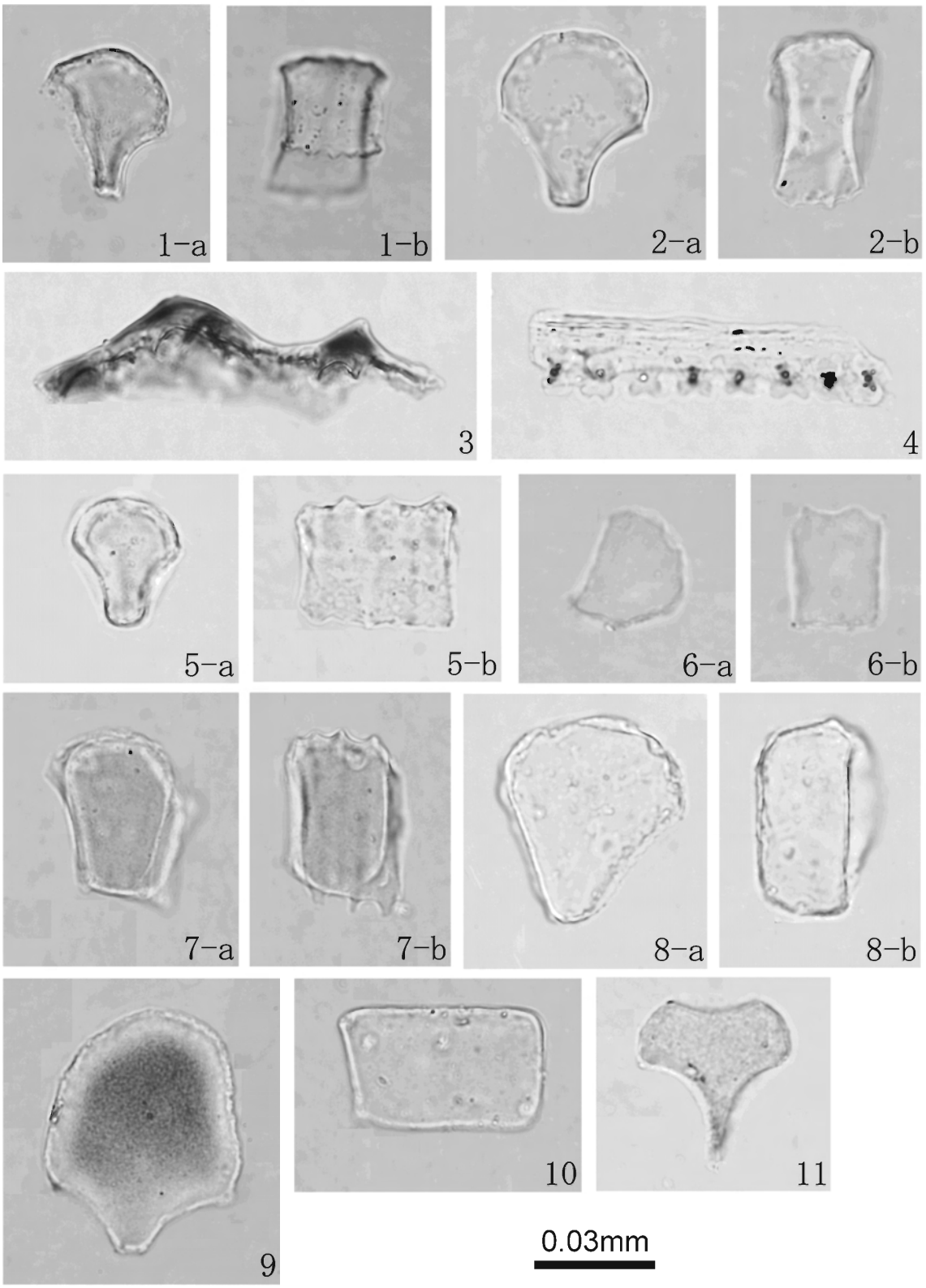
第３節　炭化材樹種同定及び放射性炭素年代測定

１　炭化材樹種同定

六里遺跡第３調査面のSK112で出土した炭化材の樹種同定を行った。遺構埋土の上面で検出した板状の材で、出土時には完全に炭化していた（第３章第５節参照）。燃料の可能性もあるが詳細は不明である。なお、分析は小林克也（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

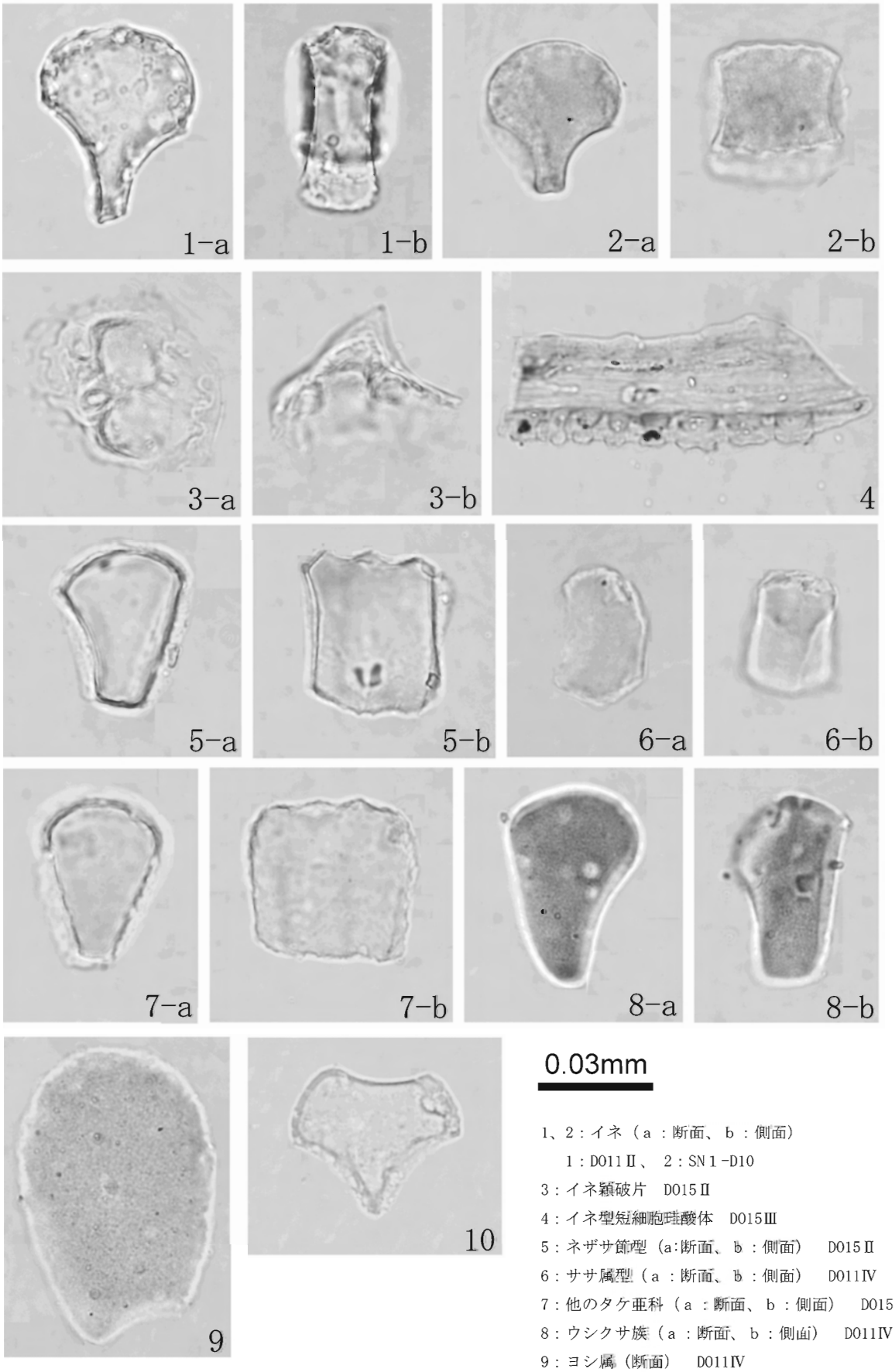
試料と方法　試料は、表115に示した12点である。まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製　JSM-5900LV）にて検鏡及び写真撮影を行なった。

分析結果　同定の結果、試料はいずれも広葉樹のクリであった。同定結果を表115に示す。次に、同



1、2：イネ（ａ：断面、ｂ：側面）　1：SN３Ⅱ、　2：SN９Ⅲ
3：イネ穎破片　SN３Ⅱ
4：イネ型短細胞珪酸体　SN14Ⅱ　　8：ウシクサ族（ａ：断面、ｂ：側面）　SN17Ⅲａ
5：ネザサ節型（a:断面、ｂ：側面）　SN14Ⅱ　　9：ヨシ属（断面）　SN３Ⅱ
6：ササ属型（ａ：断面、ｂ：側面）　SN３Ⅱ　　10：キビ族（ａ：断面、ｂ：側面）　SN24Ⅱ
7：他のタケ亜科（ａ：断面、ｂ：側面）　SN９Ⅳ　11：シバ属（断面）　SN14Ⅱ

写真13　六里遺跡のプラント・オパール



1、2：イネ（ａ：断面、ｂ：側面）
　1：D011Ⅱ、　2：SN１-D10
3：イネ穎破片　D015Ⅱ
4：イネ型短細胞珪酸体　D015Ⅲ
5：ネザサ節型（a:断面、ｂ：側面）　D015Ⅱ
6：ササ属型（ａ：断面、ｂ：側面）　D011Ⅳ
7：他のタケ亜科（ａ：断面、ｂ：側面）　D015Ⅱ
8：ウシクサ族（ａ：断面、ｂ：側面）　D011Ⅳ
9：ヨシ属（断面）　D011Ⅳ
10：シバ属（断面）　D015Ⅱ

写真14　稲荷遺跡のプラント・オパール

定された材の特徴を記載し、写真 17 に走査型電子顕微鏡の写真（1a-1 C（No.7）、2a(No.3)、3a(No.6)、4a(No.9)、5a(No.10)、6a(No.11)、7a(No.12)）を示す。

クリ（C astanea C renata Siebold. et Zu C C．ブナ科）は、年輪のはじめに大型の道管が１～３列並び、晩材部では徐々に径を減じる道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で単列となる。北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で耐朽性が高い。

表115　樹種同定試料一覧及び同定結果

試料番号	取上番号	遺構番号	遺構種別	樹種	年代測定試料番号
1	4755	SK112②	土坑	クリ	
2	4884	SK112①	土坑	クリ	№1
3	4885	SK112①	土坑	クリ	
4	4887	SK112①	土坑	クリ	
5	4888	SK112①	土坑	クリ	
6	4890	SK112①	土坑	クリ	
7	4892	SK112①	土坑	クリ	
8	4893	SK112①	土坑	クリ	
9	4894	SK112①	土坑	クリ	№2
10	4895	SK112①	土坑	クリ	
11	4896	SK112①	土坑	クリ	
12	4897	SK112①	土坑	クリ	№3

考察　クリは堅硬で耐朽性が高いという材質を持つが、燃料材としては、長時間燃焼し続けるという材質を持つ（伊東ほか 2011）。燃料材に適したクリが遺跡周辺に生育しており、選択的に利用されていた可能性がある。

２　放射性炭素年代測定（AMS 法）

六里遺跡第３調査面の樹種同定を行った SK112 出土炭化材及び第２調査面の SI ４の炭化物・焼土堆積試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を実施した。なお、分析は株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ（伊藤　茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtatidze・小林克也）が担当した。

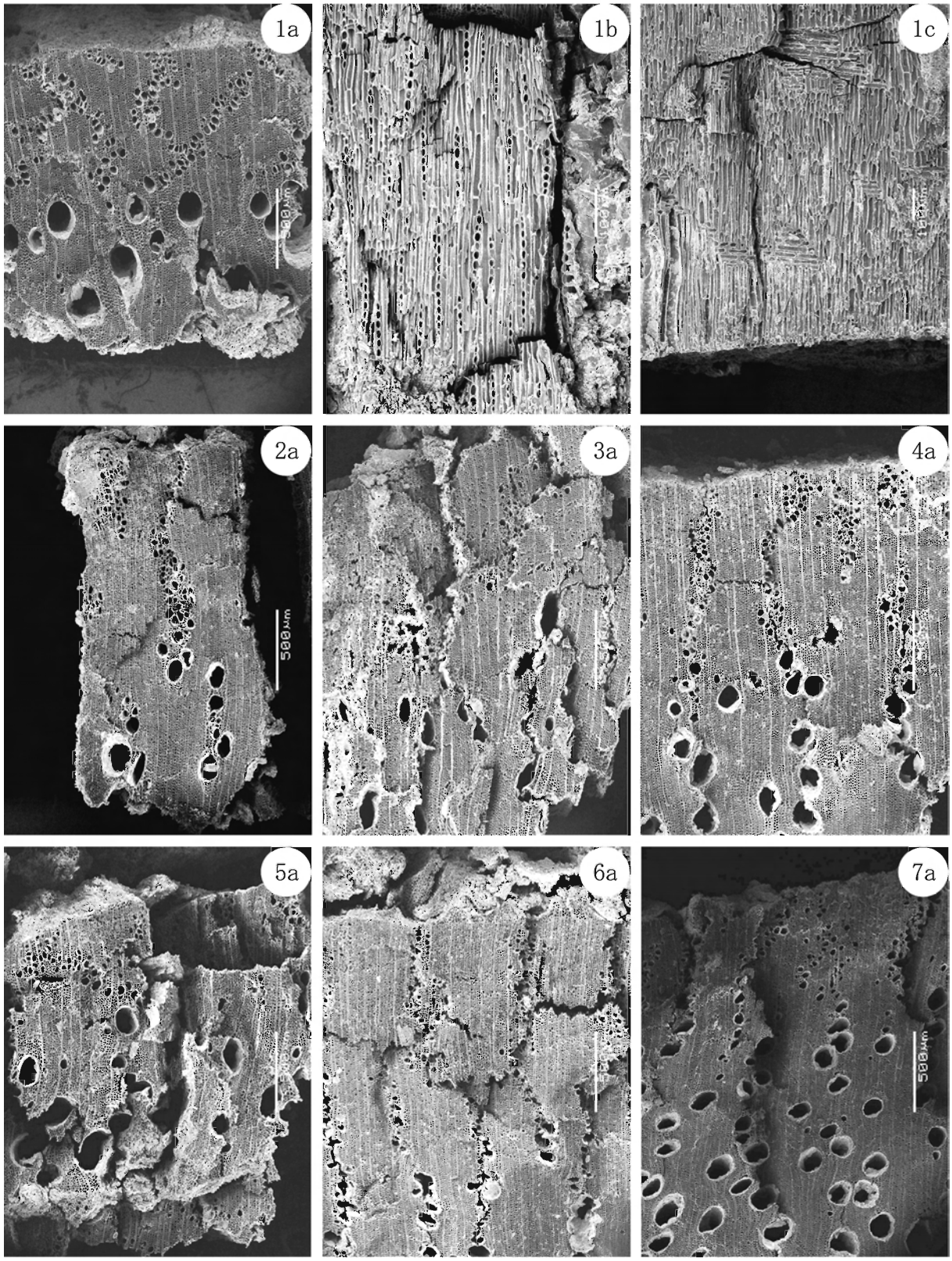
試料と方法　試料は、SK112 の３点、SI ４の２点、計５点である。いずれの試料も、最終形成年輪は残っていなかった。SK112 は縄文時代晩期、SI ４は古墳時代（７世紀代）の遺構と推定される。測定試料の情報、調製データは表 116 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ･ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた 14 C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14 C年代、暦年代を算出した。

分析結果　表 117 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ 13C)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した 14 C年代を、第 250 図に暦年較正結果をそれぞれ示した。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

14 C年代は AD1,950 年を基点にして何年前かを示した年代である。14 C年代（yrBP）の算出には、14 Cの半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。また､付記した 14 C年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の 14 C年代がその 14 C年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の 14 C濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された 14 C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14 C濃度の変動、及び半減期の違い（14 Cの半減期 5,730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。



1a-1c. クリ(No. 7)、2a. クリ(No. 3)、3a. クリ(No. 6)、4a. クリ(No. 9)、5a. クリ(No. 10)、6a. クリ(No. 11)、7a. クリ(No. 12)

a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

写真15　六里遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

14Ｃ年代の暦年較正にはOxCal4.2(較正曲線データ:IntCal13)を使用した。なお､1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された14Ｃ年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は14Ｃ年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

考察　以下、２σ暦年代範囲（確率95.4%）に着目して結果を整理する。土坑SK112の試料No. ２は14Ｃ年代が2,770±20 14Ｃ BP、２σ暦年代範囲（確率95.4%）が978-842 Cal BC（95.4%）、試料No.9は14Ｃ年代が2,750±20 14Ｃ BP、２σ暦年代範囲が971-960 Cal BC（2.8%）及び936-832 Cal BC（92.6%）、試料No.12は14Ｃ年代が2,775±20 14Ｃ BP、２σ暦年代範囲が996-889 Cal BC（83.4%）及び881-847 Cal BC（12.0%）で、紀元前1,000～830年頃の暦年代を示した。これは、凸帯文系土器の年代に関する分析（中村2008）を参照すると、縄文時代晩期中葉に相当する。SK112は縄文時代の遺構と考えられており、今回の測定結果は遺構の推定時期に対して整合的であった。

なお、試料No. １～３は最終形成年輪が残っていなかった。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死若しくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であ

表116　放射性炭素年代測定試料及び処理

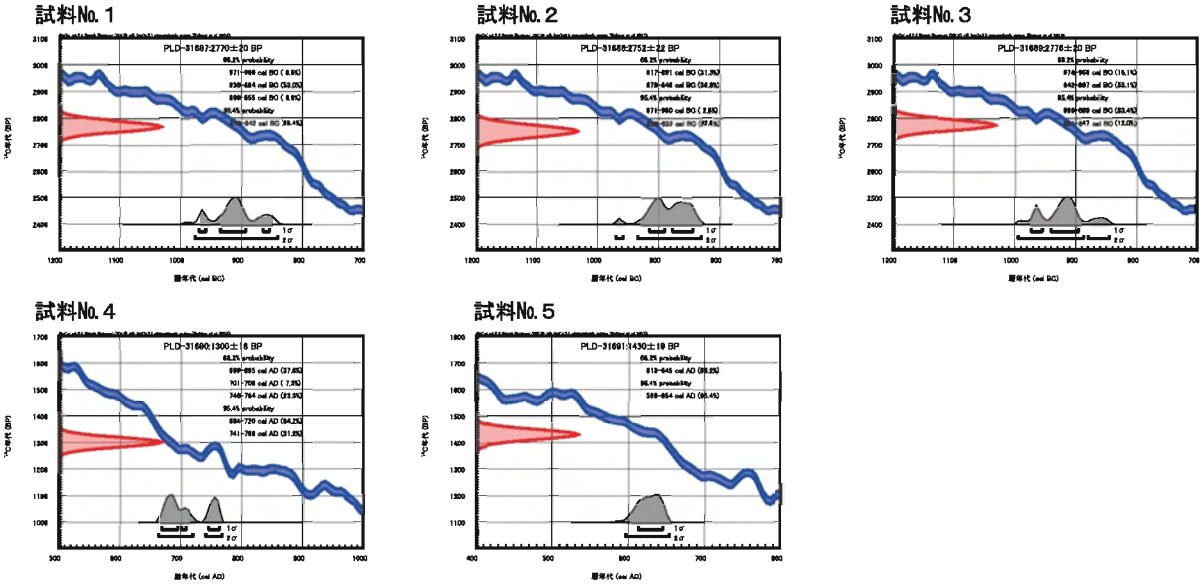
測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-31687	遺構：SK112 試料No. 1	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-31688	遺構：SK112 試料No. 2	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-31689	遺構：SK112 試料No. 3	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-31690	遺構：SI４ 試料No. 4	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-31691	遺構：SI４ 試料No.14	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.1N,塩酸：1.2N）

表117　測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-31687 SK112 試料No. 1	-25.32±0.16	2770±20	2770±20	971-960 cal BC (8.5%) 936-894 cal BC (53.0%) 866-855 cal BC (6.8%)	978-842 cal BC (95.4%)
PLD-31688 SK112 試料No. 2	-27.33±0.16	2752±22	2750±20	917-891 cal BC (31.3%) 879-846 cal BC (36.9%)	971-960 cal BC (2.8%) 936-832 cal BC (92.6%)
PLD-31689 SK112 試料No. 3	-26.36±0.17	2776±20	2775±20	974-956 cal BC (15.1%) 942-897 cal BC (53.1%)	996-889 cal BC (83.4%) 881-847 cal BC (12.0%)
PLD-31690 SI４ 試料No. 5	-28.49±0.17	1300±18	1300±20	669-695 cal AD (37.6%) 701-709 cal AD (7.3%) 746-764 cal AD (23.3%)	664-720 cal AD (64.2%) 741-768 cal AD (31.2%)
PLD-31691 SI４ 試料No. 6	-29.50±0.16	1430±19	1430±20	613-645 cal AD (68.2%)	596-654 cal AD (95.4%)

るほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の測定結果はいずれも古木効果の影響を受けていると推定され、枯死若しくは伐採された年代は、測定結果よりもやや新しい年代と考えられる。

SI４の試料No. ４は２σ暦年代範囲が664-720 Cal AD（64.2％）及び741-768 Cal AD（31.2％）で、７世紀後半から８世紀後半の暦年代を示した。また試料No. ５は２σ暦年代範囲が596-654 Cal AD（95.4％）で、６世紀末から７世紀中頃の暦年代を示した。SI ４は古墳時代後期（７世紀代）の遺構の可能性が高いため、今回の測定結果は遺構の推定時期に対して整合的であった。なお、試料No. ４と５も、測定結果は古木効果の影響を受けている可能性があり、実際に枯死若しくは伐採された年代は、測定結果よりもやや新しい年代であると考えられる。



第250図　暦年較正結果

第４節　鉄滓の成分分析

六里遺跡の遺構等で出土した鉄滓について、走査型電子顕微鏡観察及びＸ線分析（EPMA 分析）を実施した。なお、分析は竹原弘展（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

試料と方法　分析対象は、鉄滓３点である（表 118、第 251 ～ 253 図）。時期は、No. １と No. ２が古墳時代から中世の可能性があり、No. ３は所属時期不明である。いずれも磁着が認められ、観察・測定面は比較的磁着の強い箇所を選んだ。第 251 図～ 253 図 -1 にそれぞれの採取部位を示した。

各試料の断面プレパラートを作製し、観察、分析を行った。プレパラートの作製には、包埋樹脂に注型

表118　鉄滓成分分析対象試料一覧

No.	取上番号	出土遺構	出土層位	種別	寸法(cm)			備考
					長さ	幅	厚さ	
1	3571	SD26②	c	鉄滓	7.0	5.4	2.3	
2	4303	SD21③	a	鉄滓	4.6	4.0	4.3	
3	1935-21	―	Ⅲ	鉄滓	4.5	3.2	1.5	A020グリッド

用高透明エポキシ樹脂を使用し、試料の一部を岩石カッターで切り取った後包埋した。包埋試料は、ディスコプランで研磨した後、コランダムの #3000、ダイヤモンド粒子の１μmの順で研磨し、観察、分析面とした。試料は、採取断面について蛍光Ｘ線分析（エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製 SEA1200VX、照射径８mm:以後 XRF 分析）を行い、採取部位の化学組成を調べた。走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製 JSM-5900LV、以後 SEM）による反射電子像の観察及び付属するエネルギー分散型Ｘ線分析装置（同 JED-2200、以後 EDS）による鉱物組織の定性分析を行った。

分析結果及び考察　XRF 分析による半定量値を表 119 に酸化物の形で示した。また、SEM 反射電子像を第 251 図～ 253 図－２、第 251 図～ 253 図－３に、SEM 反射電子像に示したａ～ｃのポイントの

表119　蛍光X線分析による半定量値（wt%）

No.	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	SO_3	K_2O	CaO	TiO_2	Cr_2O_3	MnO	Fe_2O_3	NiO	CuO	ZnO	As_2O_3	SrO	ZrO_2	SnO_2	BaO
1	—	9.02	14.57	0.10	3.85	0.08	0.68	0.47	0.02	0.30	70.47	0.07	0.29	0.02	0.01	—	0.01	0.03	0.01
2	0.60	8.25	20.41	0.38	0.68	0.64	0.46	0.30	0.02	0.05	68.16	—	0.01	0.01	—	0.01	0.01	—	0.02
3	0.44	7.85	10.39	0.89	3.75	0.05	0.43	0.31	0.02	0.05	75.79	—	—	0.02	—	—	0.01	—	0.01

EDS によるスペクトルを第 251 図～ 253 図－４～６に、検出元素を表 120 に示した。

①試料 No. １

XRF 分析では、鉄が酸化物（Fe2O3）換算で約 70％と高い割合で検出された。チタン（TiO2）含有量は少ない。SEM 反射電子像では、第 251 図－２、３のような結晶組織が観察された。EDS 分析結果と併せると、明色の樹枝状ないし粒状組織（第 251 図－３のａ）では鉄（Fe）と酸素（O）が検出され、ウスタイト（FeO）とみられる。中間色木ずれ状組織（同図ｂ）では鉄とケイ素（Si）と酸素が主に検出され、ファイヤライト（2FeO･SiO2）とみられる。これらが、基質となる暗色ガラス質（同図ｃ）上に晶出している。また、別の箇所では銹化鉄も観察された。以上の特徴より、含鉄鍛冶滓と考えられ、鍛錬鍛冶滓である可能性が高い。

② No. ２

XRF 分析では、鉄が酸化物（Fe2O3）換算で約 70％と高い割合で検出された。チタン（TiO2）含有量は少ない。SEM 反射電子像では、第 252 図 -2、3 のような結晶組織が観察された。EDS 分析結果と併せると、密集している明色の樹枝状ないし粒状組織（第 252 図 -3 のａ）では鉄（Fe）と酸素（O）が主に検出され、ウスタイト（FeO）とみられる。中間色木ずれ状組織（同図ｂ）では鉄とケイ素（Si）と酸素が主に検出され、ファイヤライト（2FeO･SiO2）とみられる。これらが、基質となる暗色ガラス質（同図ｃ）上に晶出している。以上の特徴より、鍛冶滓と考えられ、鍛錬鍛冶滓である可能性が高い。

表120　EDS分析結果

No.	ポイント	検出元素	所見	
1	a	O, Fe	ウスタイト	含鉄鍛冶滓（鍛錬鍛冶滓?）
	b	O, (Al), Si, Fe	ファイヤライト	
	c	O, Al, Si, Fe	ガラス質	
2	a	O, (Si), Fe	ウスタイト	鍛冶滓（鍛錬鍛冶滓?）
	b	O, (Al), Si, Fe	ファイヤライト	
	c	O, Al, Si, K, Ca, Fe	ガラス質	
3	a	O, Fe	ウスタイト	鍛冶滓（鍛錬鍛冶滓?）
	b	O, Si, Fe	ファイヤライト	
	c	O, Al, Si, Fe	ガラス質	

③試料 No. ３

XRF 分析では、鉄が酸化物（Fe2O3）換算で約 75％と高い割合で検出され

た。チタン（TiO2）含有量は少ない。SEM反射電子像では、第253図-2、3のような結晶組織が観察された。EDS分析結果と併せると、密集している明色の樹枝状ないし粒状組織（第253図-3のａ）では鉄（Fe）と酸素（O）が検出され、ウスタイト（FeO）とみられる。中間色木ずれ状組織（同図ｂ）では鉄とケイ素（Si）と酸素が検出され、ファイヤライト（2FeO･SiO2）とみられる。これらが、基質となる暗色ガラス質（同図ｃ）上に晶出している。以上の特徴より、鍛冶滓と考えられ、鍛錬鍛冶滓である可能性が高い。

一般に砂鉄製錬の場合、原料中にチタンが多く含まれており、さらにその製錬滓にはチタンが濃縮され、チタンを含む結晶鉱物が晶出する。今回の鉄滓の鉱物組織の定性分析結果では、チタン含有の鉱物が検出されず、またウスタイトが多くみられ、また、蛍光Ｘ線分析ではチタン含有量が少なく鉄含有量が多い。以上より、製錬に伴う製錬滓ではなく、精錬鍛冶や鍛錬鍛冶に伴う鍛冶滓といえ、中でも鍛錬鍛冶滓である可能性が高い。

引用文献・参考文献

守田益宗・崔　基龍・日比野紘一郎　1998　「中部・東海地方の植生史」『日本列島植生史』安田喜憲・三好教夫編　朝倉書店：92-104

南川　幸編　1995　『愛知県の植物相』　愛知県：328ｐ.

藤原宏志　1984　「プラント・オパール分析法とその応用－先史時代の水田址探査－」『考古学ジャーナル』227　ニュー・サイエンス社：2-7

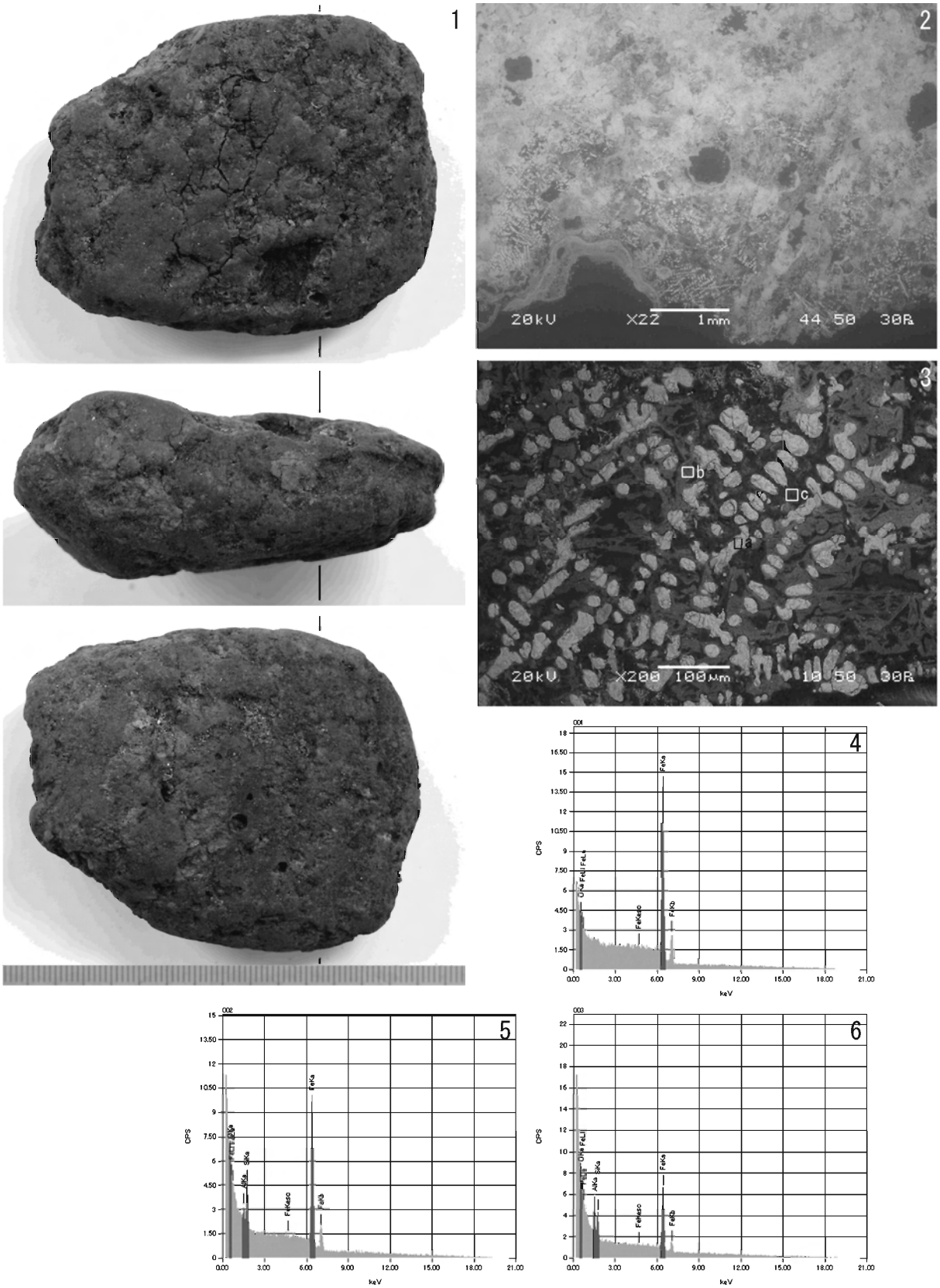
Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

増子康眞　2008　「晩期半裁竹管文土器」『総覧縄文土器』小林達雄編　アム・プロモーション：774-781

中村健二　2008　「凸帯文系土器（中四国・近畿・東海地方）」:『総覧縄文土器』小林達雄編　アム・プロモーション：798-805

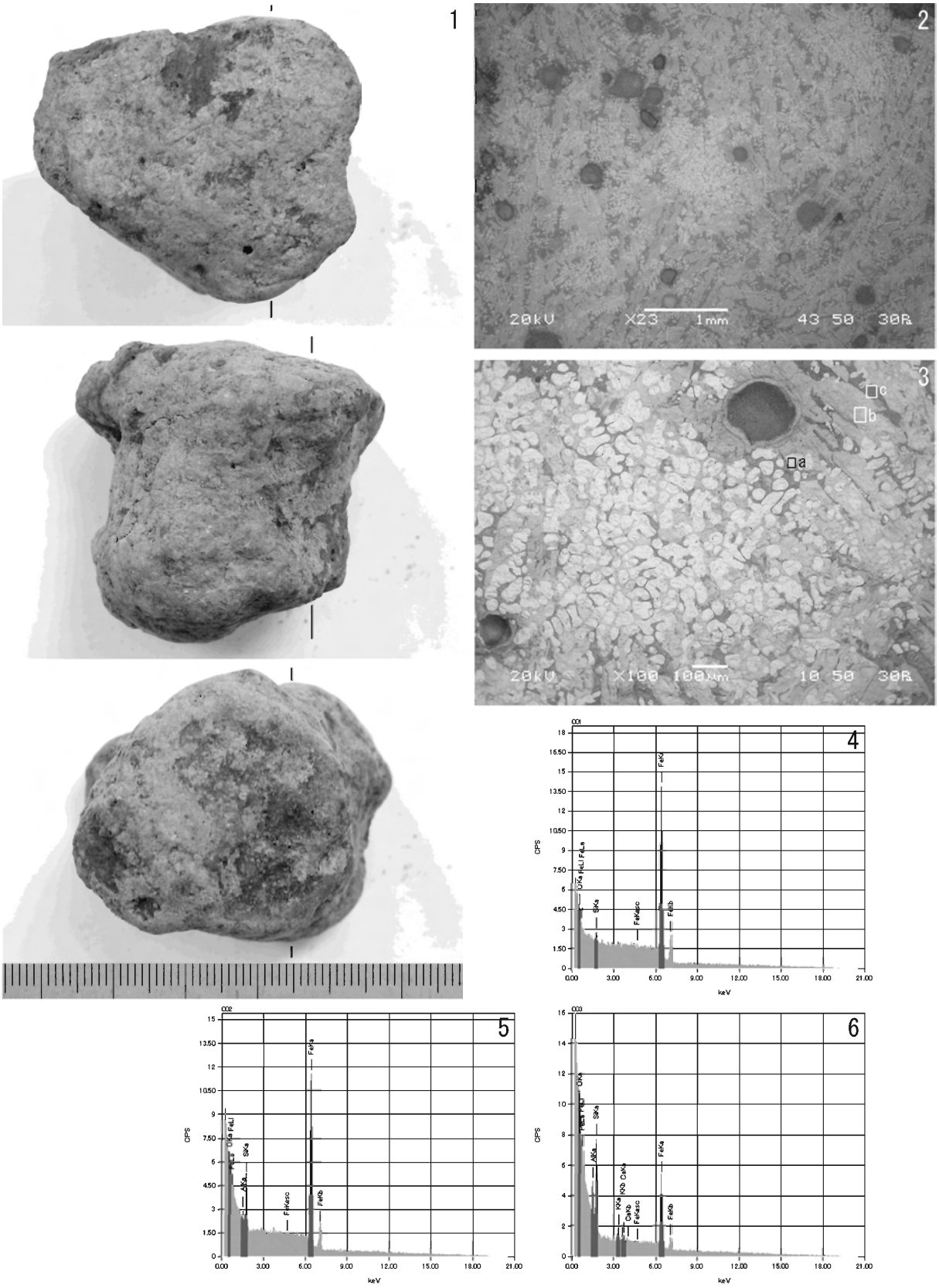
中村俊夫　2000　「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の14Ｃ年代』日本先史時代の14Ｃ年代編集委員会編　日本第四紀学会：3-20

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4)：1869-1887.



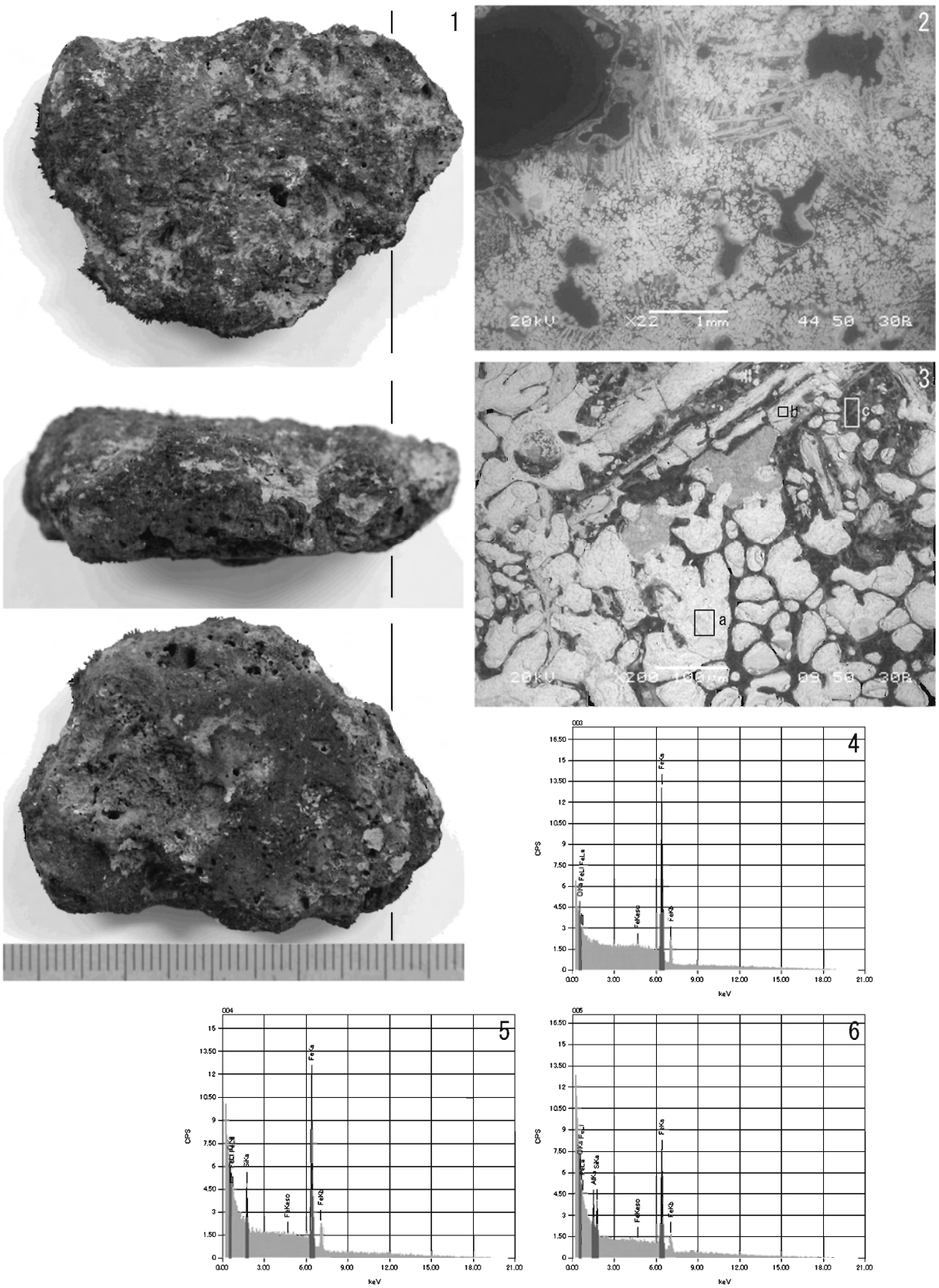
1．採取部位　2・3．SEM 反射電子像（2：x22、3：x200）　4～6．EDS 分析スペクトル（4：a、5：b、6：c）

第251図　鉄滓のSME観察とEMS分析結果①



1．採取部位　2・3．SEM 反射電子像（2：x23、3：x100）　4～6．EDS 分析スペクトル（4：a、5：b、6：c）

第252図　鉄滓のSME観察とEMS分析結果②



1．採取部位　2・3．SEM 反射電子像（2：x22、3：x200）　4～6．EDS 分析スペクトル（4：a、5：b、6：c）

第253図　鉄滓のSME観察とEMS分析結果③

第６章　総括

第１節　六里遺跡・稲荷遺跡の竪穴建物について

今回の調査において六里遺跡で７軒、稲荷遺跡で18軒の竪穴建物を検出した。いずれも古墳時代後期以降の竪穴建物であり、美濃地域ではこの時期、屋内の壁際にカマドを備えるものが多い。カマドを備える竪穴建物については、平成４年に行われた集成がある（中井・鈴木1992）。これによると西濃地域の事例は大垣市東町田遺跡のみで、集成時にはまだ本報告（大垣市教育委員会2004）がなされていなかった。以降多数の発掘調査が行われ資料の蓄積が成されたが、西濃地域におけるカマドを備える竪穴建物の事例はそれほど増加したとはいえない状況にある。その中で今回の調査で確認した六里遺跡・稲荷遺跡の竪穴建物群は、当該期における西濃地域の集落の在り方を示す重要な資料と考える。

本節では、平成４年の集成で着目されたカマドの位置や煙道の形態による分類に加え、建物規模や長軸方位等から各時期における特徴を抽出し、西濃地域で確認された竪穴建物との比較をすることで地域的な特徴について検討する。

１　対象とした遺跡と遺構

西濃地域においてカマドが検出された事例は少なく、対象としたのは、六里遺跡・稲荷遺跡の他３遺跡にとどまった。

東町田遺跡は、昼飯大塚古墳にほど近い大垣市赤坂町に所在する遺跡で、国史跡である「東町田墳墓群」を含む。標高は六里遺跡・稲荷遺跡よりやや低いが、低位段丘に立地しているため、基盤は安定している。主に弥生時代の遺構・遺物が確認されているが、平成３～６年に大垣市教育委員会が実施した調査で、７世紀代の竪穴建物が３軒確認された。同じ大垣市内の一本松遺跡では、大垣市教育委員会による平成４年の第２次調査で、８世紀代の竪穴建物が３軒確認された。東町田遺跡と同様赤坂町に所在し、山麓の緩斜面に立地する。なお、３軒の内、SB03についてはカマドのみ検出され、竪穴建物の竪穴掘方は残存していなかった。座倉遺跡では、平成元年に大野町教育委員会が調査し、平安時代の竪穴建物や掘立柱建物などが確認された。六里遺跡から北西約1.3㎞に位置し、地形も類似する。

この他、大野町教育委員会が平成24年度に実施した六里遺跡の調査（以下「24年度調査」という。）について、すでに公表されている図面等（大野町教育委員会2013）を用いて、計測を行った[1)]。ただし、遺構の内容は明示されていないため、規模や長軸方位のみ記載した。また、岐阜市教育委員会が調査した御望遺跡と財団法人岐阜市教育文化振興事業団が調査した下西郷一本松遺跡は、立地や標高が類似し、地理的に六里遺跡・稲荷遺跡と比較的近いことから、参考事例として一覧表に含めた。

２　竪穴建物一覧表について

集成した竪穴建物一覧表の各項目は、以下のとおりである。

遺跡名　集成した遺跡の名称を記載した。集成した遺跡の概要は次項に記載した。

遺構名　文献に記載された名称を記載した。

時期　文献に記載された時期を、本報告の時期区分に置き換えて記載した。なお、特に時期が示されていないものは出土遺物から判断した。

平面形　今回集成した竪穴建物は、形状がわかるものはすべて方形又は長方形であった。このため、全容が不明なものは「方形か」と記載した。

長軸・短軸　平面形から長軸とそれに直交する短軸の上端の長さを、図面から計測した。重複により全容が不明なものは、残存値を括弧で示した。

面積　長軸・短軸から面積を算出した。

長軸方位　北を起点に長軸が東西にどの程度傾いているかを図面から計測し、本書の記載に合わせて「N-●°-E（W）」と記載した。平面形が歪な遺構は、直交する２辺を基準に計測した。

南北軸からのずれ　算出に当たっては、まず西に傾く長軸を直交する東の傾きに換算し、この数値から45°を引くことで、平均となる北東方向からの分散を算出した。その上で、算出した数値を45で割り（マイナスの値はプラスに補正）、その比率をパーセントで示した。従って、割合が高いほど方位が南北軸に近いことを示す。

煙道タイプ　平成４年の集成でも示されているとおり、カマドの煙道は竪穴建物の掘方（以下、「竪穴掘方」という。）から突出するものと突出しないものに大きく分けることができる。谷氏の分類（谷1992）では、さらに竪穴掘方の突出について詳細な細分が行われている。ここでは、六里遺跡・稲荷遺跡の検出例等を参考に、第254図のような分類を行った。なお、平成４年の集成にもあるとおり、Ａ類にはＢ類やＣ類の上面が削平された可能性のあるものも含むと思われる。

Ａ類　竪穴掘方から煙道が突出しないもの。

Ｂ類　カマドが接する竪穴掘方が竪穴掘方外にやや突出するもの。

Ｃ類　カマドは竪穴掘方内に構築し、煙道が長く延びるもの。

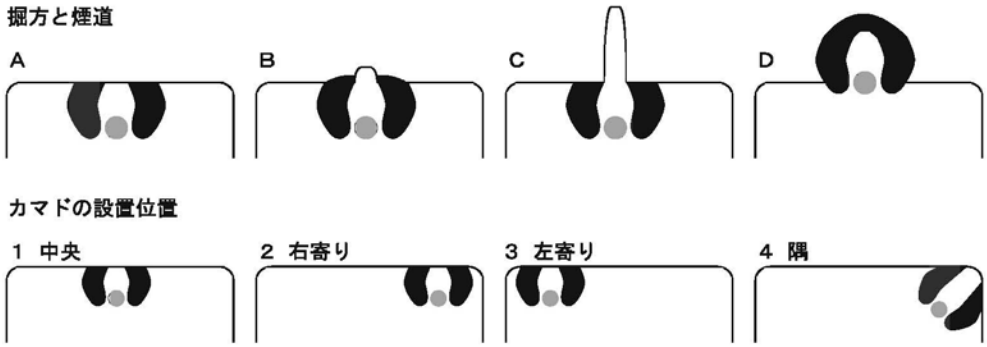
Ｄ類　カマドそのものが竪穴掘方外に構築されるもの。

カマド位置　竪穴掘方壁面とカマドの設置位置との関係について以下のとおり分類した。

１類　竪穴掘方中軸線上に設置されるもの。

２類　カマドの左袖が竪穴掘方中軸線より右に位置するもの。

３類　カマドの右袖が竪穴掘方中軸線より左に位置するもの。



第254 図　カマド属性分類模式図

表121 西濃地域におけるカマドをもつ竪穴建物一覧表

遺跡名	遺構名	時期	平面形	長軸(m)	短軸(m)	面積(m2)	長軸方位	南北軸からのずれ	煙道タイプ	カマド位置	主柱穴	参考文献
六里遺跡（H24）	９号竪穴建物	Ⅲ	方形	5.40	5.10	27.54	N 0° E	100%	―	―	―	3
下西郷一本松遺跡	SB１	Ⅲ	方形	4.98	(4.10)	―	N 4° W	91%	B	1か	c	4
下西郷一本松遺跡	SB７	Ⅲ	方形	5.91	(4.98)	―	N 71° W	58%	B	3	c	4
下西郷一本松遺跡	SB17	Ⅲ	方形	6.13	5.04	30.9	N 81° E	80%	B	2	c	4
下西郷一本松遺跡	SB26	Ⅲ	方形か	(3.29)	(2.02)	―	N 1° W	98%	不明	不明	不明	4
下西郷一本松遺跡	SB29	Ⅲ	方形	4.70	4.30	20.21	N 46° W	2%	Cか	2	c	4
下西郷一本松遺跡	SB２	Ⅳａ	方形	6.00	4.10	24.6	N 52° W	16%	不明	2	c	4
下西郷一本松遺跡	SB５	Ⅳａ	方形	3.18	3.14	9.99	N 33° W	27%	B	2	a	4
下西郷一本松遺跡	SB６	Ⅳａ	方形	4.60	3.66	16.84	N 24° E	47%	C	1	c	4
下西郷一本松遺跡	SB11	Ⅳａ	方形	6.12	4.12	25.21	N 20° E	56%	B	1	c	4
下西郷一本松遺跡	SB22	Ⅳａ	方形	5.90	(3.20)	―	N 72° E	60%	不明	不明	c	4
下西郷一本松遺跡	SB28	Ⅳａ	方形	5.10	4.60	23.46	N 60° E	33%	B	1	c	4
六里遺跡（H24）	５号竪穴建物	Ⅳｂか	方形か	5.06	3.79	19.18	N 30° W	33%	―	―	―	3
六里遺跡	SI１	Ⅳｂ	方形	5.44	(5.36)	―	N 41° E	9%	不明	不明	a	本書
六里遺跡	SI２	Ⅳｂか	方形か	(4.30)	(1.26)	―	N 70° E	56%	不明	不明	aか	本書
六里遺跡	SI３	Ⅳｂか	方形	4.81	4.76	22.9	N 48° W	7%	不明	不明	a	本書
六里遺跡	SI５	Ⅳｂ	方形	(2.66)	(2.11)	―	N 51° E	13%	不明	不明	aか	本書
六里遺跡	SI６	Ⅳｂ	方形	6.36	6.24	39.69	N 47° E	4%	構造不明	1か	a	本書
六里遺跡	SI７	Ⅳｂ	方形	4.00	3.20	12.8	N 70° E	56%	C	1	礎石か	本書
稲荷遺跡	SI４	Ⅳｂ	方形	4.53	3.67	16.63	N 72° E	60%	A	1	a	本書
六里遺跡（H24）	１号竪穴建物	Ⅳｃか	方形	3.47	2.88	9.99	N 27° W	40%	―	―	―	3
六里遺跡（H24）	２号竪穴建物	Ⅳｃか	方形	3.55	2.80	9.94	N 46° W	2%	―	―	―	3
六里遺跡（H24）	３号竪穴建物	Ⅳｃか	方形	3.81	2.91	11.09	N 7° E	84%	―	―	―	3
六里遺跡（H24）	10号竪穴建物	Ⅳｃか	方形か	3.44	(2.22)	―	N 39° W	13%	―	―	―	3
東町田遺跡	SB03（Ⅰ区）	Ⅳｃ	方形	5.10	(3.30)	―	N 28° E	38%	A	2	a	2
東町田遺跡	SB04（Ⅱ区）	Ⅳｃ	方形	5.60	4.15	23.24	N 31° E	31%	A	1	aか	2
東町田遺跡	SB01（Ⅴ区）	Ⅳｃ	方形	5.40	5.10	27.54	N 51° W	13%	A	1	a	2
六里遺跡	SI４	Ⅳｄか	方形	2.74	2.66	7.29	N 16° E	64%	なし	なし	c	本書
御望遺跡	SB16（B区）	Ⅳか	方形か	不明	不明	―	N 69° E	53%	不明	不明	―	5
御望遺跡	SB07（A区）	Ⅳ～Ⅴ	方形か	不明	不明	―	N 36° W	20%	不明	1か	c	5
御望遺跡	SB08ａ（A区）	Ⅴか	方形か	(3.80)	(2.60)	―	N 45° E	0%	不明	不明	c	5
御望遺跡	SB02（B区）	Ⅴか	方形か	(2.40)	(2.15)	―	N 1° E	98%	不明	不明	不明	5
御望遺跡	SB03（B区）	Ⅴか	方形か	不明	不明	―	N 11° W	76%	不明	1か	c	5
御望遺跡	SB04（B区）	Ⅴ～Ⅵ	方形	3.90	3.60	14.04	N 58° E	29%	A	2	c	5
御望遺跡	SB05（B区）	Ⅳ～Ⅴ	方形か	不明	不明	―	N 18° W	60%	不明	不明	c	5
御望遺跡	SB06（B区）	Ⅳ～Ⅴ	方形か	不明	不明	―	N 16° W	64%	不明	不明	c	5
御望遺跡	SB07（B区）	Ⅴａ	方形か	(2.80)	(1.10)	―	N 10° W	78%	不明	不明	不明	5
御望遺跡	SB08（B区）	Ⅴａ	方形か	(3.10)	(1.30)	―	N 15° W	67%	Dか	2か	不明	5
御望遺跡	SB09（B区）	Ⅴａ	方形か	3.30	(2.10)	―	N 23° W	49%	B	2か	不明	5
御望遺跡	SB12（B区）	Ⅴか	方形か	不明	不明	―	―	―	不明	1か	c	5
御望遺跡	SB13（B区）	Ⅴか	方形か	不明	不明	―	N 72° E	60%	不明	不明	c	5
御望遺跡	SB14（B区）	Ⅴａ	方形	3.90	3.90	15.21	N 8° W	82%	Bか	2	c	5
御望遺跡	SB15（B区）	Ⅴｂか	方形	不明	不明	―	N 87° E	93%	B	1・2	c	5
御望遺跡	SB17（B区）	Ⅴａ	不定形	(2.50)	2.10	―	N 10° E	78%	なし	なし	c	5
御望遺跡	SB18（B区）	Ⅴか	方形か	不明	不明	―	N 85° E	89%	不明	2か	c	5
御望遺跡	SB20（B区）	Ⅴか	方形か	不明	不明	―	N 6° W	87%	不明	不明	c	5
稲荷遺跡	SI２	Ⅴｂ	方形	4.69	(2.96)	―	N 84° E	87%	構造不明	R1か	b	本書
稲荷遺跡	SI５	Ⅴｂ	方形	3.30	3.25	10.75	N 7° W	84%	B	2	b	本書
稲荷遺跡	SI８	Ⅴｂ	方形	3.52	3.36	11.83	N 75° E	67%	A	1	b	本書
稲荷遺跡	SI10	Ⅴｂ	方形	3.88	3.66	14.19	N 30° W	33%	A	2	b	本書
稲荷遺跡	SI11	Ⅴｂ	方形	2.85	2.80	7.97	N 23° W	49%	A	2	b	本書
稲荷遺跡	SI12	Ⅴｂ	方形か	(1.45)	(0.90)	―	N 28° W	38%	B	1	不明	本書
稲荷遺跡	SI13	Ⅴｂ	方形か	(1.60)	(1.22)	―	―	―	不明	不明	不明	本書
稲荷遺跡	SI15	Ⅴｂ	方形か	(4.20)	(1.68)	―	N 23° W	49%	B	1	不明	本書
稲荷遺跡	SI16	Ⅴｂ期以前	方形か	―	―	―	―	―	不明	不明	不明	本書
稲荷遺跡	SI17	Ⅴｂ期以前	方形か	(2.75)	(1.79)	―	N 24° W	47%	不明	不明	不明	本書
稲荷遺跡	SI18	Ⅴｂ	方形か	2.92	(1.27)	―	N 15° W	67%	不明	不明	不明	本書
一本松遺跡	SB01	Ⅴｂか	方形	4.05	2.80	11.34	N 34° W	24%	D	3	c	6
一本松遺跡	SB02	Ⅴｂか	方形	3.60	3.40	12.24	N 9° E	80%	不明	4	c	6
稲荷遺跡	SI１	Ⅵａ	方形	3.64	3.49	12.69	N 8° E	82%	C	2	b	本書
稲荷遺跡	SI６	Ⅵａ	方形	3.01	2.85	8.56	N 18° W	60%	構造不明	2	b	本書
稲荷遺跡	SI７	Ⅵａ	方形	3.98	(3.04)	―	N 58° E	29%	不明	不明	b	本書
稲荷遺跡	SI９	Ⅵａ	方形か	(2.82)	(1.60)	―	―	―	A	2	不明	本書
座倉遺跡	第１号住居跡	Ⅵａ	方形	2.92	2.23	6.51	N 84° E	87%	C	1	c	1
御望遺跡	SB11（B区）	Ⅵａか	方形	2.80	2.04	5.71	N 84° E	87%	D	2	c	5
六里遺跡（H24）	６号竪穴建物	Ⅵｂ～ｃ	方形	2.56	2.46	6.3	N 1° E	98%	―	―	―	3
稲荷遺跡	SI３	Ⅵｂ	方形	2.59	2.38	6.17	N 77° E	71%	B	2	b	本書
稲荷遺跡	SI14	Ⅵｂ	方形か	(4.72)	(2.12)	―	N 3° W	93%	不明	不明	bか	本書
座倉遺跡	第１号竪穴状遺構	Ⅵｂ	方形	2.78	2.32	6.45	N 7° E	84%	なし	なし	c	1

4類　竪穴掘方の隅に設置されるもの

主柱穴　今回集成した遺構については主柱穴について明確な記載のないものが多かったため、図面上から判断できる内容について、以下のとおり分類した。なお、a類については今回の調査における六里遺跡の事例から、深さが0.15m以上あることを基準とした。

a類　明確な掘り込みのある主柱穴が同心円上に配置されるもの。

b類　明確な掘り込みはないが、同心円上の配置が認められるもの。

c類　同心円上の配置が認められないもの、又は掘り込みのないもの。

文献　節末尾の脚注に示した文献の番号を記載した[2)]。

3　集成結果

（1）各時期の様相（第IR95図）

Ⅲ期　六里遺跡の9号竪穴建物（24年度調査）と下西郷一本松遺跡の5軒（財団法人岐阜市教育文化振興事業団2000の時期区分7期）がある。いずれも5世紀後半の遺構であり、美濃地方におけるカマドの出現期とされる時期である。建物規模は一辺が5m以上あり、長軸方位は南北軸に近いものが多い。カマドの煙道が竪穴掘方からやや突出するものがあり、下西郷一本松遺跡のSB29では、カマドに接した竪穴掘方外で炭化物の散布が報告され、竪穴掘方外へ延びる煙道の存在が示唆されている。この時期はカマドの設置位置に明確な特徴は認められず、主柱穴も不明確である。

Ⅳa・Ⅳb期　下西郷一本松遺跡の6軒（8期）と六里遺跡の5号竪穴建物（24年度調査）、六里遺跡のSI 1～3及びSI 5～7、稲荷遺跡のSI 4がある。下西郷一本松遺跡の竪穴建物は、六里遺跡より時期の古い遺構が含まれている可能性が高い。前時期に引き続き、一辺5m以上の竪穴掘方をもつものが多いが、下西郷一本松遺跡SB 5や六里遺跡のSI 7のように小規模な竪穴掘方のものも認められる。長軸方位は南北軸から傾いたものが多く、下西郷一本松遺跡ではⅢ期との違いが認められる。六里遺跡では、SI 1・3・5・6に特徴の類似性があり、位置も近いことから何らかのまとまりを示す可能性がある。一方、六里遺跡5号竪穴建物（24年度調査）及びSI 2・7、稲荷遺跡SI 4にも類似性が認められるが、これらは立地する場所が互いに離れており、SI 1等とは、詳細な時期が異なる可能性がある。煙道タイプは遺存状態が良好な事例が少ないが、下西郷一本松遺跡SB 6や六里遺跡SI 7にはC類が認められる。主柱穴は、下西郷一本松遺跡では不明確なものが多いが、六里遺跡では同心円上に配置された明瞭なものが認められる。なお、六里遺跡SI 7については、床面で検出した河原石が柱の礎石である可能性について指摘した（第3章第4節）。

Ⅳc・Ⅳd期　六里遺跡（24年度調査）4軒と東町田遺跡3軒がある。六里遺跡のものはいずれも規模が小さく、長軸方位に若干ばらつきがある。東町田遺跡では前時期と規模は変わらない。Ⅳd期の可能性がある六里遺跡のSI 4はさらに小規模で、カマドをもたない特殊な遺構である。カマド位置がわかる事例は東町田遺跡のみであるが、カマド部分の竪穴掘方の突出はなく、カマドは竪穴掘方中軸線上に設置される。主柱穴は、東町田遺跡で同心円上に配置された明瞭なものが認められる。

Ⅴ期　御望遺跡17軒と稲荷遺跡11軒、一本松遺跡2軒がある。御望遺跡については遺存状態が悪いものが多く、規模がわかるものは2軒のみである。また、時期は稲荷遺跡より古いⅤa期のものが含まれている可能性が高い。一本松遺跡は出土遺物からⅤb期とほぼ同じ時期の遺構と思われる。前時

期と比較すると竪穴掘方が小型化し、一辺が５ｍを超えるものが認められない。長軸方位は、稲荷遺跡の事例で西部のSI ２・５、東部のSI10～17、SI ８・18の３グループに分けることができ、いずれも近接している。カマドはＡ・Ｂ類が多いが、一本松遺跡のSB01のように竪穴掘方外に設置されるＤ類も認められる。設置位置は竪穴掘方中軸線上又は右寄りが多い。なお、一本松遺跡SB02のように竪穴掘方隅に設置された可能性のあるものは、他の遺跡では確認できなかった。主柱穴は、稲荷遺跡のように窪み状の浅いものか、御望遺跡のように確認できないもので、ａ類は認められなかった。

Ⅵａ・Ⅵｂ期　御望遺跡１軒と稲荷遺跡６軒、六里遺跡（24年度調査）１軒、座倉遺跡２軒がある。御望遺跡SB11は９世紀代の須恵器が出土しているため当期に含めた。座倉遺跡は竪穴建物とされているのは１軒のみであるが、参考事例として１号竪穴状遺構を掲載した。Ⅳ期より竪穴の小型化が進み、一辺４ｍを超えるものも認められない。どの遺跡でも長軸方位が南北軸に近いものが多くなり、Ⅳ期との違いは明瞭である。煙道タイプは様々なものがあるが、カマドはいずれも竪穴掘方中軸から右寄りに設置されるものが目立つ。主柱穴はｂ類又はｃ類で、ａ類は認められなかった。

（２）まとめ

今回の検討によって、カマドをもつ竪穴建物について、いくつかの特徴を抽出することができた。

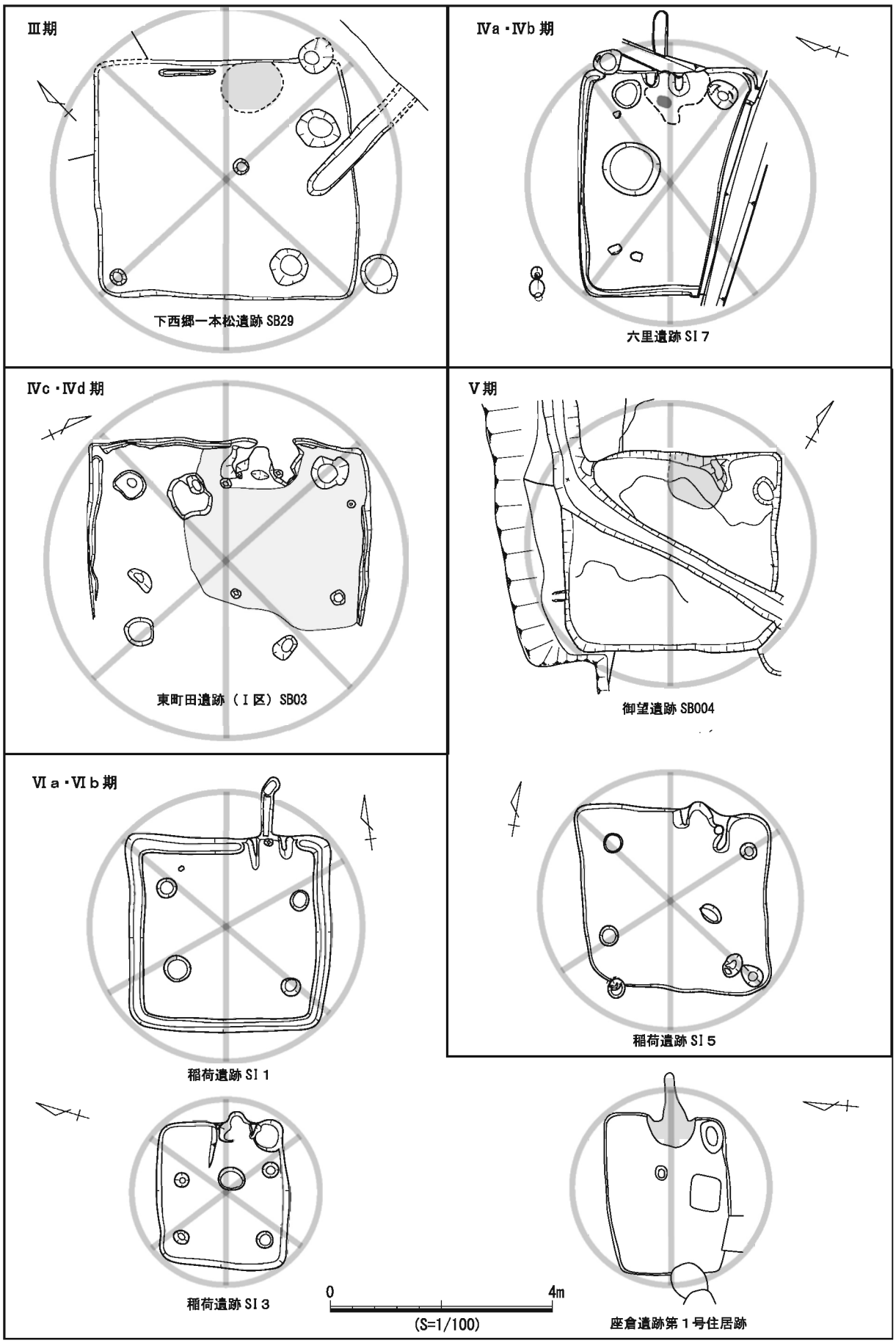
①建物規模は縮小化する傾向があり、Ⅲ・Ⅳ期には一辺５ｍを超えるものが認められるが、Ｖ期には５ｍ未満、Ⅵ期には４ｍ未満となる。

②長軸方位により、まとまりを抽出できる可能性を指摘することができた。また、Ⅲ期やⅥ期においては、南北軸に近い傾向がある。

③煙道タイプの明確な傾向は、遺存状態の問題もあり見出せなかったが、煙道が屋外へ長く延びるＣ類は各時期で認められる。設置位置は竪穴掘方中軸線上か右寄りが多く、左寄りのものは少ない。

④主柱穴はⅣ期以前はａ類が多いが、Ｖ期以降はｂ類、ｃ類のみとなる。

①については、比較的明瞭な傾向である。ただし、六里遺跡SI ７のようにⅣ期でも小型のものや稲荷遺跡SI14のようにⅥ期でも大型のものが存在し、竪穴建物の規模によって、性格が異なる可能性がある。②は、平安時代以降南北軸を基準とした土地区画が、浸透しつつある可能性がある。稲荷遺跡では、溝状遺構等には同時期における長軸方位の変化が確認できないため、一般的な傾向とするには、他地域の類例を検証する必要がある。③の煙道Ｃ類は、竪穴掘方壁面から横穴をあけるものや、竪穴掘方から溝状に延ばすもの[3]が削平により煙道の一部が残存したものと考えられ、遺存状態の良い資料により検証を進める必要がある。カマドの設置位置については、時期にかかわらず竪穴掘方中軸線上の右側に寄せる例が多いことが特筆される。六里遺跡は１類でカマドの両側に貯蔵穴を配し、東町田遺跡SB １は２類で、狭くなった右隅に主柱穴が配される。稲荷遺跡SB ３は２類で右隅に貯蔵穴、座倉遺跡第１号住居跡は１類で同様に貯蔵穴と思われる土坑が認められる。Ｄ類を除くカマドは竪穴建物の床面の一定の場所を占める構造物であり、その両脇を活用するために工夫された結果、片側に寄せたことが考えられる。ただし、右側に寄せる例が多いことは、地域的傾向や当時の屋内利用に関する慣習などによる可能性を秘めている。④は①と同様比較的明瞭な傾向である。柱穴によって柱を固定する構造でない場合、屋根の重量によって安定させる必要があり、規模の縮小傾向と主柱穴の変化は、竪穴建物の構造が違うことを示す可能性がある。今後は、六里遺跡SI ７のように、



第255 図　各時期の竪穴建物（引用文献の遺構図をトレースして転載、一部改変）

床面上に置かれた礫などにも注目していく必要があると思われる。ただし、Ⅲ期の下西郷一本松遺跡では明確な柱穴が検出されておらず、時期的あるいは地域的な傾向なのかを、他地域の類例を含めて検討する必要がある。

注

1）大野町教育委員会から六里遺跡 24 年度調査における全体図原図の提供を受けた。また、出土遺物の実見について御協力を得た。

2）表の引用文献は以下のとおりである。

1　高木宏和 1990『座倉遺跡』大野町文化財調査報告書第１集　大野町教育委員会

2　大垣市教育委員会 2004『東町田遺跡』大垣市埋蔵文化財報告書第 14 集

3　大野町教育委員会 2013『大野町史跡　条里跡（六里遺跡）の発掘調査』平成 25 年度岐阜県発掘調査報告会配付資料

4　財団法人岐阜市教育文化振興事業団 2000『下西郷一本松遺跡』（財）岐阜市教育文化振興事業団報告書第６集

5　大垣市教育委員会 1994「一本松遺跡（第２次調査）」『大垣市埋蔵文化財調査概要　平成４年度』

3）谷氏によれば、「地山を掘り抜いたトンネル状のもの、溝を掘って被覆したもの、土器を連接した土管状のもの」があるとされ、Ｆ類として一括されている（谷 1997）。

第２節　六里遺跡の土器埋設遺構について

県内の縄文時代晩期の土器埋設遺構については、平成 12 年に集成が行われ（春日井 2000）、この中で美濃地域は 18 遺跡が挙げられている。その後、恵那市串原町の大平遺跡（財団法人岐阜県教育文化財団文化財団文化財保護センター 2006）、揖斐川町の櫨原村平遺跡（財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2007）、大垣市の荒尾南遺跡Ａ地区（岐阜県文化財保護センター 2013）で確認された。これまで県内で確認された土器埋設遺構は後世の撹乱を受けている例が多いが、今回の調査で検出したものは遺存状態が良く、設置状況を考える上で重要な資料になると考えられる。以下に、今回検出した土器埋設遺構の埋設形態と位置について検討するとともに、同時期の他遺跡における検出例との比較を行う。

１　埋設形態

西日本における縄文時代晩期中葉の土器埋設遺構については、人骨が土器内容物として遺存している事例などから「土器棺」として使用されたことは確実とする見解がある（立岡 2000）。今回の調査では埋設土器の内部から人骨が出土しなかったため埋設土器としたが、一般的に「土器棺」とされる遺構と類似する形態を持つ。中村氏は「土器棺」の埋設形態について８類の分類を行っている（中村 1996）。今回検出した土器埋設遺構は、この内、Ｂ類、Ｄ類、Ｇ類に当たると考えられ、それ以外に SJ ９・SJ11 のような複合的な要素を含むものも認められる。以下に、六里遺跡の土器埋設遺構を分類（第 256 図）し、その詳細を述べる。

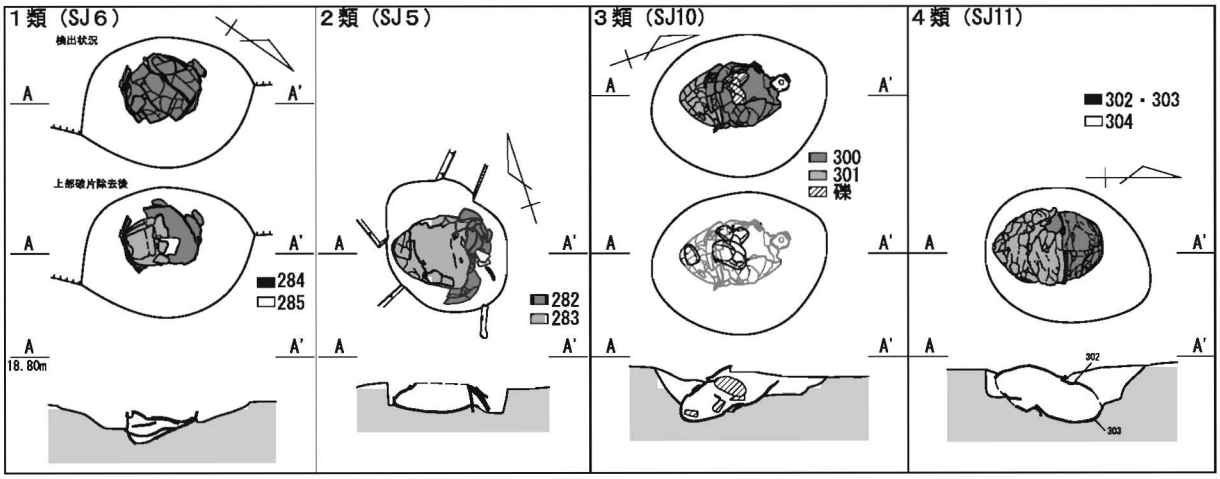
１類　同一個体の土器片を組み合わせて設置するもので、中村氏のＢ類に当たる。今回確認したのはSJ ６の１基である。SJ ６は２個体の土器が使用されているが、小型の頸部屈曲深鉢（285）を別個体の深鉢（284）の破片で覆うように設置されていた。ほぼ設置当初の状況を留めていると考えられるが、284･285 ともに底部破片を欠く特徴がある。時期は異なるが、土器片を組み合わせる埋設形態は、大平遺跡 SZ ４で認められる。

２類　横位又は斜位に設置した土器に、別個体の土器の破片を蓋として被せるもので、中村氏のＤ類に当たる。今回の調査ではSJ ３～SJ ５、SJ ８がこれに該当する。蓋の被せ方は、同一個体の大型破片を被せたもの（SJ ３）、複数個体の破片を蓋に用いたもの（SJ ４・SJ ８）、同一個体の破片を組み合わせて蓋としたもの（SJ ５）がある。蓋として用いられた破片は接合するものは多いが、いずれも完形にはならない。また、体部下半を欠くものが多い。その中で、SJ ４は体部を含む比較的小型の破片を集めて蓋とする特徴をもつ。遺構の時期は、いずれもＩｂ期である。

３類　横位又は斜位に設置した同一器種の土器を、口縁部同士で合わせて設置するもので、中村氏のＧ類に当たる。今回の調査ではＩｂ期のSJ １･SJ ２、Ｉｃ期のSJ10 がこれに該当する。SJ １･SJ ２は、口径が異なる深鉢を深く組み合わせる特徴があり、SJ10 のように、ほぼ同じ口径の２個体を組み合わせたものとは若干異なる。

４類　２類と３類の２つの要素をもつもので、SJ ９・SJ11 が該当する。SJ ９は 298 の中に底部を欠く 297 を合わせ口で設置し、さらに 296 の破片を蓋としている。このような事例は、戸入村平遺跡（財団法人岐阜県文化財保護センター 1994）SZ ７にも認められる。SJ11 は完形の深鉢（304）の口縁部に２個体の深鉢で蓋をするが、蓋とした破片の内、上に置かれた方（302）の口縁部と 304 の口縁部を合わせた擬似的な合わせ口形態をもつ。

５類・６類　５類は設置形態（正位・横位など）にかかわらず土器１個体を埋設するもので、中村氏のＡ類にあたる。６類は異なる器種を組み合わせるもので、中村氏のＥ類若しくはＦ類に当たる。ともに今回の調査では確認できなかったが、第３項における同時期の遺構の集成では、いんべ遺跡や戸入村平遺跡で５類、はいづめ遺跡で６類が認められたため、分類に加えた。



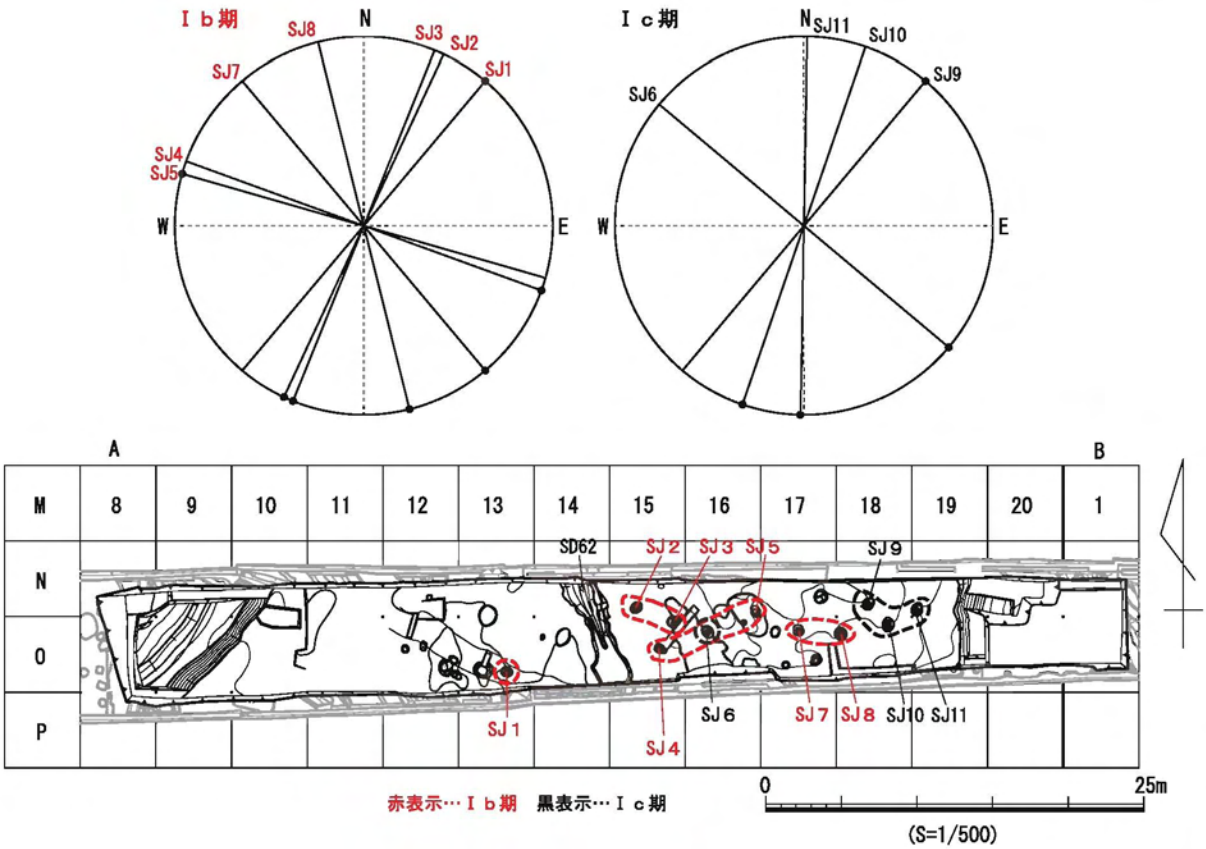
第256 図　六里遺跡における土器埋設遺構の分類

２　遺構の分布

第257図に、六里遺跡の土器埋設遺構の長軸方位と位置を示した。長軸方位は埋設土器の中軸線で計測した。「●」を付けた方位が、主となる土器のある方向である。Ｉｂ期がA013グリッドからA018グリッドまで広がっているのに対し、Ｉｃ期はA016グリッドに単独で位置するSJ６とAN18～AN19グリッドに集中するSJ９～SJ11に分かれる。長軸方位では、位置が比較的近いSJ２とSJ３、SJ７・SJ８、SJ９～SJ11がそれぞれ近似している。SJ４・SJ５は若干離れているが、長軸方位や埋設形態（２類）に類似点があり、SJ１とSJ２は長軸方位や土器の埋設形態（３類）が類似するが、位置は他のものと比べると離れている。今回の調査は発掘区の幅が約10ｍしかない狭い範囲での検出状況であるため断定はできないが、土器埋設遺構が位置や長軸方位にまとまりをもって設置されていた可能性を示すと考えられる。

３　他遺跡の状況

第２節冒頭で述べた遺跡の内、六里遺跡の土器埋設遺構と同時期と考えられる遺構が確認されたのは、北裏遺跡（大江他1973）、はいづめ遺跡（岐阜県教育委員会1989）、戸入村平遺跡、上原遺跡（財団法人岐阜県文化財保護センター1998）、いんべ遺跡（財団法人岐阜県文化財保護センター2000）、櫨原村平遺跡[1]がある。北裏遺跡の土器埋設遺構は、土器の埋設状態などに不明な点が多いため、それ以外の遺跡からＩｂ・Ｉｃ期の土器埋設遺構を抽出し、表122にまとめた。遺構の規模や長軸方



第257 図　土器埋設遺構の長軸方位と配置

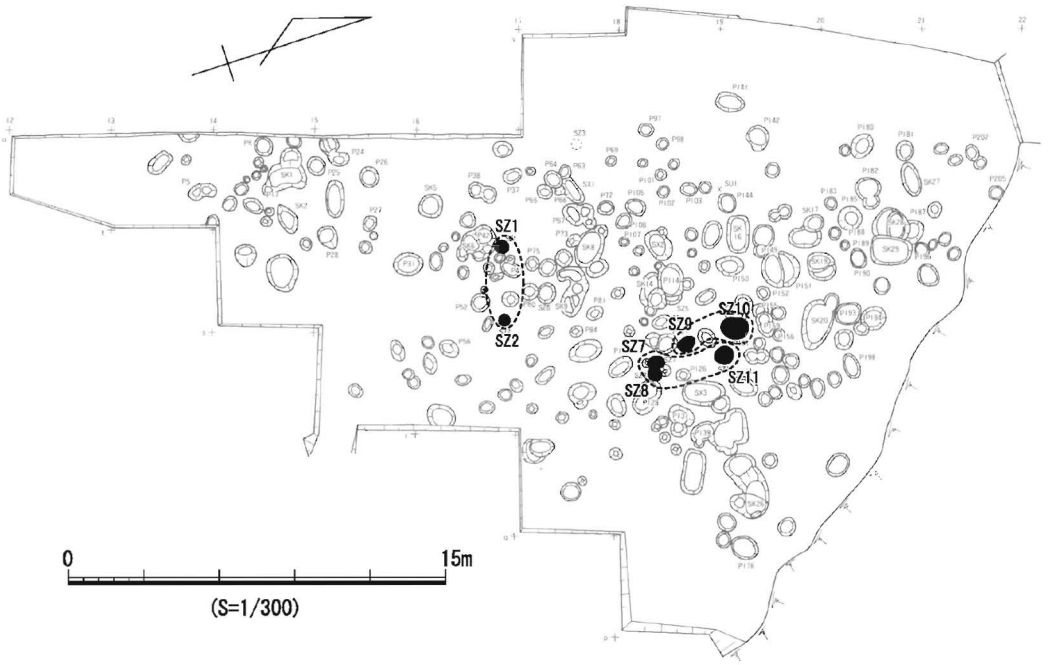
位は報告書の記載に従ったが、記載のないものは図上で計測した。はいづめ遺跡の土器埋設遺構は「五貫森式期から下り松式期」と表記されたものが多いが、六里遺跡の土器埋設遺構と類似する土器が使用されているものを抽出した。いんべ遺跡・戸入村平遺跡は「粗いミガキ」を施す土器や「滋賀里Ⅲｂ式期」と記載のあるものを抽出したが、六里遺跡では認められない器形の土器も多く、時期幅がある可能性がある。櫨原村平遺跡については報告書に明確な時期の記載はないが、SK110 にＡ２ｃ類の土器が用いられていることとから、隣接する SK111 を含めて抽出した。

土器埋設遺構の掘方　いずれも長軸が１ｍ未満で、類似する規模をもつ。これは使用されている土器の大きさがほぼ同じであり、これに合わせて土器を設置する穴を掘り込んだものが多いためと推定される。なお、六里遺跡では掘方底面に土器が置かれているもののみであったが、掘方の埋土中に設置されている事例が多く認められた。

設置及び埋設形態　いんべ遺跡及び戸入村平遺跡では、六里遺跡にはない５類が認められる。前掲の集成結果を受けて春日井氏は、「晩期前半の段階では正位埋設例が多く、後半になって横位埋設例が増加し優位となる」としており（春日井 2000)、時期的に古い要素と思われる。なお、いんべ遺跡の事例は別個体の土器が共伴しており、５類ではない可能性もある。埋設形態が明確なものは、Ｉｂ期は２類が 11 例で３類が４例、Ｉｃ期は２類が３例で３類が２例あり、基数は少ないがＩｃ期の方が３類の比率は高い。４類では、戸入村平遺跡の SZ ７で、時期は異なるが六里遺跡 SJ ９と同様な土器の埋設形態が認められた。しかし、残存状態の関係から SJ11 のような事例は認められなかった。５類とした単独のものも報告されているが、上面を削平された可能性もあり詳細は不明である。６類ははいづめ遺跡の第 12 号土器棺で認められ、壺と深鉢による合わせ口の埋設形態をもつ。なお、今回

表122　美濃地域におけるＩｂ・Ｉｃ期の土器埋設遺構

番号	遺跡名	遺構名	掘方（m）			主軸方位	埋設形態	時期	備考
			長軸	短軸	深さ				
1	六里遺跡	SJ1	0.75	0.64	0.26	N　40°　E	３類	Ｉｂ	
2	六里遺跡	SJ2	0.81	0.74	0.27	N　25°　E	３類	Ｉｂ	内部に石皿
3	六里遺跡	SJ3	(0.75)	(0.70)	0.25	N　22°　E	２類	Ｉｂ	
4	六里遺跡	SJ4	0.80	0.57	0.16	N　70°　W	２類	Ｉｂ	
5	六里遺跡	SJ5	0.78	0.60	0.16	N　74°　W	２類	Ｉｂ	
6	六里遺跡	SJ7	0.74	0.70	0.13	N　40°　W	不明	Ｉｂ	
7	六里遺跡	SJ8	0.89	0.74	0.25	N　14°　W	２類	Ｉｂ	内部に石皿
8	はいづめ遺跡	第14号土器棺	―	―	―	N　35°　E	２類か	Ｉｂ	川原石設置
9	はいづめ遺跡	第16号土器棺	―	―	―	N　42°　E	３類	Ｉｂ	
10	いんべ遺跡	SZ１	0.60	0.50	0.35	―	不明	Ｉｂ	
11	いんべ遺跡	SZ２	0.70	0.45	0.25～0.30	N　35°　E	２類	Ｉｂ	
12	いんべ遺跡	SZ７	0.75	0.65	0.35	N　38°　W	２類	Ｉｂ	
13	いんべ遺跡	SZ８	0.65	0.55	0.28	N　40°　W	３類	Ｉｂ	SZ７<SZ８
14	いんべ遺跡	SZ９	0.63	0.50	0.38	N　18°　E	２類	Ｉｂ	骨片出土
15	いんべ遺跡	SZ10	0.60	0.55	0.30	N　68°　E	５類か	Ｉｂ	立石あり
16	いんべ遺跡	SZ11	0.75	0.60	0.30	N　48°　W	２類	Ｉｂ	
17	戸入村平遺跡	SZ２	―	―	―	N　90°　E	２類	Ｉｂ	
18	戸入村平遺跡	SZ４	0.77	0.38	0.22	N　44°　E	２類	Ｉｂか	
19	戸入村平遺跡	SZ５	0.33	0.33	0.13	―	５類	Ｉｂ	
20	戸入村平遺跡	SZ７	0.97	―	0.13	N　50°　W	４類	Ｉｂか	
21	戸入村平遺跡	SZ９	0.49	―	0.13	N　20°　E	２類か	Ｉｂ	
22	戸入村平遺跡	SZ13	0.64	―	0.18	N　59°　W	２類	Ｉｃか	
23	六里遺跡	SJ6	0.85	(0.70)	0.20	N　50°　W	１類	Ｉｃ	
24	六里遺跡	SJ9	0.87	0.67	0.19	N　40°　E	４類	Ｉｃ	
25	六里遺跡	SJ10	0.95	0.74	0.31	N　19°　E	３類	Ｉｃ	内部に川原石
26	六里遺跡	SJ11	0.90	0.72	0.30	N　1°　E	２類	Ｉｃ	
27	はいづめ遺跡	第７号土器棺	―	―	―	N　64°　W	５類	Ｉｃ	図なし、骨片出土
28	はいづめ遺跡	第12号土器棺	―	―	―	N　90°　E	６類	Ｉｃ	
29	上原遺跡	SZ４	―	―	―	N　43°　W	３類か	Ｉｃ	
30	櫨原村平遺跡	SK110	0.93	0.82	0.29	N　30°　E	３類	Ｉｃ	
31	櫨原村平遺跡	SK111	0.78	0.64	0.21	N　16°　E	２類	Ｉｃか	



第258 図　いんべ遺跡における土器埋設遺構の配置

の集成では、六里遺跡のSZ６のような１類は認められなかった。

遺跡内の分布　六里遺跡の検出状況から、位置と長軸方位にまとまりが存在する可能性について指摘したが、いんべ遺跡では、報告書の中で「南東もしくは北西を向くものと、南西もしくは北東を向くもの」(財団法人岐阜県文化財保護センター 2000)、の２種があるとしており、前者がSZ７・SZ８・SZ11、後者がSZ２・SZ９・SZ10である（第258図)。SZ７・SZ８は、竪穴掘方が切り合う位置にあり、SZ11も両遺構から４m程度北に位置する。一方、SZ２はSZ１に隣接するが、SZ９・SZ10からは大きく離れており、六里遺跡の状況に照らせば、SZ２（・SZ１)、SZ７・SZ８・SZ11、SZ９・SZ10の３グループになると思われる。戸入村平遺跡では、発掘区中央にSZ４・SZ５・SZ７・SZ13が横並びで配置されており、この内SZ７とSZ13が隣接して長軸方位が類似する。はいづめ遺跡ではＩｂ期とした14号・16号土器棺は隣接しており、長軸方位が一致する[2)]。Ｉｃ期の７号と12号においても設置位置が10ｍ程度離れているが、長軸方位が南北軸から大きく傾く点では類似している。櫨原村平遺跡はSK110・SK111ともに同一グリッドで検出されており、長軸方位が類似している。

４　おわりに

今回の集成によって、六里遺跡で確認した土器埋設遺構の埋設形態が同時期の他の遺跡においても認められること、また、当該期の土器埋設遺構の一部がまとまりを構成して配置され、他の遺跡でも同様な配置が存在する可能性があることを指摘できた。春成氏は、晩期の埋葬人骨の抜歯や装身具から血縁の有無を基準とした埋葬場所の区分について言及しており（春成 1992)、土器埋設遺構が墓であるという観点に立てば、家族や血縁に基づく単位などの解釈は可能と思われる。しかし、今回は

同一遺跡内における土坑墓などに関する検討を行っていないため、墓域としての説明をするためには、さらなる検討が必要になると考えられる。また、その他の今回対象とした遺跡は、結果的に、旧徳山村（現揖斐川町徳山）と六里遺跡という岐阜県西濃地方でも限られた地域の資料のみとなってしまったため、今後の調査事例の増加を待って検討する必要があると考えられる。

注

1）表の参考文献は以下のとおりである。

岐阜県教育委員会 1989『はいづめ遺跡－徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査報告書－』

財団法人岐阜県文化財保護センター 1994『戸入村平遺跡』徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査報告書第４集　岐阜県文化財保護センター調査報告書第 11 集

財団法人岐阜県文化財保護センター 1998『上原遺跡Ｉ』徳山ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 10 集　岐阜県文化財保護センター調査報告書第 36 集

財団法人岐阜県文化財保護センター 2000『いんべ遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第 55 集

財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2007『櫨原村平遺跡』岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第 106 集

2）藤田氏は、はいづめ遺跡の晩期中葉の土器棺をＩ群とし、「調査区西隅に偏る」ことを指摘している（藤田 2013）。

第３節　六里遺跡・稲荷遺跡の出土土器について

六里遺跡・稲荷遺跡では、縄文時代から近世にかけての土器が出土している。本節では、この中でも縄文時代の遺物と古墳時代から古代にかけての土器に焦点を当て、その特性について検証する。

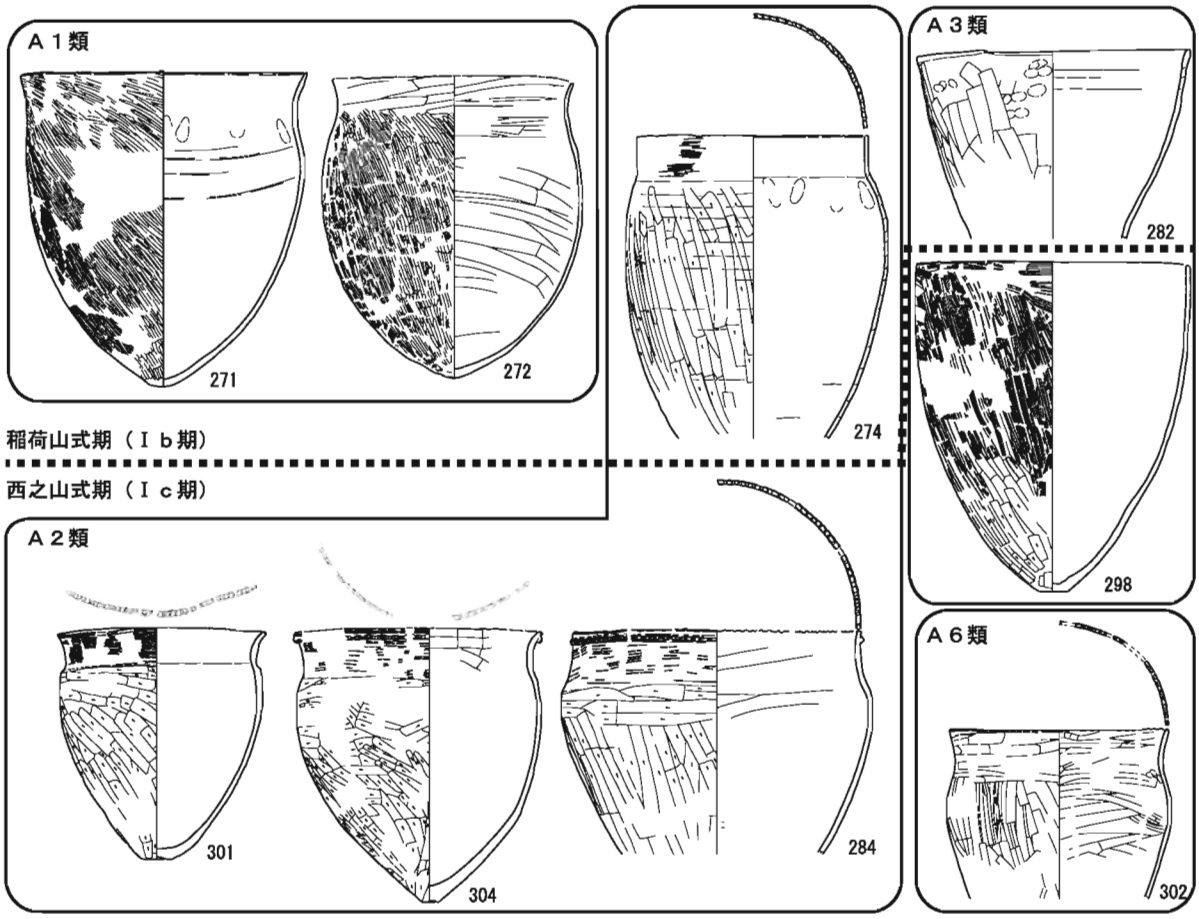
１　縄文時代晩期の土器について

これまで述べたとおり、今回出土した縄文土器は、大半が晩期中葉から後葉に属すると考えられる（第５章第３節）。特に第３調査面の遺構・遺物は、後世の影響を大きく受けておらず、遺存状態が良いこともすでに述べた。そこで、第３章第２節の縄文土器の分類と出土状況を対比し、遺跡の特性について検証を行う。

埋設土器　今回検出した土器埋設遺構は、第２節で述べたとおり、異なる個体の土器を組み合わせて設置されている。既存の研究では、Ａ１類が稲荷山式期（Ｉｂ期）、Ａ２ｃ類が西之山式期（Ｉｃ期）をそれぞれ代表する器形であり、今回の調査における時期区分の判断も、これによる部分が大きい。土器埋設遺構に埋設された土器は、異なる分類同士の共伴が認められ、これを整理することで各分類の同時性を検証することができると思われる。表 123 に、埋設土器の分類とその共伴について掲載した。なお、縄文時代晩期を示す「第Ⅱ群」は、以下の記述では省略する。Ｉｂ期としたものの共伴では、Ａ１ａ類とＡ１ｂ類が２例、Ａ１ａ類とＡ２ａ類が３例、Ａ１ｂ類とＡ３ｃ類が１例が認められる。一方、Ｉｃ期とした共伴では、Ａ２ｃ類とＡ２ｂ類が１例、Ａ２ｃ類とＡ３ａ類が１例、Ａ２ｃ類同士が１例、Ａ２ｄ類とＡ６類が１例認められる。この共伴関係について代表的な土器を抽出し、

表123　埋設土器の分類と組み合わせ

分類	SJ2	SJ8	SJ1	SJ3	SJ4	SJ5	SJ7	SJ6	SJ9	SJ10	SJ11
Ａ１ａ	○	○	○	○	○		○				
Ａ１ｂ	○	○				○					
Ａ２ａ			○	○	○						
Ａ２ｂ								○			
Ａ２ｃ								○	○	○	
Ａ２ｄ											○
Ａ３ａ									○		
Ａ３ｃ						○					
Ａ６											○



第259 図　埋設土器の分類と時期区分（S=1/5）

第259図にまとめた。Ｉｂ期ではＡ１類（271・272）とＡ２ａ類（274）及びＡ３ｃ類（282）、Ｉｃ期ではＡ２ｃ類（301）と突帯文をもつＡ２ｂ類（284）又はＡ３ａ類（298）が共伴すると考えられる。SJ11のみ突帯文を持つＡ２ｄ類（304）と今回細分できなかったＡ６類（302）との共伴である。Ａ２ｄ類はＡ２ｃ類と器形や外面調整の類似性は高いが、後述の遺物包含層出土土器の組成の検討から、六里遺跡のＩｃ期の中でも新しい要素をもつ土器の可能性がある。

遺構出土土器　今回検出した遺構の多くは、Ｉｂ期あるいはＩｃ期に属する可能性があることは、第３章第５節ですでに述べた。ここでは、土器埋設遺構以外の各遺構で出土した縄文土器の、分類ごとの組成について検討する。なお、数量の算出に当たっては、口縁部が残存する分類可能な土器を対象

表124　遺構から出土した縄文土器の分類と組成

分類	SK104	SK105	SK106	SK107	SK103	SK111	SK115	SK117	SL2	SL4	SD62	合計
Ａ１ａ		0.08									0.08	0.16
Ａ１ｂ	0.08		0.17	0.08								0.33
Ａ１										0.08		0.08
Ａ２aか									0.08			0.08
Ａ２ｂ							0.08				0.08	0.16
Ａ２ｃ					0.17	0.21	0.75				0.58	1.71
Ａ２ｄ												0.00
Ａ２ｅ										0.08	0.08	0.16
Ａ２ｆ										0.08		0.08
Ａ２ｇ												0.00
Ａ２ｈ												0.00
Ａ２ｉ												0.00
Ａ２ｊ												0.00
Ａ２kか								0.08				0.08
Ａ３ａ											0.08	0.08
Ａ３ｂ												0.00
Ａ３ｃ											0.32	0.32
Ａ３ｄ												0.00
Ａ３ｅ												0.00
Ａ４												0.00
Ａ５												0.00
Ａ６											0.17	0.17
Ｂ１							0.17					0.17
Ｂ２												0.00
Ｂ３												0.00
Ｃ１												0.00
Ｃ２												0.00
Ｃ３							0.20			0.08		0.28
Ｃ４												0.00
Ｃ５												0.00
Ｃ６									0.08			0.08
Ｃ		0.08	0.08								0.08	0.24
Ｄ			0.08								0.09	0.17
Ｅ						0.17						0.17
合計	0.08	0.16	0.33	0.08	0.17	0.38	1.20	0.08	0.16	0.32	1.56	4.52

※数量は口縁部個体数（単位：点）

とし、表示した数値は口縁部個体数である（第３章第２節参照）。

SK104～SK107では、深鉢はＡ１類のみが出土し、浅鉢（Ｃ類）の細片が伴う。また、SK106では、大洞ＢＣ～Ｃ式期と考えられる異系統土器Ｄ類（341）が認められる。SK115では突帯文をもつＡ２ｂ類（351）とＡ２ｃ類（348等）が共伴する。また、外面をミガキ調整する壺（Ｂ１類、352）や口縁部が外傾及び外反する浅鉢（Ｃ３類、353等）も認められる。SL２では素文突帯を施す浅鉢（306）が出土しているが、細片であるため詳細は不明である。SD62では、Ａ２ｂ類（326）と口縁部内面に沈線を施すＡ２ｅ類（321）がＡ２ｃ類（316等）と共伴する他、砲弾型深鉢であるＡ３ａ類（322）・Ａ３ｃ類（323等）が出土している。逆に、第３調査面の土器埋設遺構を除く遺構から出土しなかった分類としては、頸部屈曲深鉢のＡ２ｄ・Ａ２ｇ～Ａ２ｊ類、砲弾型深鉢Ａ３ｂ・Ａ３ｄ・Ａ３ｅ類、変容壺Ａ４、その他の突帯文をもつ深鉢Ａ５類、壺のＢ２・Ｂ３類、浅鉢Ｃ１・Ｃ２、Ｃ４・Ｃ５類がある。以上のように、遺構内から出土した遺物については、後述する遺物包含層と比較すると組成に偏りがある状況が認められる。

遺物包含層（Ⅵａ層）　Ⅵａ層出土土器については、第３章第５節において出土した土器の特徴から、①AN ９～AO12グリッド、②AN13～AO14グリッド、③AN15～AO18グリッド、④AN19・AO19グリッドに区分した。第３章第５節の土器観察表で示したように、大型の破片については区分を超えて接合した事例も認められなかった。ここでは遺構出土遺物と同様の集計を区分ごとに行い、各分類におけ

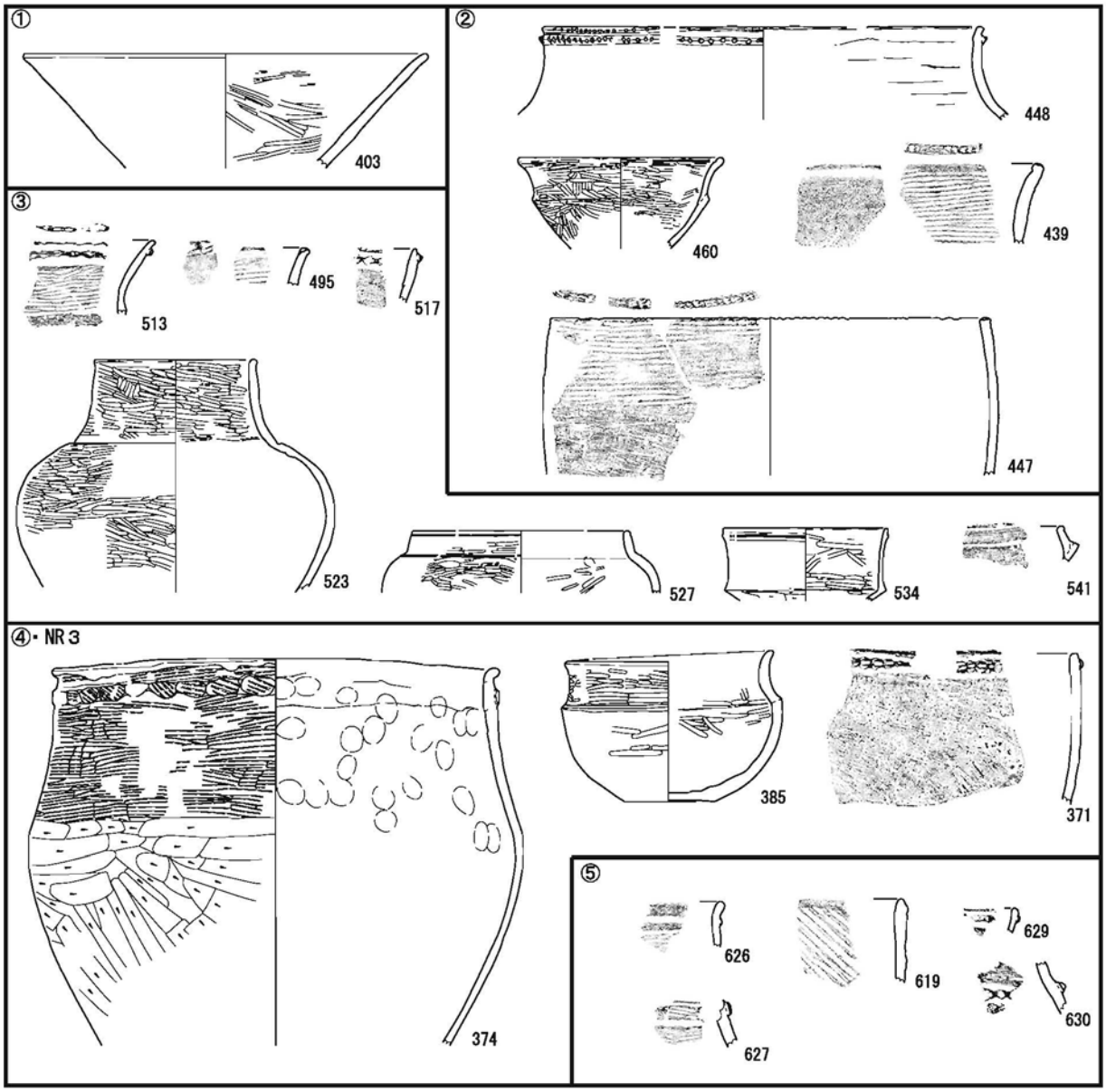
る組成の検証を行った。また、堆積状況から、最終的な埋没時期がⅥａ層より新しいNR ３とⅣ・Ⅴ層の出土遺物についても、比較のために組成を確認した。その集計結果を表 125 に示し、代表的な土器を第 260 図に掲載した。いずれの区分でもＡ１類やＡ２ｃ類が認められることについては、第３章第５節でも述べたとおり、発掘区全体に遺構が認められることから、各時期における活動域が重複した結果と考えられる。この他①において、Ｃ２類の浅鉢（403）が認められる。②では突帯文をもつＡ２ｂ類（448）、口縁部内面に沈線を施すＡ２ｅ～ｇ類（439）、外面に条痕を施すＡ３ａ類及びＡ２ｃ類と類似する外面調整が認められるＡ３ｂ類（447）、口縁部が外反及び外傾する浅鉢であるＣ３類（460）が出土している。③では②と同様な土器に加え、Ａ２ｃ類に突帯を施すＡ２ｄ類（513）や口縁端部の刻みが内面側に寄るＡ２ｈ類（495）、口縁端部を面取りせず突帯を施すＡ２ｉ類(517)が認められる。Ａ３類では、外面をナデやケズリ調整するｃ類は存在するが、ｂ類は認められない。壺は馬見塚Ｆ地点型壺であるＢ２類（523）と口縁部が短いＢ３類（527）があり、浅鉢には逆く字口頸部浅鉢であるＣ５類（541）と、素文突帯を施すＣ６類（534）が認められる。④とNR ３は、遺物包含層掘削作業時に出土遺物が混在したためか、ほぼ同じような組成を示す。④又はNR ３に存在し③に認められないものとしては、突帯に幅広の二枚貝押圧を施すＡ２ｊ類（374）と砲弾型深鉢に突帯を施すＡ３ｅ類（371）、口縁端部に接して突帯を施すＡ５ａ類、口縁部を外反及び内傾する浅鉢Ｃ４類（385）がある。⑤では、変容壺と考えられるＡ４類（626･627）、粗い竹管状工具を施すＡ３ｄ類（619）、突帯を施す壺Ｂ４類（629･630）が認められる。

表125　遺物包含層で出土した縄文土器の分類と組成

分類	①	②	③	④	NR３	⑤	合計
Ａ１ａ		0.08	0.33		0.08		0.49
Ａ１ｂ	0.25	0.27	0.63	0.43		0.25	1.83
Ａ２ａ	0.08		0.33				0.41
Ａ２ｂ		0.33	0.25				0.58
Ａ２ｃ	0.17	3.23	1.67	1.53	0.40	0.58	7.58
Ａ２ｄ			0.33				0.33
Ａ２ｅ		0.25	0.17	0.08			0.50
Ａ２ｆ		0.08	0.25				0.33
Ａ２ｇ		0.17					0.17
Ａ２ｈ			0.17				0.17
Ａ２ｉ			0.17	0.64	0.75	0.65	2.21
Ａ２ｊ					0.40	0.25	0.65
Ａ２ｋ		0.32	0.74	0.17		0.11	1.34
Ａ３ａ		0.17	0.40	0.33		0.34	1.24
Ａ３ｂ		0.33					0.33
Ａ３ｃ			0.43	0.08	0.17	0.27	0.95
Ａ３ｄ						0.08	0.08
Ａ３ｅ				0.08	0.25		0.33
Ａ４						0.08	0.08
Ａ５ａ				0.08	0.08		0.16
Ａ５ｂ			0.08	0.08		0.08	0.24
Ａ６		0.71	0.08	0.08	0.08	0.25	1.20
Ｂ１					0.08		0.08
Ｂ２			0.66				0.66
Ｂ３			0.10				0.10
Ｂ４						0.08	0.08
Ｃ１					0.26		0.26
Ｃ２	0.22	0.08			0.17		0.47
Ｃ３		0.57	0.25	0.20	0.08	0.08	1.18
Ｃ４				0.08	0.51	0.17	0.76
Ｃ５			0.33	0.68	0.65		1.66
Ｃ６			0.59			0.51	1.10
Ｄ		0.58	0.17	0.18	0.25	0.17	1.35
Ｅ			0.26				0.26
合計	0.72	7.17	8.39	4.72	4.21	3.95	29.16

※数量は口縁部個体数（単位：点）

以上のように、各区分において違う要素を含む分類の数が増え、重層的になっている状況が窺える。これは、時期が新しくなるにつれて、第３調査面発掘区西部に活動の比重が移ったことを示すと思われる。中でも重要と考えられる点は、③で出土しているＡ２ｄ類やＡ２ｈ類が②には認められないことである。Ａ２ｄ類について松本氏は、西之山式の標識資料である大ノ木遺跡出土の突帯を施す土器が突帯文出現期の資料としてはやや新しいこと（松本 2007）や、口縁端部に刻みを施す突帯文をもつ深鉢が五貫森式古段階まで存在する可能性があること（松本 2009）を述べており、このタイプの深鉢が新しい要素であることを推察している。また、増子氏がＡ２ｈ類に類似する土器を西之山式よ



第260図　各区分における組成上の特徴を示す土器（S=1/6）

り新しい時期に位置付けていることはすでに述べた（第３章第２節）。これらの土器が出土する時期を編年上に位置付けるのは難しいため、今回の調査ではＩｃ期に含めたが、②と③における組成の違いは、時期差を示している可能性が高い。なお、②に素文突帯の浅鉢が認められない点については、SL ２では細片とはいえ出土しているため、本来は存在する可能性を残す。

これまで美濃地方で確認された当該期の土器は、同一面や同一遺構で複数時期が混在する事例が多く、時期的な組成を考えることが困難な状況にあった。今回の調査により比較的良好な資料を得たことで出土状況に基づく検討を行うことができた。ただし、Ｉｂ期・Ｉｃ期については墓域の可能性が高く、それ以降については遺物包含層の出土遺物のみであり、当該期の土器組成全てが現れているとは言い難い面がある。また、対象とした資料には破片も多く含まれるため、今後の資料の蓄積を待ってさらに検討する必要がある。

２　古墳時代から古代の土器について

六里遺跡第２調査面及び稲荷遺跡から検出した集落跡は、Ⅳｂ期からⅥｂ期を主体とする。これらの時期判断は、主に遺構内から出土した土器によるが、各遺構によって様々な土器が出土している。ここでは、遺構出土遺物により各時期における土器組成を検討する。

検討対象とした遺構　今回の調査において最も遺物が多く出土した遺構は溝状遺構であるが、その大半は埋め戻し等に伴い様々な時期の土器が混在しているため、比較的時期的なまとまりがあると思われる竪穴建物出土遺物を対象とした。ただし、稲荷遺跡の遺構については、Ⅴ・Ⅵ期の遺構でも、一定量のⅣ期の遺物を含んでおり、また、SI ５やSD14の事例（第４章第３節）にもみられるように、新しい時期の遺物が、遺構の埋没過程で混入する状況も考えられる。これらの遺物を恣意的に除外することはできないため、今回の検証では、その量比から傾向を確認することを主眼とした。なお、対象とした遺構は遺物出土状況や出土量から選択し、Ⅳｂ期が六里遺跡SI １及びSI ７、Ⅴｂ期が稲荷遺跡SI10・SI11・SI15、Ⅵａ期が稲荷遺跡SI １、Ⅵｂ期がSI ３及びSI14とした。なお、組成の検証には、口縁部残存率による口縁部個体数を用いた（第３章第２節参照）。

種別ごとの組成（表126①）　Ⅳｂ期においては須恵器と土師器が認められ、その比率は６：４である。Ⅴｂ期では、須恵器の比率が高くなり、以降の時期に継続する。Ⅵａ期には灰釉陶器が出現し、Ⅵｂ期において、比率が増加する。なお、前述のように稲荷遺跡においては時期が古い須恵器が一定量遺構に混入するため、Ⅴｂ期以降の組成に一部反映されている。

器種ごとの組成（表126②）　須恵器では、Ⅳｂ期ではＡ類の坏類のみであったのに対し、Ⅴｂ期でＢ類・Ｃ類が卓越するようになる。また、これに加えて盤も認められる。碗・皿はⅤｂ期にも若干存在するが、Ⅵｂ期を主体とする。甕は、Ⅴｂ期以降の遺構にみられⅣｂ期には認められないが、SI ７では横瓶（57・58）が出土している。Ⅵａ期の灰釉陶器は、碗・皿類に加え、口縁部が残存していないため表示していないが、手付瓶（667）のような壺・瓶類も出土している。Ⅵｂ期では深碗や輪花皿の他、口縁部が残存していない段皿（694）も出土している。土師器はⅣｂ期で甕Ａ類のみであるが、Ⅴｂ期以降ではＢ類が主体を占める。Ⅴｂ期には甑の把手（707）も出土している。なお、坏身（790）とした土師器は、内外面の摩耗が著しいため回転ナデ調整が確認できないが、器形は須恵器の坏身に類似している。Ⅵａ期には、鍋とした土師器（670）があるが、細片であるため詳細は不明である。また、Ⅵｂ期にSI14でロクロ土師器が出土しており、SD16では当該期の灰釉陶器との共伴が認められた（第４章第３節）。

用途ごとの組成（表126③）　出土した土器について、坏や碗・皿類を「食膳具」、須恵器の甕や壺・瓶類を「貯蔵具」、土師器の甕や鍋を「煮炊具」（宇野1989）として、用途ごとに集計した。その結果、各時期において食膳具・貯蔵具・煮炊具が存在し、当該地において生活を営んでいた状況が考えられるが、組成においては、Ⅳｂ期に比べてⅤｂ期以降に大きな違いが認められた。Ⅳｂ期の遺構については、食膳具や貯蔵具と比較し、破損しやすいことからより消費量が多いと考えられる土師器の煮炊具が卓越する状況から、一般的な傾向と考えられる。一方Ⅴｂ期では、組成の８割以上を食膳具が占める状況が認められる。なお、Ⅴｂ期においては須恵器が食膳具の主体を占め、Ⅵ期以降灰釉陶器が採用されるようになったが、組成における食膳具の比率に変化はなかったと思われる。美濃地域においてはⅤ期以降美濃須衛窯における生産が活発となり、当該地でもⅤ期以降に美濃須衛産の須恵

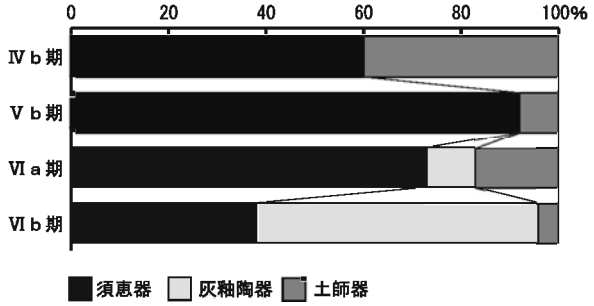
表126　古墳時代～古代の土器組成

①種別ごとの組成

時期	須恵器	灰釉陶器	土師器	合計
Ⅳｂ期	1.61		1.09	2.70
Ⅴｂ期	10.71		0.98	11.69
Ⅵａ期	5.90	0.77	1.38	8.05
Ⅵｂ期	3.08	4.69	0.33	8.10
合計	21.30	5.46	3.78	30.54

※数量は口縁部個体数（単位：点）

種別ごとの組成比



②器種ごとの組成

種別	器種	Ⅳｂ期	Ⅴｂ期	Ⅵａ期	Ⅵｂ期	合計
須恵器	坏蓋Ａ	0.08	0.08		0.23	0.39
須恵器	坏身Ａ		0.13		0.08	0.21
須恵器	坏蓋Ｂ				0.08	0.08
須恵器	坏蓋Ｃ		3.42	0.88	0.46	4.76
須恵器	坏身Ｂ２		0.73	0.93	0.09	1.75
須恵器	坏身Ｃ		3.02		0.17	3.19
須恵器	坏身Ｂ又はＣ		2.00	1.45	1.47	4.92
須恵器	鉄鉢		0.08			0.08
須恵器	盤		0.35	0.17	0.08	0.60
須恵器	碗		0.08	1.29	0.08	1.45
須恵器	碗か		0.30			0.30
須恵器	皿			0.90		0.90
須恵器	皿か		0.08			0.08
須恵器	高坏	0.37				0.37
須恵器	甕		0.28	0.08	0.17	0.53
須恵器	短頸壺			0.21		0.21
須恵器	横瓶	0.39				0.39
須恵器	平瓶		0.08			0.08
須恵器	壺類				0.08	0.08
須恵器	焼台	0.77				0.77
須恵器	不明		0.08		0.08	0.16
灰釉陶器	碗			0.25	2.64	2.89
灰釉陶器	深碗				0.62	0.62
灰釉陶器	皿			0.21	1.11	1.32
灰釉陶器	耳皿			0.31		0.31
灰釉陶器	輪花皿				0.33	0.33
土師器	坏身		0.24			0.24
土師器	ロクロ土師器皿				0.08	0.08
土師器	甕Ａ	1.09	0.17	0.17	0.08	1.51
土師器	甕Ｂ		0.49	1.11	0.17	1.77
土師器	鍋			0.10		0.10
土師器	不明		0.08			0.08
	合計	2.70	11.69	8.06	8.10	30.55

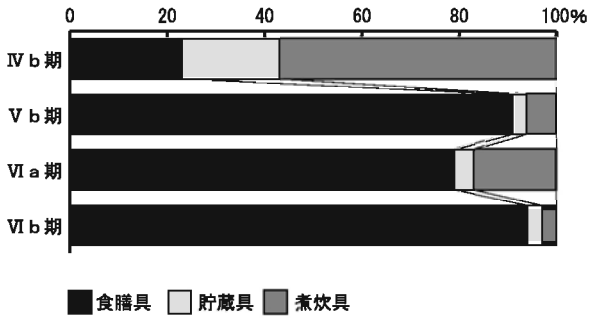
※数量は口縁部個体数（単位：点）

③用途ごとの組成

時期	食膳具	貯蔵具	煮炊具	合計
Ⅳｂ期	0.45	0.39	1.09	1.93
Ⅴｂ期	10.51	0.36	0.66	11.53
Ⅵａ期	6.38	0.29	1.38	8.05
Ⅵｂ期	7.52	0.25	0.25	8.02
合計	24.86	1.29	3.38	29.53

※数量は口縁部個体数（単位：点）

用途別の組成比

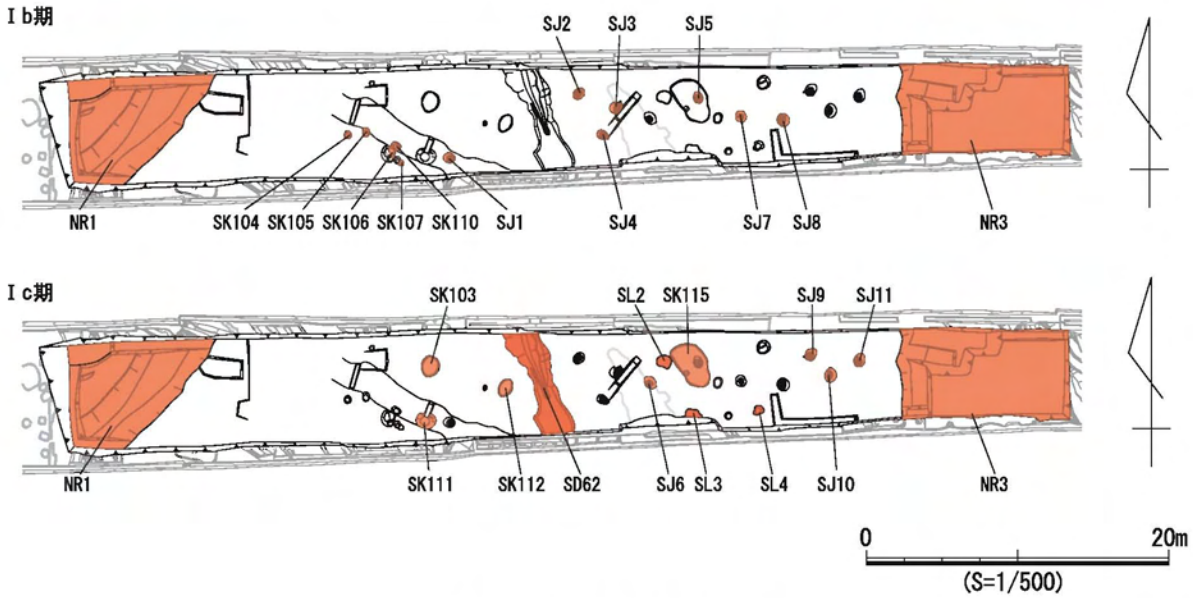


器が食膳具として多量に持ち込まれたと推定されるが、組成的に食膳具が主体を占めてⅣｂ期と大きく異なる状況については、遺跡の特徴を示している可能性がある。稲荷遺跡発掘区の北に位置する里山稲荷神社境内では「美濃国」刻印須恵器が採集されており、また、近世には稲荷遺跡の東を流れる三水川が水運に利用されたことから、稲荷遺跡で確認した集落跡が、Ｖ期以降において、水運を背景として物資が集積する拠点的な性格をもった集落であった可能性も考えられる。ただし、官衙の可能性がある広畑野口遺跡（財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2010）や官営工房的とされる野内遺跡Ｂ地点（財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2009）と比較すると、文字と認識できる墨書土器や硯などの特徴的な遺物は比較的少なく、公的な性格を持っていたかは不明である。今後の周辺の調査の進展を待って稲荷遺跡の集落跡の性格を、さらに検討する必要がある。

第４節　土地利用の変遷について

本項では、これまでの検討を踏まえ、今回の調査で確認した周辺の土地利用の変遷について考察する。なお、六里遺跡の 24 年度調査（第６章第１節参照）における発掘区は、今回の発掘区と座標を合わせて配置した[1)]。

Ｉ期　今回の調査で確認した最も古い遺物は、六里遺跡の縄文時代後期（Ｉａ期）の可能性がある土器である。大野町では、北部山麓古墳群の調査で縄文時代早期～中期の遺物が確認されているが、後期については今のところ例がない。ただし、大野町の公郷八木では地下約 1.5 ｍから大型の彫刻石棒が出土した事例（第２章第２節参照）もあり、当時の大野町の地形については不明な点が多い。Ｉｂ期には、NR １及び NR ３に挟まれた中洲状の微高地に、六里遺跡第３調査面で確認した土器埋設遺構や土坑が出現する。土器埋設遺構や土坑出土遺物はいずれも特徴が類似しており、大きな時期幅はないと思われる。第３章第５節でも述べたが、Ｉｂ期の遺構は今回の六里遺跡第３調査面発掘区全体に広がっており、骨片の可能性がある白色粒が出土した土坑や土器埋設遺構を含めた墓域を形成していた可能性がある。Ｉｃ期に遺物包含層や遺構から出土する遺物の量が増加する。Ｉｃ期には、六里



第261 図　土地利用の変遷（Ｉ期）

遺跡と地形が類似する大垣市の荒尾南遺跡や、本巣市の番場遺跡（岐阜県文化財保護センター 2016）にも当該期以降の土器が出土しており、当時の人々の揖斐川中流域沖積地への進出が始まった可能性がある。六里遺跡では、特に AN13 ～ AO14 グリッドにおいては質・量ともに顕著で、当該期の溝状遺構と思われる SD62 以西を土器捨て場にしていた可能性が考えられる。一方、Ｉｃ期の遺構は、AN13 ～ AO14 グリッド周辺の他、SD62 以東に分布している。土器埋設遺構や焼土遺構、土坑などはいずれもＩｃ期の遺構と思われるが、明確な建物跡は確認できなかったため、集落跡が存在したかは判断できなかった。Ｉｄ期の遺構は認められないが、SD62 以東の各グリッドにおいて遺物が出土している。第３節で検証したように量や器種は豊富で、当該期の土器捨て場として利用された可能性がある。発掘区東端の NR ３は、Ⅵａ層堆積後に埋没しており、Ⅵａ層出土土器より新しい様相をもった土器が含まれることから、Ｉｅ期までは周辺で人々の活動があったと考えられる。六里遺跡のⅣ・Ⅴ層は均質で下層ほど粒子が粗いことから、沈殿堆積の可能性がある。網目状の河川が堰き止められることによって生じた池や沼が、流入する土砂によって埋没することで古墳時代以降に基盤となる地形が形成されたと考えられる。Ⅳ・Ⅴ層にはＩｅ期以降の縄文土器が認められ、縄文時代の末期には堆積が始まったと思われる。なお、稲荷遺跡から出土する縄文土器は摩耗しており、時期的にⅣ・Ⅴ層に含まれるものと類似することから、当該期以降に二次的に流入した可能性がある。

Ⅱ期　Ⅱ期の遺物としては六里遺跡 SD39 から出土した高蔵式期の弥生土器（197 ～ 199）がある。著しく摩耗しているため、二次的な流入と考えられるが、これまで大野町で確認された弥生土器では最古である。また扇形文を施した後期の土器（202）も出土した。

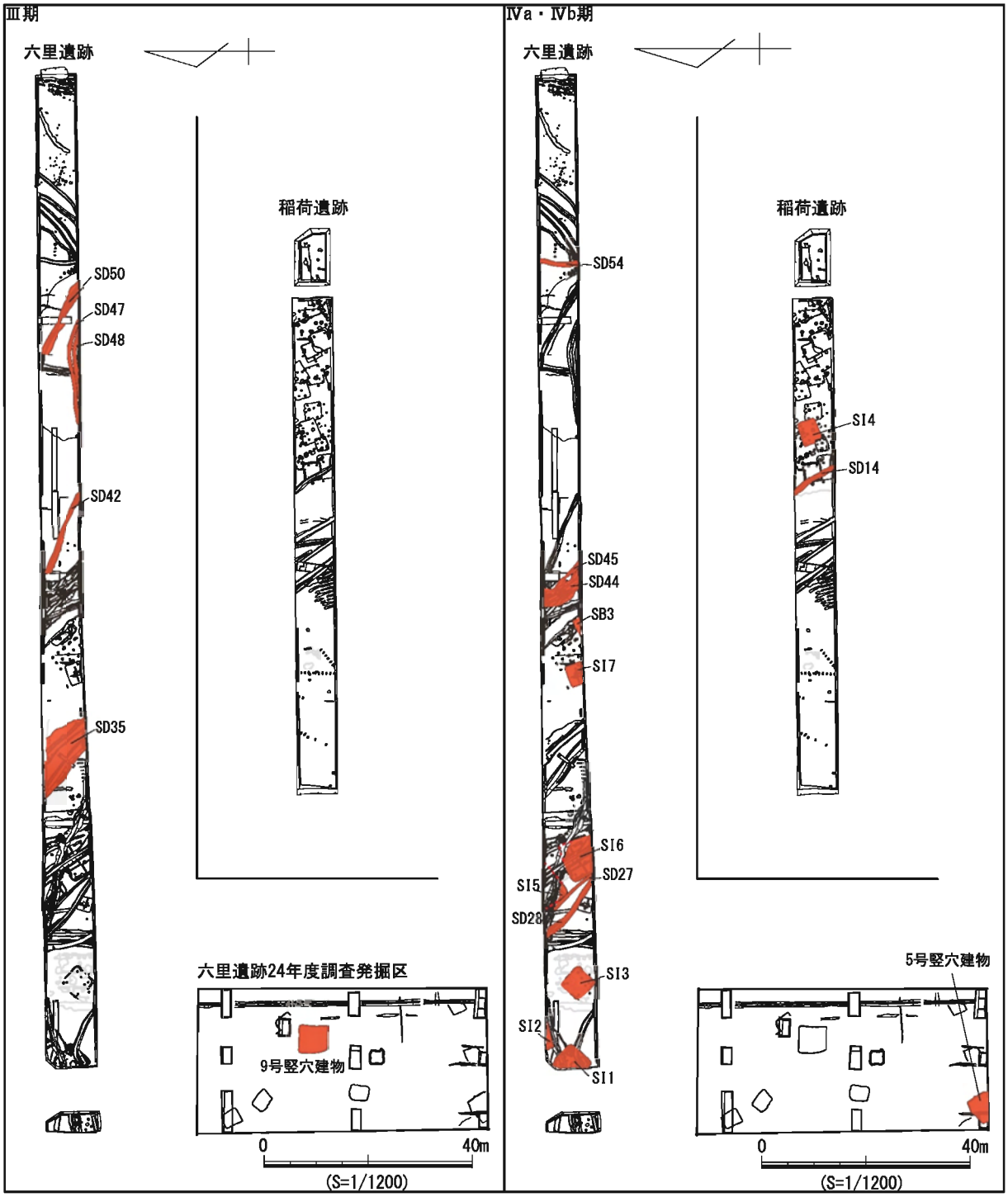
Ⅲ期　Ⅲ期には六里遺跡で幅３ｍを超える SD35 が設置される。この溝状遺構は、六里遺跡発掘区西部の微高地上に立地しており、流水の痕跡があることから取水路と考えられる。一方、発掘区東部の低地には、古墳時代前期から中期に属すると考えられる SD42 や SD50 が設置される。流水の痕跡がなく、湿地性であった水田の水位を下げることを目的とした遺構の可能性がある。八賀氏は、大野町における土壌環境の分析と古墳の分布から「弥生時代後期までには南部及び北部に広がる強湿地系の水田経営が始まった。この頃、平野の大半を占める条里地帯は山林であり、４世紀代から５世紀にかけ、湿地系の水田を中核としてその縁辺でに新たな開発が及んだ」（八賀 2011）という見解を示しており、六里遺跡の溝状遺構は、その時期の状況を反映している可能性がある。SD35 設置当時の集落域は不明であるが、六里遺跡の 24 年度調査では５世紀後半代の竪穴建物を確認した。六里遺跡西部に分布する遺構の埋土からも同時期の遺物が出土しており、５世紀後半には集落域が存在した可能性は高い。なお、稲荷遺跡でも５世紀代の遺物が出土している。

Ⅳａ・Ⅳｂ期　Ⅳ期前半になると六里遺跡の SD35 はほぼ埋没して機能を失い、これに代わって SD44 が設置される。SD44 は SD35 とは異なり、西部の微高地と東部の低地の境に位置する。その後、同じような位置に溝が複数設置されており、付け替えが行われたと考えられる。東部の低地には SD42・SD50 より東に溝状遺構群が設置される。SD42・SD45 が旧河道上の低地に設けられているのに対し、SD54 等の溝状遺構群は若干地形が高い東側に位置し、水田域が拡大した可能性がある。西部の微高地には、集落域が形成される。SI １～３・SI ５・６などは当該期の竪穴建物と考えられる。SI ７も同時期の遺構と思われるが、他の竪穴建物から離れた SD44 に近接する位置に設置され、その後同じ場所に SB １・SB ２が建てられる状況から、集落内で特殊な役割を担った建物であったと推測される。

なお、その位置関係や長軸方位の類似から SB ３が SI ７と同時期の建物である可能性がある。この他、集落域内に SD27 ～ SD29 が設置されており、集落域における排水溝や区画溝と考えられる。

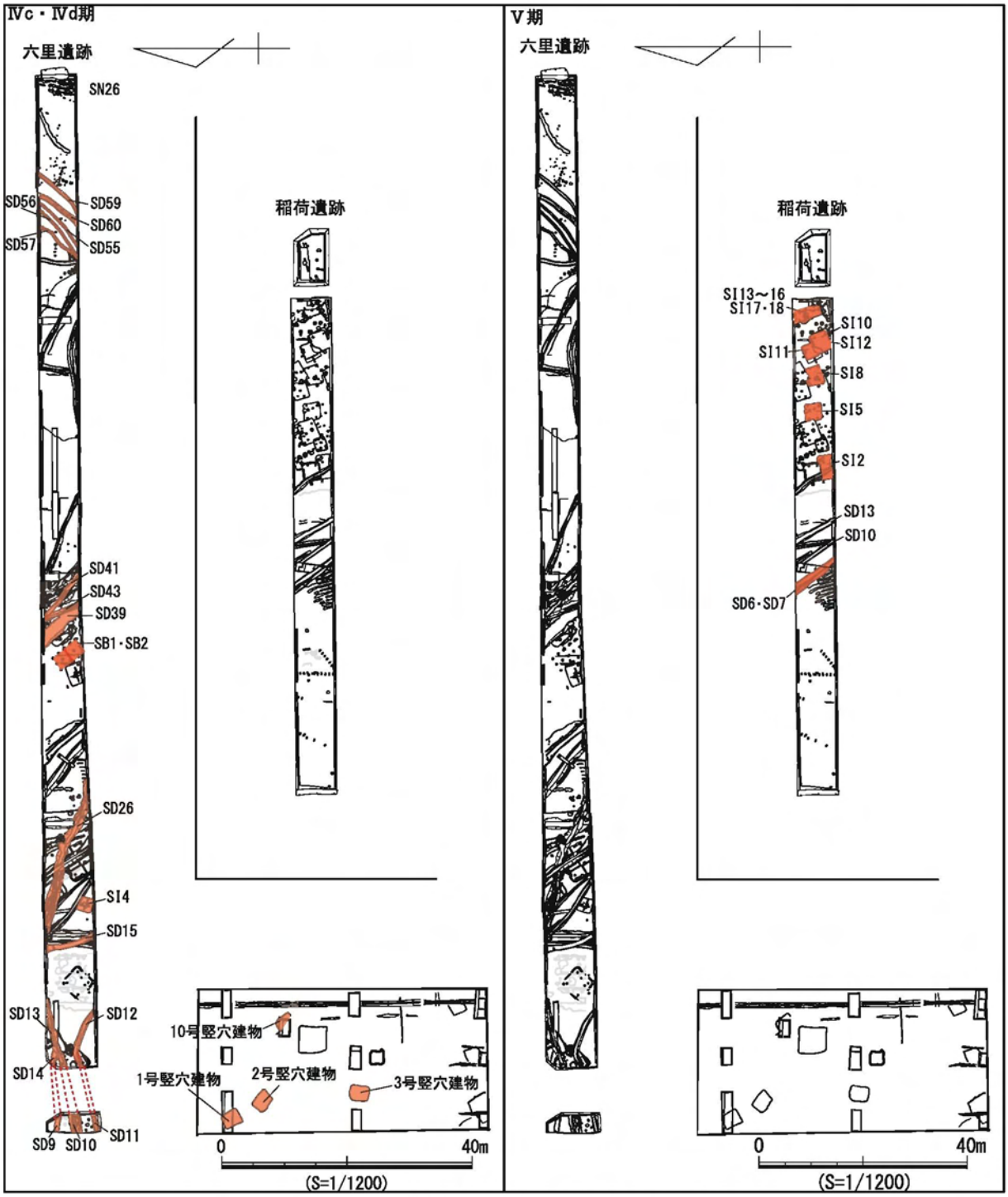
稲荷遺跡では、SI ４と SD14 が設置される。SD14 も六里遺跡 SD44 と同様に取水路と考えられ、当該期には稲荷遺跡においても水田経営が行われていた可能性がある。

Ⅳｃ・Ⅳｄ期　Ⅳ期の後半には、六里遺跡発掘区西部に SD26 などの溝状遺構が設置される。Ⅳ期前半の SD27・SD28 とは異なり、等高線に直交するような長軸方位をもつものが多い。また、流水の痕跡は認められるが、発掘区内における東端あるいは西端の底面の標高が低い特徴があり、地形に沿っ



第 262 図　土地利用の変遷（Ⅲ期及びⅣａ期・Ⅳｂ期）

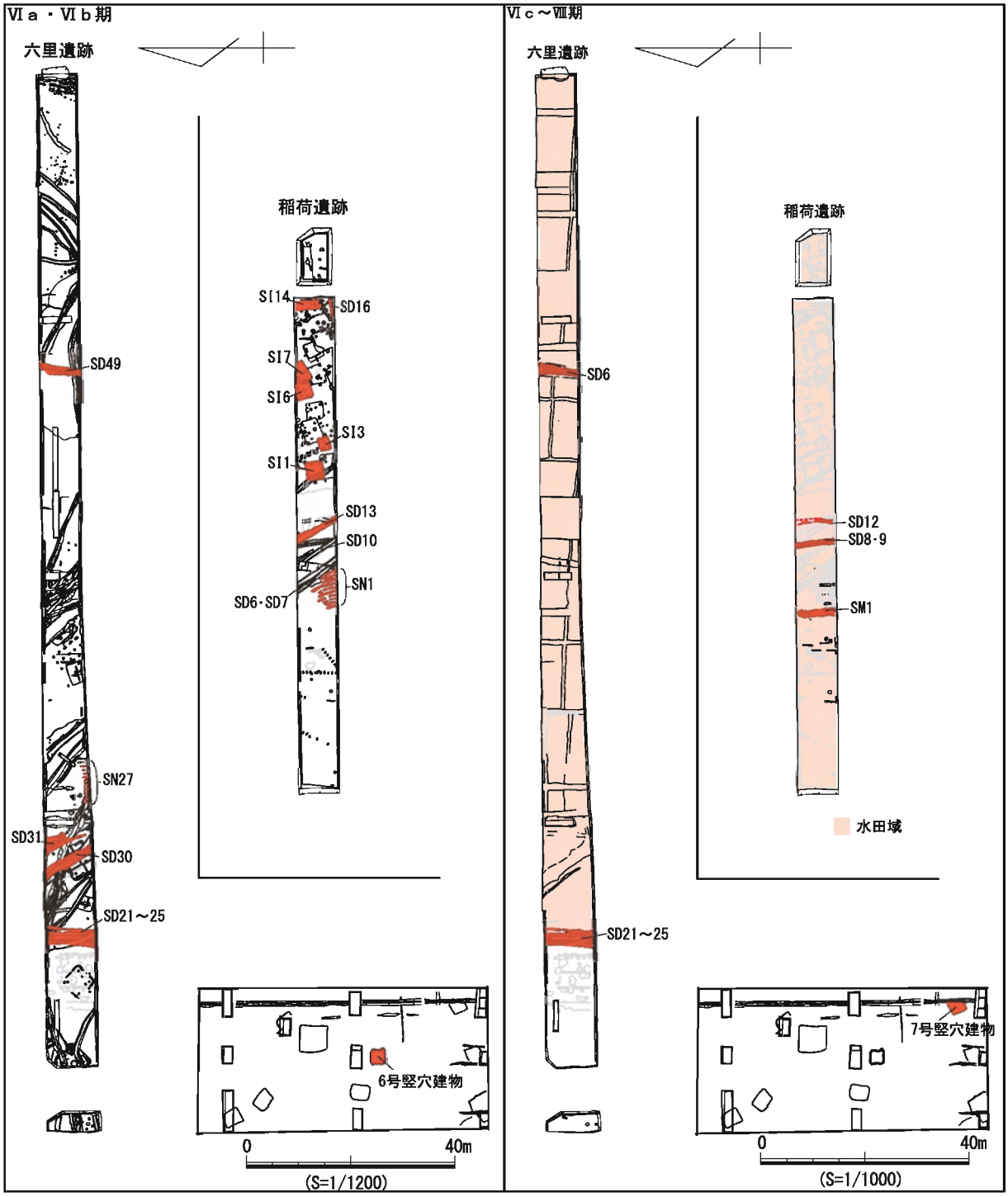
た取水溝ではない可能性が高い。この時期の六里遺跡の集落域は、より地形の高い24年度調査区（1号竪穴建物等）に移動し、六里遺跡発掘区内の溝状遺構は、この集落の北縁に位置すると考えられる。なお、SI 4はSD26と長軸方位が類似することから、当該期の竪穴建物である可能性がある。発掘区東部では、遺物での検証はできなかったが、Ⅳ期前半のSD44周辺に引き続き溝状遺構が設置され、重複の新しいSD39・SD40・SD41などがこれに該当する可能性がある。また、総柱掘立柱建物であるSB 1・SB 2も遺構の重複や長軸方位から当該期の可能性がある。また、発掘区西部のSD57ではⅣd期の遺物が出土しており、Ⅳ期前半から引き続き排水溝が設置されていたと考えられる。



第263 図　土地利用の変遷（Ⅳc期・Ⅳd期及びⅤ期）

稲荷遺跡では、当該期の遺物は比較的多く出土するものの、遺構は確認できなかった。

Ⅴ期　Ⅴａ期は、六里遺跡・稲荷遺跡ともに明確な遺構・遺物が確認できない時期である。７世紀後半の大隆寺建立にみられる社会の変化や奈良時代の律令制への移行を背景として、集落の再編が行われたと考えられる。遺物包含層からも当該期の遺物は出土しないことから、発掘区から離れた位置に集落が移動したと推測されるが、前述のように、稲荷遺跡の発掘区から北へ約 200 ｍに位置する里山稲荷神社の境内では、Ⅴａ期と考えられる「美濃」刻印須恵器が採集されており、当該期の集落域が三水川右岸に形成されていた可能性を示すと思われる。Ⅴｂ期になると、稲荷遺跡発掘区東部の微高



第264 図　土地利用の変遷（Ⅵａ・Ⅵｂ期及びⅥｃ～Ⅷ期）

地に集落が展開する。特に、発掘区東端付近の竪穴建物は重複が著しい。稲荷遺跡発掘区中央部の溝状遺構は、出土遺物から推測することはできないが、Ｖｂ期の竪穴建物の長軸方位やSN １との位置関係から、SD ６・SD ７といった溝状遺構が対応する可能性がある。発掘区西部の低地部分では引き続き水田が営まれたと考えられるが、明確な遺構は確認できなかった。

六里遺跡でＶｂ期の遺物が出土したのはSD49のみである。SD49は条里地割の坪境と考えられる遺構であり、当該期にまで時期を遡らせられるかは、十分検討する必要がある。

Ⅵ期　稲荷遺跡では集落域が存続する。発掘区中央部のSD13やSN １が当該期の遺構である可能性はあるが明確でない。Ⅵｂ期にはSI ３とSI14の２軒となり、発掘区内の建物は減少する。SD16が同時期の溝状遺構と考えられる。Ⅵ期の竪穴建物は長軸方位が南北軸に近くなるが、SD16も含めて一致はしない。Ⅵｂ期の段階では、当該地に条里地割が施行されていなかった可能性が高い。

六里遺跡では、SD30が設置される。埋土から取水路の可能性があり、SD44東側の低地にあった水田域が、SD30以東まで広がった可能性を示す。設置時期はⅥｂ期以降であるが、Ⅳ期に設置されたSD44等とは時期差があるため、この間の土地利用状況は不明である。なお、24年度調査の６号竪穴建物は、長軸方位が南北軸とほぼ一致し（第６章第１節表121）、条里地割の導入期の遺構と推定されている（大野町教育委員会2013）。この遺構で出土する遺物は、稲荷遺跡のSI ３やSI14より若干新しい様相を示し[2)]、Ⅵｂ期の後半以降に条里地割が施行されたとすれば、今回の調査結果と矛盾しない。また、里境溝状遺構群（SD22～SD25）や坪境溝（SD49）、SN27など、南北方向の長軸をもつ遺構も、この段階まで時期が降る可能性がある。

Ⅵｃ期・Ⅶ期　六里遺跡・稲荷遺跡ともに水田化が進んだと考えられる。六里遺跡では24年度調査区で中世前期の竪穴状遺構（７号竪穴建物）を確認しており、また、Ⅲ層で比較的残存状態の良い中世の遺物が出土したことから、集落域が微高地上に広がっていた可能性がある。

Ⅷ期以降　Ⅷ期は六里遺跡の第１調査面や、稲荷遺跡のⅢ層上面遺構で確認した水田遺構の所属時期と考えられる。六里遺跡の里境溝状遺構群以西にはⅢ層がないため、水田域に関してはⅦ期の状況と変化がなかったことが推定され、稲荷遺跡のⅢ層上面から検出したSM １等も、層序から同時期の遺構である可能性が高い。Ⅸ期には六里遺跡･稲荷遺跡の発掘区全域がⅡ層を耕作土とする水田となる。SD ６は同じ場所で改修等が行われ、昭和43年の圃場整備前まで使用された（SD ５）。また里境溝は、近世以降に一区画西の「条里の坪境の水路跡」（大野町教育委員会2013）へ移動したと考えられる。

なお、表127に、六里遺跡・稲荷遺跡と今回の調査で確認した条里関連遺構について、六里遺跡で確認した里境溝状遺構群（SD22～SD25）からの距離を示した。六里遺跡のSD ６・SD49、稲荷遺跡のSM １ともに想定された坪境の位置に近似することがわかる。ただし、稲荷遺跡のSM １はⅧ期以降の遺構である可能性が高く、SM １以外に坪境に相当する遺構は確認できなかったため、条里地割施行直後の坪境については不明である。

表127　条里関連遺構と距離

遺跡名	調査面	検出遺構	竹谷2011の復原条里における位置	想定距離（m）	想定坪数/109	実測距離（m）	算出坪数/109
六里遺跡	第２調査面	SD22～25	大野郡条里12条６里１坪西縄（里境）	0	0	0.00	0.00
六里遺跡	第１調査面 第２調査面	SD６ SD49	大野郡条里12条６里２坪西縄	109	1	109.40	1.00
稲荷遺跡	上層遺構	SM１	大野郡条里12条６里４坪西縄	327	3	334.00	3.06

注

1）大野町教育委員会から提供を受けた六里遺跡 24 年度調査の全体図原図と座標値をもとに作図した。

2）遺物の実見により判断した。

引用・参考文献

家根祥多 1994「篠原式の提唱－神戸市篠原中町遺跡出土土器の検討－」『縄紋晩期前葉－中葉の広域編年』平成４年度科学研究費補助（総合Ａ）研究成果報告書（立命館大学文学部 2016『家根祥多先生著作集』より）

泉拓良・山崎純男 1989「凸帯文系土器様式」『縄文土器大観』４後期　晩期　続縄文、小学館

泉拓良 1990「西日本凸帯文土器の編年」『奈良大学文化財学報』第８集、奈良大学文学部文化財学科

岩瀬彰利 1996「縄文後期～晩期の煮炊具－美濃・尾張・三河・遠江における変遷－」『鍋と甕そのデザイン』、第４回考古学フォーラム実行委員会

内堀信雄・井川祥子 1996「美濃における古代煮炊具の様相」『鍋と甕そのデザイン』、第４回考古学フォーラム実行委員会

宇野隆夫 1989『古代と中世の歴史と社会』、真陽社

宇野隆夫 1991『律令社会の考古学的研究　北陸を舞台として』、桂書房

江戸遺跡研究会 2001『図説　江戸考古学研究辞典』、柏書房

大野町教育委員会 2006『大野町北部山麓古墳群発掘調査報告書』

大野町教育委員会 2009『大野の絵図　大野町遺跡詳細分布調査報告書資料（絵図）編』

大野町教育委員会 2013『大野町史跡条里跡（六里遺跡）」の発掘調査』、平成 25 年度岐阜県発掘調査報告会資料

長田友也 2010「東海地方の縄文集落の葬墓制」『シリーズ縄文集落の多様性Ⅱ葬墓制』、雄山閣

小野木学 1997「美濃地方における中世前期の土師器皿の様相」『美濃の考古学』第２号、美濃の考古学刊行会

各務原市教育委員会 1984『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』

春日井恒 2000「岐阜県」『関西の縄文墓地－葬り葬られた関西縄文人－』資料集第１分冊、関西縄文文化研究会

春日井恒 2000「東海・北陸からの視点」『関西の縄文墓地－葬り葬られた関西縄文人－』発表要旨集、関西縄文文化研究会

春日井恒 2007「岐阜県の突帯文土器の概要・集成」『関西の突帯文土器』第８回関西縄文文化研究会資料集、関西縄文文化研究会

大江まさる他 1973『北裏遺跡』、可児町北裏遺跡発掘調査団

川添和暁 2003「棺の構造からみた縄文晩期葬法研究について－近畿・東海・中部高地・北陸地方を中心に－」『関西縄文時代の集落・墓地と生業』関西縄文論集１、関西縄文文化研究会

菊池実 1995「甕棺葬」『縄文文化の研究』９、雄山閣

岐阜県教育委員会 1989『はいづめ遺跡』

岐阜県文化財保護センター2013『荒尾南遺跡Ａ地区Ⅱ』

岐阜県文化財保護センター2015『上保本郷遺跡現地見学会資料』
岐阜県文化財保護センター2016『番場遺跡』
国府町教育委員会 1998『桜本遺跡』
小村美代子 2004「東町田遺跡出土鉄滓・鉄塊の分析」『東町田遺跡』、大垣市教育委員会
財団法人愛知県埋蔵文化財センター1990『廻間遺跡』
財団法人岐阜県文化財保護センター1994『戸入村平遺跡』
財団法人岐阜県文化財保護センター2000『いんべ遺跡』
財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2006『大平遺跡』
財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『櫨原村平遺跡』
財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2009『野内遺跡Ｂ地区』
財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2010『広畑野口遺跡』
齋藤孝正 1995「東海西部（愛知・岐阜）」『須恵器集成図録』第３巻東日本編Ⅰ、雄山閣
重久淳一 1985「雷文土器の研究－東京都町田市なすな原遺跡出土土器を中心として－」『古代探叢Ⅱ』、早稲田大学出版部
城ヶ谷和広 1996「総論　東海地方の古代煮炊具の様相と諸問題」『鍋と甕そのデザイン』、第４回考古学フォーラム実行委員会
鈴木正貫 2005「東海における中世土器・陶磁器の編年」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』発表要旨集、「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会
関市教育委員会 2012『弥勒寺官衙遺跡群　弥勒寺東遺跡１』
瀬戸市史編纂委員会 1998『瀬戸市史』陶磁史編６、瀬戸市
高木宏和 1997「美濃の古式土師器、南山遺跡再考」『美濃の考古学』第２号、美濃の考古学刊行会
高木宏和・藤田英博 2002「美濃（飛騨）地域」『弥生土器の様式と編年　東海編』、木耳社
竹谷勝也 2011「考古学的調査」『大野の条里　大野町遺跡詳細分布調査報告書　条里編・解説編』、大野町教育委員会
竹谷勝也 2011「大野郡の条里プラン」『大野の条里　大野町遺跡詳細分布調査報告書　条里編・解説編』、大野町教育委員会
太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』
立岡和人 2000「土器棺墓・埋甕・埋設土器」『関西の縄文墓地－葬り葬られた関西縄文人－』発表要旨集、　関西縄文文化研究会
田辺昭三 1981『須恵器大成』、角川書店
谷旬 1983「古代東国のカマド」『千葉県文化財センター研究紀要』７
田村陽一 2007「三重県の突帯文土器の概要・集成」『関西の突帯文土器』第８回関西縄文文化研究会資料集、関西縄文文化研究会
戸田哲也 1982「飛騨における晩期縄文土器の様相」『信濃』第 34 巻第４号、信濃史学会
中井正幸・鈴木元 1992「岐阜県」『古墳時代の竈を考える』、埋蔵文化財研究会
永井宏之 1993「条痕文土器をめぐる諸問題」『突帯文土器から条痕文土器へ』、第１回東海考古学フォーラム豊橋大会実行委員会

永井宏之 2007「伊勢湾周辺からみた突帯文系土器様式の終焉」『関西の突帯文土器』、第８回関西縄文文化研究会発表要旨集、関西縄文文化研究会

中沢道彦 2007「関西出土所謂東日本系土器の再検討」『関西の突帯文土器』第８回関西縄文文化研究会発表要旨集、関西縄文文化研究会

中野晴久 2005「常滑・渥美系」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』発表要旨集、「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会

中村健二 1996「縄文晩期土器棺墓の調査方法について－近畿地方の場合－」『紀要』第９号、財団法人滋賀県文化財保護協会

中村健二 2008「凸帯文系土器（中四国・近畿・東海地方）」『総覧縄文土器』、アム・プロモーション

中村豊 2008「西日本磨研土器（滋賀里１～３式土器）」『総覧縄文土器』、アム・プロモーション

日本貨幣商協同組合 1993『日本貨幣カタログ 1993 年版』

八賀晋 2005「安八磨郡と鉄生産」『東海学セミナー（１）－古代の鉄生産を考える－』、春日井市教育委員会

八賀晋 2011「地形環境と開発」『大野の条里　大野町遺跡詳細分布調査報告書　条里編・解説編』、大野町教育委員会

藤澤良祐 1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』３、三重県埋蔵文化財センター

藤澤良祐 2005「瀬戸系」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』発表要旨集、「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会

春成秀爾 1992「墓」『図解・日本の人類遺跡』、財団法人東京大学出版会

藤田英博 2013「荒尾南遺跡」『論集　馬見塚』、考古学フォーラム編集部

藤本健三 2007「奈良時代から平安時代までの集落」『国府町史』考古・指定文化財編、国府町史刊行委員会

増子康眞 2013「東海西部の晩期土器編年と馬見塚遺跡」『論集　馬見塚』、考古学フォーラム編集部

松本泰典 2007「愛知県の突帯文土器の概要・集成」『関西の突帯文土器』第８回関西縄文文化研究会資料集、関西縄文文化研究会

松本泰典 2009「西之山式の突帯文土器についての一考察－馬見塚遺跡Ｅ地点井上吉貞氏採集資料の紹介」『南山考人』第 37 号、南山考古文化人類学研究会

松本泰典 2013「愛知県内田貝塚における稲荷山式土器」『東海縄文論集－大塚達朗代表還暦記念－』、東海縄文研究会

豆谷和之 1994「弥生壺成立以前－馬見塚Ｆ地点型壺形土器について－」『古代文化』第 46 巻第７号、古代学協会

三重県埋蔵文化財センター1993『松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』

宮田聡一郎 2007「逆「く」字形浅鉢の成立と展開」『関西の突帯文土器』第８回関西縄文文化研究会発表要旨集、関西縄文文化研究会

山下峰司 1995「灰釉陶器・山茶碗」『中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編、真陽社

渡辺博人 1996「美濃の後期古墳出土須恵器の様相－蓋坏の型式設定とその編年試案－」『美濃の考古学』創刊号、美濃の考古学刊行会